

# 鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ

平成8年度

鈴鹿市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、鈴鹿市教育委員会が平成8(1996)年度に実施した埋蔵文化財に関する活動の概要をまとめたものです。
2. 平成8年度の埋蔵文化財に関する活動の体制は以下のとおりです。  
文化財保護課 石井平(参事兼文化財保護課長) 中森成行(文化財保護課長補佐)  
川島俊一(文化財保護課文化財保護係長)  
岡田雅幸・藤原秀樹・新田剛・杉立正徳(文化財保護課文化財保護係)
3. 本書は、各調査の担当が分担して執筆し、それぞれの文末に執筆者名を明記し文責を明らかにしています。全体の編集は藤原が担当しました。
4. 報告にかかる遺物整理は加城陽子・片岡貴美子・神田梢・杉本恭子・真鈴川千津子(鈴鹿市埋蔵文化財整理室)があたり・図版の作成と編集には山本保志・北條律子(文化財保護係)の協力を得ました。
5. 第2章のうち調査報告としたものはこれを持って発掘調査の正報告とするもので、概要としたものは別途報告書を予定しているものです。
6. 本書に関する実測図、写真は鈴鹿市教育委員会文化財保護課、遺物については鈴鹿市埋蔵文化財整理室で保管しています。

# 目 次

I. 埋蔵文化財事業の概要	1
II. 埋蔵文化財発掘調査の概要	
1. 伊勢国府跡発掘調査概要	4
2. 伊勢国分寺跡発掘調査概要	5
3. 狐塚遺跡発掘調査概要	6
4. 竹野一丁目遺跡発掘調査概要	7
5. 岸岡山22号墳発掘調査概要	8
6. 中尾遺跡発掘調査概要	9
III. 発掘調査報告	
1. 木田坂上遺跡(第2次)発掘調査報告	10
2. 石薬師東遺跡発掘調査報告	22
3. 三宅神社遺跡発掘調査報告	26
4. 三宅神社遺跡(第2次)発掘調査報告	32
5. 長者屋敷遺跡(第5次)発掘調査報告	42
6. 長者屋敷遺跡(第6次)発掘調査報告	46
7. 須賀遺跡発掘調査報告	48
8. 天王遺跡発掘調査報告	54
9. 一反通遺跡発掘調査報告	60
10. 山の原遺跡発掘調査報告	68
11. 山辺瓦窯発掘調査報告	72
12. 岡太神社遺跡発掘調査報告	80
13. 羽舞場遺跡発掘調査報告	84
14. 天王遺跡(第2次)発掘調査報告書	90
15. 三宅神社(第3次)発掘調査報告	94
16. 石薬師東第76号墳発掘調査報告	96
17. 狐穴遺跡発掘調査報告	98
18. 富士遺跡発掘調査報告	102
IV. 試掘調査一覧	106
V. 受贈図書一覧	110
VI. 資料紹介	
鈴鹿市の有茎尖頭器(1)	114
VII. 自然科学分析	
鈴鹿市上箕田遺跡における自然科学分析	116
報告書抄録	129

# I. 埋蔵文化財事業の概要

## 1. 埋蔵文化財発掘調査と保護事業

### (1) 長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業

伊勢国府跡（広瀬町長者屋敷遺跡）第5次調査および大鹿廃寺（国分町国分南遺跡、国分尼寺跡）の範囲確認調査を主として実施しました。調査の実施に当たっては下記の先生・機関にご指導をいただいています。

足利健亮（京都大学大学院教授）、川越俊一（奈良国立文化財研究所）、高瀬要一（奈良国立文化財研究所）  
八賀晋（三重大学人文学部教授）、渡辺寛（皇學館大学文学部教授）、仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）  
文化庁、三重県教育委員会文化芸術課、三重県埋蔵文化財センター

また昨年度から当事業に組み入れられた関連遺跡における個人住宅建設および新発見遺跡の試掘・範囲確認調査を併せて実施しましたが、今年度は消費税率改定に先立つ住宅建築の駆け込み需用により件数が急増しました。

### (2) 緊急発掘調査事業

各種開発事業と埋蔵文化財保護との円滑な調整を図りながら、現状保存が困難な場合に発掘調査を実施し記録としての保存を図っています。今年度は、先にも述べたように消費税率改定に先立つ住宅・店舗等小規模な発掘調査件数が急増したため、調査スケジュールが過密となり調整に苦慮しました。また、景気の回復に伴うものか年度後半から開発面積が5,000平方メートルを超える大規模開発の協議・試掘調査の案件が複数上がっており、次年度当初から調査の大規模化が予想されます。



狐塚遺跡の調査

	平成5年度		平成6年度		平成7年度		平成8年度	
	試掘調査	本調査	試掘調査	本調査	試掘調査	本調査	試掘調査	本調査
公共事業	2件	3件	2件	5件	1件	4件	5件	6件
民間事業	17件	2件	14件	3件	25件	4件	65件	19件

### (3) 開発にかかる調整協議

庁内各課への当初予算策定期間における次年度公共事業の照会や農業委員会（農地転用許可）・建築指導課（建築確認申請）および「開発審査会・開発審査小委員会」との提携によって、埋蔵文化財の保護についての指導・届出・協議の効率化、適正化を図っています。

## 2. 遺物整理作業

### (1) 鈴鹿市埋蔵文化財整理室

鈴鹿市岡田町699の鈴鹿市埋蔵文化財整理室において市内の発掘調査で出土した遺物の洗浄、樹脂補強、注記接合、復原や実測、写真撮影等の整理作業を行っています。整理報告済みの遺物は鈴鹿市河田町1064と三宅町1883-1所在の埋蔵文化財収蔵庫において保管しています。



刊行物

(2) 報告書・パンフレットの作成

今年度は本書のほか下記の報告書等を作成しました。

「第6回埋蔵文化財展高宮郷の考古学」

「伊勢国分寺・国府跡4」

3. 普及・啓発活動

(1) 鈴鹿市埋蔵文化財展

埋蔵文化財の周知と啓発を目的として、市内の発掘調査の成果を公表しています。今回は「第6回埋蔵文化財展高宮郷の考古学」と題し、三重用水加佐登調整池にかかる埋蔵文化財発掘調査から20周年を迎えたことを記念

してその出土品を含め、加佐登地区周辺の遺跡・遺物を中心に構成しました。会場として地元の高宮資料館（加佐登町2010加佐登神社境内地）を利用し、平成8年8月17日～9月1日の2週間開催しました。期間中約900名の見学者があり、四日市市、津市、名古屋市といった市外からの見学者が増加しました。



文化財講演会

(2) 文化財講演会

埋蔵文化財展のテーマにあわせ講演会を開催し、第1回60名、第2回50名の参加者がありました。

第1回「考古学よりみた古代の高宮郷」

第2回「中世社会と墳墓」

講師：岡田 登 皇學館大学助教授

講師：伊藤久嗣 三重県教育委員会博物館準備室長

日時：平成8年8月18日（日）14:00～15:00

日時：平成8年8月25日（日）14:00～15:00

会場：鈴鹿市立図書館視聴覚室

会場：鈴鹿市立図書館視聴覚室

(3) 現地説明会・見学

調査を実施した遺跡について市民を対象にした現地説明会を開催し、また希望に応じ随時見学の受け入れを行って成果を公開しました。

平成8年5月18日	狐塚遺跡・木田坂上遺跡	35名（美濃市教育委員会）
5月19日	狐塚遺跡・木田坂上遺跡	110名
6月4日	三宅神社遺跡	120名（国府小学校児童）
7月12日	狐塚遺跡・木田坂上遺跡	30名（三重県埋蔵文化財担当者会議）
10月26日	山辺瓦窯跡	50名
10月29日	伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）	10名（高校社会科教員）
11月11日	伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）	110名（日本考古学協会三重大会）
11月19日	伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）	50名（國學院大學公開講座）
12月15日	伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）	90名

(4) 講師の派遣

生涯学習の催しに資料の提供や講師の派遣を行っています。

平成8年4月26日 「狐塚遺跡（河曲郡衙）の調査」 三重県埋蔵文化財担当者会議

6月27日 「鈴鹿の歴史と出土遺物」 長太公民館成人学級

平成9年1月28日 「埴輪と鈴鹿の古墳文化」 白子公民館成人学級

2月 7日 「山辺瓦窯跡の調査」 三重県埋蔵文化財担当者会議

(5) 資料の貸出・閲覧

市内外からの要請に応じて、遺物・写真の貸出および閲覧を行っています。

平成8年4月1日～平成9年3月31日	伊勢国分寺出土瓦	四日市市立博物館常設展示
5月29日	伊勢国分寺出土瓦	個人（研究）
6月8・9日	神戸中学校遺跡出土遺物	個人（研究）
7月1日～11月29日	伊勢国府跡出土瓦、写真外	三重の新しい文化財の仲間たち展
7月9日～7月14日	市内出土軒瓦	三重県の古瓦刊行会
7月21日	高井B遺跡出土緑釉陶器	施釉陶器研究会
7月29日	伊勢国府跡写真	個人（図書掲載）
8月19日～12月6日	伊勢国府跡出土瓦外	斎宮歴史博物館「斎宮・国府・国分寺」
9月4日	狐塚遺跡・伊勢国府跡写真	個人（図書掲載）
10月10日	伊勢国分寺写真パネル	国分町10・10祭実行委員会
11月12日	伊勢国分寺出土瓦	個人（研究）
平成9年2月4日	寺谷古墳群出土形象埴輪	個人（研究）
2月6日	市内出土須恵器	個人（見学）

(6) インターネットでの情報提供

教育委員会公認ホームページ「Suzuka考古情報」  
URL <http://www.tcp-ip.or.jp/~ise-koku/> を通じて、  
市内の遺跡、発掘調査情報や県内の考古学関係の催し物の案内を随時提供しています。また、新たにスタートする鈴鹿市広報情報課が提供する鈴鹿市ホームページに考古博物館 online として話題を発信する予定です。

4. 史跡伊勢国分寺跡整備事業

(1) (仮称) 鈴鹿市考古博物館建設事業

国史跡伊勢国分寺跡の隣接地に平成10年3月完成、同年秋のオープンをめざして平成8年10月4日に起工式が行われ建物の建設工事が進行中です。同時に展示工事も始まっており、今年度は展示資料のレプリカ作成を主に作業が進められています。平成6年度から続けられてきた博物館建設に伴う埋蔵文化財調査は一般駐車場予定地（狐塚遺跡）の調査をもって完了しました。

(2) 歴史公園の整備

国史跡伊勢国分寺跡の整備に向け3年次計画で進められている公有地化の2年次目に当たる今年度は、国・県の補助事業と市の単独事業をあわせて史跡指定地及び周辺の16,000平方メートルの買い上げを行いました。



現地説明会

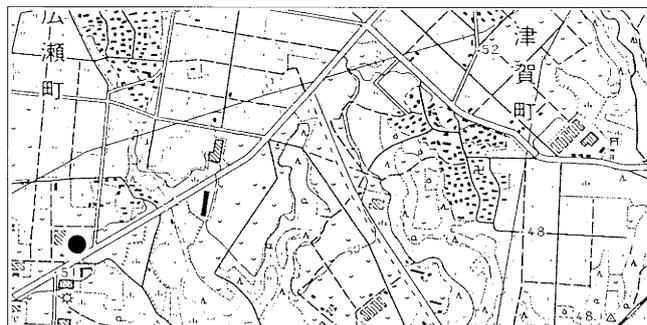


レプリカ製作風景

## Ⅱ．埋蔵文化財発掘調査の概要

### 1．伊勢国府跡発掘調査概要

所在地 鈴鹿市広瀬町字南野 972・97-1・97-2・973  
事業主体 鈴鹿市教育委員会  
調査目的 学術調査  
調査期間 平成8年10月7日～平成9年1月7日  
調査面積 580 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 新田剛・杉立正徳



位置図 (1:25,000)

5年目第7次となった今回の調査は、第2～4次調査で確認された政庁（矢下地区）を離れ、第1次調査地点（南野地区）すなわち古くは藤岡謙二郎率いる京都大学によって確認された瓦葺礎石建物（S B 01）の東隣接地において実施した。藤岡らの調査及び第1次調査によって確認された礎石建物は東西2面廂の南北棟で、梁行4間（廂各12尺・身舎10尺×2間）・桁行8間（14尺等間）という大規模なものである。政庁の一部とは云えないものの国府に関連する施設としてさらに周辺の調査が望まれていた。

調査は隣接の約1,000 m<sup>2</sup>の範囲内でトレンチを設定し、一部必要に応じて面的に広げる手法を採った。遺構確認面はクロボクをベースとした耕作土及び攪乱層を40～50cm除去した黄褐色土地山ないしは漸移層上面である。

調査の結果、礎石建物の基壇基礎（S B 08）、掘立柱建物S B 09、南北溝S D 14・15、東西溝S D 16・19が検出された。出土遺物には軒丸瓦1点・鬼瓦1点・文字瓦2点を含む大量の瓦類があり、それらのほとんどは溝から出土した。その他に8世紀後半代のものと考えられる土師器・須恵器が少量と鞆羽口・鉄滓などがやや多く出土した。

礎石建物S B 08の基礎地業部分は南北18 m（60尺）に及び、東側は調査区外に延びている。かろうじて残る礎石の痕跡から12尺の柱間を想定すると納まりが良く、南北4間・東西3間以上の建物が想定できる。さらにS B 08の北辺から北へ15 m（50尺）に掘立柱建物S B 09の南辺が位置するなど規則的な配置が窺える。S B 09は7尺等間梁行2間の東西棟で建

て替えの痕跡がある。

軒瓦はS B 08上で出土した重圈紋軒丸瓦1点のみで、これまで出土例のない新形式のものである。丸瓦・平瓦は矢下地区のものとは比べ、大振りでタタキ整形の粗雑なものが多く、明らかに区別できる。平瓦には凸面広端側に赤色塗料の付着する資料が見受けられることから、平瓦を軒平瓦として使用していた可能性がある。鬼瓦は破片資料ではあるが、遺跡全体を通じて初見のものである。

今回検出されたS B 08・09がS B 01などと一体の建物群と考えるならば矢下地区の政庁に匹敵する規模の施設が想定できる。その性格については国司館あるいは異なる時期の政庁などの可能性が考えられる。周辺には他にも瓦が集中する地点が認められ、さらなる調査の進展によって当地点の性格も序々に明らかになることであろう。

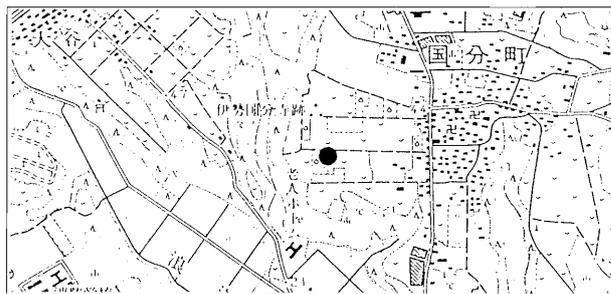
（新田 剛）



調査風景

## 2. 伊勢国分寺跡発掘調査概要

所在地 鈴鹿市国分町字西高木 230、231、233、234、235  
事業主体 鈴鹿市教育委員会  
調査目的 (仮称) 鈴鹿市考古博物館建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成 8 年 6 月 5 日～平成 8 年 10 月 2 日  
調査面積 850 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 岡田雅幸



位置図 (1:25,000)

大正 11 (1922) 年に国史跡に指定された伊勢国分寺跡は現在の鈴鹿市国分町に所在し、鈴鹿川北岸の標高 43 m 前後の丘陵地に位置している。鈴鹿市教育委員会が行ったこれまでの発掘調査の結果、伊勢国分寺の伽藍地は東西 178 m、南北 184 m のほぼ方形の規模で、周囲を築地で囲んでいたことが確認されている。

今年度はこの南辺部の築地に並行するような形で、東西にトレンチ状に細長く延びる調査区を設定した。東西 80 m、南北 10 m (東端部は 14 m) で調査面積は 850 m<sup>2</sup> である。伽藍地に近接するため、国分寺に関連する何らかの遺構が確認されるものと期待して調査を進めたが、時期的に新しい遺構が大半で、残念ながら国分寺に伴う遺構はほとんど検出できなかった。

調査の結果、溝 6 条、大型の土壇 1 基、多数の柱穴を検出した。東部で確認された溝 S D 197, 198, 199 の 3 条は調査区外の北から流れ込み、調査区内で緩やかに向きを変え東に向かっていく。また S D 197, 198 は溝と溝との間隔を 1 m 前後開けたまま並行して流れている上に、出土遺物や埋土の状況もよく似ていることから考えて、道路の左右にある側溝だと思われる。この道路は築地の東辺に沿って南下し、寺域の南東隅で 90° 東に折れて国分尼寺方面へと向かって延びていくようである。また S D 198 の埋土中に、国史跡に指定されたときに建てられたと思われる内務省と書かれた区域標の石柱が横倒しになっていたことから、この溝の埋没年代は大正から昭和にかけての頃とみられる。S D 199, 200, 201 は瓦や山茶碗片の出土遺物から判断して、中世の溝と思われる。S D 200 の南を切っている土壇 S K 116 も時期的

には同じ中世のものと考えられる。この土壇の平面形は直径が約 6 m の円形を呈するが、大きさの割に深さが約 20 cm と浅く、南半分が調査区外に延びるため性格ははっきりしない。S D 202 は調査区の北側の際を東西に走る。遺物もなく、削平されているため遺構の残りが良くない。時期不明の溝であるが、おそらく南辺の築地の外側溝と思われる。この他には、掘方が 20～30 cm の大きさの柱穴が多数検出されたが、建物としてはまとまらなかった。これらの柱穴は時期的には平安末から鎌倉時代が考えられ、この頃にはすでに伽藍地のすぐ南前面にいくつかの掘立柱建物が建っていたことが明らかになったわけである。このことは伊勢国分寺が廃絶した時期を考える上で貴重な資料を提供したと言える。

(岡田 雅幸)



発掘調査区全景

### 3. 狐塚遺跡発掘調査概要

所在地 鈴鹿市国分町字人足道 140-1

字念仏山 42, 7-1, 7-2, 9-1

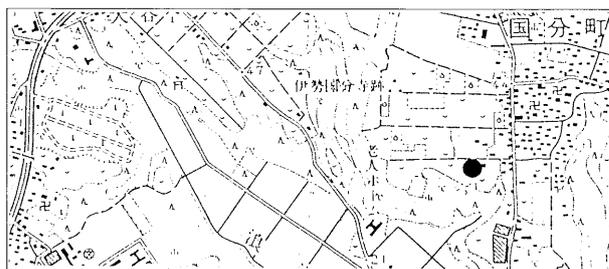
調査目的 (仮称) 鈴鹿市考古博物館建設に伴う発掘調査

調査期間 平成8年4月15日～平成9年3月6日

調査面積 3,100 m<sup>2</sup>

調査主体 鈴鹿市遺跡調査会

調査担当 岡田雅幸



位置図 (1:25,000)

調査区は、国史跡伊勢国分寺跡(僧寺)の南に面し、鈴鹿川左岸の標高40m前後の台地上に位置している。(仮称)鈴鹿市考古博物館への進入道路に6BIC-D-2地区、大型バスの駐車場にあたる6BIC-JKL地区、普通車の駐車場にあたる6BNA-H地区、6BNC-ABC地区の4地区に分かれている。

**6BIC-D-2地区** 昨年度調査を行った6BIC-D-1地区の南側に接している。D-1地区で検出された溝や掘立柱建物の続きが確認された。建物は調査区外に延びるため規模がはっきりしないが、ほぼ正方位に建てられた3間×2間以上の建物1棟と3間以上×1間以上の建物1棟が検出された。

**6BNC-JKL地区** 掘立柱建物2棟(SB62, SB63)と溝4条、土壇1基が検出された。SB62はほぼ正方位に建てられ、3間×6間の南北棟である。束柱を持つ床張りの大型建物で、柱間は桁行7尺、梁行は6尺・7尺・6尺である。側柱の柱掘方を見ると1m前後の方形で、中には1.2mを超える掘方もあった。柱痕跡から直径30cmから50cmの柱を使用したと考えられ、かなりの規模を持つ建物だということが分かった。この建物は倉庫である可能性が高く、床面は75m<sup>2</sup>に及ぶ超大型(通常の倉庫は30m<sup>2</sup>前後である)の「法倉」と呼ばれるようなものである。このような大規模な倉庫は、伊勢国分寺跡周辺では類を見ないものである。昨年度検出された大型倉庫群よりも時期が新しく8世紀中頃以降の建物だと思われる。道をはさんで北側の調査区6BNC-ABC地区にも一回り規模が小さい建物(SB65, SB66)が検出されており新しい時期の河曲郡衙を構成する官衙施設の一部だったと考えられる。SB63は調査区の南西隅で検出されたため建物全体の規模は不明である

が、3間(柱間5尺)×4間(柱間6尺)以上の南北建物である。SB62が正方位に建てられているのに対し、SB63はわずかに東に振れている。また、柱掘方の大きさは60cmから80cmで隅丸方形を呈している。すぐ南が谷になって落ち込んでいるため官衙施設の中では最南端に建っていたと思われる。

**6BNA-H地区** 調査前は豚舎が建てられていたため遺構の残り具合が極めて悪い状態の中での調査であったが掘立柱建物2棟(SB58, SB64)と時期的には新しい道路遺構の側溝を検出できた。SB58は昨年度調査された6BNB-D地区で検出された建物の続きである。確認された建物の規模は2間(柱間7尺)×5間(柱間7尺)の南北棟である。SB64は北側柱列と東側の柱列が一部しか残っていないが3間(柱間5尺)×6間(柱間7尺)の東西建物と推定される。

**6BNC-ABC地区** 正方位に建てられた掘立柱建物が検出された。SB65は7間(柱間7尺)以上×2間(柱間7尺)で、SB66は6間×3間である。重複するように建てられていることから、建て替えの可能性もある。また中央北側で検出された調査区外に延びていく建物SB67は3間×1間以上である。柱掘方は40cm～60cmと他の建物の掘方に比べて小さめであるが正方位に建てられた総柱建物である。今回確認された建物がすべて正方位に建てられており、おそらく何らかの官衙施設であると思われるが、遺物が全く出土しないので性格や時期が決定できず苦慮している。

(岡田 雅幸)

## 4. 竹野一丁目遺跡発掘調査概要

所在地 鈴鹿市竹野一丁目13・14  
事業主体 株式会社ミット  
調査目的 宅地造成に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年9月24日～11月12日  
調査面積 620㎡  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 藤原秀樹



位置図 (1:25,000)

調査は、試掘調査により遺構が検出された開発区域の北半の530㎡を面的に調査し、さらに南半中央に南北の幅4m、延長22.5mの拡張区を設け、計620㎡を調査した。層序は厚さ20～30cmの現耕作土・床土を除去すると直ちに明黄褐色土の基盤層となる。南区では現床土以下にも約50cmの黒色土の堆積がみられ、中世から近代にかけての水田耕土とみられる。

調査区は、南北に走る地割溝によって大きく二分される。この溝は第1次調査で検出された同じく南北の地割溝からほぼ80mの距離を保ってる。

大溝の西には掘立柱建物の柱穴が密集していて、柱間3間×4間の建物がわずかに位置をずらせつつ3度にわたり建てられたとみられる。隣接する地割溝には山茶碗、土師器皿、土鍋、常滑甕といった日用雑器類の廃棄が顕著にみられ、これら遺物からみて13世紀代を通じ住居が営まれたと考えられる。住居に伴う施設として火葬土壇1基が確認されている。長軸1.4m、推定幅0.6mの隅丸方形の土壇で、土師皿2点、山茶碗1点が副葬されていた。

調査区のほぼ全面で水田の痕跡が検出された。水田面は後世の耕作により失われ検出されるのは基盤の状況である。水田は、地表を覆う黒ボク土を掘り下げ、下層の保水力のある黄色粘質土の基盤層が水平になるように掘削して基底面としており、基底面には畝による耕作痕が著しくみられる。平面はほぼ長方形で、地割りに沿いほぼ正方位である。水田は徐々に北の微高地へと広げられ、その結果住居も移転しその場所も水田化されている。水田の西側には北側から導水路が導かれ、水田の西辺に沿って流れている。同じ様相は第1次調査区でも見いだされ、

このパターンがおよそ20m単位で規格的に営まれていることが推定できる。溝や水田の縁辺には不定形の土壇が連続して掘られていて、壁土等に用いられる黄色粘質土の採掘壇と考えている。

南区では、南西から北東方向へと走る幅約2mの溝が2条検出された。第1次調査で検出されたものに続くとみられ、南側の崖線に沿って掘られた排水路的な機能を持つ溝と考えてる。

このように、竹野一丁目遺跡の発掘調査では、小規模な調査面積にもかかわらず、中世における土地利用と開発の状況、そして村落の変化の状況を考えるうえで良好な資料を得ることができたといえよう。

(藤原 秀樹)



区画溝と水田遺構

## 5. 岸岡山 22 号墳発掘調査概要

所在地 鈴鹿市岸岡山字岩ヶ谷 2574-3  
調査目的 学術調査  
調査期間 平成9年1月27日～2月26日  
調査面積 70 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25,000)

岸岡山 22 号墳は伊勢湾に面する標高約 20 m の丘陵上に位置する前方後円墳で、前方部を東方の伊勢湾に向けて築かれている。この岸岡山周辺には多数の古墳が分布しているが、今回発掘調査を行った岸岡山 22 号墳は、その中でも最大規模を誇っている。

昨年度の調査により、この古墳の規模はほぼ確定されている。それによると墳丘の長さは約 56 m、後円部の直径は約 37 m、前方部の幅は約 33 m に復元される。墳丘の大部分は灰白色粘質シルトの地山を削り出している。但し、後円部と前方部の墳頂には盛り土が施されていたようで、特に、後円部の墳頂にはかなりの盛り土があったものと考えられる。しかし、その盛り土の大部分は既に流出してしまい、後円部の墳頂では厚さ約 70cm が残るのみで、前方部にいたっては基盤層が露出している状態である。この流土がくびれ部に厚く堆積していた。

本年度の調査では、昨年度の調査で大量の埴輪片が出土したくびれ部の南半分、前方部墳麓で浅い周溝状の遺構が検出された部分の面的調査、後円部墳頂に残る盛り土部分の精査について調査を実施した。

くびれ部の南半分では予想通り大量の埴輪片が出土した。その多くは円筒埴輪であるが、一部に形象埴輪も含まれている。しかし、いずれも原位置は保っておらず、後円部から転落してきたものと考えられる。

前方部墳麓では昨年の調査で溝状の浅い掘り込みが検出されていたが、面的に広げた結果、この遺構は溝ではなく、土壌状の遺構で、しかも埋土の状況から比較的新しいものであることが分かり、少なくとも古墳に伴う周溝ではないことが確認された。

後円部墳頂では盛り土の掘り下げを行ったが、埋葬施設に関連するような遺構は検出されなかった。

調査の結果、岸岡山 22 号墳は墳丘の大部分を地山から削り出すことによって盛り土を最小限におさええており、また、墳丘には葺き石を施さず、周溝も設けていないなどの事実が判明した。しかし、葺き石が施されていないこともあり、墳丘の盛り土の流出は著しく、後円部の墳頂にあったであろう埋葬施設については既に流失してしまったものと考えられる。出土遺物については円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片がある。そのほとんどはくびれ部で出土しており、後円部、前方部から転落してきたものと考えられる。これらの遺物などから、この古墳の築造時期は 5 世紀の後半から 6 世紀の初頭に求められよう。

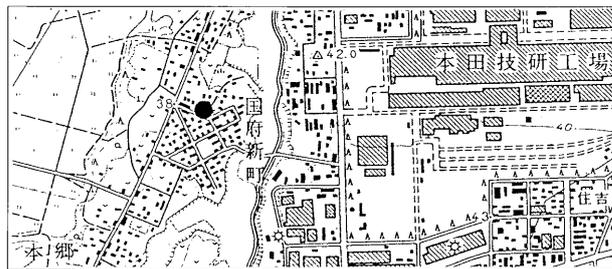
(杉立正徳)



くびれ部調査区

## 6. 中尾遺跡発掘調査概要

所在地 鈴鹿市国府町字中尾 2916-1 外  
事業主体 有限会社久保田不動産  
調査目的 宅地造成に伴う発掘調査  
調査日 平成9年3月12日～3月21日  
調査面積 176 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 藤原秀樹・新田剛・杉立正徳



位置図 (1:25,000)

中尾遺跡は、西を鈴鹿川の谷底平野に、東側を鈴鹿川支流の筒井川に区画された半島状に延びる中位段丘上に位置する。調査対象地には北側から浅い開析谷が入り込み、谷に向かって緩やかに傾斜する地形となっている。調査区の基本層序は、黒色耕作土10cm、暗灰色土10cmをへて基盤層となる黄褐色土層である。試掘調査によりピット、溝が集中的に検出された15m×15mの範囲を対象に本調査を実施した。

掘立柱建物S B 01は、主軸を正方位から34°ほど東に振って建てられている桁行き(南東-北西)4間×梁行き4間の総柱の建物である。柱穴の大部分が2重になっており、少なくとも一度建て替えが行われたことを示している。建物の規模は桁行き8.9m×梁行き8.0mである。

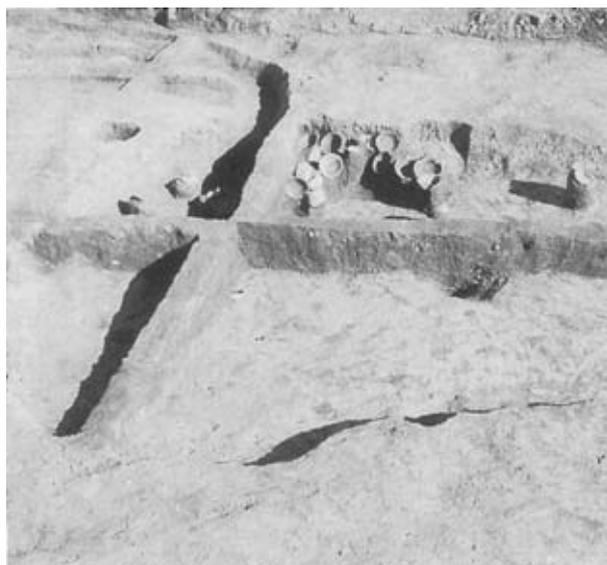
建物の南コーナーには1間×2間の範囲に重なるように幅3.2m、長さ4mの土壇S K 01が検出された。土壇にも数回の掘り直しが認められ、最終段階のものから山茶碗などの中世陶器が30点以上投棄された状態で出土した。土壇からは排水溝とみられる幅40cmの溝が北東へ最大15m延びている。溝は4条検出され、土壇の掘りなおしに伴い順次掘削されたようである。このような土壇は一般に東南隅土壇と呼ばれ、現在のところ家屋の一角で牛馬を飼育するための施設と考える研究者が多い。

出土遺物は大部分が土壇および溝から出土した。山茶碗、山皿が多数を占め、土師器皿、常滑甕が少量みられるが、鍋など煮沸具はほとんどみられない。

今回の調査で検出された遺構は典型的な中世の屋敷跡で、出土した山茶碗、山皿の年代観から13世紀の前半代に営まれたものと考えられる。(藤原秀樹)



掘立柱建物跡

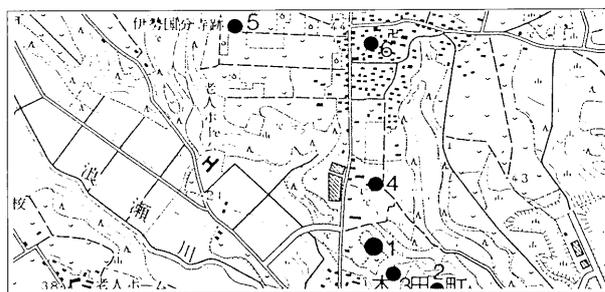


南東隅土壇

### Ⅲ．発掘調査報告

#### 1. 木田坂上遺跡（第2次）発掘調査報告

所在地 鈴鹿市木田町字木田坂山 2160 外  
事業主体 個人  
調査目的 土砂採取に伴う発掘調査  
調査期間 平成 8 年 4 月 11 日～6 月 8 日  
調査面積 1,090 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 杉立正徳、藤原秀樹



位置図（1：25,000）

#### 1. はじめに

木田坂上遺跡 (1) は鈴鹿川左岸の、鈴鹿川支流の浪瀬川と国分川に挟まれた半島状の台地上に位置する。遺跡の南方にあたる鈴鹿川を臨む台地先端部は弥生時代の磐城山遺跡 (2) が、そのやや内陸部には台地を掘りによって区画し土塁をめぐらせる中世山城の木田城跡 (3) が所在する。さらに北方約 150 m には白鳳期の瓦を出土する南浦（大鹿）廃寺 (4) が所在し、さらに国分町一帯には国史跡伊勢国分寺跡 (5)、推定尼寺跡（国分遺跡）(6) および伊勢国河曲郡衛正倉であることが確認された狐塚遺跡 (7) が所在するなど、古代河曲郡の中心地である。

この丘陵地は比高差 10～20 m の急崖をなして木田町の集落の背後に迫っているため災害防止の観点から、また台地上への進入路が狭く急傾斜のため大規模な営農が困難なことから地元の土地区画整理事業の要望が強かったのであるが、実現には至らず今日に至っている。

ところが近年この台地を横断する形で県道四日市・鈴鹿環状線のバイパスが建設され、また台地縁辺をカットして現県道とバイパスを連絡する市道の建設が決定している。このため、隣接する土地を道路の計画高まで下げることを目的とした土取りが、土地所有者個々によって順次計画されている。発掘調査もこのような土砂採取事業の動きに対応して平成 7 年度から実施している。第 1 次調査では西側隣接地 221 m<sup>2</sup> の調査を実施し奈良時代後半の堅穴住居 4 棟と掘立柱建物 1 棟を検出している。

調査は平成 7 年度中に実施した遺跡全体の試掘調

査の結果をもとに、土砂採取の早期着工が予想される台地西側約 1,000 m<sup>2</sup> を対象とした。調査は重機で耕作土を除去すると、直ちに赤褐色土の基盤層となるので、この上面において遺構検出を行った。遺構番号は第 1 次調査からの通しとして、検出順に割り振っている。便宜上逆「L」字状の調査区を南区、北区に分割して、南区から調査に着手した。前半を藤原、後半を杉立が主に担当した。なお、南区において規格的配置を持つ掘立柱建物群を検出したため調査の中間報告として 5 月 16 日に記者発表し、5 月 19 日に現地説明会を開催した。

#### 2. 遺構と遺物

##### 縄文時代の遺構と遺物

北区において土壇 2 基を検出した。

**土壇 S X 06** 耕作により著しく削平され、検出時には土器の縦断面が現れたことによりその存在が確認された。南北 98cm、東西 84cm を測る、楕円形の土壇である。埋土は褐色粘質土で、断面は皿状を呈し検出面から底面までの深さ 10cm と極めて浅い。棺の上半分は欠損しており、検出面でようやく土器が二重になっていることが観察できた。内側の土器は小形の深鉢 (27) で、口縁を北に向けてほぼ水平に横たえられている。外側の土器はやや大振りの深鉢 (26) で口縁を南に向けている。この深鉢は内側の深鉢の下へは回り込んでおらず、縦割りにした深鉢を蓋として被せたものとみられる。他にさらに別個体の深鉢の口縁 1 点 (28) が出土している。

**縄文土器深鉢 (26)** 推定口径 29.2cm。口縁部やや下

に一条の突帯をめぐらせ、口縁部は外反する。突帯は低い断面三角形で、刻み目はほとんど楕円形となり、断続的に施される。胴部は上半部に最大径が来る。胴部外面上半には横方向の条痕紋が、過半は横方向のケズリ調整痕がみられる。にぶい黄色を呈する。(27) 推定口径 22.2cm、底径 6.2cm。口縁部からやや下に一条の突帯をめぐらせ、口縁は直立したのち端部を小さく外反させる。突帯は低平でヘラ状工具によるとみられる楕円形に近い刻み目が連続的に施される。胴部中央が大きく張り、底部がすぼむ壺に近い形態である。外面調整はほとんど観察不能。黄灰色。(28) 口縁部のみの破片、口縁部のやや下をめぐる突帯は断面三角形で、押し引きによるとみられる刻み目が断続的に施される。口縁はほぼ直立し端部を僅かに外反させる。外面に条痕がみられる。橙色。

**土壙 S X 13** 奈良時代堅穴住居 S T 09 に近接して検出された。東西 107cm、南北 83cm の楕円形の土壙である。埋土は褐色土で、断面皿状を呈する。検出面から底面までの深さは 13cm である。土壙の東側に寄せるように縄文土器深鉢 (29) が出土した。口縁を北に向け、口縁部をやや持ち上げた状態である。ただし、攪乱を受けている痕跡は見受けられないのに底部付近の破片を欠き、当初から底部を欠いていたと考えられるため、土器棺であるか断定はできない。**縄文土器深鉢 (29)** 推定口径 16.8cm。口縁部からやや下に一条の突帯をめぐらせ、口縁部は長めで、肥厚する。突帯断面台形で円形の刻み目が断続的に施される。外面下半は縦方向のケズリ調整がみられるが、その他は不明。橙色。

#### 奈良時代の遺構と遺物

南区で堅穴住居 5 棟と掘立柱建物 3 棟を検出し、北区では堅穴住居 3 棟を検出した。堅穴住居は南区台地中央のものと北区の台地縁辺に立地するものでは別の群を形成し、規模等に大きな違いが見られる。**堅穴住居 S T 05** 北西隅 S D 01 に大きく切られる。南北 3.7 m、東西 4.3 m の平面長方形の堅穴住居である。北および東辺に壁溝がめぐるが、床面には支柱穴は見いだせない。検出面から床面の深さ約 20cm。東壁中央を切って東西 1.2 m、南北 1.3 m の皿状の土

壙があり、土師器片がまとまって出土した。南東コーナーには厚い焼土の堆積がみられ、南西コーナー床面には東西 2 m、南北 1.3 m、深さ 7cm の土壙が掘られ埋土に焼土、炭を多く含む。

**須恵器蓋 (1)** 床面から出土。口径 10.3cm、器高 2cm。高台様のつまみを持つ蓋で、つまみの端面は内傾する段をなす。天井部は平坦で、口縁は断面三角形に小さく垂下する。天井部の 1/2 にロクロ削り。**須恵器坏 (2)** 推定口径 17cm。底部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底面はロクロ削り調整。

**土師器坏 (3)** 推定口径 13cm、器高 3.7cm。平底で、口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。

**土師器甕 (4)** 東壁土壙出土。推定口径 23.6cm。器壁は薄く、口縁は強く外反し端部を僅かにつまみ上げる。胴部外面は斜めハケメ調整。

**堅穴住居 S T 06** 南東コーナーを大きく S D 01 に切られている。南北 3.4 m、東西 4.0 m の平面長方形の堅穴住居である。検出面から床面までの深さ 10cm、残存する四周には壁溝がみられる。床面には支柱穴は見られない。

**土師器坏 (5)** 推定口径 20.2cm、器高 2.5cm。底部は膨らみを持たず、口縁部は短く内湾しながら立ち上がる。

**土師器薬壺 (6)** 推定口径 9.6cm。口縁は短く直立する。胎土は極めて緻密。

**土師器甕 (7)** 推定口径 14.6cm、器高 14.1cm。ほぼ球形に近い胴部に、あまり開かない直線的な口縁が付く。外面調整は不明、内面上半は横方向のハケメ調整、下半はナゲ調整が施される。

**土師器坏 (8)** 推定口径 13.4cm、器高 4cm。平底に、直線的に広がる口縁部を持つ。

**堅穴住居 S T 07** 南北 4.3 m、東西 3.7 m の平面長方形の堅穴住居である。検出面から床面までの深さ約 20cm、埋土の下層には炭、焼土を多く含む。東壁の北半分を除き壁溝がめぐる。床面には支柱穴は見られない。東壁北寄りに幅 90cm、奥行き 50cm の土壙状の拡張部が見られる。

**須恵器坏 (9)** 推定口径 13.6cm、器高 3.3cm。高台は外へ強く踏ん張る。腰部は膨らみをもち、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。器壁は極めて薄い。

**土師器坏 (10)** 推定口径 16.8cm、器高 2cm。底部

は膨らみを持たず、口縁部は短く内湾しながら立ち上がる。

**土師器甕 (11)** 推定口径 23.4cm。胴部はあまり膨らみを持たず、口縁は緩やかに外反する。胴部外面は斜めハケメ調整。

**竪穴住居 S T 08** 調査区の南端にかかり検出された。東西 3.7 m、南北およそ 3 m の平面長方形の竪穴住居である。検出面からの深さは東側で約 10cm、西側で約 5cm である。検出した範囲では壁溝がめぐるが、床面に柱穴はみられない。床面の中央に直径約 1.5 m、深さ約 20cm の隅丸方形の土壌がみられ、埋土に炭、焼土を含む。

**須恵器坏 (12)** 推定口径 14.7cm、器高 3.9cm。高台は底部のやや内側に付き、断面は矩形である。口縁部は器壁が薄く、直線的に広がる。

**土師器甕 (13)** 推定口径 16.6cm。口縁部は肥厚し、外反して、端部は僅かに上に引き上げられる。

**竪穴住居 S T 09** S T 05～S T 08 が密集して分布するのに対し 1 棟やや距離をおいて立地する。南北 4.3 m、東西 5 m と遺跡内でも大振りの竪穴住居である。この一帯は耕作による削平が著しく、検出面で床面が露出している状況であった。南壁と東壁の南半に壁溝がめぐる。東壁北寄りに壁を切って南北 1 m、東西 85cm、床面からの深さ 5cm の土壌が存在し、南東コーナーの南壁に沿うように南北 80cm、南北 60cm、床面からの深さ 20cm の土壌が存在し、後者は貯蔵穴と考えられる。床面には小ピットが見られるが位置的に柱穴とは考えられない。

**須恵器坏蓋 (14)** 推定口径 15.6cm。天井部は膨らみを持ち、口縁端部はシャープな三角形状をなして垂下する。

**竪穴住居 S T 10** 調査区の北端、台地の縁辺に位置する。北東コーナーが調査区外におよぶが、東西 2.9 m、南北 2.8 m のほぼ正方形の竪穴住居である。検出面から床面への深さは西壁で 30cm、東壁で 20cm を測る。床面にしまりはなく、小ピットは見られるが主柱穴とは認めがたい。南東コーナーと西壁中央に沿って皿状の土壌がみられる。東壁中央に突出部があり、ここから焼土を伴い瓦片がまとまって出土した。カマド構築の部材とみられる。

**須恵器蓋 (15)** 推定口径 11cm、器高 2.2cm。天井

は平坦で、体部はやや内湾気味に垂下し、口縁部は水平に開く。器種は不明であるが、蓋と考えた。

**須恵器鉢 (16)** 推定口径 25.2cm。口縁部から体部にかけて内湾する。外面の口縁部付近はロクロナデ、下半はロクロヘラ削り調整。

**土師器坏 (17・18)** 17 は推定口径 13cm。口縁から体部にかけて内湾し、口縁端は内径する面をなす。18 は推定口径 16.4cm。口縁部は直線的に開き、端部は内側に小さく折り返す。

**土師器甕 (19～21)** 19 は小形甕の下半部。平底で、器壁は薄い。外面は板状工具により荒いナデ調整が施される。20・21 は甕の口縁部。推定口径は 20 が 17cm、21 が 18cm。口縁部は肥厚し、強く外反する。口縁端は上方へ引き上げる。体部外面は縦ハケメ調整。

**竪穴住居 S T 11** S T 10 から南東に 9 m ほど離れた、台地縁辺に所在する。竪穴住居 S T 12 を切っているが、埋土にほとんど差が無く切り合いの判定が困難であったため重複部についての掘方はうまく検出できなかった。平面形は一边 2.8 m のほぼ正方形で、東壁中央部に幅 1.2 m、奥行き 40cm の突出部を持つ。床面の深さは検出面から西壁で 11cm、東壁で 6cm である。床面には締まりがなく、壁溝・主柱穴はみられない。

**竪穴住居 S T 12** S T 11 に切られ、また東辺が調査区外に及んでいる。南北 3.4 m、東西 3.5 m 以上を測る。西壁において検出面から床面までの深さは 7～5 cm である。床面にしまりはなく、壁溝・主柱穴はみられない。

**掘立柱建物 S B 02** 桁行き 4 間 (8 m) × 梁行き 3 間の東西棟の建物で、柱間はほぼ等間である。方位は N20° E (正方位) である。柱の掘方は一边 80cm 弱の方形で、検出面から掘方底面までの深さは 40～50cm を測る。埋土は暗褐色または黄灰色の砂質土であるが、柱痕および抜き取り痕の観察は困難で、底面まで掘り下げてようやく直径 25cm ほどの柱痕を検出できた。西妻の柱穴列に重複するように土壌状の掘り込みがみられ柱の抜き取りに伴うものか。

**掘立柱建物 S B 04** S B 02 の西側に柱芯々で 4.1 m の間隔をおいて位置する。北側を大きく土取りのために破壊され、また南西の 2 つの柱穴は竪穴住居 S T 07 に切られている。S B 02 の南平に南平を揃える

ように建てられていた、桁行き4間(7.6m)×梁行き3間の東西棟の建物とみられる。柱掘方は一辺50～60cmの正方形でSB02に比べ小振りである。埋土は褐色土で、直径25cmほどの柱痕が観察できる。

**掘立柱建物SB03** 東平の柱穴を竪穴住居ST06・ST07に切られている。ST04の西妻と東平を揃え、SB02・SB04と直交するように建てられている。SB04とは柱芯々で3.0m離れている。桁行き3間(6.8m)×梁行き2間(4.2m)の南北棟の建物である。柱掘方は一辺60cmの正方形で、埋土は黄褐色から暗褐色土まで様々で、多くに直径25cmほどの柱痕が観察できる。

#### 中世の遺構

中世の遺構として土壌がみられ、調査区のほぼ中央ST09とST11の間に群を成して分布する。

**土壌SK01** 主軸を南北に向ける長楕円形の土壌。長さ1.8m、幅60cm、検出面からの深さ20cmを測る。

**土壌SK02** 主軸を南西-北東方向に向ける長楕円形の土壌である。長さ1.9m、幅68cm、検出面からの深さ20cmを測る。南東側から山茶碗および土師皿各1点、北西側から土師皿1点が出土している。

**山茶碗(22)** 口径17cm、器高4.8cm。高台は断面台形で、刳殻圧痕はみられない。腰部から口縁部にかけて直線的に広がり、口縁端はやや外湾する。

**土師器皿(23～25)** 23は推定口径10cm、器高1.8cm。底部は膨らみをもち、口縁は直立する。24は23に類似し、推定口径9.4cm、器高2cm。25は推定口径10.5cm、器高1.6cmと浅く、口縁から底部にかけて緩やかに内湾する。

**土壌SK03** 主軸を東西方向に向ける長楕円形の土壌。長さ1.6m、幅66cm、深さ21cmを測る。

**土壌SK04** 主軸を東西方向に向ける長楕円形の土壌。長さ1.64m、幅62cm、深さ42cmを測る。

**焼土壌SK05** 土壌群から北に9mほど離れて単独に存在する。主軸を北東-南西方向に向ける長方形の土壌。長辺1m、短辺70cm、検出面からの深さ17cmを測る。埋土は黄褐色～暗褐色土で、底面全面に厚さ2cmの炭化物の堆積がみられる、底面は被熱して硬化している。

**土壌SK08** 主軸を東西に向ける隅丸長方形の土壌。

長さ1.65m、幅56cm、深さ9cmを測る。

**土壌SK09** 主軸を東西に向ける不整な楕円形の土壌。長さ96cm、幅36cm、深さ7cmを測る。

**土壌SK10** 主軸を東西に向けた楕円形の土壌。長さ88cm、幅48cm、深さ10cm。

**土壌SK11** 土壌群の南端に他と離れて存在する。主軸を北西-南東方向に向ける不整な長方形の土壌。長さ1.1m、幅56cm、深さ10cmを測る。

**溝SD01** 調査区南側を南西から北東方向へ横断する溝。幅約2m、深さ30～40cm。この溝自体は近世以降の地境溝だが、中世の溝をなぞって掘られたとみられ底部に断続的にみられる砂礫層を中心に山茶碗、山皿の破片が出土する。

### 3. まとめ

#### 縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代晩期に相当する遺構として、2基の土壌が検出された。SK06については完形の深鉢に縦割りにした別の深鉢を被せており土器棺墓と判断できる。SK13については深鉢が単独で出土しており単棺の土器棺墓の可能性が高いが、底部を欠くなど断定するまでには至らなかった。使用されている土器は、いずれも深鉢で口縁部はすぼまり、胴部やや上位に最大径がくるタイプで、肩の稜は全くみられない、壺形に近い形態である。口縁部の刻目突帯の位置は低めで、口縁部は外反する。突帯は平低で、刻目はヘラ状工具により施され、横長のO字形である。当地域の晩期突帯紋土器を分析した鈴木克彦氏によれば(鈴木1990)IV期の特色として「口縁部凸帯の施文位置が下がり、それより上が外反傾向を示す。」ことが指摘されているが、出土した深鉢はまさにこの様相を示す。また、同氏によればIV期は弥生時代前期中段階と平行する部分があるとする。

鈴鹿川流域では国府町北一色遺跡、津賀町居敷遺跡に次ぎ3遺跡目の検出である。いずれも鈴鹿川を臨む段丘の上面に、土器棺墓が単独で検出されるといふ共通点が見いだせ、当地域において普遍的に行われていた墓制であると認められる。現在のところ鈴鹿川左岸台地上では晩期の集落の存在を示す調査や遺物の散布例はないのに対し、鈴鹿川下流域の自然堤防上に立地する上箕田遺跡ではすでに晩期後半

前葉から集落が成立していることが確認されている。

#### 奈良時代の遺構と遺物について

奈良時代の遺構で注目されるのはほぼ正方位に方位を揃え鍵の手状に配置されたS B 02・S B 03・S B 04の3棟の掘立柱建物である。柱掘方からの遺物の出土は無く正確な年代決定は不可能だが、堅穴住居に切られているため8世紀中葉以降には降らない。SB02の柱掘方が大きく中心的な建物である。規模は桁行4間(27尺)×梁行3間(16尺)を測る。S B 04はS B 02と南の平を整然と揃え、S B 02と14尺の間隔を置いて建てられている。S B 04も同様の柱配置を持つが桁行きが約25尺強と寸詰まりである。S B 03はS B 03の西妻と東の平を正確に揃え、つまりS B 02・S B 04と直交するように建てられている。S B 04との間隔は正確に10尺を測る。このS B 03のみが桁行3間(23尺)×梁行2間(14尺)の建物である。建物の妻、平を正確に揃え、また建物間の距離に正確な10尺・7尺×2といった規格が読み取れるのに対し、各々の建物は柱間が不均等で、建物の規模も尺及び1/2尺単位の倍数に収まらない。特に、S B 04はS B 03と妻を揃えるためか西側の1間が他に比べて1尺以上広いようである。まずは、柱間のばらつきにも関わらず、建物の南・東面を整然と揃えることに注意が払われていることに注目しておきたい。建物の位置(間隔)が決定され、建物自体の建築はそれにかなり制約を受けたことが考えられる。さらに、建て替えがみられず短期間で廃絶して、堅穴住居主体の一般集落に転換していることも指摘できよう。

このような規格性の高い建物群の性格であるが、建物の規模や配置から一般集落で無いことは疑いない。残念ながら遺構の性格を示すような遺物の出土は皆無であった。これら建物群については付近に伊勢国分寺や河曲郡衙正倉(狐塚遺跡)の存在が確認され、白鳳時代寺院が所在するなど古代河曲郡の中心地であり、古東海道が付近を通過していたことが推定されることから郡衙、駅家、寺院付属施設、豪族(郡司)居宅といった様々な可能性が想定できる。

近年の地方の発掘調査によって主殿とみられる東西棟の大型建物2棟と、それに直交する脇殿様の建物からなる鍵の手状を呈する建物群の検出例がみら

れる。その性格が明らかになったものについていくつか例を挙げれば(1)国司館肥前国府跡(山中・佐藤1985)、(2)地方官衙の曹司(館?)御子ヶ谷遺跡=駿河国志太郡衙(同)、(3)豪族居宅海会寺遺跡(広瀬ほか1987)、京都府畑ノ前遺跡(川西ほか1987)、大分県小迫辻原遺跡などがあげられよう。建物の配置には規格性が高く、特に場としての前面の庭を極めて意識した官衙風な配置であるものの、完全なコの字、品の字そして囲郭といった配置を意図的に崩しているという観がある。どちらかといえば私的な性格を持つ施設にみられる傾向がある。すると、今回検出された建物群は、遺構としての広がりには乏しく周囲に区画施設を伴わないこと、また建物が底などを持たず規模的にも小形であることから、官衙とすることは困難であろう。白鳳寺院や郡衙との関連の強い豪族に関連した、それも首長でなく一族の者が居住した居宅の可能性が高いと考えておきたい。

ついで堅穴住居であるが、掘立柱建物群と重複するST 05～ST 09と北側の縁辺部に分布するST 10～12ではとではかなり規模や床面の状況に差異がみられる。全体に遺物に乏しいのであるが、いずれも8世紀中葉から後半の間で位置づけられ、両群に時期的な大きな開きは認められない。規模の乏しいST 09・ST 11もカマドを有していたとみられ機能的な差とは認められず、居住者の地位、経済的な差が示されているものとみられる。

遺構として興味深い点が2点あげられる。1点は全ての堅穴住居において廃絶時にカマド跡が大きくめぐり取られ、東壁を切る土壇状や、半円状の突出部となっている点である。ST 07ではそれに伴う焼土が底面からやや浮いた埋土中に層状に見いだされた。2点目は全てに見られるわけではないが、ST 05・ST 08にみられる床面土壇であり、廃絶後の埋土を切っておらず少なくとも床面が露出している間に掘られたとみられる。焼土、炭混じりの土で埋め戻されていて当初は床面の補修とも考えたが、上面は踏みしめられておらず埋め戻し後堅穴住居が長期間使用されたとは認められない。

上記の両者に関連があるか断定は困難であるが、当遺跡内において住居廃絶後のカマドの処置に一定の規範が存在したことは間違いなからう。カマドに

霊的なものを認め、廃棄後のカマドが付物神となることを恐れ何らかの儀礼の後破壊したことが推定される。また新たなカマドの用土の採掘穴に破壊したカマドの土を帰すといった行為の可能性も今後の調査の視野に入れておきたい。

#### 鎌倉時代の遺構と遺物について

鎌倉時代の遺構としては調査区中央で集中的に検出された土壇群がある。SK 02の山茶碗、山皿は12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。SK 02の遺物の出土状態と各土壇の形態から中世の土壇墓群であろうと考えているが、副葬遺物を伴うのは1基のみと極めて貧弱である。第1次調査区を含めた調査区内からは中世に降るとみられる小規模なピットが多数検出されているが今のところ建物としてはまともならず、遺物の出土量も乏しい。おそらく集落の辺縁にあたり墓地として利用されたものであろう。

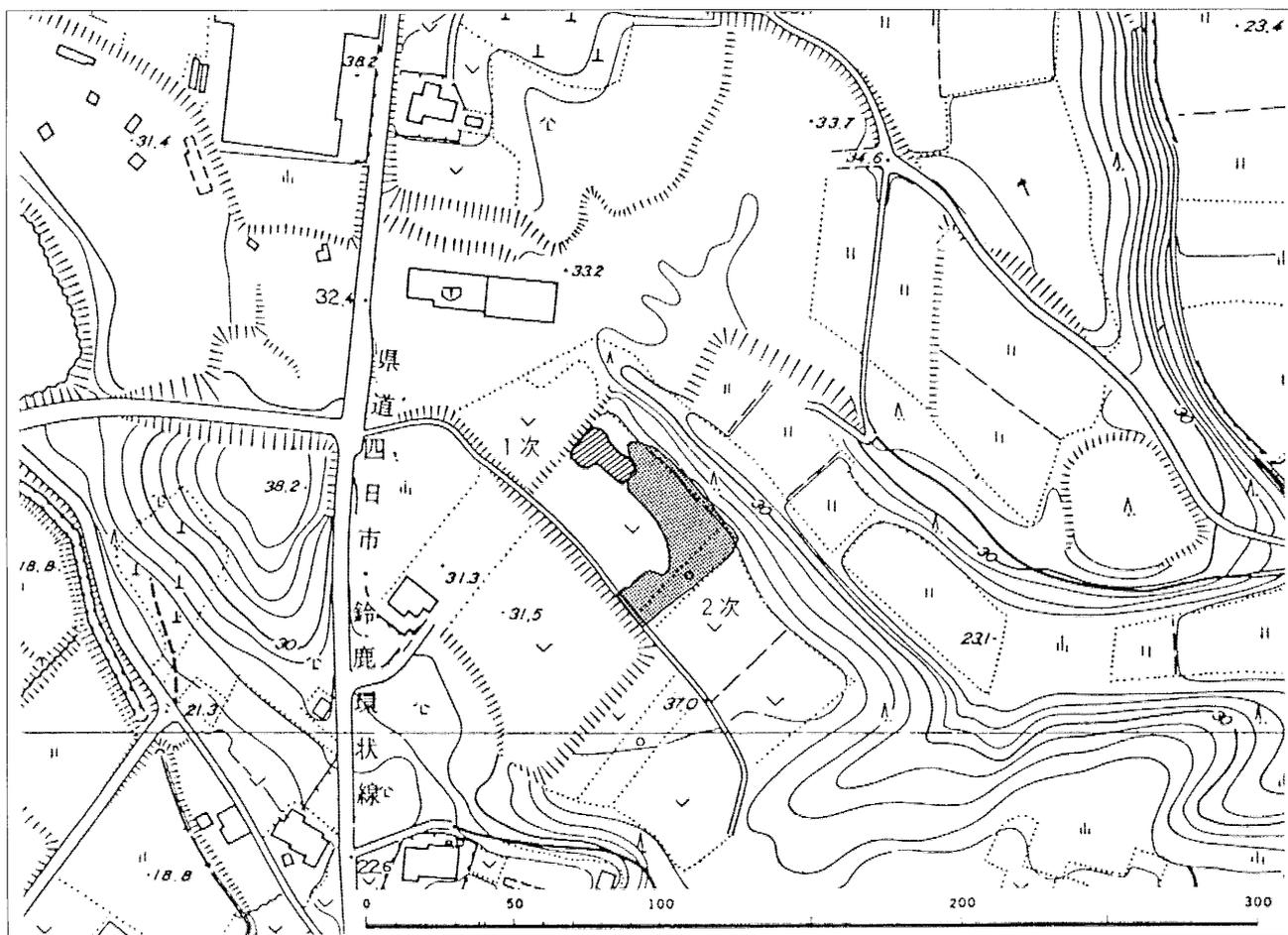
以上今年度の調査は限られた面積であったが、多くの知見を得ることができた。特に、居宅とみなさ

れる整然と配置された掘立柱建物群は、伊勢国分寺をめぐる地域社会の復原にとって少なからぬ意義があるといえよう。木田坂上遺跡における土砂採取は次年度以降も予定され第3次以降の調査も不可避とみられる。今後の調査によって今まで述べてきた結論めいたことにも大きく変化する可能性があることをお断りしておく。

最後に、調査に当たって三重大学人文学部教授八賀晋、奈良国立文化財研究所山中敏史の両先生に現地指導を含め多大なご協力をいただいた。記して謝意を表したい。  
(藤原秀樹)

#### 【参考文献】

- 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相 - 伊勢地方からの視点」『三重県史研究』第6号 1990
- 川西宏幸ほか「(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書」財団法人古代学協会 1987
- 広瀬和雄ほか『海会寺』泉南市教育委員会 1987
- 山中敏史・佐藤興司『古代の役所』岩波書店 1985



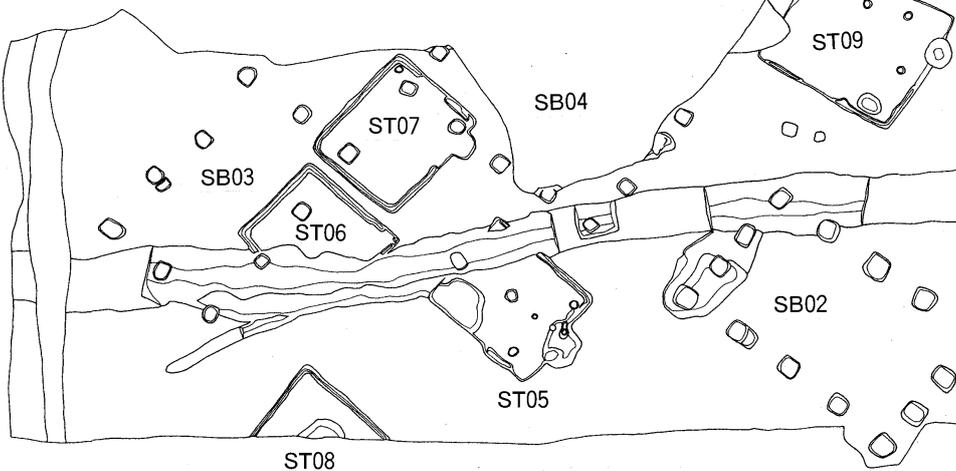
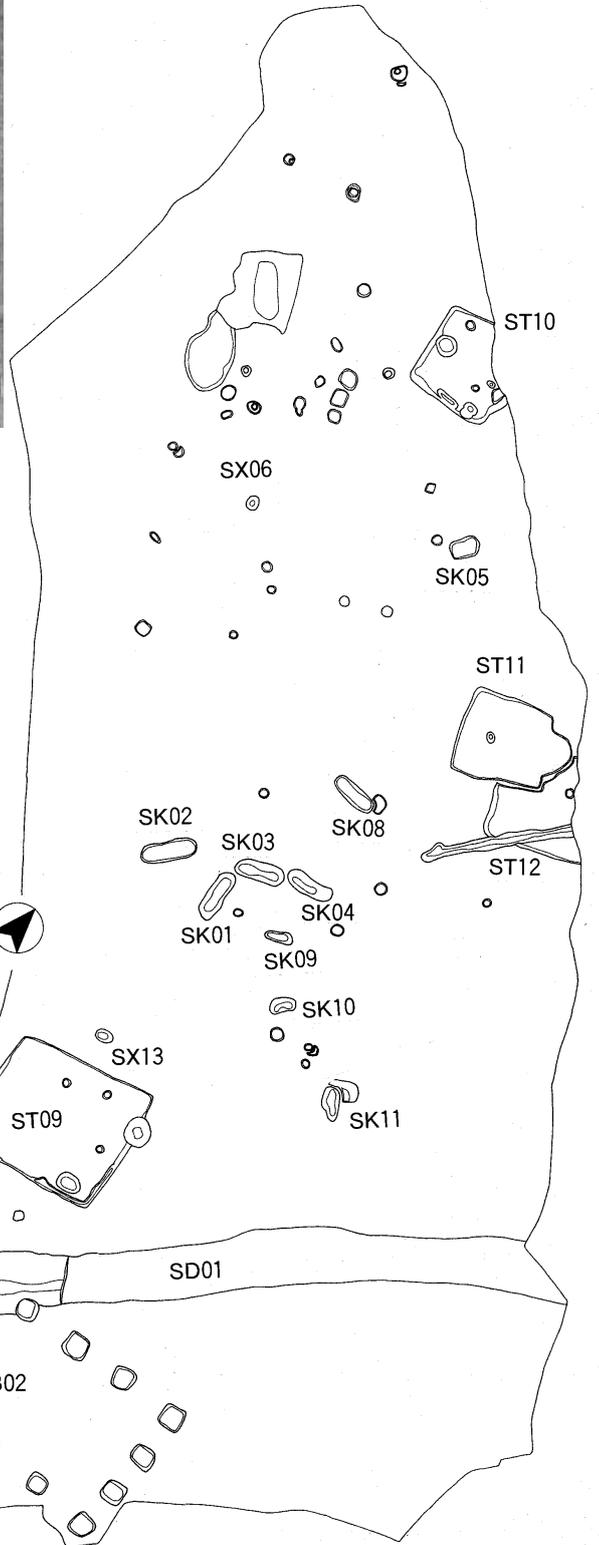
調査区位置図



南区全景

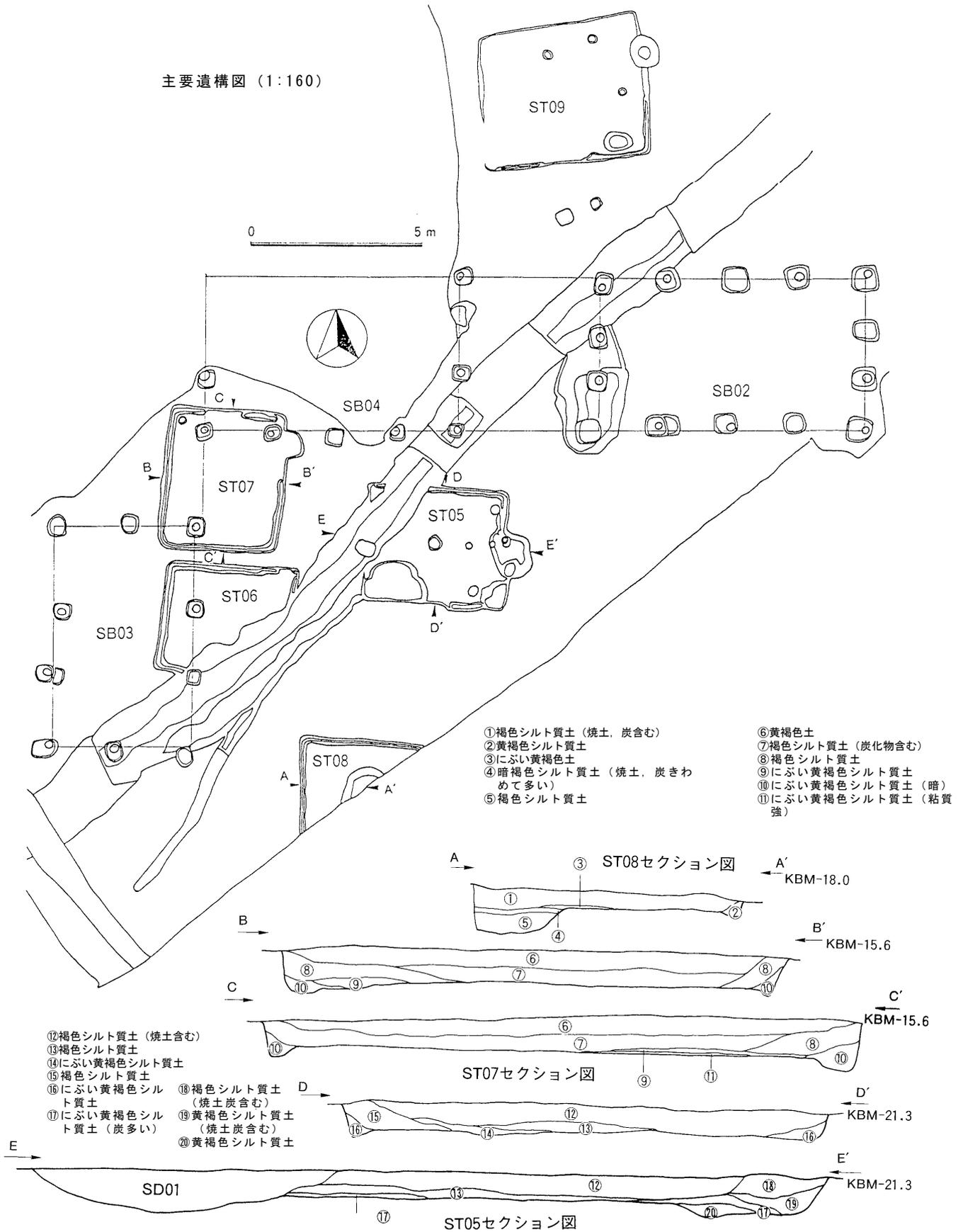


北区全景



遺構配置図 (S=1:250)

主要遺構図 (1:160)





S B 02



S B 02 と S B 04 (奥)



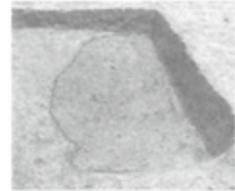
S B 03



南区全景



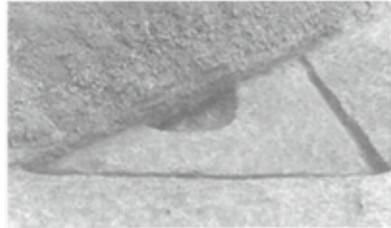
S T 05



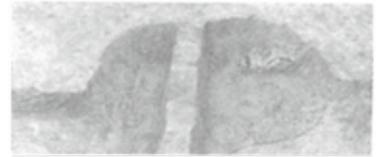
S T 05 床面土壌



S T 07 と S T 06 (奥)



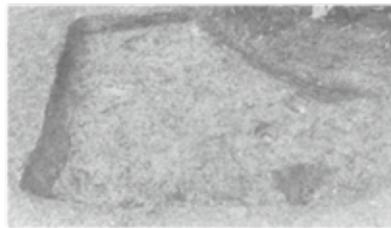
S T 08



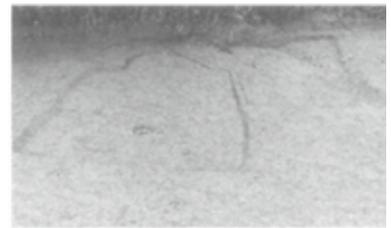
S T 05 壁土壌



S T 09



S T 010



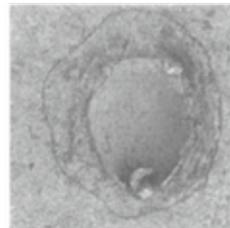
S T 11 と S T 12



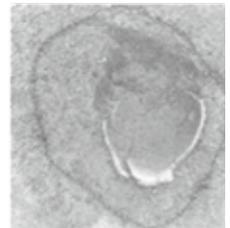
中世土坑群



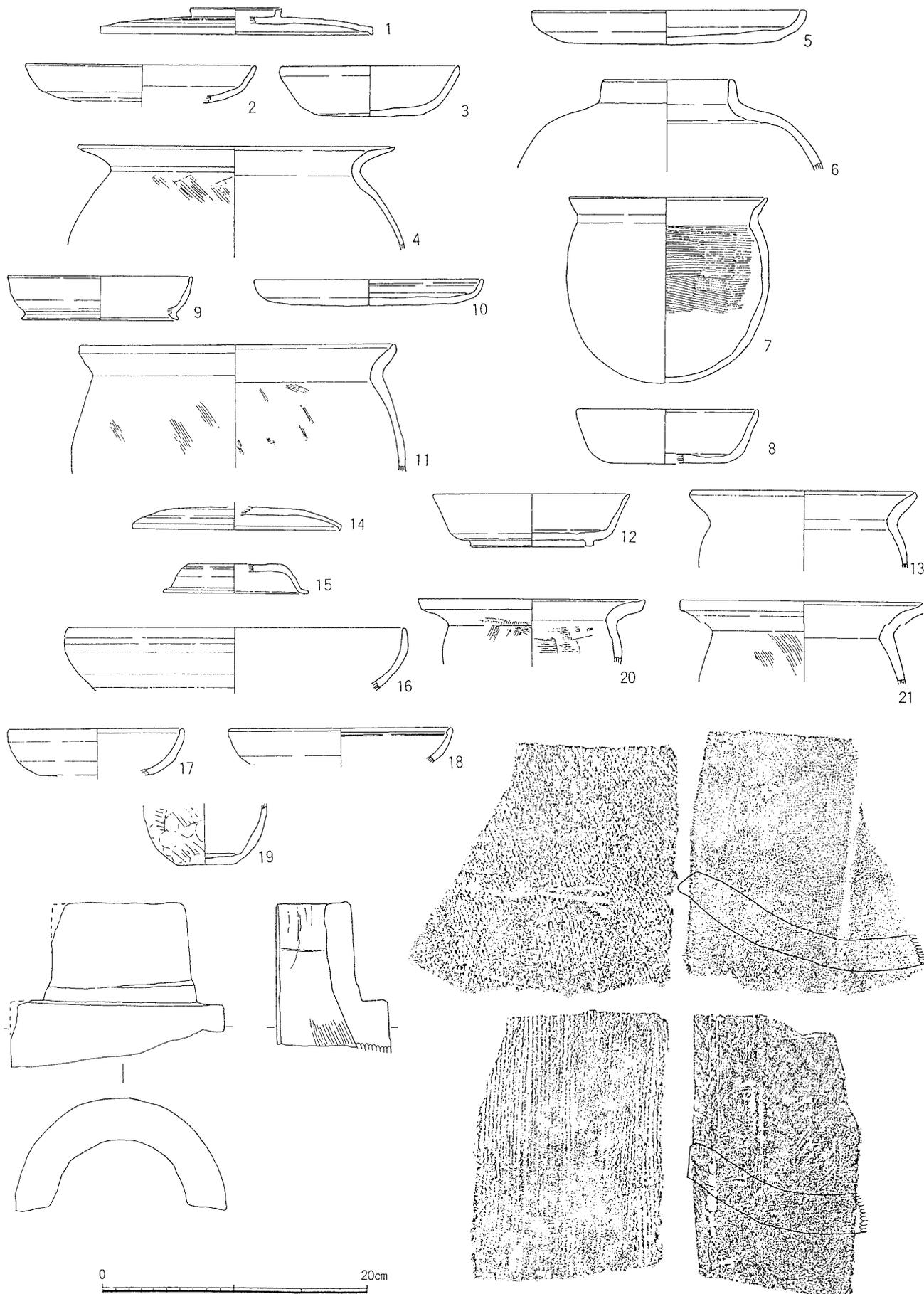
S X 06 検出

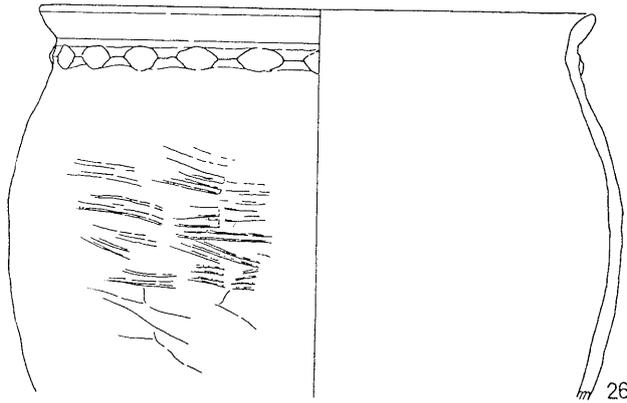


S X 06

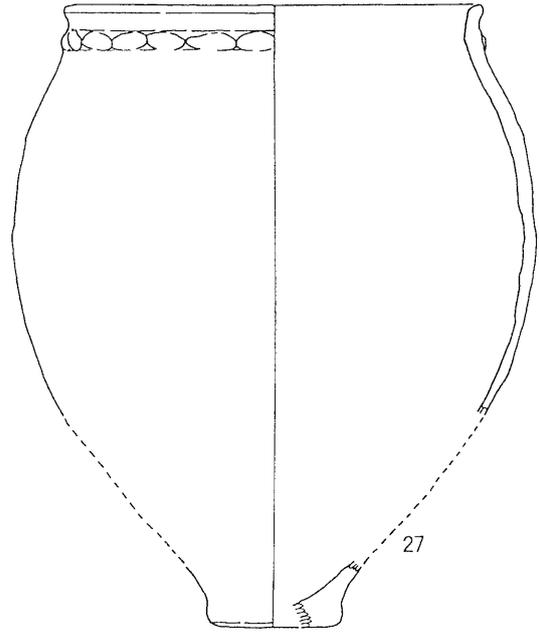


S X 13





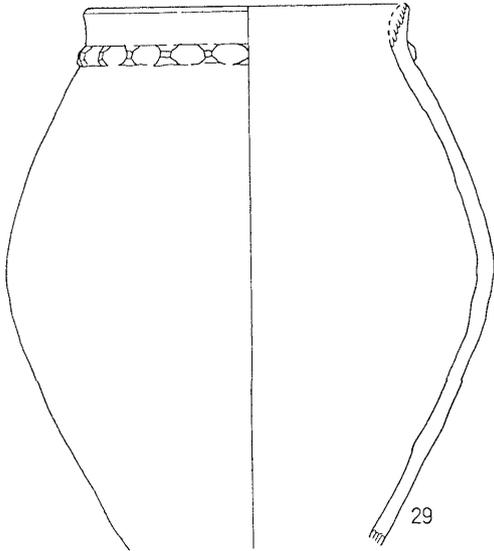
26



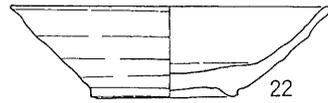
27



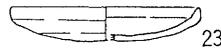
28



29



22



23

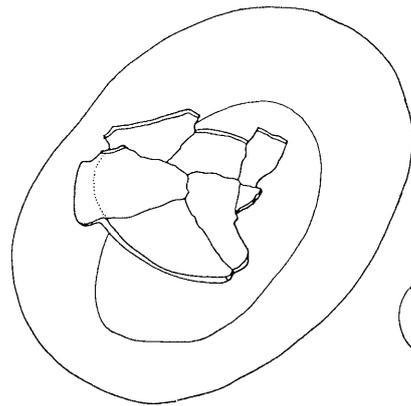
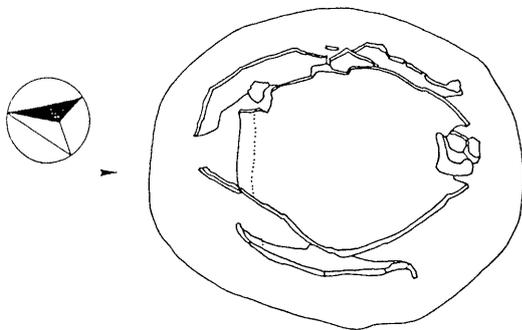


24

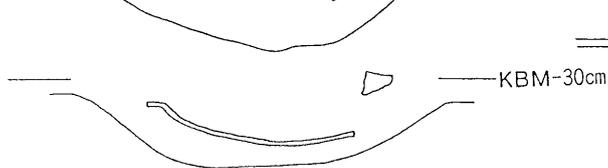


25

0 20cm



0 1



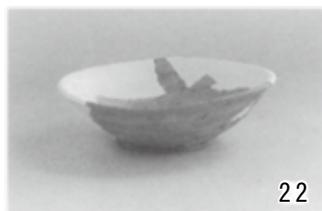
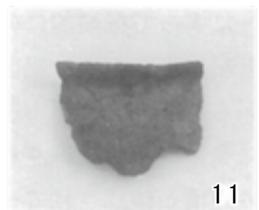
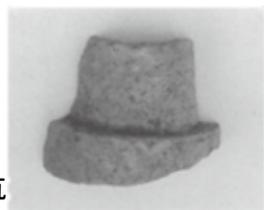
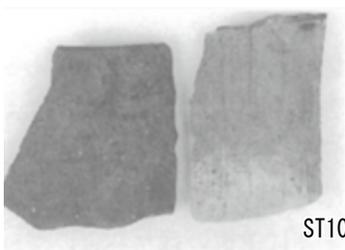
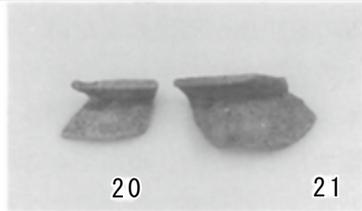
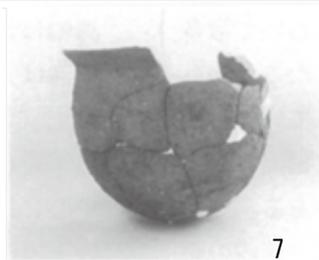
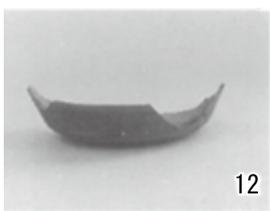
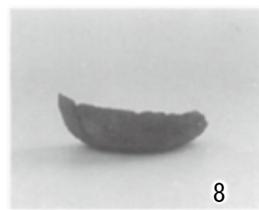
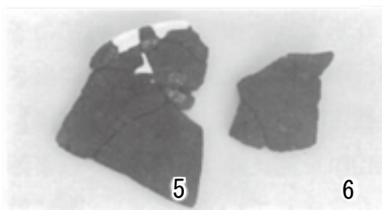
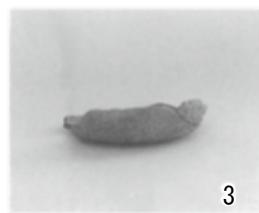
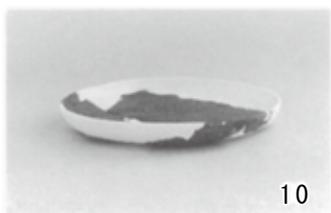
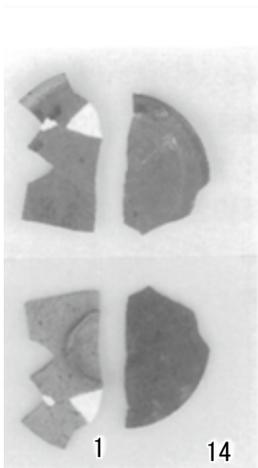
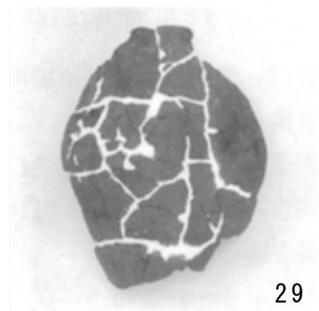
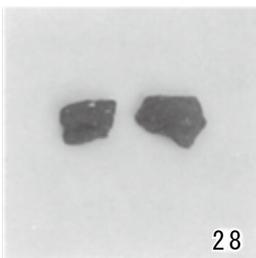
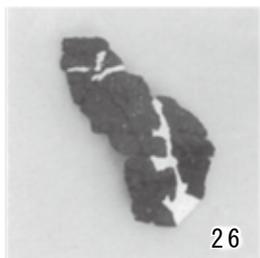
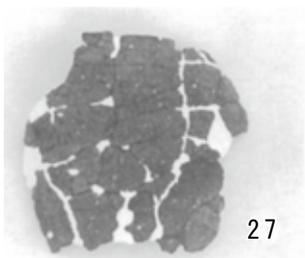
KBM-30cm



KBM-30cm

S X 06 土器棺墓 (1:10)

S X 13 土器棺墓 (1:10)



出土遺物

## 4. 石薬師東遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市石薬師町字寺東 452-39  
事業主体 個人  
調査目的 個人住宅建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年4月10日～平成8年4月18日  
調査面積 80 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25, 000)

### 1. はじめに

石薬師東遺跡は鈴鹿川下流域の左岸台地上に位置する。当地域は鈴鹿市内でも有数の古墳の密集地帯であり、付近には多数の古墳が分布している。その大部分は丸山古墳群、中山古墳群、願入坊古墳群、南山古墳群、山辺古墳群などに見られるように直径10 m前後の小円墳から構成されるが、中にはこれらの古墳群の盟主墳とも考えられる乗鞍古墳、南町古墳、丸山1号墳、大谷古墳など長径40 mを越えるような比較的規模の大きな前方後円墳も含まれている。

しかし、この地域は第二次世界大戦中に陸軍通信部隊の駐屯地が築かれたため、その過程において数多くの古墳が破壊され、消滅した。こうしたことから本来はさらに多くの古墳がひしめきあっていたと想像される。なお、現在でもこの地域を発掘調査すると戦時中の塹壕の跡が発見されることがある。今回調査を行った石薬師東遺跡は県消防学校の施設の整備事業に伴い平成5年から三重県埋蔵文化財センターによって継続的に発掘調査が実施されており、5世紀後半から6世紀前半の小方墳が多数確認されている。また、鈴鹿市遺跡調査会によっても平成7年に発掘調査が実施されており、5基の小方墳、1基の円墳が確認されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、平成7年に鈴鹿市遺跡調査会によって実施された調査区のすぐ南に隣接する場所である。調査面積は約80 m<sup>2</sup>、調査区の標高はおよそ40 m、現況は畑地である。

### 2. 調査の成果

今回の調査地は平成7年に調査が実施され、石薬師東59号墳の周溝の北西コーナーが確認された場所

のすぐ南東に接するため、その59号墳の周溝の続きを予想して調査に入った。調査地内の基本層序は第Ⅰ層が厚さ15cmの腐植土(クロボク)、第Ⅱ層が厚さ5cmの褐色土、第Ⅲ層が黄褐色の地山である。遺構の検出はこの第Ⅲ層の上面で行った。その結果、当初の予想通り59号墳の周溝と新たに64号墳の周溝が検出された。

#### 【遺構】

〔石薬師東59号墳〕

既に墳丘は削平されていたが、北側と東側の周溝が検出された。一部は後世の攪乱を受けている。周溝幅は最大で150cm、深さは深い所で50cmを測る。周溝は大きく分けて3層から成り、上から暗褐色粘質土(①層)、黒色粘質土(②層)、灰黄褐色粘質土(③層)となる。遺物は北周溝の第①層、第②層を中心に出土した。この古墳の規模は一辺7.5m前後の方墳になると考えられる。

〔石薬師東64号墳〕

59号墳の南東に位置する。周溝の一部と考えられる溝状の遺構が検出されたが、戦時中の塹壕によって切られている。墳丘は既に削平されている。現存で周溝の幅は90cm、深さは10cmを測るが、遺物は全く出土していない。全体に遺構の残り具合が良くないために古墳の規模などの詳細については不明であるが、59号墳との位置関係から推察して、本来はさらに南へと展開していたものと考えられる。

#### 【遺物】

今回の調査で出土した遺物は全て59号墳からのものであり、その大部分は北周溝の第①層、第②層から出土した。

〔59号墳周溝第①層出土の遺物〕

**須恵器坏蓋 (1)** 口径 12.9cm、器高 5cm。天井部はやや扁平で、3/4 にヘラケズリが施される。口縁部はやや外反気味に下に伸び、端部は内傾する凹面をなす。なお、天井部と口縁部の間には稜を有す。焼成は並で、全体的にやや剥落が目立つ。色調は灰白色。

**須恵器坏蓋 (2)** 口径 13.2cm、器高 5cm。天井部はやや扁平で、2/3 にヘラケズリが施される。口縁部はやや外反気味に下に伸び、端部は内傾する凹面をなす。なお、天井部と口縁部の間には稜を有す。焼成は並で、色調は外面が明緑灰色、内面が灰白色である。

**須恵器坏蓋 (3)** 天井部の一部のみが残存する。天井部はやや扁平で、外面はヘラケズリ、内面はロクロナデ調整される。焼成は良で、色調は灰白色である。

**須恵器甕 (4)** 口縁部の一部のみが残存する。推定口径 20.8cm。内外面ともロクロナデ調整される。焼成は良で、色調は明緑灰色である。

**土師器甕 (5)** 口縁部の一部のみが残存する。推定口径 11.2cm。外面は剥落が著しく調整は不明であるが、内面はナデ調整されている。焼成はやや軟で、色調は外面が浅黄橙色、内面にぶい黄橙色を呈す。  
[59号墳周溝第②層出土の遺物]

**須恵器坏蓋 (6)** 口径 12.8cm、器高 4.6cm。天井部はやや扁平で、1/2 にヘラケズリが施される。口縁部はやや内湾気味に直立し、端部は内傾する凹面をなす。焼成は良で、色調は明緑灰色を呈す。

**須恵器坏蓋 (7)** 天井部と口縁部の一部を欠く。推定口径 12cm。天井部 2/3 にヘラケズリが施される。口縁部はやや内湾気味に下に伸び、端部は内傾する凹面をなしている。なお、天井部と口縁部の間には稜を有する。焼成は良で、色調は外面が緑灰色、内面が灰白色を呈す。

**須恵器坏身 (8)** 口径 10.6cm、器口 4.4cm。底部は丸みを持ち、2/3 にヘラケズリ、中心部は後にナデ調整されている。立ち上がりは内傾し、端部は凹面をなしている。焼成は良で、色調は青灰色である。

**土師器壺 (9)** 体部のみの残存で、口縁部を欠く。体部最大径 17cm。体部はやや肩が張っており、最大径は上位に位置している。底部は平底である。内外

面ともに剥落が目立ち、調整技法は不明である。焼成は並、色調は浅黄橙色を呈す。

その他、図示し得なかったものとして須恵器甕片、土師器坏片が出土している。

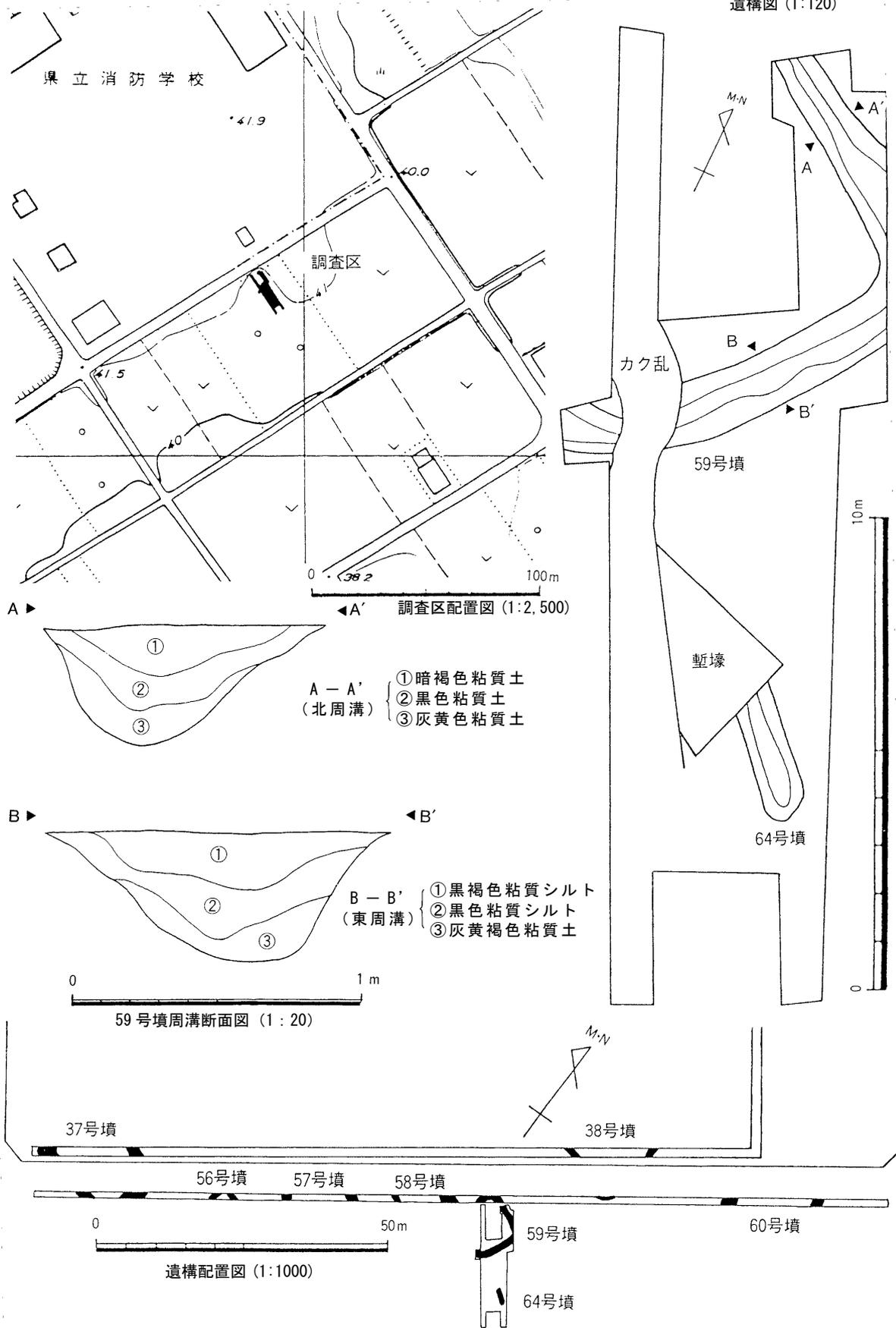
### 3. まとめ

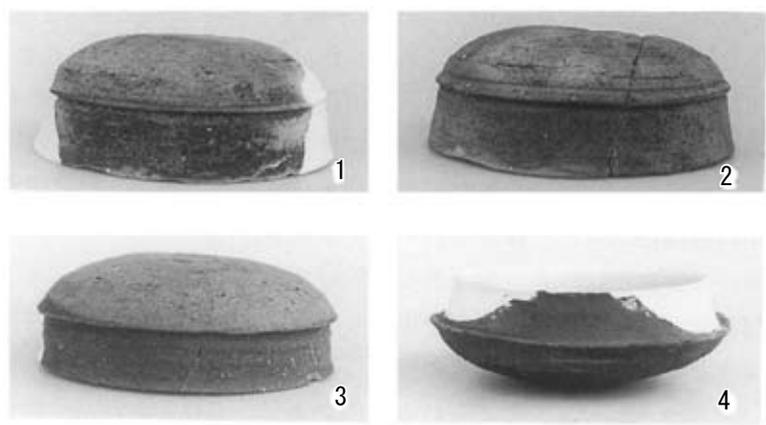
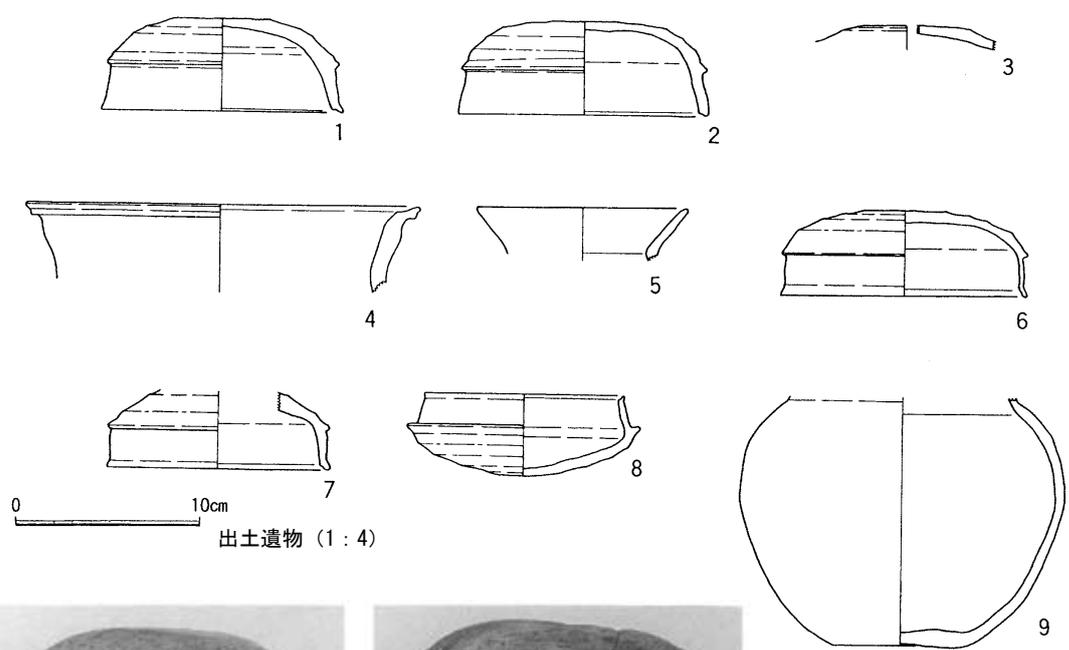
今回の調査では石薬師東 59・64 号墳という 2 基の方墳を確認した。いずれも墳丘は既に削平されており、周溝のみが検出された状況であった。その内、64 号墳については残念ながら周溝の遺存状態が良くなく、出土遺物も全く無いたため、その詳細については明らかに出来なかった。しかし、59 号墳については一定の資料を得ることが出来た。この古墳は一辺 7.5 m の方墳で、出土した須恵器から陶邑編年の TK 23 段階に平行するものとみられ、5 世紀後半の築造が想定される。

周溝から出土した須恵器、土師器はいずれも周溝の底から浮いた状態で出土しており、周溝がある程度埋まった段階で追善的な祭祀が行われたようである。このことは平成 7 年の調査で、同じく 59 号墳の西周溝から口縁部を欠き、底部を穿孔された須恵器甕が正立した状態で周溝底から浮いた位置で出土していることから肯定されよう。但し、第①層出土の遺物の中には周溝の肩上でずれ落ちたようなものも見受けられ、墳丘から転落したものも含まれていると考えられる。

今回調査を実施した石薬師東遺跡は近年の調査により、数多くの方墳が中心となって構成される初期群集墳であることが明らかになりつつある。しかし、古墳群はさらに面的に広がっているものと考えられ、特に南への展開が予想されよう。古墳群の全容解明にはこういった未確認の古墳の調査が今後必要になってくるものと考えられる。今回の調査結果もそういった数多くの資料の中において生かしていくことが重要である。こうした資料の蓄積により、この古墳群の当地域における位置付け、性格がより明らかになるものと考えられる。  
(杉立正徳)

遺構図 (1:120)





出土遺物



全景 (北から)



59号墳 (北から)



59号墳 (南東から)



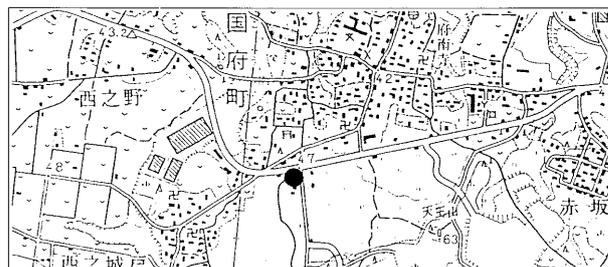
59号墳遺物出土状況 (北から)



64号墳 (南西から)

## 4. 三宅神社遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市国府町字西木曾田 3694-6  
事業主体 個人  
調査目的 店舗建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年5月23日～5月31日  
調査面積 378 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 新田剛・藤原秀樹・辻公則



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

鈴鹿川右岸の台地上に位置する当遺跡は、かつて方八丁国府域が想定された伊勢国府推定地として知られる。1993年には鈴鹿川・安楽川を挟んで対岸に位置する長者屋敷遺跡（鈴鹿市広瀬町）において奈良時代後半の国府政庁が確認されるに及び、国府町の国府推定地が平安期以降の国府所在地であるという国府移転説が確立した。

当遺跡周辺における発掘調査は1958年の藤岡謙二郎氏らによる試掘調査が最初で、1991年には鈴鹿市教育委員会によって開発に伴う範囲確認調査が実施されているが、ともに国府に関連するような考古学的成果は得られていない。

今回の調査地は式内社に比定される三宅神社の南150mに位置し、調査前の現況は隣接する道路から1m程下がった水田であった。試掘調査においては本来存在したであろう遺構が水田の床下げ等によって失われた状況が伺え、かろうじて削平を免れた遺構が記録保存の対象となった。

遺構検出面は表土の耕作土を約30cm除去したオーブ灰色シルト層上面で、台地上ではあるものの湿地的な層相を呈している。

### 2. 遺構と遺物

奈良時代の井戸S E 01、平安時代末の土壇S K 01・井戸S E 02が検出された。その他に中世以降の溝・柱穴も検出されたが、ほとんど痕跡と云えるものであった。

#### (1) 奈良時代の遺構

##### 井戸S E 01

調査区西寄りで検出された方形の掘り方を持つ井

戸である。掘り方は東西2.9m・南北2.8mを測るほぼ正方形の平面形をなし、深さは1.8mで、ほぼ座標方位に併せて設置されている。地山は検出面から約0.6mがシルト層で、以下砂層となり、遺構底部において湧水した。深さ約0.8m以下には幅1.2mの井戸枠の痕跡が残存するが、上層では認められない。井戸の廃絶時に材の再利用のため掘削され、埋め戻されたものと考えられる。上層から底部にかけての埋土は還元色を呈する。

埋土から土師器杯・甕・須恵器坏蓋・坏・井戸枠材などが出土したが、大部分が上層及び井筒部分からのものである。木材には一端を薄く削った横椀と考えられるものがある。上層からは完形の土師器杯が、底部からは完形の須恵器広口壺が出土した。

**土師器杯 (1～3)** 口縁部が内湾するもの(1～2)と外反するもの(3)がある。1は完形で、体部外面がケズリ調整される。3の口縁部は外反するが、口端は内側に巻き込まれる。外面はミガキ調整。口径は1が116mm、2が134mm、3が128mmである。

**土師器甕 (4～5)** 4の体部はあまり膨らまず、口縁は緩やかに外反する。5の口縁はやや強く外反し、口端はつまみ上げられる、口縁のヨコナデは丁寧。4は口径249mm。

**須恵器坏蓋 (6～12)** 受部のある杯に伴う蓋(6～7)とかえりのある蓋(8)とかえりのない蓋(9～12)がある。

9は丸みを帯びた高い天井部を有する。口径は6が166mm、7が146mm、8が100mm、9が164mm、10が186mm、11が178mm。

**須恵器坏 (13～22)** 高台のない坏(13～16)とある坏(17～22)がある。

16は器高が低く、径が大きい。17は小型で器高が高い。17～21の高台は「ハ」状に開き、20の高台は底部のやや内側に位置する。22の高台も「ハ」状に開くが、やや内湾ぎみとなる。13は口径99mm、14は口径122mm・器高38mm、15は口径112mm・器高45mm、16は口径150mm・器高31mm、17は口径100mm・底径61mm・器高45mm、18は口径144mm・底径104mm・器高43mm、19は口径144mm・底径112mm・器高40mm、20は口径170mm・底径150mm・器高39mm、21は底径119mm、22は底径100mmである。

**須恵器広口壺 (23)** 体部下半は縦・斜めに手持ちケズリされ、上半はカキメ調整される。口径119mm・器高132mmで、完形。

**須恵器長頸瓶 (24)** 底部片。高台は外半ぎみに開く。底径103mm。

**木製遺物 (25)** 井戸枠の横棧と考えられる。横断面が53×76mmの矩形を呈する角材で、一端は欠損する。残存するもう一端は薄く加工されている。

## (2) 平安時代末期の遺構

### 井戸SE02

井戸SE01の東3.3mに位置する。径1.9×2.0m、深さ2.0mの素掘り井戸である。地山は検出面から約0.8mまでがシルト層で、以下は砂層となる。土師器甕・鍋・ろくろ土師器・山茶碗が出土した。

**土師器甕・鍋 (28～32)** 28～30は口端が内側に軽く折り返されるもので、30は器壁が薄い。31・32はいわゆる清郷型鍋の細片。口径は28が254mm、29が278mm、30が208mm。

**ろくろ土師器 (33)** 底部片。径53mm。

**山皿 (34)** 直線的で深い体部にしっかりした高台をもつ。口径93mm・底径52mm・器高25mm。

**山茶碗 (35)** 内面に厚く炭化物が付着する。底径84mm。

### 土壌SK01

井戸SE02の北東0.5mで隣接して検出された。径1.0×1.2m、深さ40cmの円形土壌で、埋土は有機質である。山茶碗・土師器片が出土した。

**山茶碗 (26・27)** 刳痕のあるしっかりした高台を有する。26は底径76mm、27は口径156mm・底径78mm・器高52mm。

## (3) その他の遺物

その他土師器皿(36)・緑釉陶器碗(37)・山茶碗(38)が表土中から出土した。36は口径221mm・器高33mm、37は底径80mm、38は口径154mm・底径70mm・器高51.5mm。

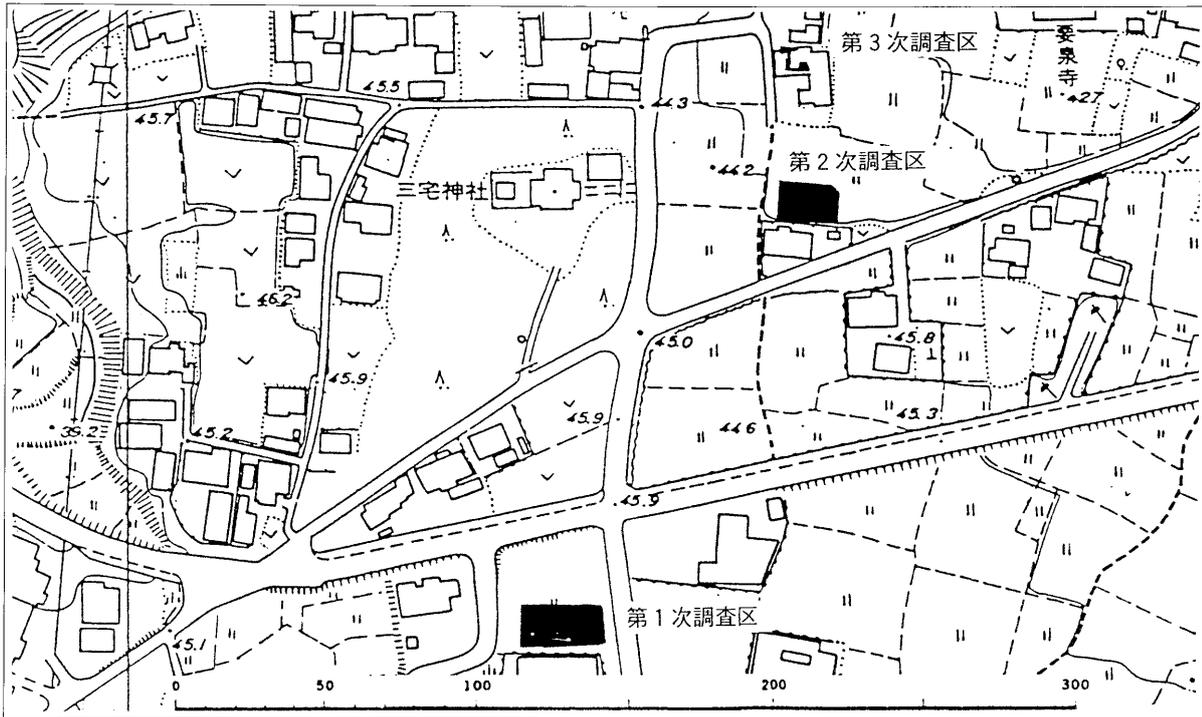
## 3. まとめ

井戸SE01は出土遺物から、新しくとも奈良時代中葉を下ることはないと考えられる遺構である。井戸底部から出土した完形の須恵器広口壺は、水の汲みだしに使用されたものが遺棄されたか、あるいは祭祀に供された可能性が考えられる。上層に見られる攪乱から井戸枠材の一部は抜き取られたものと考えられる。残存していた木製遺物には26のような横棧と考えられるものがあつたが、井戸枠の構造を復元できるまでには到っていない。周囲にはその他に関連する建物があつたものと推定されるが、全て開墾等により消滅したものと思われる。少なくとも当遺構の発見によって付近に奈良時代初頭に遡りうる比較的規模の大きな施設があつたことは疑いなく、初期国府あるいは郡衙等を考える上で興味深い。

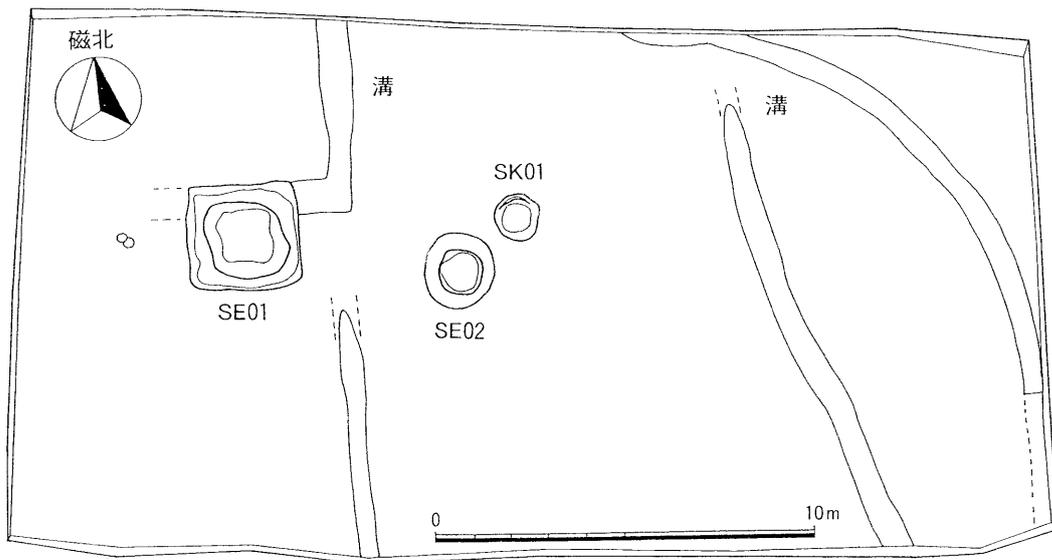
一方井戸SE02は律令末期の国府周辺の様子が窺い知れる資料である。出土遺物から平安後期に主要な使用年代が求められ、平安末期に到り廃絶した可能性がある。隣接する土壌SK01の性格は不明であるが、埋没時期はSK02と重なるものである。井戸の掘削を試み、途中で放棄された可能性がある。これら平安後期～末期の遺構にはとくに官衙等に関連する要素は見受けられない。(新田剛)



調査区全景(西から)



調査区位置図 (1 : 2,500)



調査区平面図全景 (1 : 200)



井戸SE01(南から)



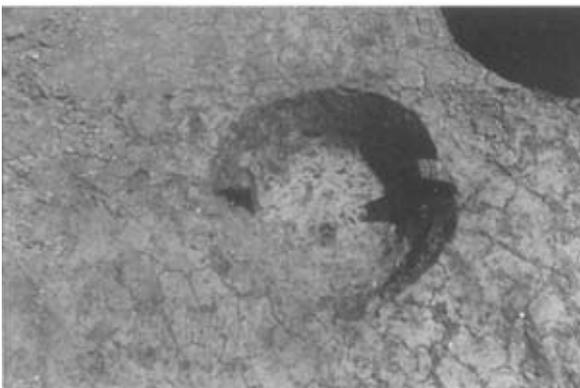
井戸SE01断面(南東から)



SE 02 (西から)



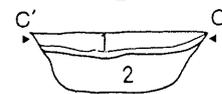
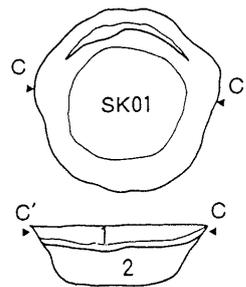
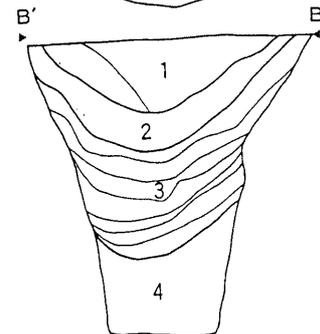
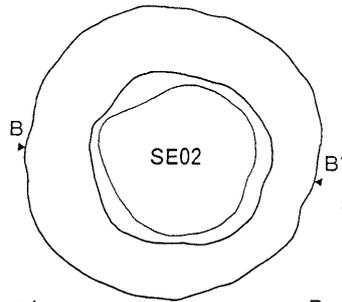
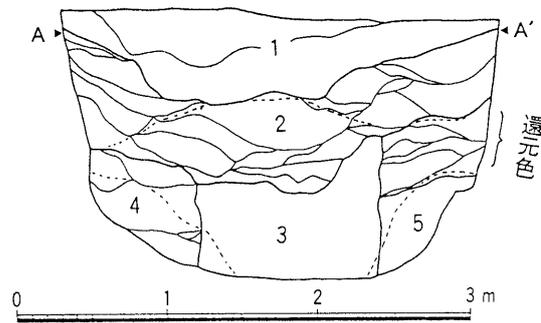
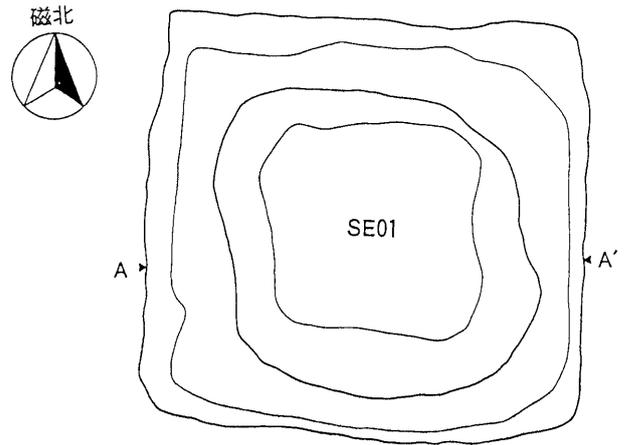
SE 02 断面 (北から)



SK 01 (北から)



SK 01 断面 (北から)

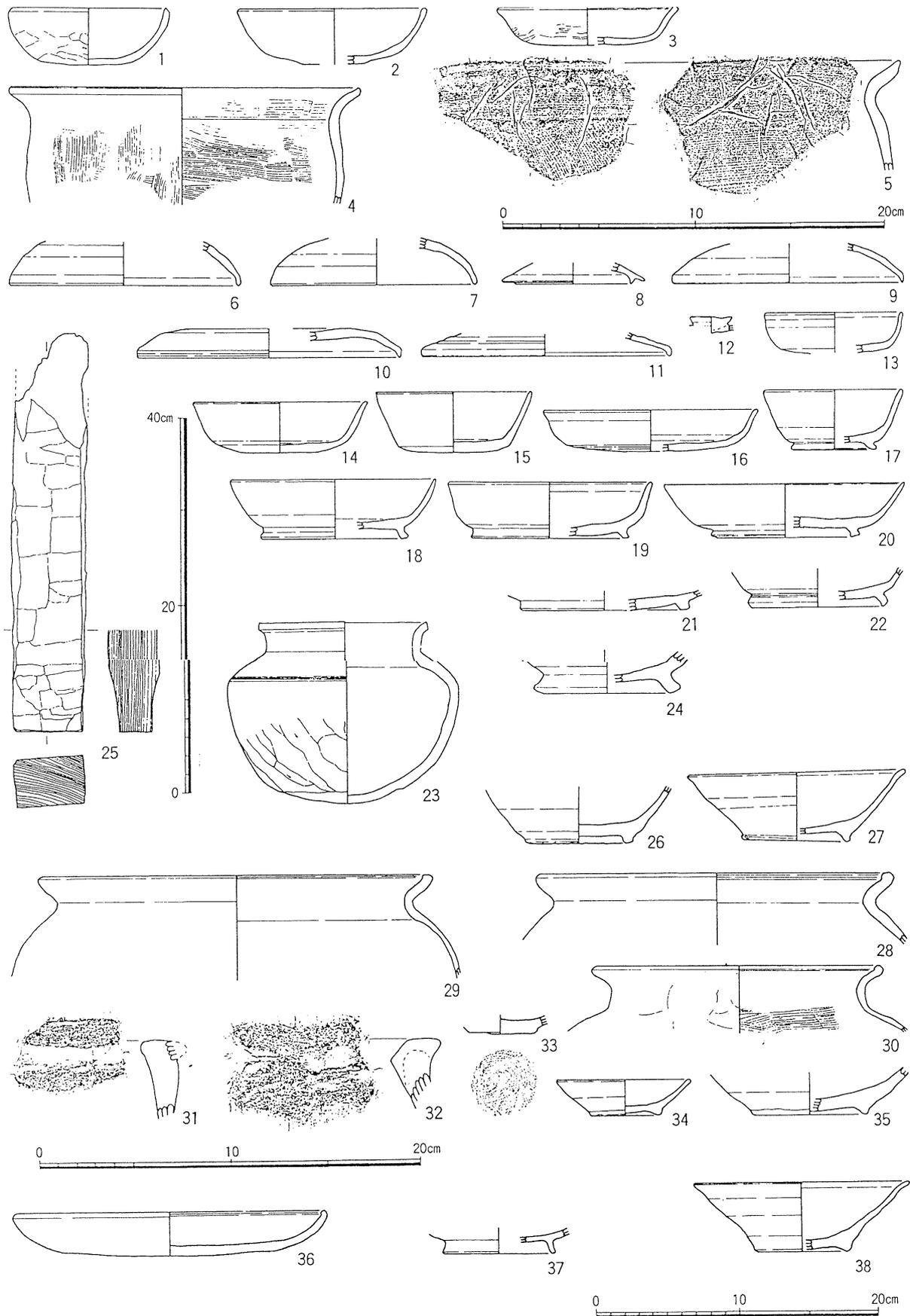


- SE 01
1. 廃絶時埋土上層。砂礫混じり有機質シルト。
  2. 廃絶時埋土下層。有機質シルト・灰色シルト
  - 3~4. 掘方埋土(裏込め土)。灰色シルトと有機質シルトの互層。
  5. 井戸枠内埋土。シルト質粘土。

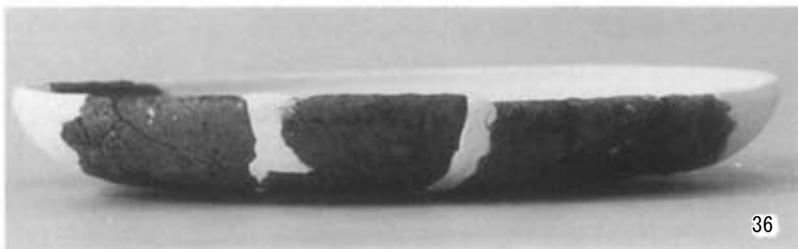
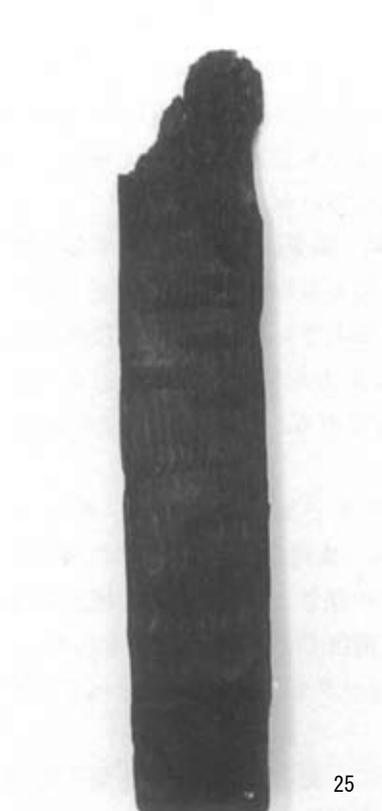
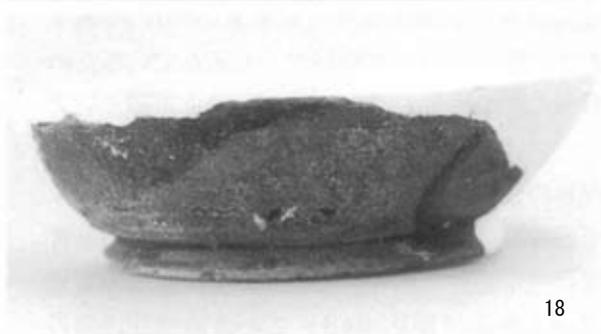
- SE 02
1. 有機質砂礫混じりシルト。
  2. 有機質砂礫混じりシルト・シルト質粘土
  3. 砂礫混じり有機質シルトとシルト質粘土の互層。
  4. 砂礫混じり有機質シルト。

- SK 01
1. 有機質砂混じりシルト・有機質シルト質粘土。
  2. 有機質砂混じりシルト

SE 01・SE 02・SK 01 (1:50)

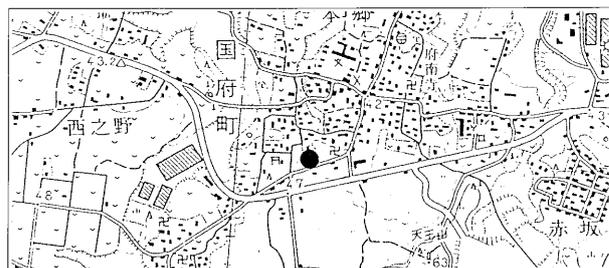


土器・木製品 (1 ~ 25 : SE 01, 26 ~ 27 : SK 01, 28 ~ 35 : SE 02, 36 ~ 38 : その他)  
 (1 ~ 4・6 ~ 24, 26 ~ 30, 33 ~ 38 1 : 4, 5, 31 ~ 32 1 : 3, 25 1 : 6)



## 4. 三宅神社遺跡（第2次）発掘調査報告

所在地 鈴鹿市国府町字中木曾田 3565-2  
事業主体 橋本明子  
調査目的 塾建築に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年6月17日～7月17日  
調査面積 260 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 藤原秀樹



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

遺跡の立地および周辺的环境についてはすでに第1次発掘調査報告で述べられたとおりである。第2次調査地点は1次調査地点の北北東150mに位置する。東に北側から浅い解析谷が入り込んでいるため三宅神社を中心とした遺跡の広がり東縁部といえよう。

調査地の西に水田1枚を隔て三宅神社が所在する。この三宅神社は元和元年(1615)の棟札に「奉造立勢州鈴鹿郡府中総社大明神」とあり伊勢国総社の有力な候補地である[仲見1980]。このため神社前面の水田では1957年藤岡謙二郎氏を中心とした京都大学の学術調査団によって発掘調査が実施され、瓦や須恵器・土器片の出土が報告されている[藤岡1960]。

### 2. 遺構と遺物

遺跡の現況は水田である。耕作土と床土を重機により除去すると直ちに砂礫を含む黄白色粘質土の基盤層となる。この上面において遺構検出を行った。

#### (1) 遺構

**掘立柱建物SB01** 調査区東辺に位置する、梁行2間の東西棟の建物である。主軸はほぼ正方位を向く。柱間は、桁行9.5尺、梁行7尺を測る。柱掘方は一辺約50cmの方形で、検出面から底面までの深さは約10cmである。埋土はいずれも黒褐色土で、柱根は確認できなかった。

**掘立柱建物SB02** SB01を北へ1m弱平行移動させた位置に存在する。梁行き2間の東西棟の建物で、主軸はほぼ正方位であるがSB01と比較するとごく僅か西に振る印象を与える。柱間は、桁行9.5尺、

梁行7尺を測る。柱掘方は一辺約50cmの方形で、検出面から底面までの深さは約10cmである。埋土は黒褐色および暗灰褐色で、SB01とは異なり焼土・炭および土器片を多く含む。また南辺の柱穴(pit14・15)では抜き取り痕を、その他の柱穴では柱根が確認できた。pit14から灰釉皿(16)が出土している。

**掘立柱建物SB03** 調査区南辺に位置する。梁行2間の南北棟の建物で、主軸はほぼ正方位を向く。柱間は梁行9尺、桁行10尺を測る大型建物である。柱掘方も一辺100～80cmと大型であるが、検出面から底面までの深さは10cm以下で、著しい削平を受けていることをうかがわせる。埋土は黒褐色または鈍い黄褐色で、北西隅のpit6では直径30cm強の柱痕が確認できた。また東辺のpit3から土錘(22)と須恵器瓶(23)が出土している。

**掘立柱建物SB04** 調査区北辺に位置する。桁行3間の東西棟の建物とみられる。主軸は正方位で、柱間は桁行7尺、梁行き6.5尺を測る。柱掘方は一辺60cmのいびつな正方形で、埋土は黒色または黒褐色でかなり粘質である。東隅のpit23は流路SD08に切られる。

**井戸SE** SB03のすぐ東に位置する。掘方で東西96cm、南北85cm、底部は55cm×40cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ124cmを測る。埋土は埋め戻しとみられる黒褐色土(土器細片・炭を含む)、暗褐色土(地山土ブロックを多く含む)層をへて、黒色土層となる。

この黒色土層は、途中で褐色粘質土層を間層として含む。これより上層は強粘質で炭を多く含み、土師器(8・9)や緑釉陶器など土器片多数を出土した。

黒色土下層では遺物の出土は比較的少なく、側壁の崩落に伴う褐色土ブロックが多い。さらに、最下層は水分を多く含む黒色泥土層となる。遺物の出土は比較的少ないが、最下層からまとまって土師器碗、皿(1～5)群など完形遺物が出土した。井筒の存在を示すような構造や木質遺物は見られないが、底面に張り付くように曲物底板(10)が出土した。

一括出土した碗・皿は、その状況から小皿2、皿、台付皿2、碗の順に入れ子にされた状態で投入された可能性が高く、祭祀行為に伴うものか。

**溝SD01・SD04・SD06** 調査区の西半分集中する、僅かに正方位から東に振る幅1～2m、検出面からの深さ10～20cmの南北溝である。埋土は黒色土で、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、山茶碗、瓦片を含む。

**溝SD02** 幅約2.8m、深さ約10cmの東西溝である。埋土は褐色土で、須恵器、土師器、瓦片を含む。

**溝SD05** 幅約70cm、最大深さ30cmの南北溝である。正方位から5°西に振る。SK04・05に切られる。埋土は黒色土で僅かながら土師器、黒色土器片を含む。

**溝SD07** 調査区の中央から北東隅へ延びる、延長約10m、最大幅40cm、検出面からの深さ5cmの溝である。SB01、SB02と重複し、SB02のpit16に切られることから調査区内でも比較的古い遺構である。須恵器、土師器の破片を含む。

**溝SD08** 調査区中央に発し、北へ延びる溝である。SB04のpit23を切る。延長10m、最大幅3mを測る。掘方は著しく屈曲し、底面の凹凸も著しく自然流路の感がある。埋土は黒色の粘質土で、土師器、灰釉陶器、山茶碗、瓦片を含む。延長上に井戸SEが存在するので、井戸に伴う排水溝であった可能性もある。

**土壌SK01、SK02** SE01は長径2.2m、SK02は長径1.2mで、いずれも短径1mの楕円の土壌である。断面は皿状で検出面からの深さはいずれも10cmを測る。切り合い関係はSK02→SK01→SD01である。いずれも埋土は砂礫を含んだ褐色土で、SK01は土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦片を含む。

**土壌SK04・SK05** 調査区西辺に位置する。SK05は南北4.6mの方形の土壌で、SK04はSK05に切られるため規模は不明であるが、同様の土壌と見られる。

いずれも埋土は暗褐色土で、いずれも土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦片を含む。底部は平坦ではなく、検出面からの深さ10～15cmを測る。

**土壌SK06** 調査区東辺にかかって検出された。直径80cm、深さ40cmの土壌である。埋土は上層がさらさらした黒色土(黒ボク)、下層が黄色土細粒を多く含む粘質の黒褐色土で、遺物の包含はない。

**土壌SK07** SB03の北側で検出された。長径125cm、短径80cmの楕円形土壌で、主軸は東に約60°振る。埋土は暗褐色粘質土の単純な堆積で、遺物は含まない。

**土壌SK08** SD01とSK05の間に位置する。当初は柱穴と考えていたためpit1と記録している。長径1.5mの不整形土壌で、検出面から底面までの深さ20cmである。検出面で、土師器の皿(18)が伏せられたように完形で出土した。埋土は上層が黒褐色土で緑釉陶器片2点を含む土器片多数と焼土・炭を含む、下層はオリーブ灰色の粘質土である。

## (2) 遺物

### 井戸SE出土の遺物(1～11)

1～6は最下層から一括して出土した遺物。11は基底面からの出土、その他は下層の黒色土層からの出土である。

**土師器小皿(1・2)** ロクロ製の小形の皿である。高台を意識して底部を厚く糸切りする。1は口径9.5cm、底径2.3cm、器高2.7cm。2は、口径9.5cm、底径3.6cm、器高1.9cmで、底面に「X」のヘラ書きがある。

**土師器皿(3・7)** ロクロ製の皿である。底部はわずかに擬高台風に糸切りされる。3は口径10.3cm、器高2.8cm。7は口径10.3cm、器高2.6cm。

**土師器台付小皿(4・5)** 非ロクロ製の、張り付け高台を有する小皿である。高台及び口縁部は樟ナデ、その他は指オサエ調整される。4は口径9.3cm、器高2.2cm。5は口径8.9cm、器高2.3cm。

**土師器碗(6)** ロクロ製の碗である。底部の糸切り痕はナデ消され、低い高台状に作り出している。口径14.8cm、器高4.2cm。

**土師器台付皿(8)** ロクロ製の皿である。高く、外反する高台を張り付ける。口径11.8cm、器高3.5cm。

**土師器皿 (9)** 非ロクロ製の皿である。底部は指オサエ調整される。口径 10.6cm、器高 2.6cm。

**底板 (10)** 推定径 18cm、厚さ 1cm の曲物底板である。表面は大部分が腐食するが、残存部には円周に沿って動く工具痕が残る。側端部に木釘の穴が残る。

その他の遺構出土の遺物

**緑釉稜碗 (11)** S K 08 出土。底部のみの破片で、長めの角高台を有する。釉は刷毛塗りで底面まで塗られる。東海系。

**灰釉皿 (12)** S D 04・06 間包含層出土。口径 12.1cm、器高 2.8cm。口縁部はやや内湾し、退化傾向の三日月高台を有する。釉は漬け掛けされる。

**灰釉釉 (13・14)** 13 は S B 02 の pit14 掘方出土。長めの三角形高台を有する。内面には重ね焼きの高台の圧痕が残る、そこまで釉が厚く掛かる。14 は、S D 04・06 間包含層出土。退化した太い三日月高台を有するが、内面の灰釉は中心近くまで丁寧に掛けられる。

**土師器杯 (15)** S K 08 出土。口径 12.7cm、器高 3.1cm。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内面および体部外面は横ナデ、底部は指オサエ調整される。

**須恵器薬壺蓋 (16)** S K 05 出土。推定口径 15.2cm、器高 2.8cm。天井部はロクロ削り調整される。

**土錘 (17)** S B 03 の pit3 掘方出土。全長 4.5cm、最大径 1.3cm。土師質。

**土師器高杯 (18)** S D 05 の南端部出土。断面七角形の長脚高杯の脚部。

**須恵器壺 (19)** 胴部のみ出土。外面は、肩に一条の凹線を施し、全体にカキメ、下半部にはロクロ削りが施される。推定最大径 20cm。

**平瓦** S D 04・06 間包含層出土。内面には布目圧痕、外面には平行タタキが施される。

### 3. まとめ

第 2 次発掘調査の検出遺構は、3 段階に区分される。第 1 段階は 4 棟の掘立柱建物が営まれていた段階、第 2 段階は井戸が営まれた段階、第 3 段階は南北、東西に走る溝群や各土壌が営まれた段階である。

第 1 段階の遺構は、4 棟の掘立柱建物であり、併伴する遺物は S B 02 柱掘方より出土した灰釉陶器片

1 点 (13) であるが、包含層等から出土した緑釉・灰釉陶器類もほぼこの建物群に伴うものと考えている。これらは猿投編年の黒笹 90 号窯式に遡るものもみられるが、大部分は折戸 53 号窯式 [斎藤・植崎 1982] の範疇に収まるものである。最近の年代観 [斎藤 1994] によれば折戸 53 号窯式の開始は 900 年頃とされるので、掘立柱建物群は 9 世後半から 10 世紀前半の範囲で営まれたと考えておきたい。

第 2 段階の遺構で確実なものは井戸 1 基であるが、周辺に遺構としてまとまらない円形を呈する小形の柱穴が検出されており周囲に建物が存在し、集落が営まれていたことは確実であろう。

この井戸からは一括投入されたと考えられる土師器碗皿が出土しており年代の手がかりとなる。これらのうち台付皿を除くといずれもロクロ製土師器である。市内におけるロクロ製土師器の類例としては津賀平遺跡第 2 次調査 (未報告) の土壌 5・7 出土の一括遺物をあげることができ、東山 72 号窯式の灰釉碗に伴っている。今回の井戸出土資料は、津賀平遺跡のもの比べてやや小型化し、皿部が浅くなり、高台が高くなる傾向が見られより新しい様相を示す。斎宮跡 [倉田 1985] では擬高台風の底部を持つ小皿は後 II 期 (百大寺窯式平行期) に多く、末期には減少するとされる。これらのことから井戸が利用された時期はおよそ百大寺窯式平行期であり、11 世紀前半代に位置づけておきたい。

第 3 段階の溝群、土壌に含まれる遺物は全て細片化し、磨滅するものも目立つため大部分が混入品とみられる。出土遺物には高台の退化した山茶碗の細片が含まれるため、鎌倉時代後半以降に営まれたものであろう。これら遺構群はその形態から耕作痕跡と考えられるので、中世のある時期から一帯は耕地へと転換していったものとみられる。

最後に、第 2 段階の掘立柱建物群の性格について考えておきたい。いずれの建物も主軸を正方位に揃えている。大型建物 S B 03 を基準にみると、S B 03 の東平 (ピラ) と S B 04 の東端 (ツマ) が揃い、S B 03 の北端と S B 01 の南平が揃えられている。また、S B 03 と S B 01 間は柱芯々で 3 m (10 尺)、S B 03 と S B 04 間は 9 m (30 尺) と極めて規格的に配置されている。このような規格的配置は一般集落とは考えがたく、15 点と

まとまった緑釉陶器や瓦類の出土を考えあわせると、官衙、居宅等が候補としてあげられるだろう。

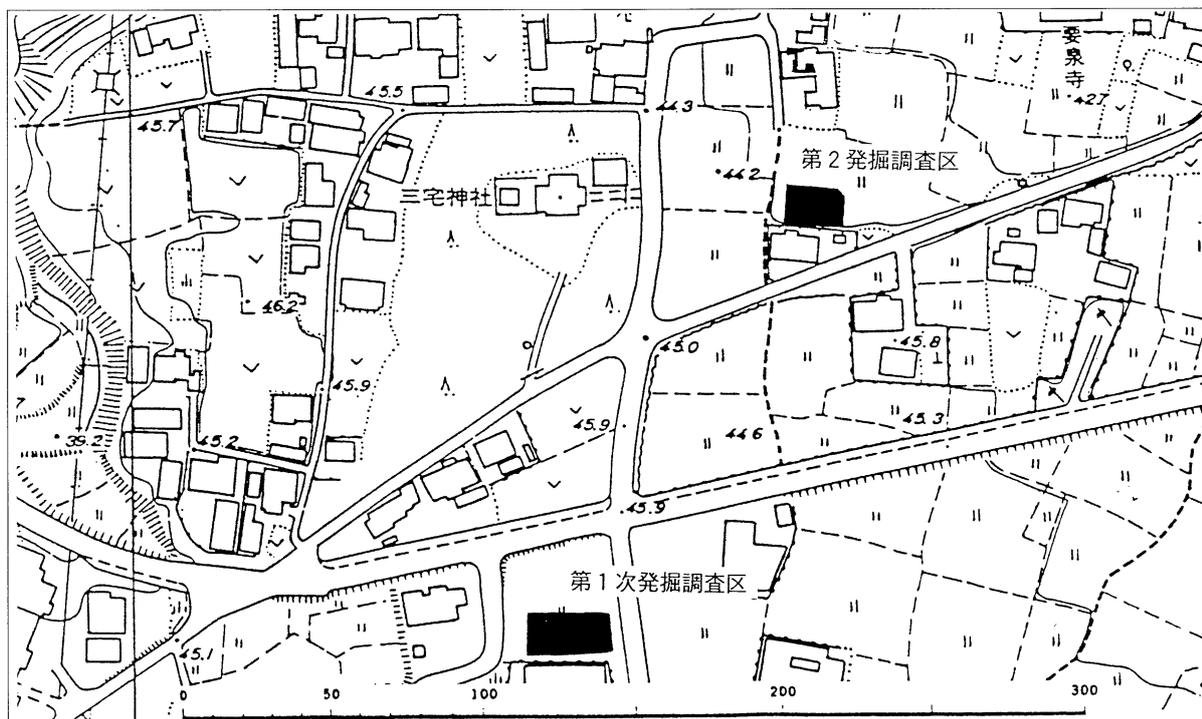
当地は地名等の歴史地理学研究による伊勢国府推定地のほぼ中心にあたる。奈良時代中期から平安時代初頭にかけての国府跡はすでに鈴鹿川対岸の広瀬町長者屋敷遺跡であることが確定しているが、平安時代中期以降にかかる顕著な遺構は検出されておらず、当地が移転した後期国府であった可能性は高い。今回の調査は推定国府域内での初の律令期建物の検出であり、その規模と企画性から国府の一部を構成する曹司の一部である可能性は捨てがたいものがある。墨書土器等遺跡の性格を決定づける遺物を欠くことは残念である。今回の調査区以北の鈴鹿川に臨む台地縁辺部は歴史地理学による国府域の中心部分であるが、古くよりの集落内ということから遺跡としての認識が十分に確立していない。この調査を契機に、試掘調査の徹底など国府の確認に向けての体

制づくりと、住民の意識の掘り起こしの必要性を痛感している。

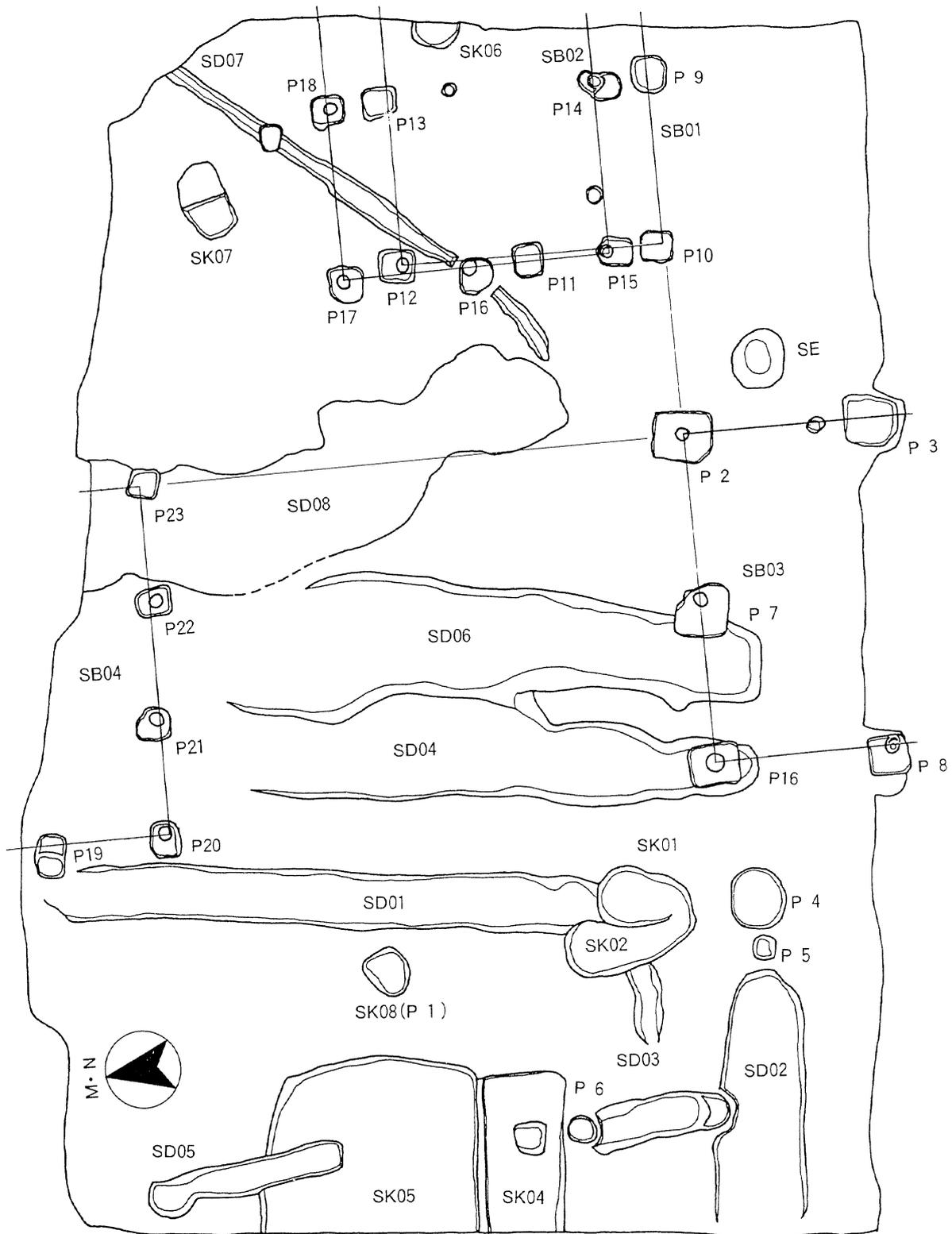
最後に、調査に当たっては仏教大学学生辻公則氏には多大の協力をいただき、また緑釉陶器の観察については京都国立博物館学芸員尾野善裕氏をはじめとする施釉陶器研究会のメンバーにご指導をいただいた。ここに記し謝意を表したい。（藤原秀樹）

#### 【参考文献】

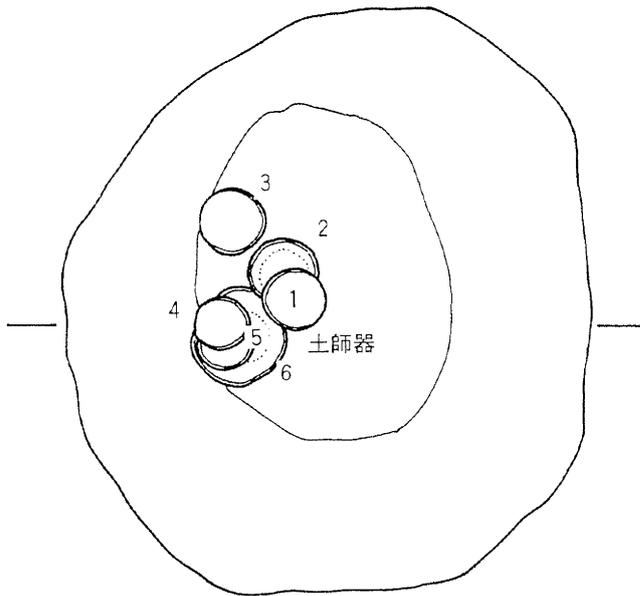
- 藤岡謙二郎 1960 『都市と交通路の歴史地理学的研究』大明堂  
仲見秀雄 1980 『鈴鹿市史』第一巻 鈴鹿市教育委員会  
倉田直純 1985 「平安時代末葉における土師器の様相」『史跡斎宮跡第37-4次発掘調査報告』明和町・三重県斎宮跡調査事務所  
斎藤孝正・楢崎彰一 1982 「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』愛知県陶磁資料館  
斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産 - 猿投窯を中心に -」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東3施釉陶器 -』古代の土器研究会



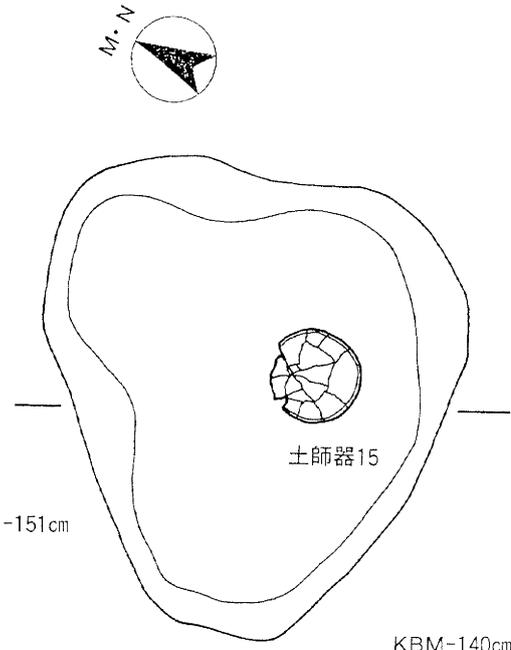
調査区位置図



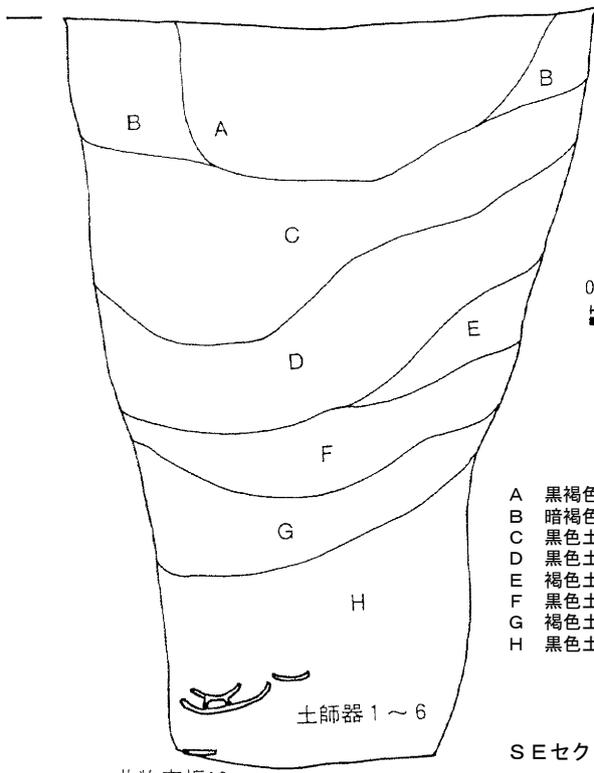
遺構配置図 ( S = 1 : 100 )



SE遺物出土状況



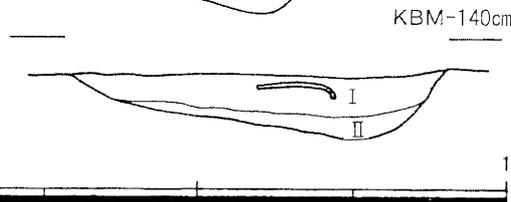
土師器15



曲物底板10

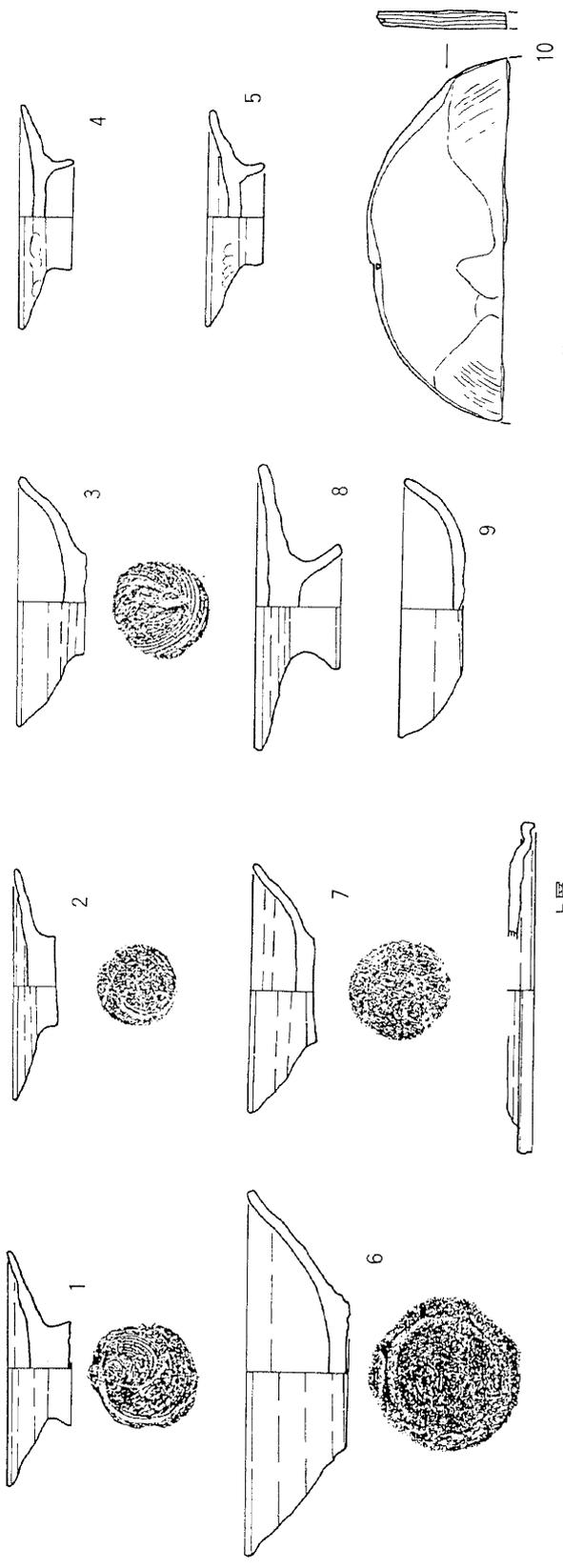
- A 黒褐色土
- B 暗褐色土 (粗砂質)
- C 黒色土 (土器片きわめて多い)
- D 黒色土 (強粘質、炭多く含む)
- E 褐色土 (粘質)
- F 黒色土 (遺物は少ない)
- G 褐色土 (粘質)
- H 黒色土 (水分多く粘土状)

SEセクション図



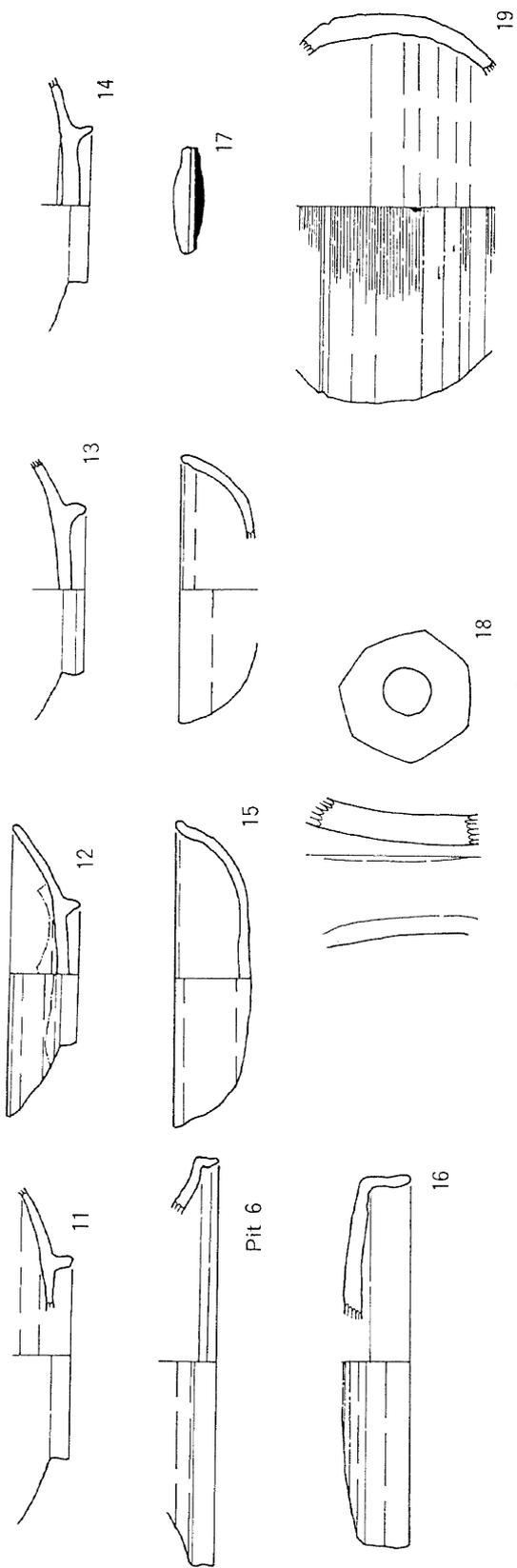
SK 08 (P 1) 遺物出土状況  
及びセクション図

- I 黒褐色土 土器片・炭・焼土多い
- II オリーブ黄色粘質土に黒色土混じる



井戸出土

上層



その他の遺構出土

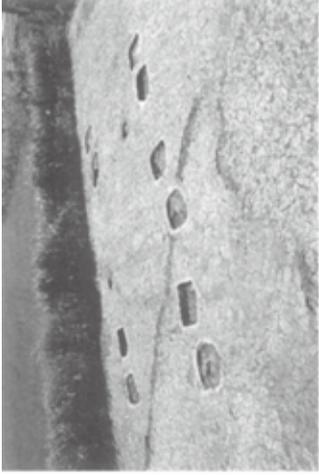
S=1/3



遺跡から見た三宅神社



調査区全景



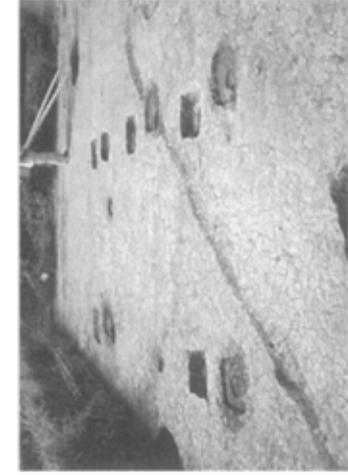
S E 01・02



調査風景（手前がS E）



S B 03



S D 07



S B 04（手前）



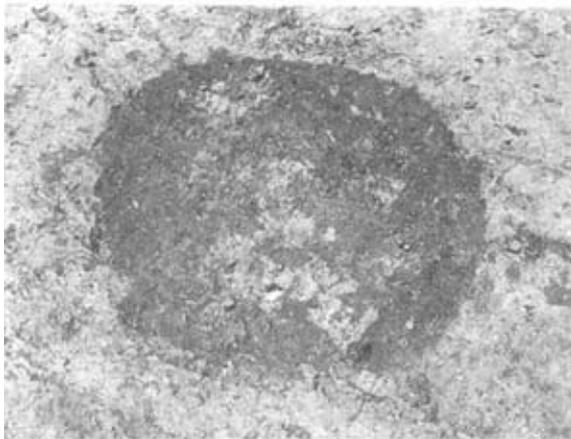
S B 01・02・S D 07 検出



S B 03 検出



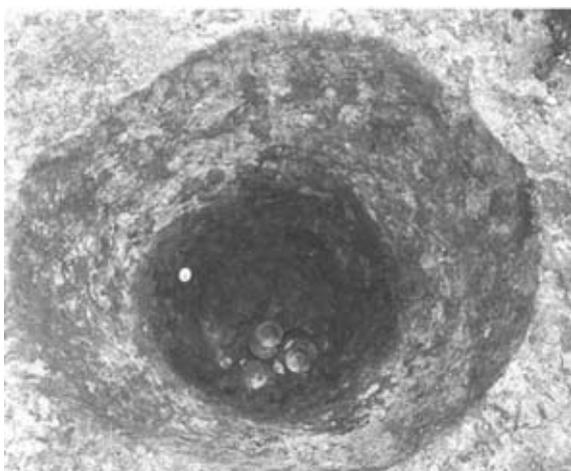
S B 04 検出



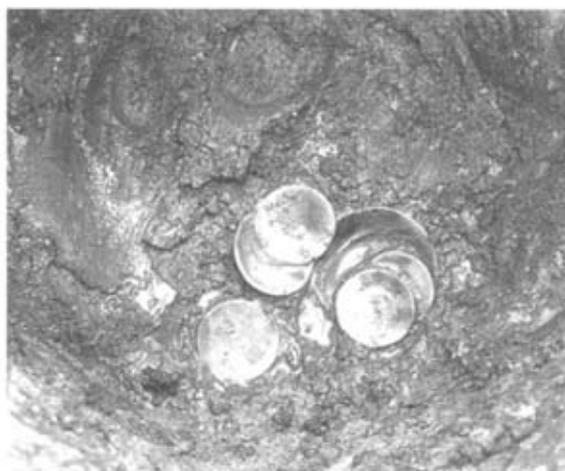
S E 検出



S E セクション



S E 下層遺物出土



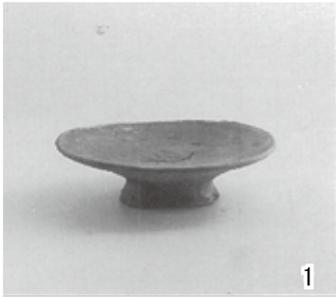
遺物一括出土状況



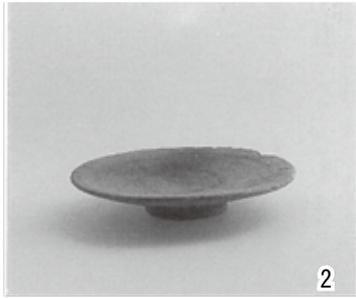
S E 掘り上がり



S K 08



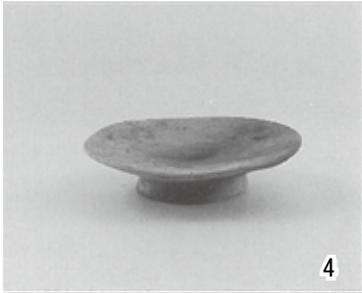
1



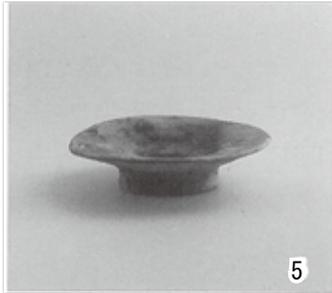
2



3



4



5



6



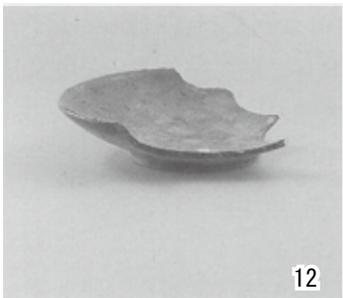
9



7



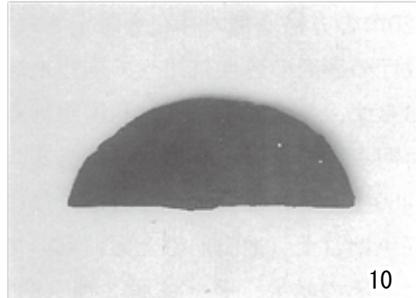
8



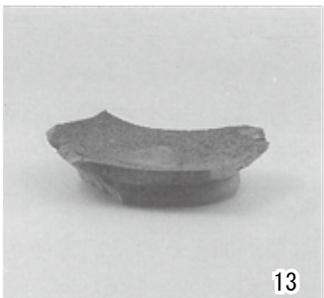
12



15



10



13

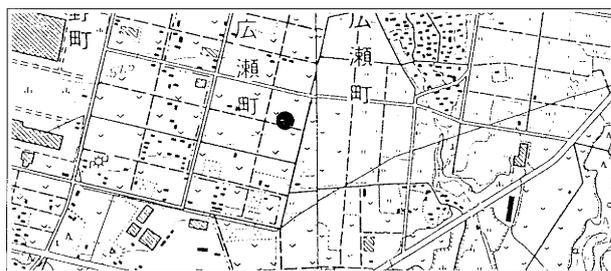


11

緑釉陶器

## 5. 長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査

所在地 鈴鹿市広瀬町字丸内  
事業主体 鈴鹿市  
調査目的 農道拡幅舗装工事に伴う埋蔵文化財の記録保存  
調査期間 平成8年6月20日～平成8年7月16日  
調査面積 133 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 杉立正徳・辻公則



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地は東西600m×南北800mの範囲と推定される長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）の北辺、伊勢国府政庁跡の北650mにあたり、長者屋敷伝説の由来となった「金藪」と呼ばれる森のすぐ西に位置する。長者屋敷遺跡は1992年度から鈴鹿市教育委員会によって継続的に調査が実施されている。それによると政庁は正殿を中心に北に後殿、東西に脇殿を配しており、それぞれを軒廊で結ぶ形態を採っているが、基壇化粧が施されていないため、未完成であった可能性が指摘されている。このことから、発見された政庁はおよそ8世紀半ばに造営が開始され、完成を待たずに廃絶し、他所へ移転したものと考えられている。また、近年の三重県埋蔵文化財センターによる調査の結果から、周辺には政庁域を南端に置く一辺120mの方格地割の存在も想定されている。しかし、政庁の調査の進展に比べて周辺地域の調査は進んでおらず、どのような土地利用が行われていたのか未解明な部分が多いのが実情である。今回の調査では約50cmのクロボク土を除去した後に現れるにぶい黄褐色粘質土（地山）の上面において遺構検出を行った。その結果、竪穴住居2棟（ST01・ST02）溝1条（SD01）が検出された。

### 2. 調査の成果

**竪穴住居ST01** 東西3.4m、南北3.0mの長方形プランを有し、検出面からの深さは深い所で18cmを測る。北東隅は後世の攪乱を受けているため既に失われている。支柱穴、壁溝は検出できなかったが、東辺ほぼ中央に竈、南東隅に貯蔵穴が設けられてお

り、住居内のほぼ中央にも土壇が設けられている。竈は上部を削平されており、袖部のみ検出されたため詳細については不明であるが、壁外へ掘り込んで構築していたようである。竈の構築に際してはオリブ褐色粘質土を多用している。床面を中心に3枚分の平瓦（①・②・③）が出土しており、竈の部材として転用されていたようである。貯蔵穴からは土師器の甕が2個体分（④・⑤）出土している。その他にも事前の試掘調査の際に埋土から須恵器の甕片（⑥）が出土している。

**竪穴住居ST02** ST01よりも地山面が高いため後世の削平が著しく、住居の北半分を失っている。正確な規模については不明であるが、検出面からの深さは深い所で6cmを測る。支柱穴は確認出来なかったが、西辺、南辺に壁溝が巡り、南東隅に貯蔵穴が設けられている。ST01と同様に住居内のほぼ中央に土壇が設けられており、平瓦片（⑦）が出土している。また、住居内東壁沿いに土師器の甕（⑧）が押しつぶされた状態で出土していることから、あるいは竈の痕跡であるのかもしれない。

**溝SD01** 幅1.5m、深さ50cmを測る。埋土は3層から成るが、遺物は全く出土していない。

**平瓦（①・②・③・⑦）** ①は長さ34.3cm、広端幅26.5cm、狭端幅22.5cm、厚さ1.8cmを測る完形品である。凸面には縄目タタキ成形を施し、凹面には布目痕が残る。側端部には3面の面取りを施し、凹面の両端部には横方向の調整が加えられる。青灰色を呈し、堅緻に焼成されている。

②は長さ34.5cm、広端幅31.2cm、厚さ2.0cmを測

る準完形品である。凸面には縄目タタキ成形を施し、凹面には布目痕が残り、後に側端部を縦方向にナデ調整している。側端部には3面の面取りが見られる。

③は長さについては不明であるが、幅22.6cm、厚さ1.9cmを測る。凸面には縄目タタキ成形を施し、凹面には一部に布目痕が残る。側端部には3面の面取りが見られる。

⑦については破片での出土なので、長さ幅については不明であるが、厚さは2.3cmを測る。凸面には布目痕が明瞭に残り、凹面は縄目タタキ成形を後にナデ消している。側端部には3面の面取りが見られる。

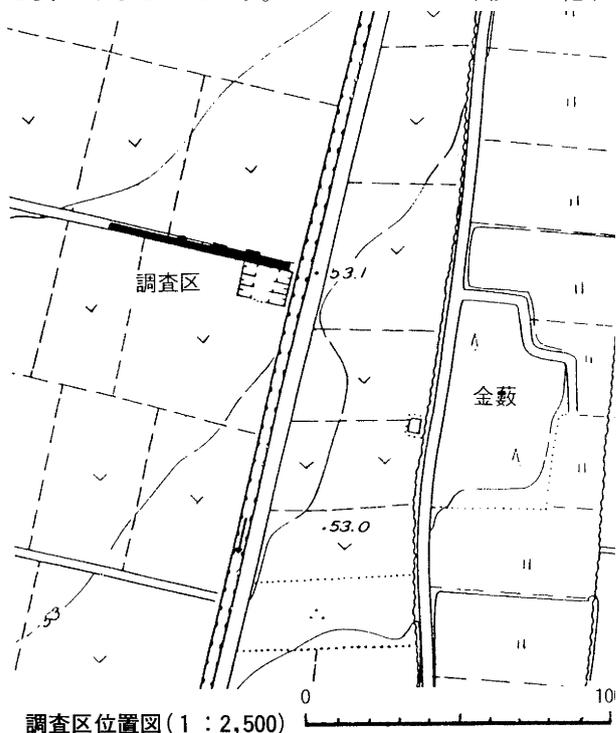
**土師器甕(④・⑤・⑧)** ④は胴部下半部を欠損するが、推定口径18.5cmを測る。胴部はあまり膨らまず、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部をやや上方へつまみ上げている。外面は剥落が著しいが、内面は横方向に密なハケメ調整を施す。⑤は胴部下半部のみの残存であるが、推定胴部最大径14.8cmを測る。平底で球状の胴部を持つ。外面には縦方向のハケメ調整およびヘラケズリを施し、内面には横方向のハケメ調整を施す。⑧は胴部の一部のみの残存であるが、推定胴部最大径32.6cmを測る大型の甕である。内外面共に剥落が著しいが、外面にはハケメ、内面には板ナデ痕が認められる。

**須恵器甕(⑥)** 事前の試掘調査に際して出土したものであるが、出土地点から考えてST02に伴うものと考えられる。胴部の破片で、内面は当て具痕を丁寧にナデ消しており、外面には平行タタキが施され黄土の塗布が認められる。

### 3. まとめ

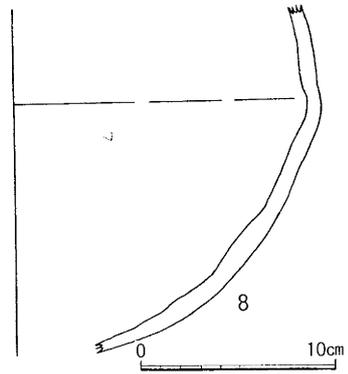
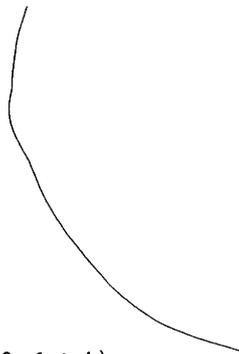
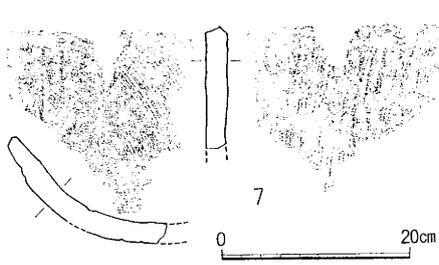
今回の調査で検出された竪穴住居は出土した土器から判断すると、奈良時代後半から平安時代初頭の時期が考えられるであろう。つまり、伊勢国府の存続時期と重なる時期が想定されることになる。今回竪穴住居内で出土した平瓦が政庁で出土する平瓦に類似していることを考え併せると、これらの竪穴住居は伊勢国府で役務に従事した人々の住居であった可能性が高いといえ、調査地周辺にさらに竪穴住居が拡がっていることが予想される。こうしたことが

ら近年その存在が指摘されている伊勢国府の方格地割は少なくとも今回の調査地においては確認されなかった。しかし、今回の調査で検出された竪穴住居が政庁の北650mの地点に位置するという事は、当初からこの間の空間を何らかの目的で利用する計画があったことを示しているともいえるのではないであろうか。今回の調査における竪穴住居の発見は政庁以外不明な点が多い長者屋敷遺跡を解明していくうえで貴重な成果になったものと考えられる。今後政庁の調査だけではなく、周辺の調査も進めていくことによって国府域の全体像を明らかにしていく必要があるといえよう。(杉立正徳)



作業風景





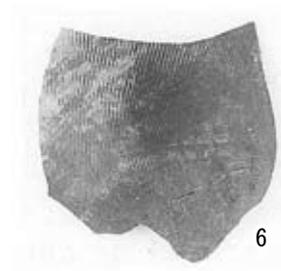
ST02出土遺物 (7・1 : 8, 8・1 : 4)



4



5



6



全景 (西から)



ST 01 遺物出土状況 (東から)



ST 01 (東から)



ST 02 遺物出土状況 (北から)



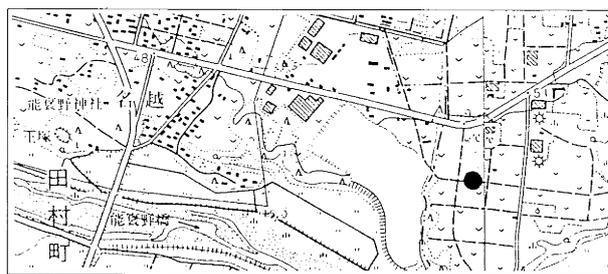
ST 02 (南から)



SD 01 (南西から)

## 6. 長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告

所在地 鈴鹿市広瀬町字矢下  
 事業主体 鈴鹿市  
 調査目的 道路舗装工事に伴う埋蔵文化財の記録保存  
 調査期間 平成8年6月25日～平成8年7月19日  
 調査面積 288 m<sup>2</sup>  
 調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
 調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25, 000)

### 1. はじめに

調査地は東西 600 m×南北 800 mの範囲と推定される長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）の南辺、伊勢国府政庁跡の南面約 90 mに位置する。碎石とクロボク土を 30～50cm除去した後に現れる明黄褐色粘質土（地山）の上面において遺構検出を行った。その結果、溝 2 条、倒木痕と思われる落ち込みを検出した。

### 2. 調査の成果

溝 S D 01 幅 1.2 m、深さ 20cm を測り、方位は S 67° W を示す。埋土は黒色粘質土のほぼ単層である。

溝 S D 02 幅 0.9 m、深さ 15cm を測り、方位は N 70°

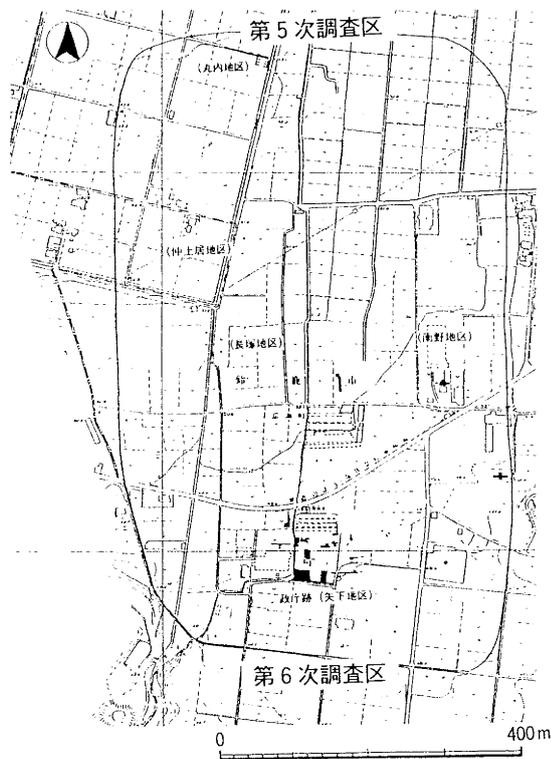
W を示す。埋土は黒色粘質土の単層である。

この他に倒木痕と思われる落ち込みを 2 カ所検出したが、いずれも浅いものであった。

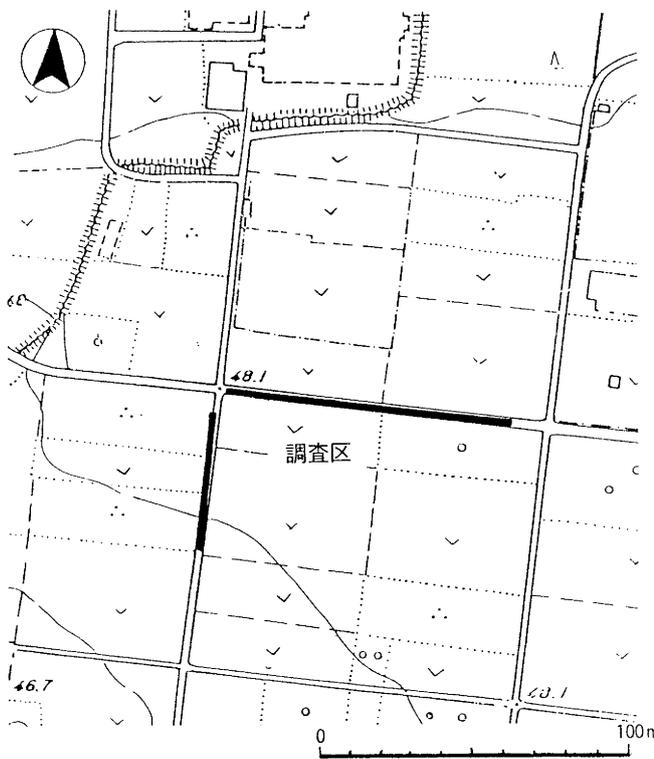
遺物は S D 01 から瓦片 1 点、須恵器片 1 点が出土したのみであり、図示し得るものはなかった。

### 3. まとめ

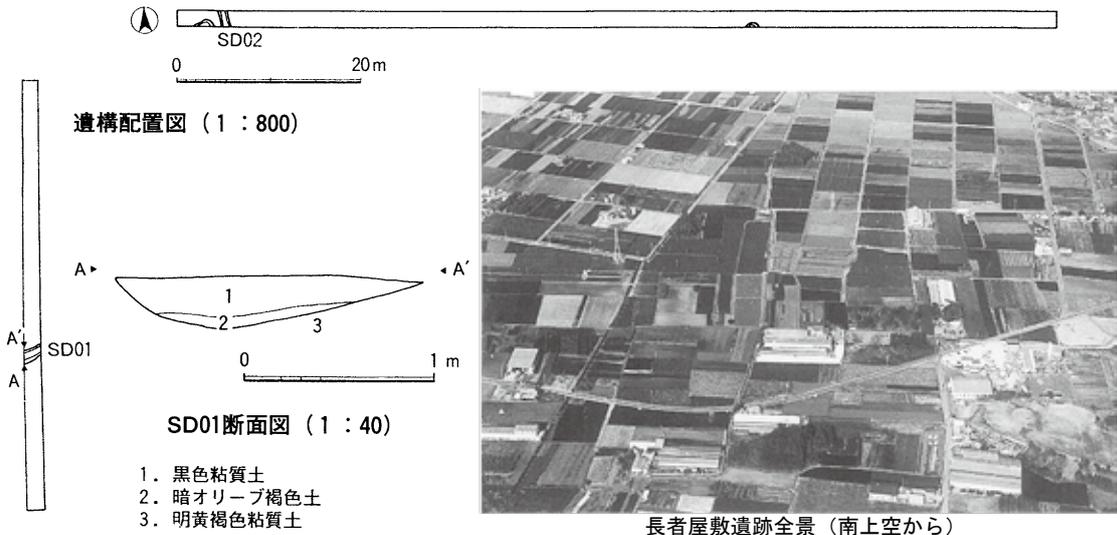
調査地は国府政庁跡の南面に位置することから、当初は国府に関連する何らかの遺構が検出されるものと期待されたが、不定方向を示す溝 2 条を検出したにとどまった。（杉立正徳）



調査区付近図 (1:10, 000)



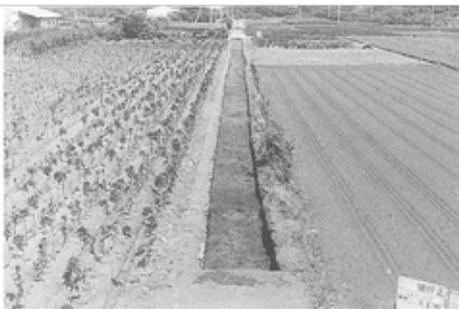
調査区位置図 (1:2, 500)



調査区遠景 (右後方の森が政庁跡)



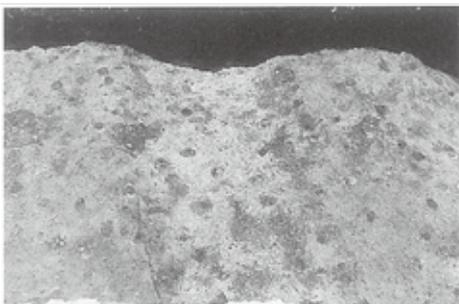
全景 (南から)



全景 (西から)



SD01 (西から)



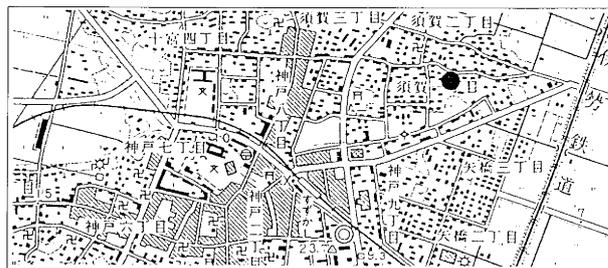
SD02 (北から)



作業風景

## 7. 須賀遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市須賀一丁目 1716  
事業主体 個人  
調査目的 個人住宅建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年7月4日～11日  
調査面積 45.7 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 新田剛・辻公則



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置する。現在は集落が密集し、住宅建設に伴う試掘調査の件数も多い。1994年には宅地造成に伴う調査で6世紀後半～7世紀中頃の須恵器などが出土し、同年の阿自賀神社境内における試掘調査では8世紀後半代の緑釉小壺が出土した。今回の調査地点は阿自賀神社の東約300mに位置する。

遺構検出面は黄褐色砂泥からなる掩乱層を50cm除去した黄褐色シルトの地山上面で、さらに30cmを過ぎると基盤の砂礫層に達する。

### 2. 遺構と遺物

弥生時代の溝2条(S D 01・02)と鎌倉時代の井戸1基(S E 01)とその他土壇・柱穴等が検出された。

これらの遺構の取扱いについて事業者と協議を重ねた結果、溝S D 02と溝S D 01の一部のみ掘り下げを行い、他は地下保存とした。

**溝S D 01** 幅2.8m・深さ1.3mで、調査区内では直線的で、長さ8mに亘って検出された。南端部分において掘り下げ、断面観察を行った。鎌倉時代の井戸S E 01に切られている。溝の東斜面はやや傾斜が緩く、西斜面はやや切り立つ。低部には平坦面があるため、断面形態は台形である。埋土は粘性が高く、非常に締まりがある。弥生時代前期から中期後葉の土器・石斧が出土した。

**壺(3・7～17)** 広口壺の口縁部片(7～13)と受口壺の口縁部片(14～15)、体部片(16～17)脚台部分(3)がある。

広口壺は口端面や頸部がクシ描き直線紋で飾られ、さらに刻み目状の押圧ないしは刺突が加えられ

るもの(10～13)がある。口縁形態には大きく屈曲するもの(9・11・13)とそうでないもの(7～8・10・12)があり、前者には端面が肥厚するもの(11・13)とそうでないもの(9)がある。以上は前期前葉のものと考えられる。

受口壺には、凹線紋の壺(14)とクシ描き波状紋で加飾される壺(15)がある。

体部片のうち17は広口壺(7～13)などの体部片である。16は細片ながら肩部付近の破片で刻み突帯を有する。前期のものであろう。

**蓋(4・5)** 4は内外面ともにミガキ調整される。5は外面にヘラ描き直線紋が5条施される。口径は4が97mm、5が104mm。ともに前期の壺の蓋である。

**甕(18・19)** 18は刻み目状押圧が加えられた短い口縁部を有し、頸部には2条1単位のクシ描き直線紋が2帯見られる。19は緩く外反する口縁部を有し、内外面ともにハケメ調整される。

**鉢(20・21)** ともに内外面がハケメ調整され、21は口縁部がナデ調整される。

**底部片(1・2)** ともに外面は縦にハケメ調整されるが、2にはミガキ調整が加えられる。底径は1が76mm、2が90mmである。

**高杯(22～23)** 22・23はクシ描き紋で加飾された脚台部である。

**石斧(26)** 玄武岩製?大部分を欠損する両刃石斧。表面は丁寧に研磨される。長さ133.7mm・幅35.3mm・厚さ40.6mm。

**溝S D 02** 幅80cm・深さ6cmで、残りは悪い。検出面においてはS D 01に切られる。弥生中期の壺・甕・高杯が出土した。

壺 (24) 口縁は大きく外半し、口端面は広く外傾する。口端には刻み目が、口頸にはクシ描き直線紋が施され、口縁内部には管状工具により加飾された円形浮紋を有する。

甕 (25) 口縁端部に刻み目を持ち、頸部に沈線を有する。

高坏 (6) 口縁に鏝を有する高坏。口径 207 mm。  
井戸 SE 01 掘り方径 1 m の井戸である。中心には井筒の痕跡と見られる径 70 cm の変色部分がある。検出面から 2 m まで掘削したが底には到っていない。山茶碗が出土した。

山茶碗 (28) 口径 162 mm・底径 80 mm・器高 53 mm。

#### その他の遺物

石製品 (27) 表土出土。堆積岩と考えられるが、石質不明。自然礫を素材として軽く研磨を加えたもので、とくに研磨痕が集中する下部は一見両刃石斧の刃部のようである。しかし石斧のように鋭利な刃部は形成されず、丸みを帯びる。長さ 169.8 mm・幅 62.2 mm・厚さ 35.8 mm。

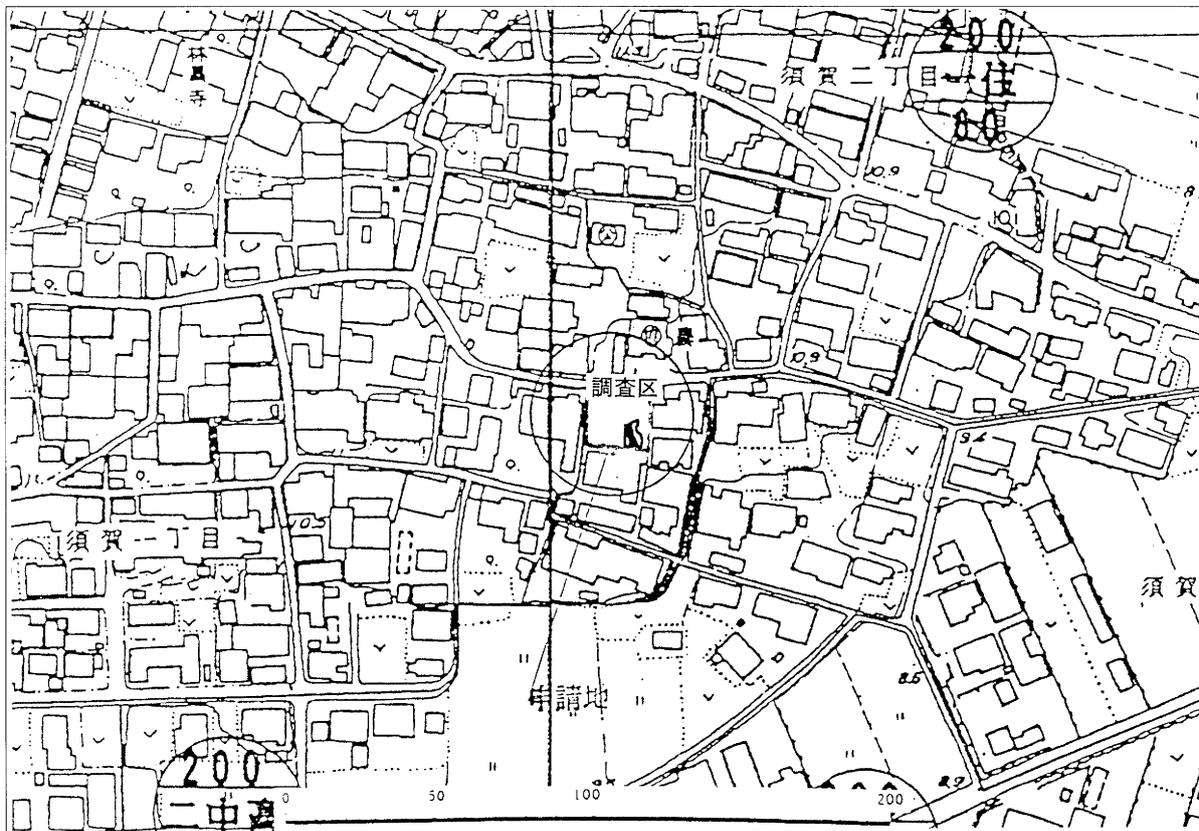
ガラス瓶 (29) 無色透明のガラス容器で、器高 48 mm。攪乱層出土。口頸部は円筒形、体部は角筒形

をなす。表面には「太陽目薬」、裏面には「伊勢薬業会社」の銘がある。図表面左側縁には扶りがみられ、近代の所産と考えられる。

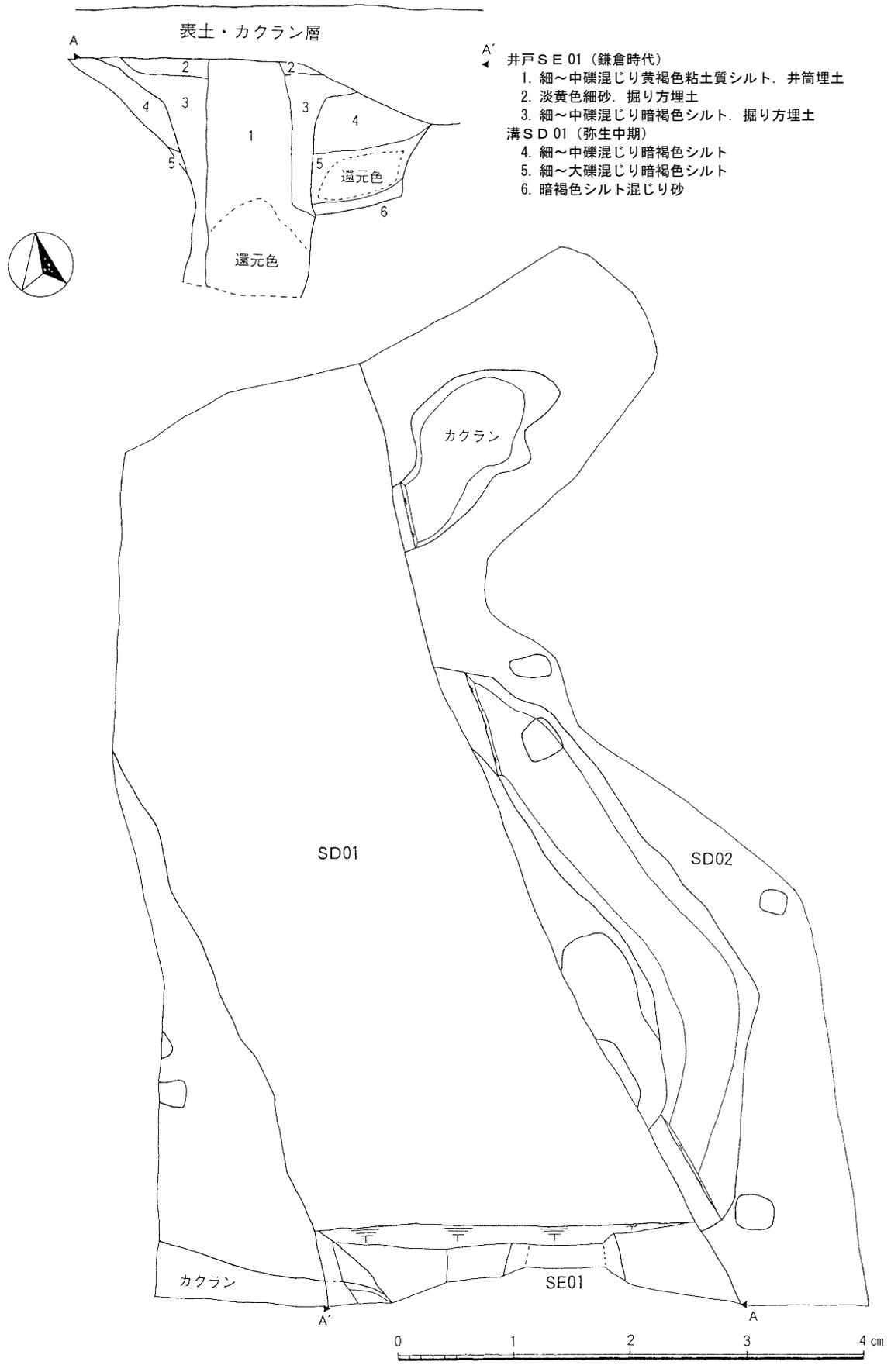
### 3. まとめ

溝 SD 01 は環濠などの一部と考えられるものである。出土遺物には前期から中期後葉までの幅があり、しかも調査箇所が限定されたため遺構の時期の特定には困難を伴うが、出土量からすれば主として中期前葉に機能していたものであろう。この濠によって画された集落は、東に沖積低地を控えるという地形的制約から考えれば、西に展開するものと思われる。当調査地点の西南 500 m の神戸九丁目付近ではかつて中期前葉の土器の出土が伝えられ、時期は異なるが、西方 800 m には後期後葉の濠が検出された神戸中学校遺跡がある。神戸から須賀にかけての低位段丘上には、時期によって少しずつ場所を違えながらも、海岸寄りの上箕田遺跡や鈴鹿川左岸の一反通遺跡に匹敵するような中核的な集落が営まれ続けたようだ。

(新田剛)



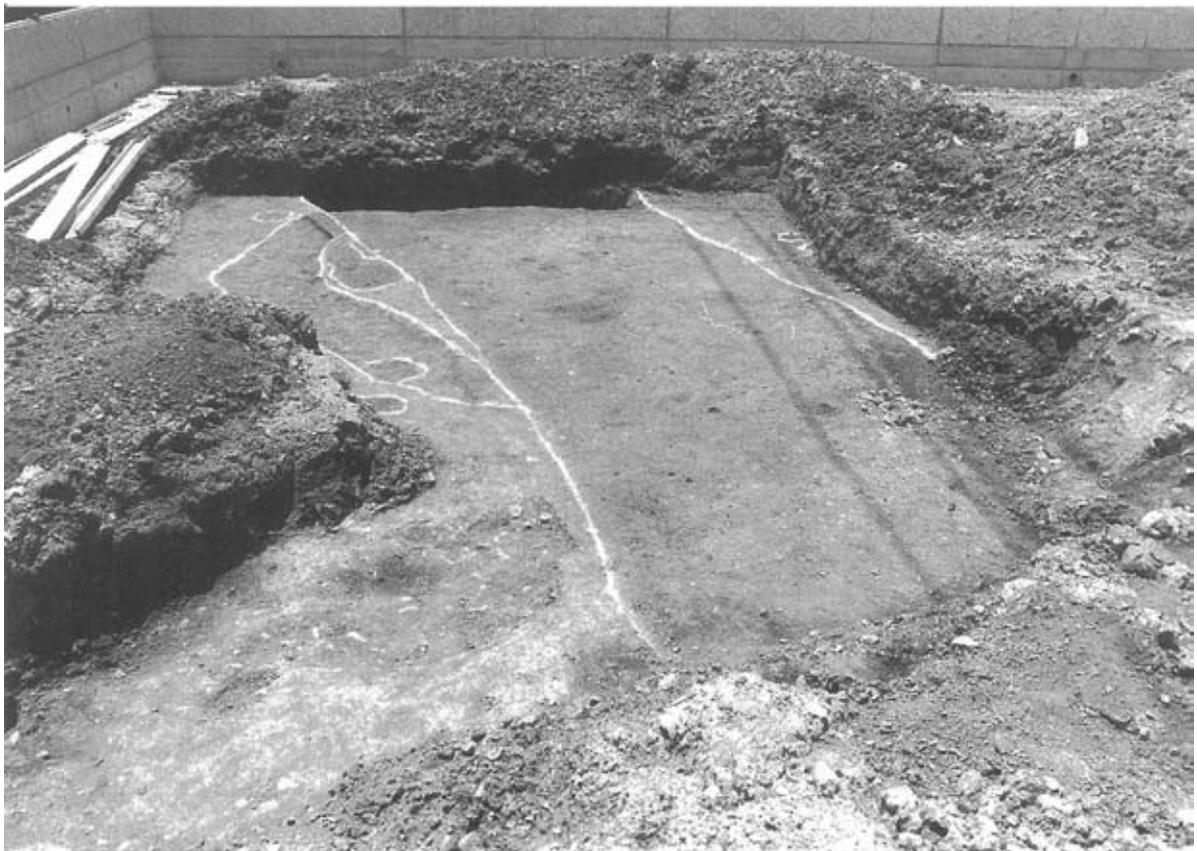
位置図 (1:2,500)



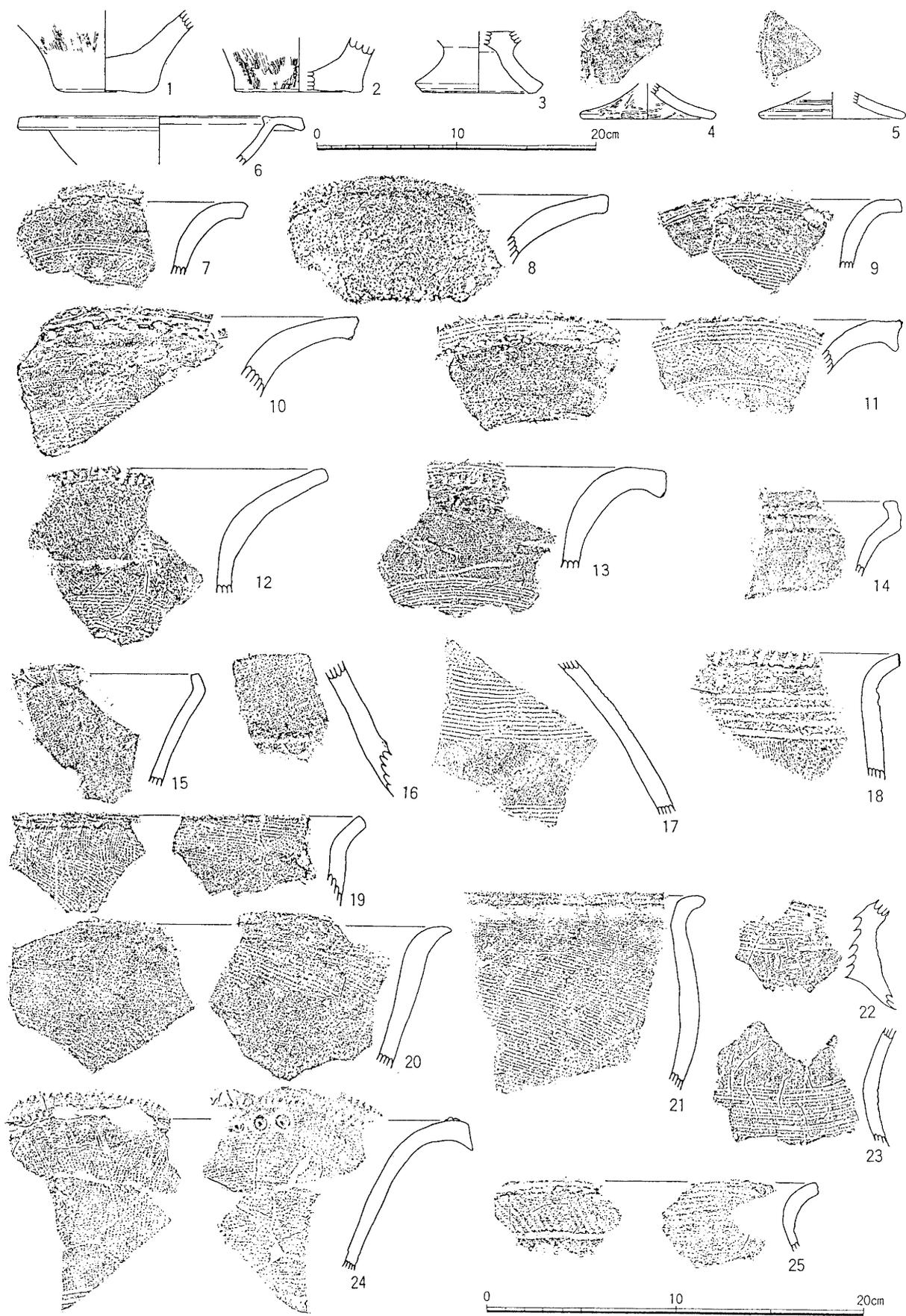
調査区平面図・断面図 (1 : 50)



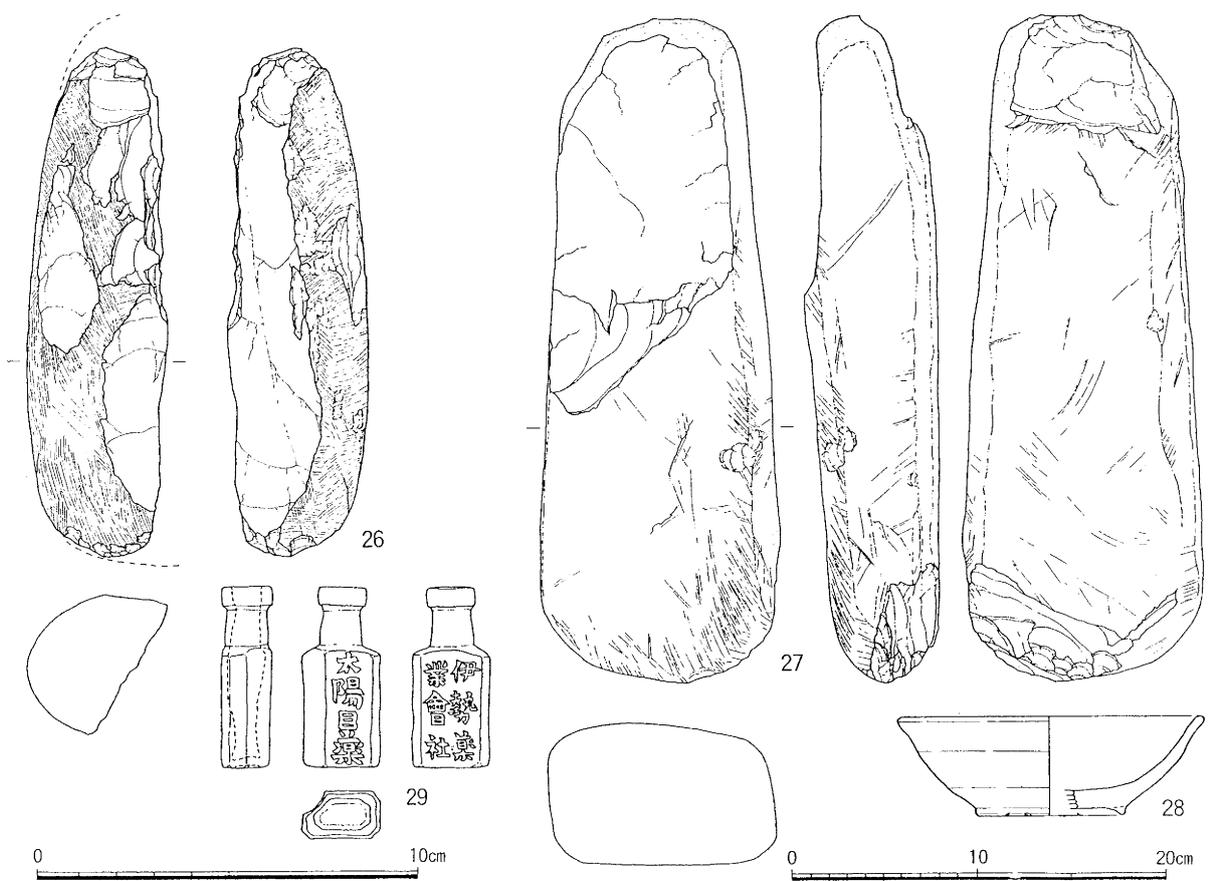
調査風景（北西から）



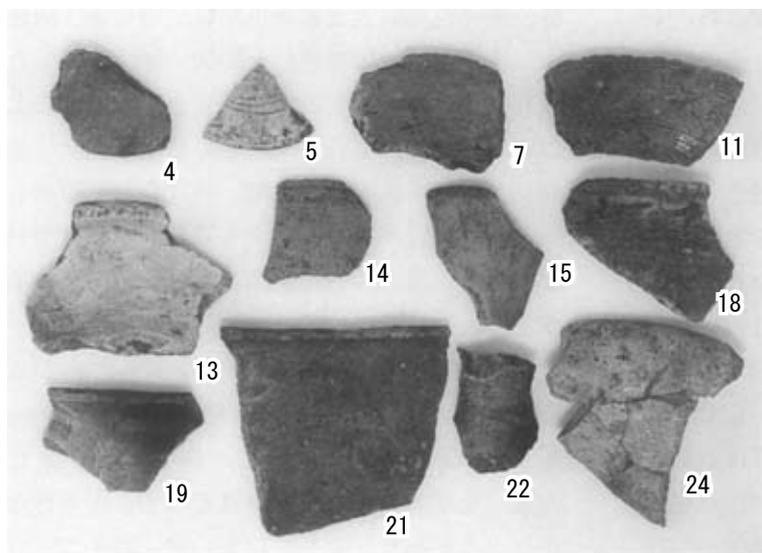
全景（北から）



弥生土器 (1~6 1:4, 7~25 1:3)



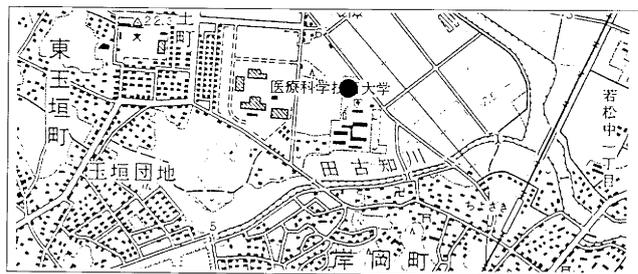
石器・その他 (26 ~ 27・29 1 : 2, 28 1 : 4)



土器・石器・その他

## 8. 天王遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市岸岡町 589-2  
事業主体 三重県厚生農業協同組合連合会  
調査目的 病院施設建設に伴う埋蔵文化財の記録保存  
調査期間 平成8年7月22日～平成8年8月23日  
調査面積 260 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

天王遺跡は鈴鹿川右岸の沖積平野の最南端、岸岡山丘陵の北裾に位置する。岸岡山丘陵を含む当地域は古代から人々の活動が活発であったらしく、数多くの遺跡が知られている。

この地域で最も古く遡る生活の痕跡は岸岡山Ⅲ遺跡で採集されたチャート製の尖頭器である。このことから縄文時代の早い時期に既に生活が営まれていた可能性が考えられる。弥生時代になると周辺地域では数多くの土器片が採集されるようになり、人々の生活の痕跡は一層色濃くなっていく。この時代を代表する遺跡が上箕田遺跡で、伊勢湾西岸における拠点的な集落であったと考えられている。その他にも深田遺跡、双ツ塚遺跡、大木ノ輪遺跡、須賀遺跡などで発掘調査が実施されている。古墳時代になると岸岡山丘陵を中心に、画文帯神獣鏡が出土した塚越古墳群、全長 56 m の前方後円墳である岸岡山 22 号墳を中心として構成される岸岡山古墳群などの古墳群が築かれるようになる。これらの古墳群の被葬者はその立地状況から見て、伊勢湾を媒介とした海上交通と深い関係にあったと想定されよう。なお、当該期の集落遺跡については調査例が乏しくはっきりとはしていない。歴史時代になると周辺では点的に掘立柱建物を中心として集落遺跡の調査例が増加する。また、その他にも注目される遺跡として、白鳳時代に遡ると考えられる軒瓦が出土した天王屋敷遺跡、山田寺式系と考えられる軒瓦が出土した土師南方遺跡がある。これらの瓦の出土はこの地域の歴史的性格を考える上で重要な視点を提示しているものと考えられよう。さらに、中世になると市内には主に丘陵上を中心として数多くの城砦が築かれるよ

うになるが、岸岡山にもその地理的特性を生かした岸岡山城が築かれている。

### 2. 調査の成果

事前の試掘調査の結果、開発予定地内の大部分は戦後の溜め池の構築、病院施設の建設に伴う造成などの影響により大きく掩乱を受けており、調査区は比較的遺構の残り具合が良かった開発予定地内の西辺に設定した。調査区は南北に長く、北側に向かってやや傾斜している。調査区内の基本層序は掩乱を受けている箇所が多いため一定していないが、整地層、黄褐色粘質土と黄灰色粘質土の互層、灰色粘質土（中世の遺物包含層）を約 60～90cm 除去した後に現れる浅黄色から明黄褐色粘質土（地山）の上面において遺構検出を行った。その結果、掘立柱建物 2 棟、井戸、多数の溝、土壇、柱穴などを検出した。但し、調査区内の南側が大きく攪乱を受けていたこともあり、遺構は特に北側に密に分布している状況であった。

**掘立柱建物 S B 01** 一部が調査区外にかかるが、東西 3 間（柱間 160cm）×南北 3 間（柱間 140cm）の規模の東西棟と考えられる。棟方向は N 10° E（磁方位）を示す。柱の掘り方はその形、大きさともにバラッキがあり一定していないが、最小のもで一辺 50cm の隅丸方形、最大のもで直径 90cm の円形を呈しており、柱痕は 30cm 前後である。出土遺物は少なく正確な時期決定には至らない。

**掘立柱建物 S B 02** S B 01 のすぐ西側で検出した掘立柱建物である。南東隅の柱穴と西と北の一個分の柱掘り方と思われるピットを検出した。その大部分が調査区外へ拡がるために全体規模については不明

である。S B 01 と同様に出土遺物は少なく正確な時期については不明である。なお、S B 02 は S B 01 と棟方向を揃えて建てられた可能性も考えられる。

**井戸 S E 01** 一辺約 70cm、深さ約 60cm を測る隅丸方形の素掘りの井戸と考えられる。須恵器片、土師器片に混じって平瓦片が出土した。

**平瓦 (1)** 残存幅 6cm、厚さ 1.7cm を測る。凸面縁部はヘラケズリによる面取りがなされており、凹面には布目痕が明瞭に残っている。明オリブ灰色を呈し、堅緻に焼成されている。

**溝 S D 01** 幅約 160cm、深さ約 5cm を測る。一部攪乱を受けてはいるが、調査区中央で S D 02 と分かかれ、西から東へ向けて流れていたものと考えられる。須恵器のはそうが出土している。

**須恵器はそう (2)** 体部下半分のみが残存である。肩部は強く張り、最大径は 8.8cm を測る。高台が外向きに付けられており、内側端部のみ接地している。体部下半部は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ調整されている。明緑灰色を呈し、堅緻に焼成されている。7 世紀後半頃のものであろう。

**溝 S D 03** 幅約 40cm、深さ約 10cm を測り、本来は S D 01、S D 02 と同一の溝であったと考えられる。土師器甕が出土した。

**土師器甕 (3)** 推定口径 16.0cm、推定体部最大径 18.1cm を測る。口縁部はナデ調整されているが、それ以外は剥落が著しいために詳しい調整技法については不明である。灰白色を呈している。

**焼土壇 S X 01** 150cm × 230cm、深さ 5cm を測る不定形の土壇状の遺構である。床面、埋土ともに均一に被熱しており、焼土、炭化物が充満していた。土師器片、少量の鉄滓が出土している。

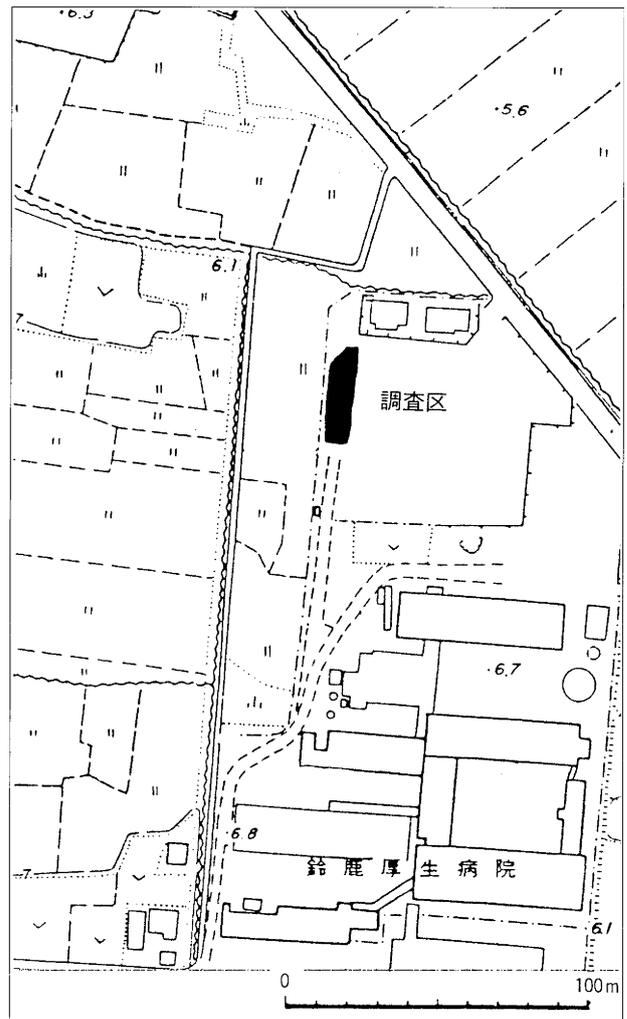
これら以外に図示し得る遺物として包含層から須恵器の坏、土錘が出土した。

**須恵器坏 (4)** 底部の破片である。体部の立ち上がり部の外面は回転ヘラケズリ調整されており、それ以外はロクロナデ調整されている。台形状の高台が付けられており、体部は丸味を持って立ち上がるものと考えられる。緑灰色を呈す。

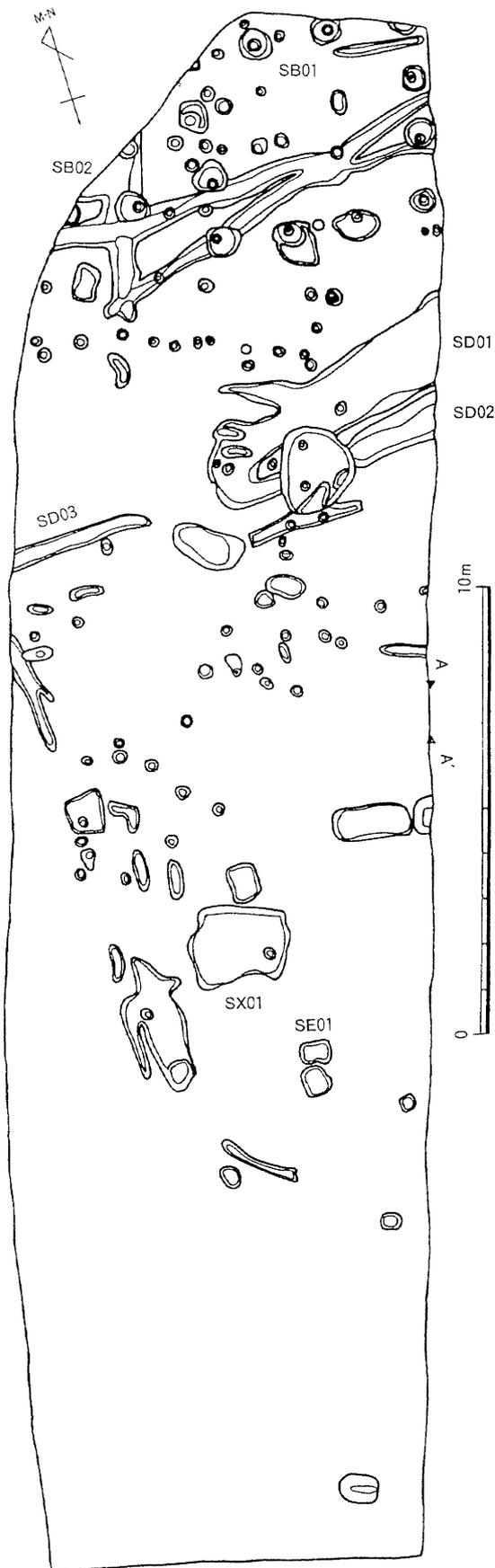
**土錘 (5)** 長さ 4.3cm、最大径 1.2cm を測り、にぶい黄橙色を呈している。

### 3. まとめ

今回の調査では調査面積に比して出土遺物が少なく、いずれの遺構についてもその明確な時期については不明な部分が多い。しかし、瓦片や 7 世紀に遡ると考えられる須恵器のはそうの出土は、過去に付近で採集された軒瓦の出土によって想定されていた白鳳時代の寺院と関連がある可能性もある。また、大型掘立柱建物 (S B 01、S B 02) はさらに面的に拡がる可能性も残している。これらの掘立柱建物からは時期決定には至らないものの、須恵器片、土師器片が一定量出土しており、これらの遺物や包含層出土の遺物から判断して、掘立柱建物は 7、8 世紀代の年代が考えられる。今回の調査において大型掘立柱建物が検出されたということは、付近に該期の集落遺跡が存在していることを強く示唆しているといえるのではないだろうか。 (杉立正徳)



調査区位置図 (1:2,500)



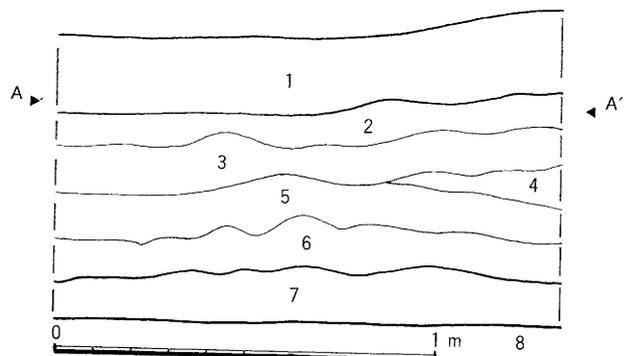
遺構配置図 (1:150)



調査前全景 (東から)

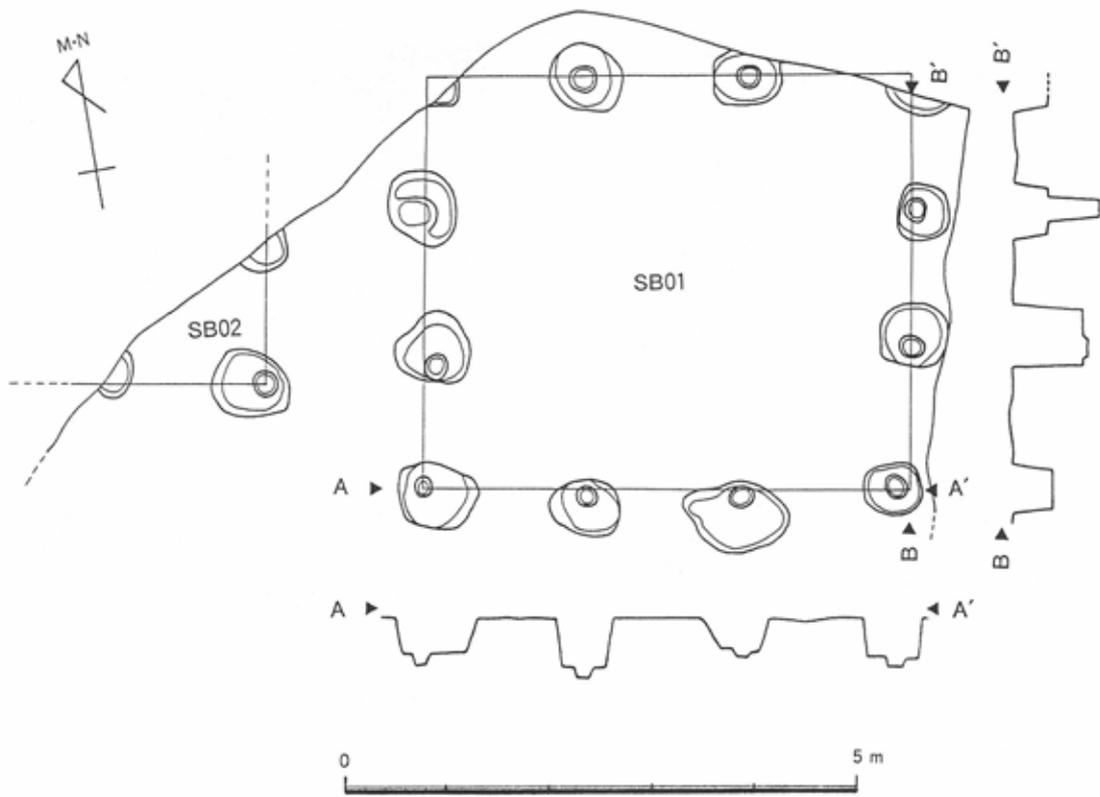


調査地現況 (東から)

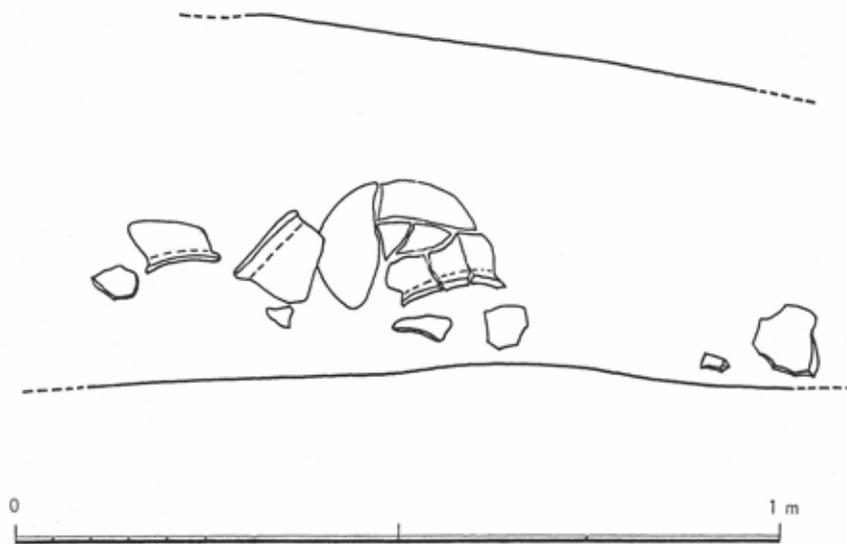


土層断面図 (1:20)

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 整地土    | 5. 黄褐色粘質土  |
| 2. 黄褐色粘質土 | 6. 黄灰色粘質土  |
| 3. 黄灰色粘質土 | 7. 灰色粘質土   |
| 4. 褐色砂質土  | 8. 明黄褐色粘質土 |



掘立柱建物 SB01・SB02 (1:75)



S D 03 遺物出土状況 (1:10)



全景（南から）



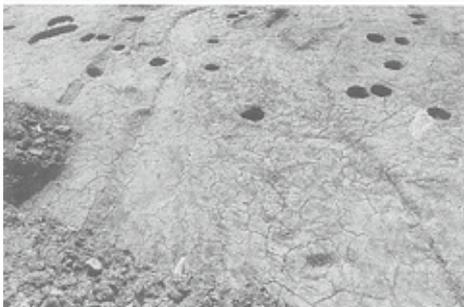
S B 01・S B 02（南から）



S B 01（南から）



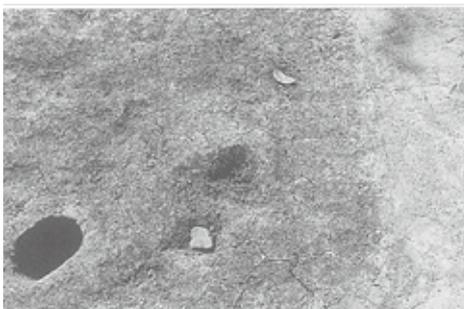
S B 02（南から）



S D 01（東から）



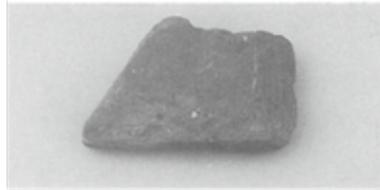
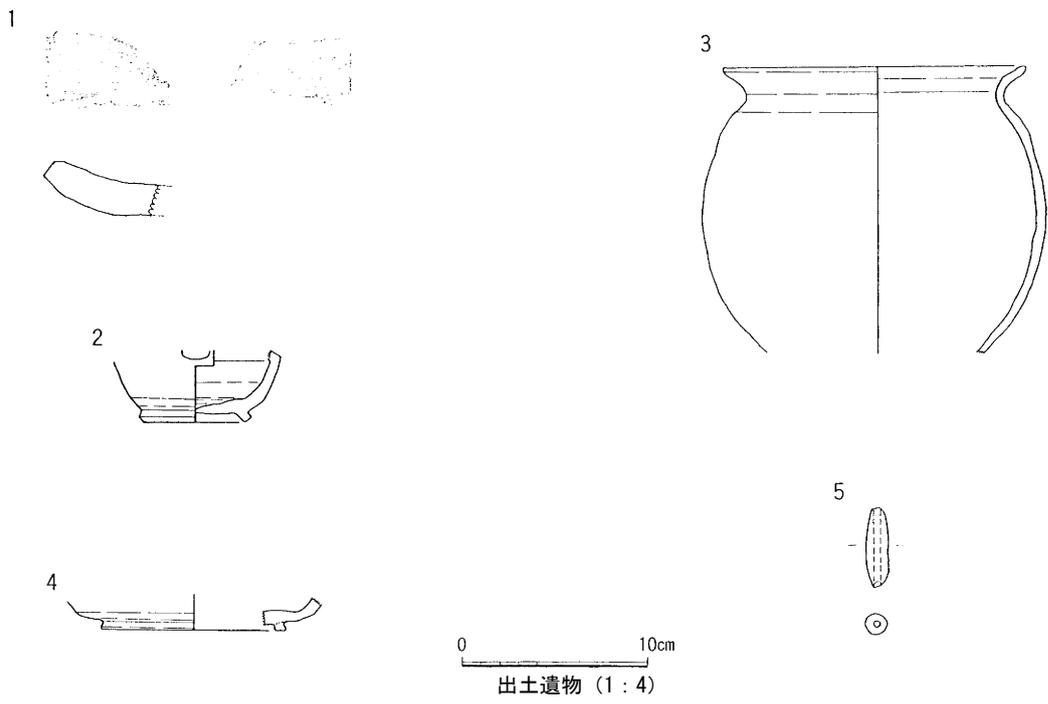
S D 03 遺物出土状況（北から）



S X 01（東から）



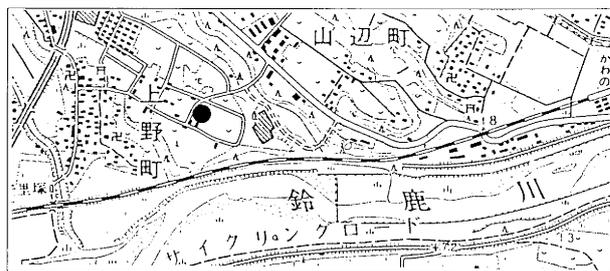
作業風景（東から）



出土遺物

## 9. 一反通遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市石薬師町字一反通 3134-1  
事業主体 個人  
調査目的 個人住宅建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年7月19日～8月14日  
調査面積 33.3 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 新田剛・藤原秀樹・辻公則



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

鈴鹿川左岸の段丘上に位置する当遺跡では、弥生時代の玉作り関係遺物が採集され、さらに1989年の市道改良工事に伴う発掘調査によって弥生中期から後期までの環濠の一部や銅鐸片等が検出されている。今回の調査は小規模な試掘調査を除けば1989年の調査に次いで第2次目となった。調査地点は鈴鹿川左岸の段丘崖から200mを測る平坦地である。

### 2. 基本層序

現在残存する包蔵地はその大半が鈴鹿市クリーンセンター建設工事の際に造成が行われているため、表面は客土に覆われている。基本層序は第1層が造成土20～30cm、第2層が旧表土（耕作土）5～10cm、第3層が漸移層、第4層が黄褐色シルトの地山層である。遺構確認面は第3層または第4層上面である。

### 3. 遺構と遺物

弥生時代中期の溝3条（SD 201・202・203）、古墳時代の土壇1基（SK 201）、奈良時代の土壇1基（SK 202）、時期不明の土壇2基（SK 203・204）が検出された。

#### (1) 弥生時代の遺構

##### 溝SD 201

幅2.7m・深さ90cm。東側は緩いテラス状をなす。最下層の粘質土には種子や木片等の植物遺体が含まれる。弥生土器壺・甕・高坏などの土器や尖頭器・削器・楔形石器・石包丁・石斧などの石器が出土した。

なお上層には不整合面があり、鎌倉時代の層と平安時代の層がある。これらの層から須恵器坏蓋（58）

・灰釉陶器片・山茶碗（59）が出土した。

**弥生土器壺**（1～2・34～39）波状・刻み目状の押圧により加飾された口端部を有する広口壺（1～2・34～35）や受口状口縁部をもつもの（36）、無頸壺の口縁部と考えられるもの（46）がある。37は縄紋施紋の体部片、38はO形刻み突帯を有する頸部片、39は斜格子沈線・円形浮紋等で加飾された膨らみを持つ頸部片である。

1の頸部には密接したクシ描き直線紋が施される。口径は1が216mm、2が260mmである。

**弥生土器甕**（3～4・40～45）「く」状に屈曲する口縁をもつもの（3・42）、ゆるやかに外反する口縁をもち、刻み目状押圧や沈線等で加飾される口端をもつもの（4・40～41・43）、受口状口縁をもつもの（44）、口端を上方にはね上げるいわゆる瀬戸内型のもの（45）がある。3は口径174mm、4は口径188mmである。

**弥生土器底部**（6～16）壺・甕の底部片である。16の甕底部には径12mmの焼成後穿孔が見られる。底径は6が41mm、7が50mm、8が52mm、9が53mm、10が55mm、11が60mm、12が62mm、13が73mm、14が76mm、15が86mm、16が36mmである。

**弥生土器高坏**（5・17）5は凹線紋の口縁部を有する高坏で、外面は縦にハケ調整が施される。17は中実の脚部である。5は口径172mm。

**尖頭器**（61）サヌカイト製。基部側縁には潰れが認められる。長さ33.6・幅27.6・厚さ15.9mm。基部のみ残存。

**削器**（62）サヌカイト製。鋸歯状の直線的な刃部を有する。長さ28.5・幅21.0・厚さ9.4mm。大部分を欠損。

**楔形石器 (65)** 緑色ガラス質の岩石製。2対の刃部を有する。長さ45.0・幅39.7・厚さ10.4mm。

**片刃石斧 (68)** 玄武岩と思われる硬質の岩石製。やや厚手の片刃石斧。ほぼ全面に研磨痕が見られ、刃部付近には強い光沢が観察される。長さ43.2・幅36.8・厚さ16.9mm。基部欠損。

**磨製石包丁 (64)** 緑色片岩製。刃部付近を僅かにとどめるものの、大部分を欠失。刃部の一部に光沢が見られる。長さ36.9・幅38.4・厚さ6.3mm。

**両刃石斧 (69)** 玄武岩製? やや薄手の両刃石斧。基部には敲打痕をとどめる。研磨痕はやや少なく、全体に光沢が強い。両側縁に刃部側からの欠損が認められる。長さ77.4・幅65.0・厚さ34.1mm。基部のみ残存。

#### 溝SD 202

SD 201の東へ約2m離れて併行する。幅2.4m・深さ37cm。SD 201・203に比べて著しく浅い。遺物はやや少なく、風化の著しいものが多い。壺・甕・襖形石器・両刃石斧が出土した。

**弥生土器壺 (18～19・47～49)** 18～19は底部から胴部中程にかけてのみ残存。47～48は刻み目状押圧により加飾された広口壺、49は口縁内面に瘤状突起とクシ状工具による連続刺突紋を有し、垂下する口端をもつ薄手の広口壺。底径は18が56mm、19が64mm。

**弥生土器甕 (50)** 刻み目状の押圧が施された短い口縁部を有する。頸部には彫りの深いクシ描き直線紋がめぐる。

**楔形石器 (63)** 赤色チャート製。1対の刃部を有するが、一方は尖頭状と化している。長さ31.0・幅19.0・厚さ4.6mm。

**両刃石斧 (71)** 凝灰岩製? 調整剥離痕を多くとどめ、扁平な形状。研磨痕はほとんど認められない。再加工の進行したものと考えられる。長さ68.1・幅58.9・厚さ29.9mm。基部のみ残存。

#### 溝SD 203

SD 202の東0.7mに併行して位置する。深さ1m。幅は5m以上だが、西側の2.8mを除いて東側は深さを約40cm減じ、テラス状となる。2枚の不整合面が認められるが、遺物は上・中層に多い。弥生土器壺・甕・石鏃・石包丁・石錘・石斧・砥石が出土した。

**弥生土器壺 (20～24・51～52)** 20・21は凹線紋壺。20はやや緩やかな受口口縁であるが、21はより明瞭に屈曲する。22・23は刻み目状押圧を口端にもつ広口壺で、23は口縁内面に4対の瘤状突起を有し、口頸にクシ描き直線紋をもつ。51はクシ描き直線紋や円形浮・紋で加飾された受口口縁壺。24・52はクシ描き直線紋・波状紋・斜格子紋で飾られた算盤玉形の体部を有する。ともに同一個体。20は口径100mm、21は口径108、22は口径218mm、23は口径233mm。

**弥生土器甕 (29～33・53～55)** 29・31・33は「く」状に屈曲する口縁を有する。29は小型で底部は上げ底、31・33はいわゆる大和型。30は軽く外反する口縁を有する。53・54は刻み目で加飾され、緩やかに外反する口縁を有する在地型。32は55は受口口縁甕。29は口径143mm・底径45mm、30は口径260mm、31は口径172mm、32は口径222mm、33は口径174mm。

**弥生土器底部 (25～28)** 壺・甕の底部。25・27の外表面は縦にハケメ調整される。底径は25が65mm、26が75mm、27が111mm、28が69mmである。

**石鏃 (60)** サヌカイト製。やや丸みを帯びた平基三角鏃。長さ12.4・幅14.3・厚さ2.7mm。

**石包丁 (66)** 玄武岩製? 石斧の破損品を再加工した打製石包丁と考えられる。両面からの粗い調整により曲線的な刃部が作られている。長さ53.2・幅93.1・厚さ13.8mm。一端欠損。

**石錘 (67)** 砂岩製。扁平な自然礫に溝を施したものの。長さ61.2・幅43.2・厚さ19.4mm。

**両刃石斧 (70)** 砂岩製。ほぼ全面に研磨痕がみられる太型蛤刃石斧である。長さ59.9・幅55.0・厚さ44.0mm。基部のみ残存する。

**砥石 (72～74)** 砂岩製。72は1面、73には2面の使用面がある。74はより粒子の細かいもので、隣合う2面に使用面を有する細片である。72は長さ71.2・幅78.9・厚さ26.3mm、73は長さ53.3・幅77.0・厚さ18.8mm、74は長さ34.1・幅37.5・厚さ11.1mm。

#### (2) 古墳時代の遺構

##### 土壙SK 201

弥生中期の溝SD 202の東辺を切る形で検出された長径1.0m・短径0.6m・深さ7cmを測る小土壙である。やや灰色味を帯びた暗褐色の埋土を有する。須恵器甕(56)が出土した。

須恵器甕 (56) 口縁及び底部を欠く。体部下半には叩き調整が見られるが、内面はナデ消されている。最大径 223 mm である。

### (3) 奈良時代の遺構

#### 土壌 S K 202

調査区西端でごく一部が検出された。炭化物粒子を含む暗褐色の埋土を有する。須恵器坏蓋 (57) 1 点が出土したことから奈良時代の遺構と判断した。

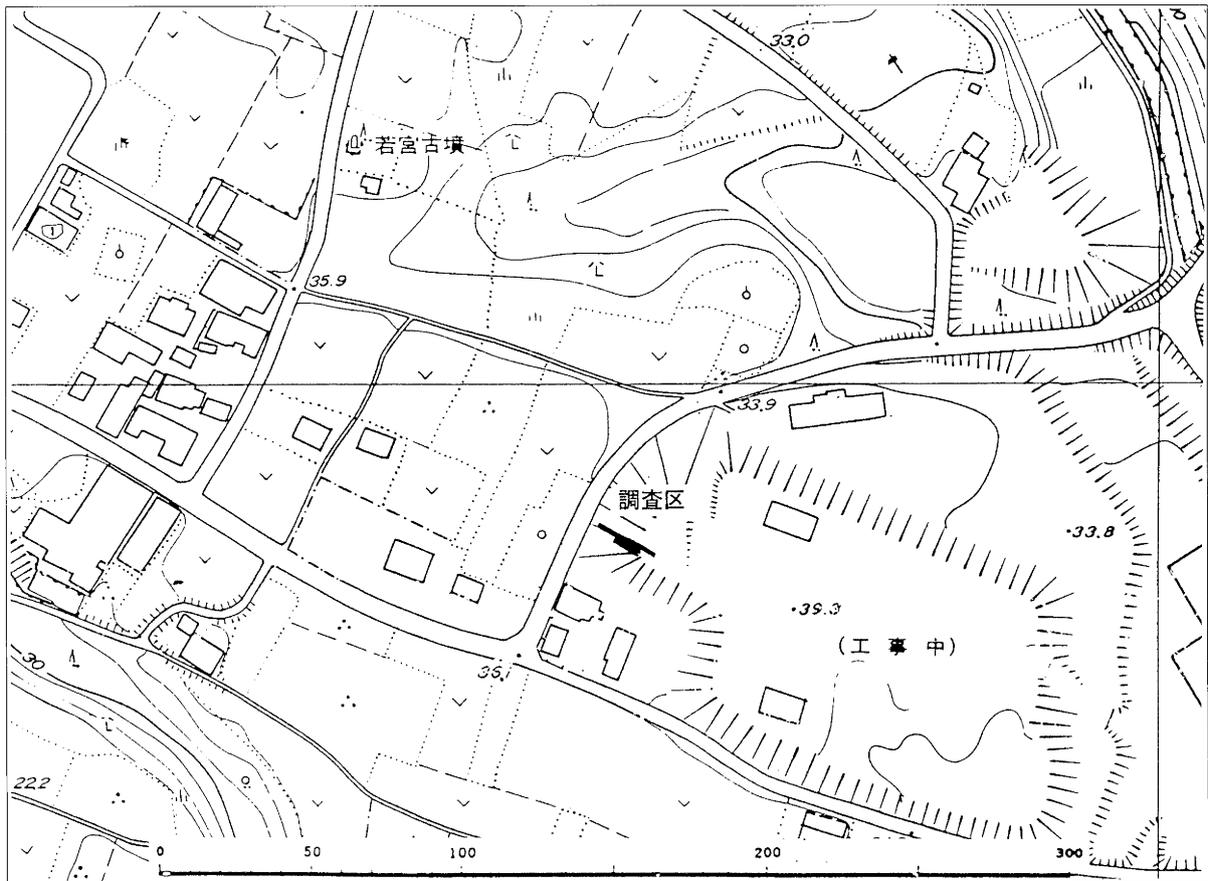
須恵器坏蓋 (57) 天井部はやや丸みを帯び、口縁部付近は直線的で、口端は短く垂下する。口径 190mm。

### 4. まとめ

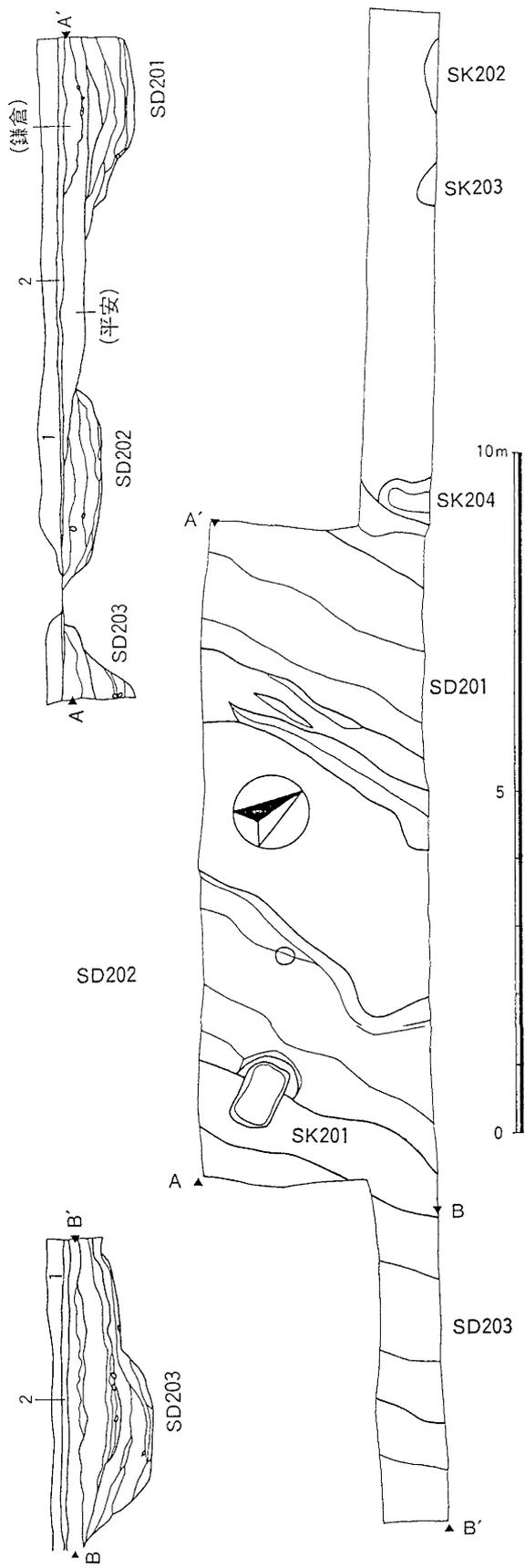
検出された弥生時代の溝 S D 201・202・203 はその規模・形状・立地から環濠などの濠と判断されるものである。限られた調査範囲ではあるがそれぞれ重

複することなくほぼ併行する位置関係にある。ただし S D 202 は S D 203 と極めて近接しており、さらに深さも他の溝…と大いに異なる。S D 201・203 は、出土土器からともに中期後葉 (IV 期) の廃絶が考えられるが、S D 202 については遺物が少ないものの他に隔たった時期は考え難い。S D 201 は歴史時代に至っても十分埋まりきらずに浅い低地として痕跡をとどめていたと思われ、その低地に沿って鎌倉時代に溝が設けられたようだ。

S D 202 は、位置関係や深さの違いから S D 201・203 に先行し、これら 2 条の溝の掘削により機能を失ったものと解釈しておきたい。第 1 次調査において後期の溝に交わって、先行する時期の溝の一部が確認されており、それらとの関係については今後の整理を通して検討しなければならない。(新田剛)



調査区位置図 (1:2,500)



調査区平面図・土層断面図 (1:100)



S D 203 (西から)



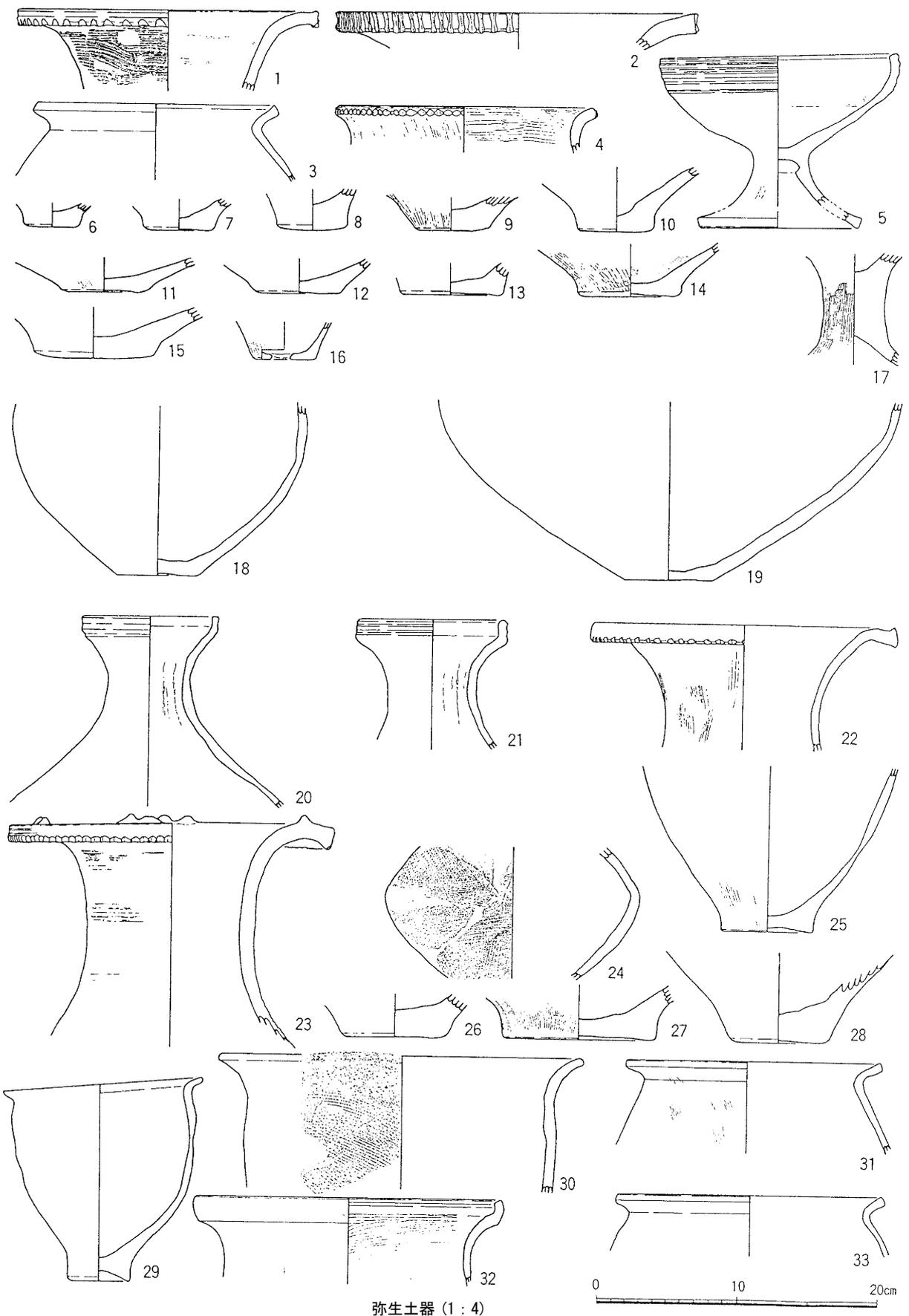
S D 201 (北西から)



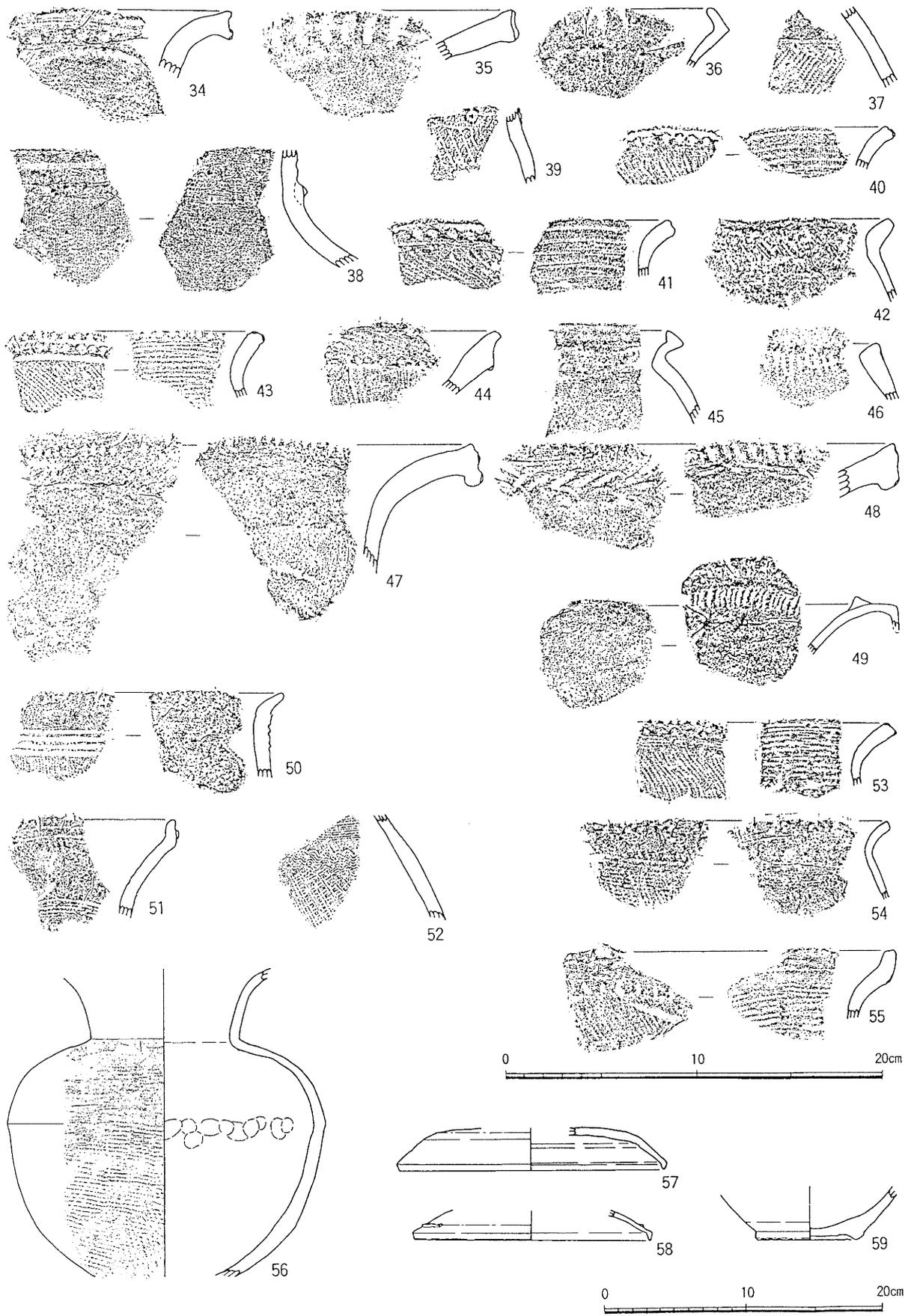
S D 201 断面 (北から)



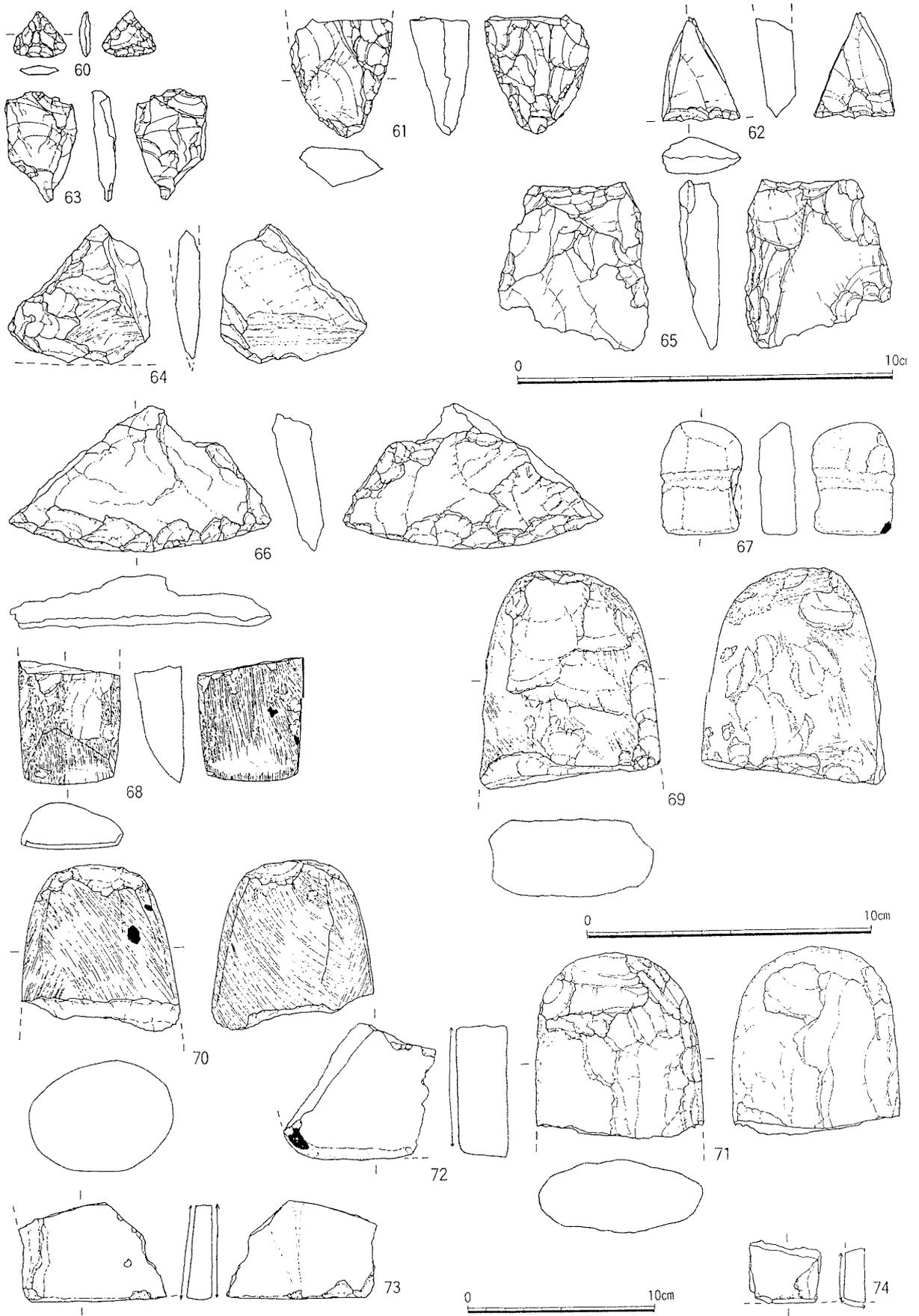
調査区 (西から)



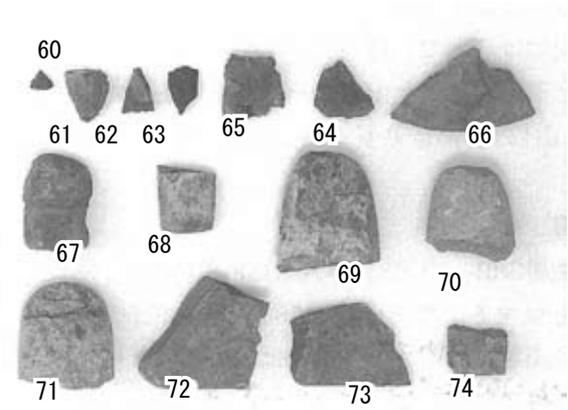
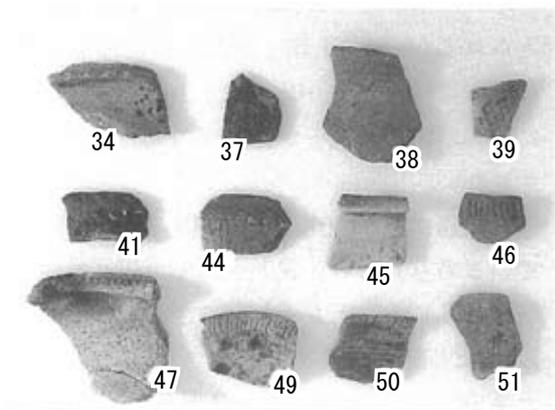
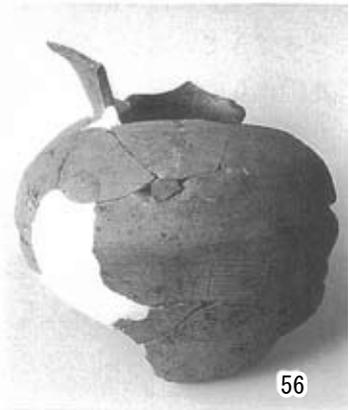
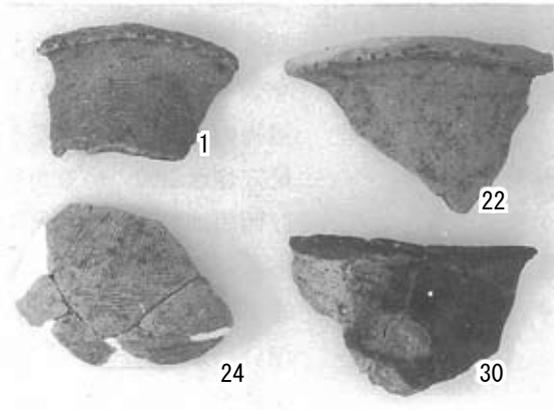
弥生土器 (1 : 4)



弥生土器 (34 ~ 55 1 : 3) 須恵器・土師器 (56 ~ 59 1 : 4)



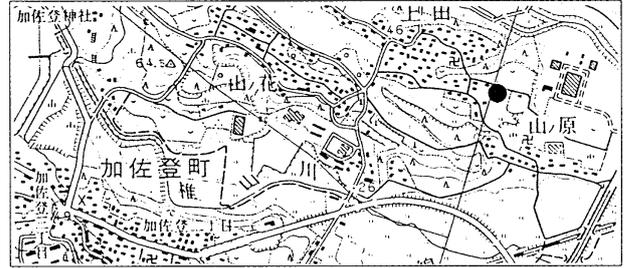
石器 (60 ~ 65 2:3 66・68 ~ 71 1:2 67・72 ~ 74 1:3)



弥生土器・須恵器・石器

## 10. 山の原遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市上田町字赤土 292  
事業主体 個人  
調査目的 住宅建築に伴う発掘調査  
調査期間 平成 8 年 7 月 19 日～7 月 24 日  
調査面積 22.1 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 藤原秀樹・新田剛



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

鈴鹿川左岸に位置し、鈴鹿川支流の蒲川と椎山川に挟まれ半島状を呈する台地である。鈴鹿川に臨む台地先端にはかつて中世の上田城が所在したとされるが、国道 1 号線の拡張やその後の土砂採取により消滅してしまった。その際、蔵骨器とみられる古瀬戸壺が出土し地元で保存されており中世墓も存在したことがうかがえる。

山の原遺跡は、古墳時代から室町時代にかけての遺物散布地として登録されている。近年、道路改良や個人住宅の建築に伴う試掘・立会調査が行われるようになってきているが、表土の薄い台地面を床下げて水田化しているためか、遺構の検出は見られなかった。

今回の調査は個人の住宅建築に起因するもので、試掘調査を実施したところ竪穴住居が検出されたため、遺跡の性格確認のため該当竪穴住居の範囲について調査区を拡張して本調査とし、その他の遺構については地下保存とした。

### 2. 遺構と遺物

調査地は畑地で、標高はほぼ 42 m を測る。耕作土 20cm と下層の茶褐色土層 20～30cm を除去した、基盤層（地山）の黄褐色粘質土層上面が遺構検出面となる。

#### (1) 遺構

**竪穴住居 S I 01** 南北 3.0 m × 東西 3.9 m の長方形の平面形を呈する。軒方向は N 78° W（磁方位）である。遺構の深さは東南コーナーでは削平により竪穴床面がほぼ露出している状況であり、その他の部分でも検出面から 6～8cm で床面に達する。南東コーナ

ーには東西 82cm × 南北 56cm、深さ 24cm を測る長楕円形の土壌 S K 04 があり貯蔵穴と考えられる。S K 02 からは土師器片が数片出土したのみである。東壁中央やや南寄りに作りつけのカマドが検出された。カマドの袖は削平を受け基底部のみの検出で幅 25cm で屋内に向かって 75cm 突出している。地山掘り残しにより構築されたと考えられる。カマド袖間と前面床面の 120cm × 60cm の範囲は炭、焼土が 1～2cm の厚さで覆われている。北東および南西コーナーで壁溝が検出されたが、支柱穴は検出できなかった。床面は、地山土の踏み堅めであるが、北西角については切っている S I 02 の床面上に 2～5cm の黄褐色粘質土を張って床面としている。床面上からのまとまった遺物の出土は見られなかった。

**竪穴住居 S I 02** 南東角を S I 01 により切られ、北および西側は調査区外へと延びているため規模は不明である。また、S I 01 と重複する部分についてのみ床面まで掘り下げた。床面は S I 01 床面から 2～7cm ほど深い。東南コーナーに東西 68cm × 南北 46cm の長方形の範囲に土師器甕片（3～7）を多量に含む、炭、焼土の厚い堆積が見られ、破壊されたカマドの基底と考えられる（当初、土壌と誤認したため取り上げに際しては遺構番号 S K 01 とした）。東壁および南壁添いに壁溝が明瞭に残るが、調査の範囲内で柱穴は検出されない。

**竪穴住居 S I 03** S I 01、S I 02 に切られ部分的に残存しているのみである。調査区内で東辺と南西コーナーがかろうじて検出されたため、東西の規模がおおよそ 3.4 m と推定可能である。

**土壌 S K 02** S K 01 の埋土から掘り込まれ床面に達する南北 85cm × 東西 45cm の土壌である。少量の土師器

片を含むのみである。

**土壙SK 03** S I 01の埋土を掘り込みS I 02の壁溝を切っている。東西65cm×南北34cmの長楕円の土壙である。土壙西壁寄りにほぼ完形の土師器杯(2)が正位の状態出土した。

**土壙SK 05** S I 01の北東コーナーに近接して検出された。南北80cm、深さ46cmの方形の土壙である。柱穴の可能性も考えたが、埋土がしまりのない茶褐色土の単純な堆積であるので土壙とした。埋土内からは土師器、須恵器の細片が少量出土したのみである。

**土壙SK 06** S I 01南辺から南に3m離れた地点に位置する。東西65cm、深さ43cmの隅丸方形の土壙である。埋土はSK 05と同様茶褐色の単純な堆積で、土師器片数点を出土したのみである。

## (2) 遺物

**須恵器坏蓋(1)** S I 01北西部の埋土から出土。口縁部1/8のみの破片で、推定口径18.5cm。天井部はわずかに膨らみを持つ。口縁は断面三角形で短く垂下し、末端は小さく外反する。青灰色。

**土師器坏(2)** SK 03から出土。口縁部の1/3を欠く、長楕円形にゆがみがあり長径21.1cmで、短径は1cmほど短い。口縁も水平でないため器高も4.2cm～3.8cmと変化がある。高台は剥落が著しいが、断面矩形でわずかに開く。腰部から口縁部にかけては膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。焼成は甘く橙色を呈する。器表の剥離が著しいため調整の観察は困難である。

**土師器甕(3)～(6)** いずれもS I 02カマド(SK 01)から出土。(3)(4)は同一個体の可能性もある。(3)は口径部で1/4残存し、推定口径は16cmを測る。(4)は口径部で1/4残存し、推定口径は17.6cmを測る。いずれも膨らみの少ない筒状の胴部に、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は丸く、わずかに上方に引き上げられる。内外面とも剥落し調整の観察が困難。焼成はあまく、灰白色を呈する。(5)は胴部の破片で、1/4残存、最大径22.4cmを測る。筒状の胴部の外面は目の細かい斜め刷毛目調整、内面は横方向の断続的な刷毛目調整が施される。焼成は良く、灰黄色を呈する。(6)は大型の甕で、口縁部1/4残存、推定口径は25cmを測る。頸部から緩やかな曲線状に外反し

て、口縁部となる。口縁端部は矩形に整える。胴部外面は目の細かい斜め刷毛目調整、内面は横刷毛目調整される。焼成は良く、灰黄色を呈する。

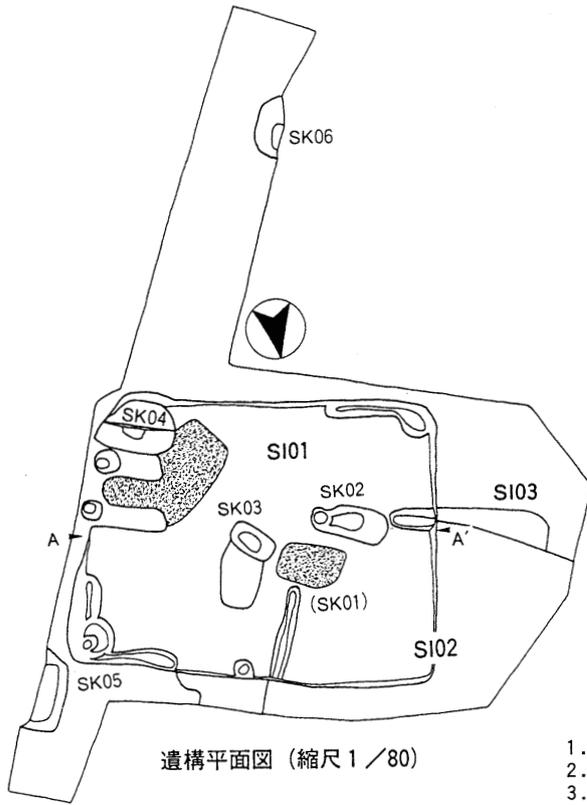
**土師器甕(7)～(8)** (7)は、S I 02カマド出土。口径部1/6残存、推定口径は22.8cmを測る。体部はわずかに開きながら立ち上がり、口縁端部は内側に引き出される。外面調整は剥落のため不明で、内面は横方向の断続的な刷毛目調整で、口縁部付近にはわずかに炭化物が付着する。焼成はあまく、浅黄橙色を呈する。(8)はS I 01の南西部分から出土。底部1/6残存、推定底径21cmを測る。底部からやや開きながら直線的に体部へと続く。底部の穴数は不明。焼成はあまく、内外面とも調整不明、灰白色を呈する。

## 3. まとめ

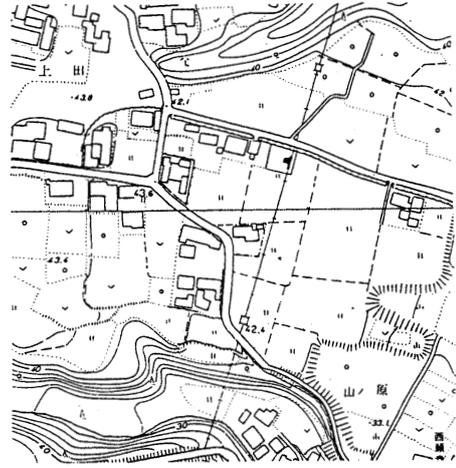
検出された遺構は、その切り合い関係からS I 03→S I 02→S I 01→SK 03という新旧関係が推定される。年代決定の決め手となる遺物はSK 03出土の土師器坏のみといえるが、北勢地域における律令期の土師器の実体はほとんど明らかでない。斎宮跡の土師器編年をみると高台付の土師器坏は8世紀前半期を通じて存在する。このことから、竪穴住居S I 01の廃絶は遅くとも8世紀中葉であると判断される。すると、2度の建て替えが行われていることからS I 03の建築は600年前後にまで遡る可能性があるといえよう。今回の調査は山の原遺跡における初の調査である。検出された遺構は、奈良時代前半期の竪穴住居である。今回の調査地はどちらかといえば台地中央部であるにもかかわらず、かなりの密度で竪穴住居等の遺構が検出されることから、山の原遺跡は台地のほぼ全域に住居が広がる大集落であったことが予想される。  
(藤原秀樹)

## [参考文献]

倉田正純「斎宮跡の土師器」『史跡斎宮跡発掘調査概報』1985  
三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所

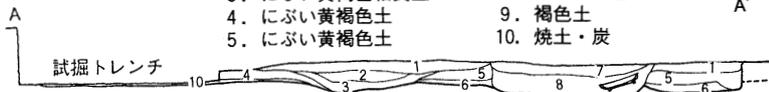


遺構平面図 (縮尺 1/80)

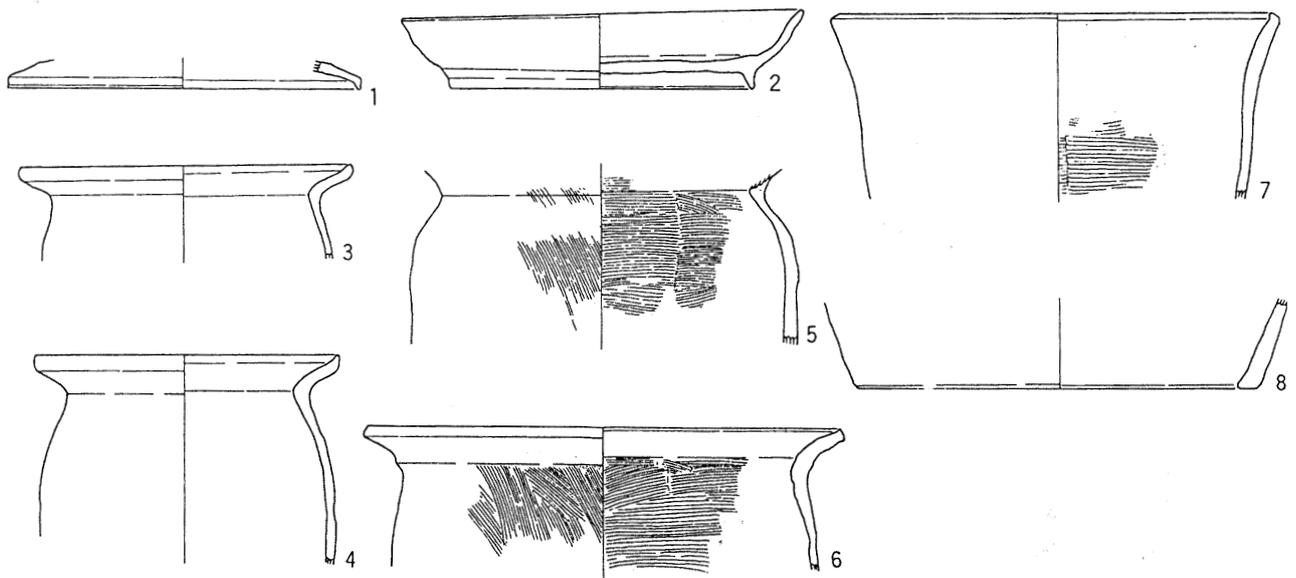


調査区位置図 (縮尺 1/5,000)

- |              |            |
|--------------|------------|
| 1. にぶい黄褐色土   | 6. 褐色土     |
| 2. 褐色土       | 7. にぶい黄褐色土 |
| 3. にぶい黄褐色粘質土 | 8. にぶい褐色土  |
| 4. にぶい黄褐色土   | 9. 褐色土     |
| 5. にぶい黄褐色土   | 10. 焼土・炭   |



竪穴住居 SI01 東西セクション (縮尺 1/40)



出土遺物 (1:4)



検出状況



調査風景



S I 01 と S I 02・03 の切り合い



カマド基礎部



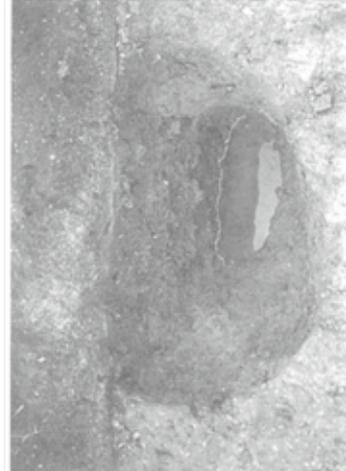
S I 01 (西から)



S K 03



S K 05



S K 06



出土土師器

## 11. 山辺瓦窯跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市山辺町 232(大井神社境内)

遺跡名 山辺瓦窯跡

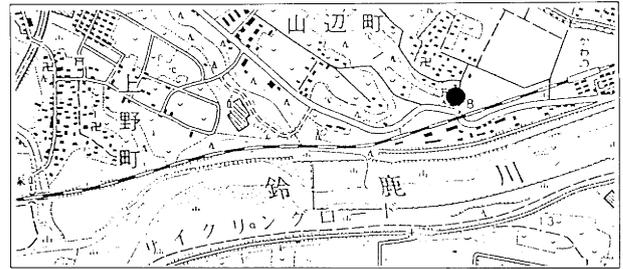
調査目的 神社改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査

調査期間 平成8年8月26日～10月31日

調査面積 64 m<sup>2</sup>

調査主体 鈴鹿市教育委員会

調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地は鈴鹿川下流の左岸、鈴鹿川に向かって半島状に張り出した丘陵の東縁部に位置している。調査地が所在する一帯の丘陵上は古代から人々の活動が活発であったと考えられており、銅鐸片や銅鐸形土製品を出土し、弥生時代中期～後期の環壕が見つかった一反通遺跡が所在する。古墳時代には鈴鹿川を見下ろすといった立地条件の良さを反映してか、多数の古墳が築かれるようになる。近年の発掘調査により、多数の方墳を中心として構成されることが判明した石薬師東古墳群もその一つに含まれる。また、今回の調査地である大井神社境内の裏手ではかつて山辺横穴墓の発掘調査も行われており、3基の横穴墓が確認されている。なお、白鳳時代の寺院跡と想定される南浦廃寺(大鹿廃寺)、L字状に規格的に配置された掘立柱建物群が見つかった木田坂上遺跡、河曲郡衙跡と考えられる狐塚遺跡、伊勢国分寺、尼寺跡などは浪瀬川沿いに形成された谷底平野を挟んだ北側の丘陵上に位置している。今回調査を実施した山辺瓦窯跡は大井神社の改築に先立つ造成工事に伴い新たに発見された遺跡である。

### 2. 調査の成果

窯は丘陵先端の東向きの斜面を利用して、トンネル状に掘り抜いて構築された地下式窖窯である。ちょうど窯体の中央部が過去の土砂採取によって切り取られる形となって失われてはいるが、窯体上半部(焼成室)や煙道および窯体下半部と焚き口については地下に埋没していて当初は良好に残存しているものと予想された。今回の調査では工事によって削平される予定の焼成室と煙道について調査を行い、

一部窯体下半部についてトレンチ調査を実施した。焼成室の標高は約21～23mを測る。なお、窯体下半部と焚き口については現状保存されている。

焼成室の遺存状態については窯が砂レキ層を割り抜いて構築されているため崩落が著しく、また、窯体内には窯壁や天井部の崩壊土、煙道を伝って入り込んだと考えられる流入土が充満しており、決して良好といえるものではなかったが、床面については比較的良好に残存していた。

残存する焼成室上半部の長さは2.4m、床幅1.02m(煙道下部では70cmに狭まる)、天井高1.26m、床面の斜度30度前後を測る。窯体下半部に設定したトレンチではさらに焼成室の続きと考えられる部分が確認されていることから、窯体の全長は焼成室だけで少なくとも8mを越えるものと想定される。

窯壁の立ち上がりについては崩落が著しく確実なことはいえない状況であるが、比較的直線的に立ち上がっていたものと考えられる。天井部についても同様に崩落は著しいものであったが、削平部断面の検出時において一部確認されたところによると、比較的水平に穿たれていたようである。こうしたことを踏まえると焼成室の断面は縦に長いやや方形のものが想定されよう。

床面については一度大掛かりに補修していることが確認された。窯の構築当時の床面については地山を階段状に削りだした有段式のもので、残存範囲では5段確認された。但し、スサ入り粘土等を貼ったような形跡は無く、地山を削りだしてそのまま使用したようである。そのため床面は非常に弱く、事実、階段部分については既に崩れている部分も目立った。このことから短期の操業で補修された可能性が

高いと考えられよう。なお、床面から10cmほどの範囲が赤く被熱している状況であった。

補修に際しては当初の床面の階段を粘土で埋め、スロープ状にして使用していた。補修前の床面との間隔は5～10cm程存在している。この床面は主に2層から成り、上面が酸化還元状態の黄褐色系、下面が赤褐色系に被熱している。出土した瓦の多くはこの床面上での出土である。

また、トレンチ観察の結果、構築当時の床面には向かって左側の窯壁沿いに幅20cmほどの浅い溝状の窪みが見受けられた。人為的な掘削によるものなのかは不明であるが、雨水などを排水する機能を果たしていたものと考えられる。

煙道の幅は検出面で約80cmを測り、断面は隅丸方形を呈するものと考えられる。煙道の周囲には赤褐色に被熱している部分も認められる。ほぼ垂直に穿たれていたようであるが、その大部分は現在の神社建設時と思われる削平によって失われている。

また、拝殿北側の平坦面においても一部分的な調査を実施した。位置的に見ると煙道の上部にあたる場所であるが、大きく削平を受けており、その堆積土の中から弥生土器片、須恵器片、土師器片、山茶碗片などが出土している。しかし、瓦窯に伴う工房跡や住居跡などの遺構は検出されなかった。

なお、調査地周辺においてトレンチ調査を実施しており、また、調査終了後の造成工事に際しても立ち会い調査を行ったが、別の瓦窯跡や工房跡などの遺構は発見されなかった。

#### 〔遺物〕

今回の調査では図示し得る遺物として軒平瓦、平瓦、須恵器、土師器が出土しているが、その多くが破片での出土である。また、軒丸瓦については全く出土しておらず、丸瓦についても破片が少量出土しているのみである。

#### 軒平瓦 (1～8)

8点の軒平瓦が出土している。いずれも補修後の床面上や焼成室内に充満した流入土の中からの出土である。全て段顎形式の四重弧文軒平瓦で、弧文の2段目と3段目の間での接合面からすべてはがれている。

1は唯一出土した軒平瓦の本体部で、瓦当面の一

部が欠損するもののほぼ完形である。凹面には布目痕、凸面には縄目タタキが認められるが、共に後にナデ消されている。長さ40.1cm、中央部で幅26.8cm、厚さ2.1cmを測り、側端部は面取りされている。緑灰色を呈し、非常に堅緻な焼成である。2～8はいずれも顎部のみの出土で、灰色を呈し、非常に堅緻に焼成された2・3と浅黄色を呈する4～8に分けられる。顎部の長さは5.0～6.2cm、厚さ1.8～2.3cmを測り、本体との貼り合わせ面に格子目タタキを施すものも見受けられる。なお、2の顎底面には5条の平行沈線文が巡らされている。

#### 平瓦 (9～12)

いずれも補修後の床面上や焼成室内に充満した流入土の中から出土し、軒平瓦(4～8)と同様に、浅黄色に焼成されている。凹面には布目痕が明瞭に残り、凸面は横方向にケズリを加えている。また、側端部はいずれも面取りされている。完形品がないために詳しい大きさについては不明であるが、9では幅32.6cm、厚さ2.3cmを測る。

#### 土師器坏 (13)

焼成室内に充満した流入土の中から出土したもので、約1/2残存している。体部上半部はヨコナデ、体部下半部から底部にかけてはユビオサエが施されている。推定口径12.2cm、推定器高2.6cmを測り、浅黄色を呈している。

この他に拝殿北側の削平に伴う堆積土の中から須恵器高坏の脚部(14)、須恵器甕の口縁部(15)が出土している。

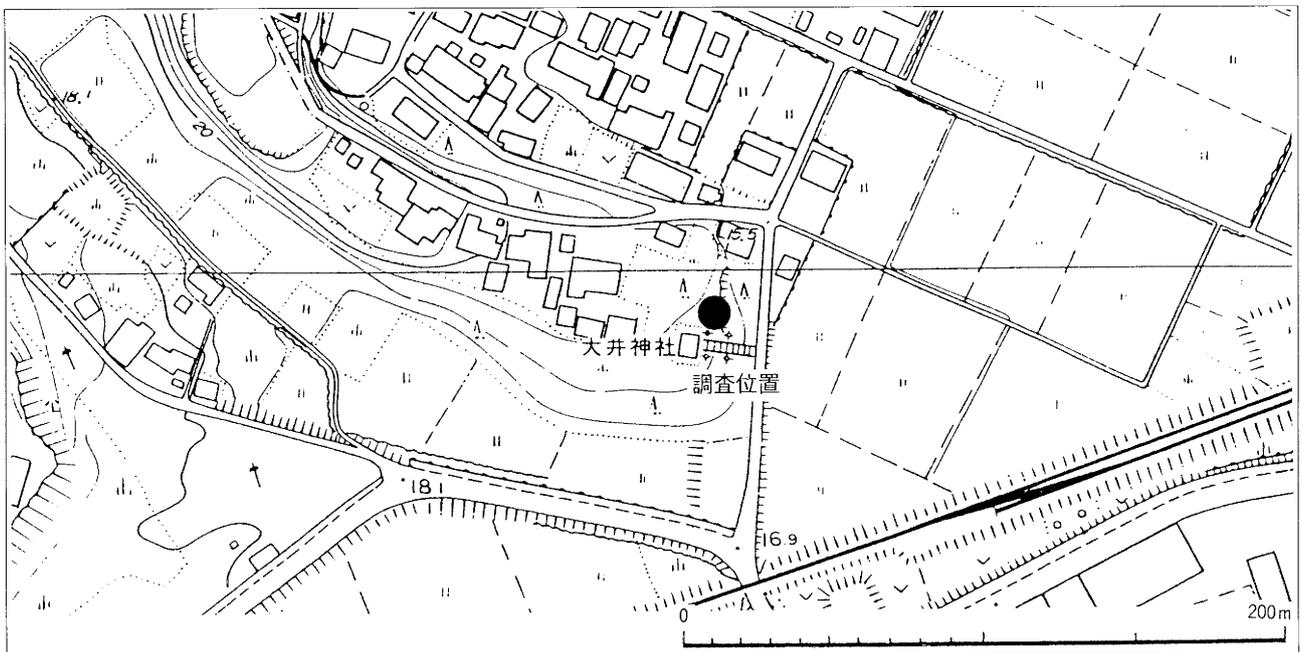
### 3. まとめ

今回の調査では窯が瓦専用窯であったこともあり、出土した土器は少なかった。しかし、出土した軒平瓦の全てが重弧文軒平瓦であったことから、この瓦窯は白鳳時代に操業されていたと考えてほぼ間違いないと思われる。県内における白鳳時代の瓦窯跡の発掘としては四日市市北浦瓦窯跡群、嬉野町辻垣内瓦窯跡群に次いで今回が3例目となる。では、この瓦窯で焼成された瓦の供給先は何処であったのか。周辺の遺跡に目を移すと、北北東850mの地点に同様に重弧文軒平瓦を出土する国分町の南浦廃寺(大鹿廃寺)が位置する。この白鳳時代の寺院

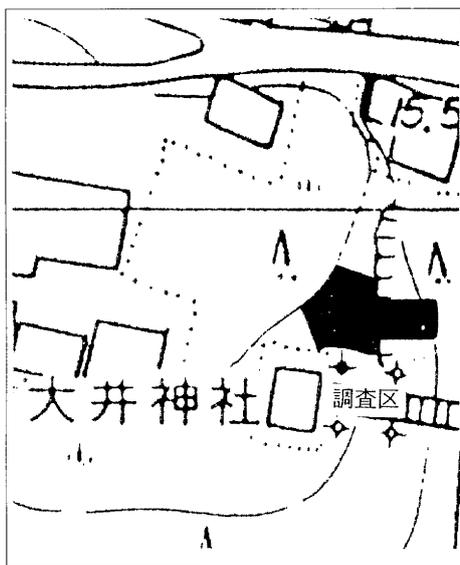
跡からは過去の調査で隅切瓦に転用され、顎底面に3条の平行沈線文が施された軒平瓦が出土している。ここには今回の調査で出土した顎底面に5条の平行沈線文が施された軒平瓦2と共通した技術的系統を見て取ることが出来よう。こうしたことを考え併せると、この瓦窯で焼成された瓦の供給先としては南浦廃寺が有力であると考えられる。調査地一帯の旧河曲郡は『日本書紀』の記述などから見て、古代豪族大鹿氏の支配力が極めて強い地域であったと考えられている。こうしたことから山辺瓦窯跡は大鹿氏の管轄下にあり、大鹿氏の氏寺であったと考え

られる南浦廃寺に焼成した瓦を供給していたと想定されよう。しかし、この瓦窯の立地する場所が鈴鹿川に面していることからその水運を利用してさらに下流域にも運搬されていた可能性もかんがえられる。

さらに、今回の調査で確認出来た瓦窯跡は1基のみであり、周辺地域に未だに別の瓦窯跡が眠っている可能性も否定出来ない。瓦の供給先をより確実にするためにも南浦廃寺を含め、周辺地域における今後の調査に期待がかかる。(杉立正徳)



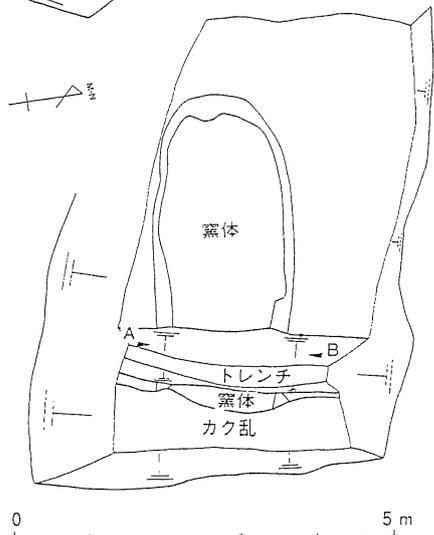
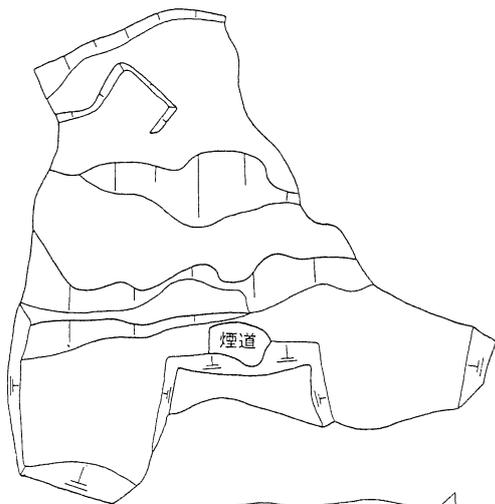
調査区付近図 (1 : 2,500)



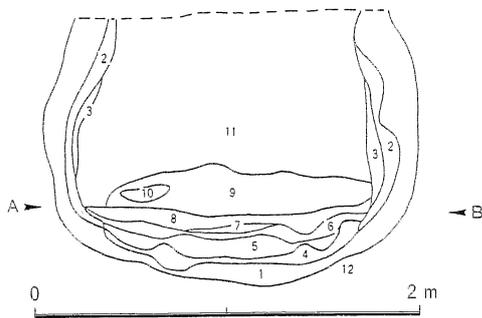
調査区位置図 (1 : 1,000)



調査前風景 (北から)



調査区平面図 (1 : 100)



窯体下半部トレンチ断面図 (1 : 40)

- |       |   |                  |                 |
|-------|---|------------------|-----------------|
| A — B | { | 1. 明赤褐色砂質土 地山、赤変 | 9. 橙色土 赤変、天井崩落土 |
|       |   | 2. 明黄褐色砂質土       | 10. 黄色砂質土 窯壁崩落土 |
|       |   | 3. 黄灰色砂質土 還元層    | 11. 暗灰黄色土 流入土   |
|       |   | 4. オリーブ黒色砂質土 灰層  | 12. 明黄褐色砂質土 地山  |
|       |   | 5. 褐灰色砂質土 硬質     |                 |
|       |   | 6. 黒色砂質土 補修後床面   |                 |
|       |   | 7. 明黄褐色砂質土 赤変    |                 |
|       |   | 8. 灰黄褐色砂質土 灰層    |                 |
|       |   |                  |                 |
|       |   |                  |                 |
|       |   |                  |                 |
|       |   |                  |                 |



煙道 (南西から)



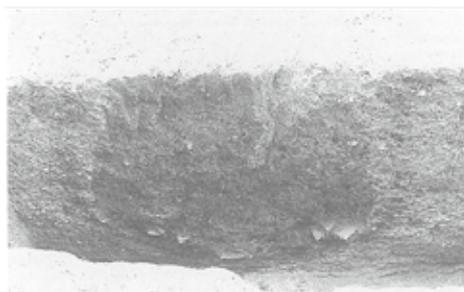
調査風景 (煙出し付近)



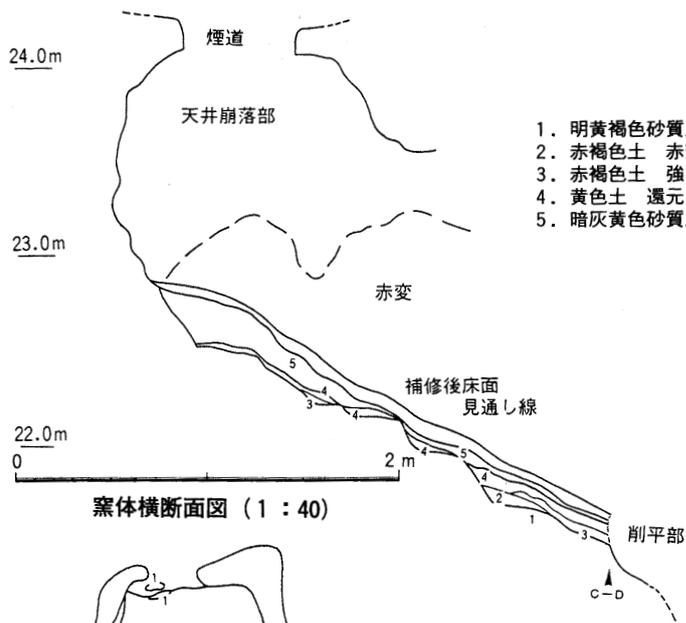
窯体下半部検出状況



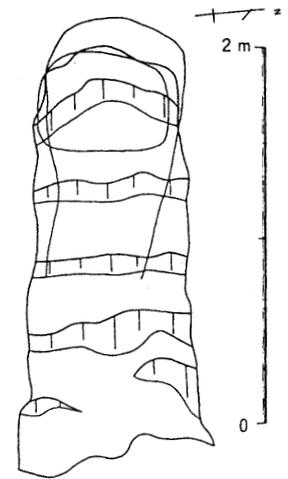
窯体下半部トレンチ



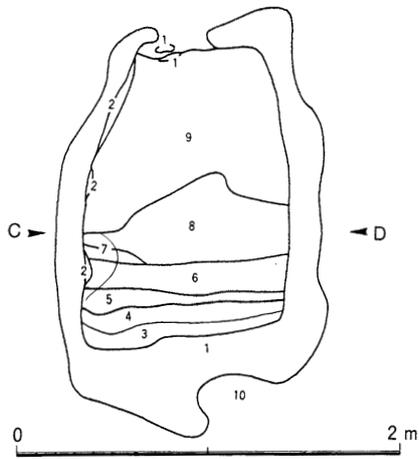
窯体下半部トレンチ断面 (東から)



1. 明黄褐色砂質土 地山、当初の床面
2. 赤褐色土 赤変
3. 赤褐色土 強く赤変する
4. 黄色土 還元 補修後床面
5. 暗灰黄色砂質土 灰層



窯体部平面図 (1:40)



窯体断面図 (1:40)

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 明赤褐色砂質土 地山、赤変    | 8. 黄褐色粘質土 流入土   |
| 2. オリーブ色土 還元層       | 9. 灰オリーブ砂質土 流入土 |
| 3. 赤褐色土 赤変          | 10. 明黄褐色砂質土 地山  |
| C-D 4. 黄色土 還元、補修後床面 |                 |
| 5. 暗灰黄色砂質土 灰層       |                 |
| 6. 褐色砂質土 やや赤変 天井崩落土 |                 |
| 7. オリーブ色土 窯壁崩落土     |                 |



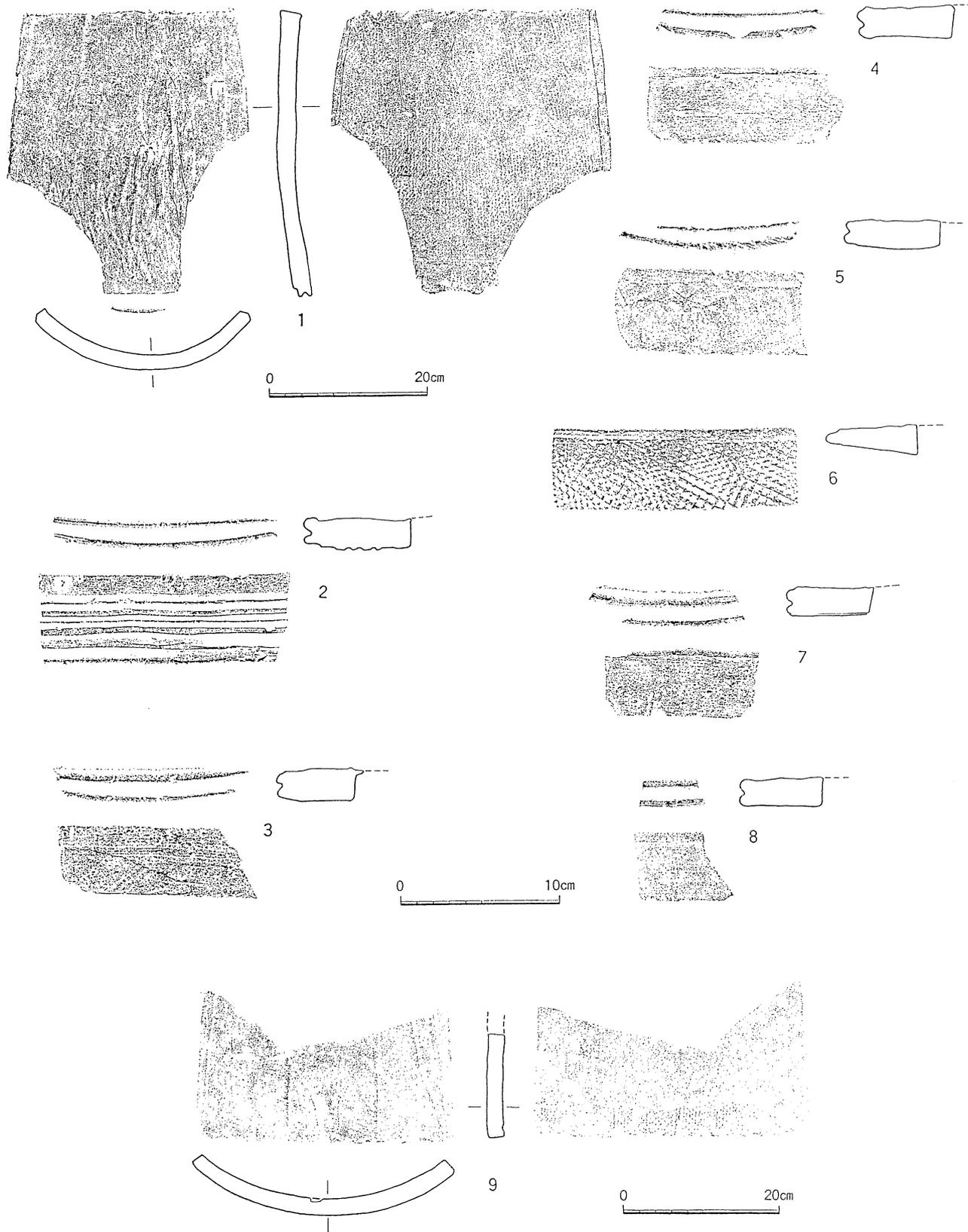
調査区全景 (北東から)



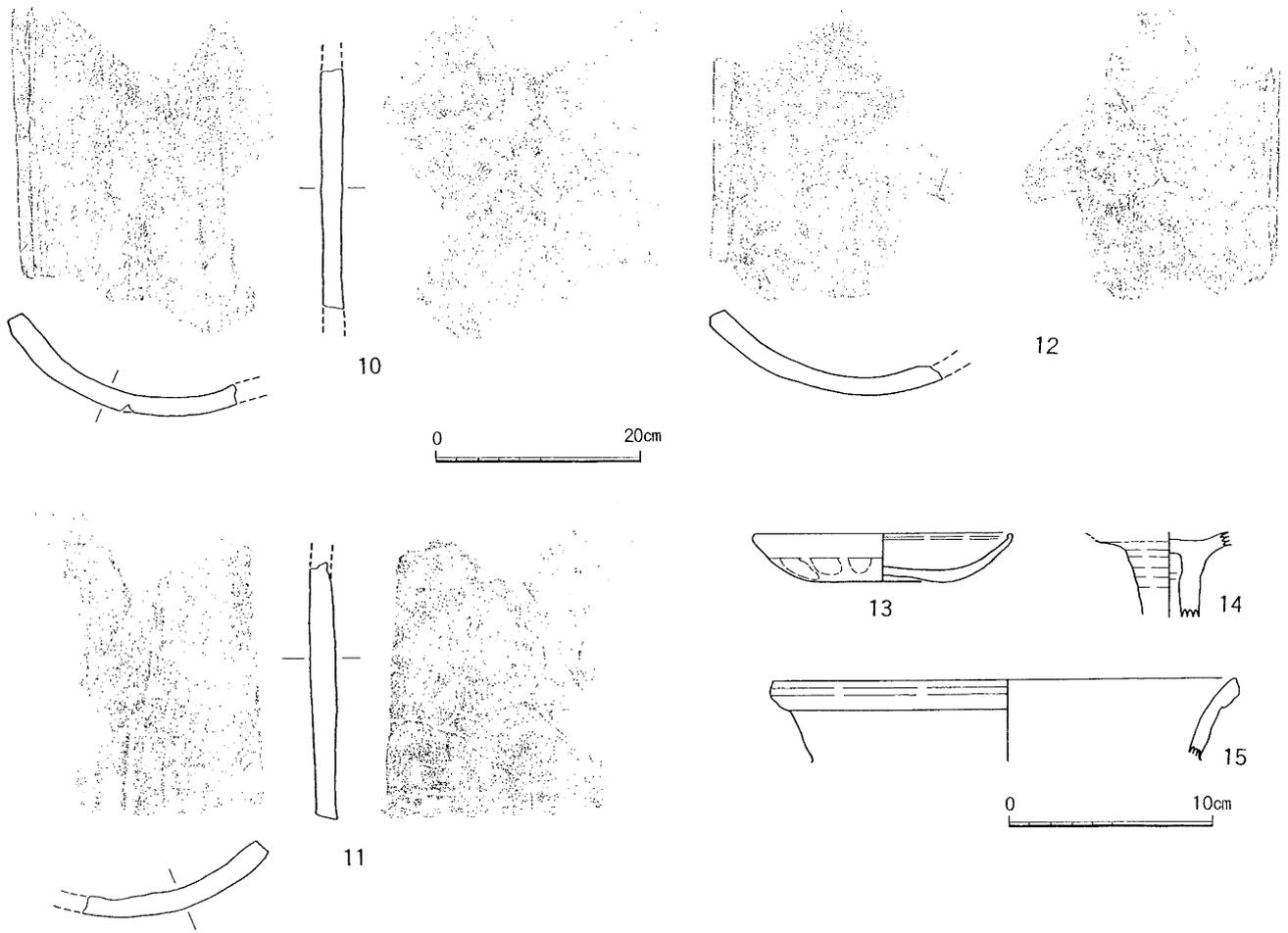
補修後床面



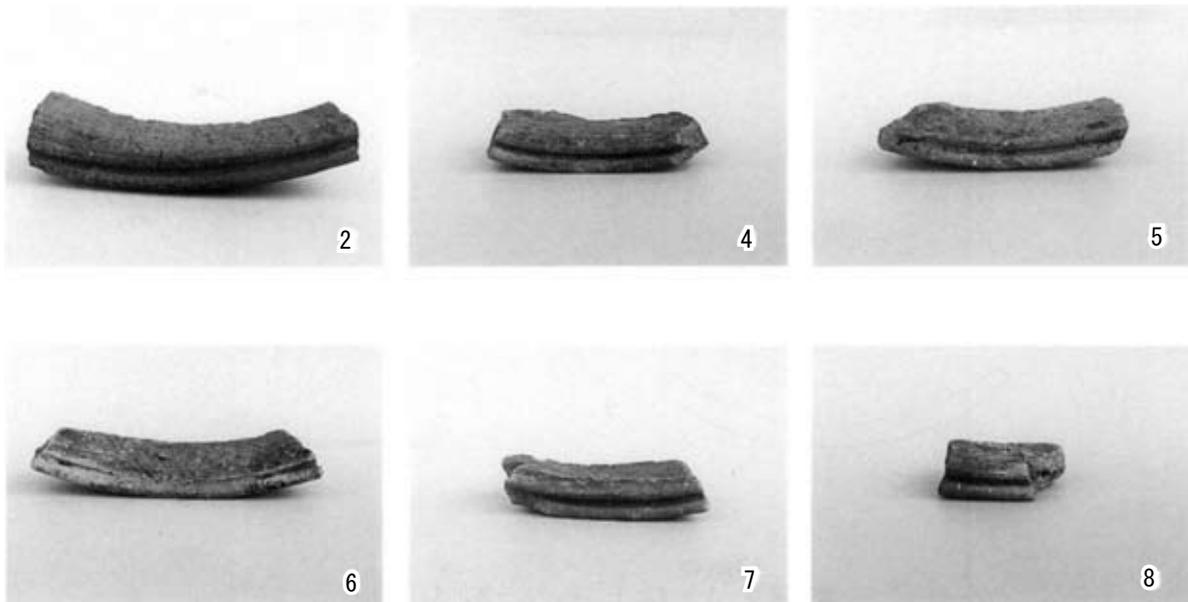
当初の床面



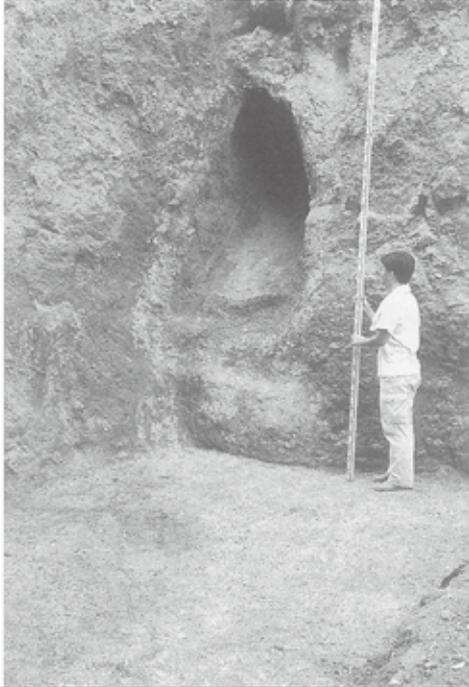
出土遺物 (1・9, 1:8 2~8, 1:4)



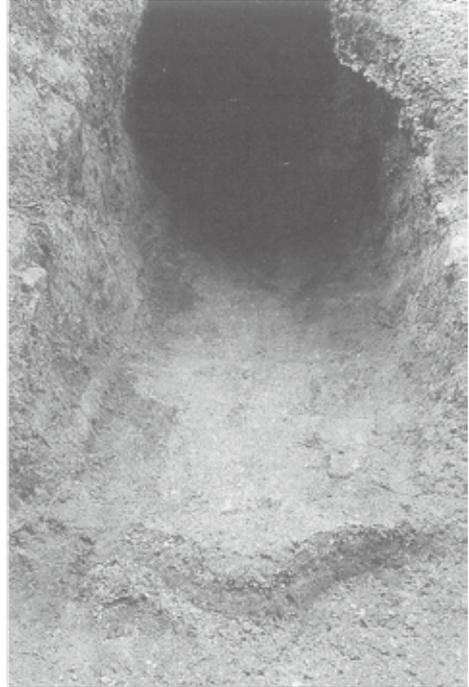
出土遺物 (10 ~ 12, 1 : 8 13 ~ 15, 1 : 4)



出土遺物



調査区全景（北東から）



補修後床面



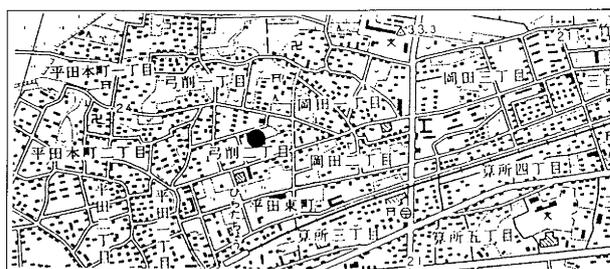
窯体完掘



当初の床面

## 12. 岡太神社遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市弓削二丁目 45-2  
調査目的 宅地造成に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年10月16日～10月28日  
調査面積 180 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 岡田雅幸



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地は鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置し、岡太神社遺跡として知られる遺物散布地の南縁部にあたる。周辺にはかつて、岡田古墳群と呼ばれる12基の円墳が所在した。大正期の開墾によって6基が消滅し、昭和30年代に行われた住宅建設のために残り6基もまたたく間に破壊された。

今回の調査では開発予定地の北側に1カ所、南側に2カ所トレンチを設定し、試掘調査を行った。基本層位は第1層が耕作土を含む黒褐色土約30cm、第2層が黄褐色基盤層で、第2層上面で遺構検出を行った。その結果、南側のトレンチで中世陶器(山茶碗)を含む鎌倉時代の建物の柱跡が検出されたので南西部分を掘り、記録保存を図ることにした。

### 2. 遺構と遺物

検出された遺構は溝5条、多数の柱穴、土壌である。溝SD 01はほぼ東西に走っているが調査区の東側で向きを北側に変えL字状になる。幅80～120cm、深さ20～25cmの規模を持ち、緩いU字状の断面を呈する。SD 01とほぼ並行して走っている溝SD 02は西部では幅1mであるが、東部に向かうほど幅が広くなり2mになる。土師器片の他に山茶碗が出土した。

そのうち図示できたのは4個体である。(1)～(4)は体部はほぼ直線的に開き、口縁端部が尖る。口縁部径は13.4～14cm、器高は5.2～5.5cm、底部径は5.6～7cmである。内外面ともロクロナデが施されている。(1)と(3)の底部外面には墨書が見られ、(1)にははっきりしないが「大(?)」が、(3)には「○」が認められる。高台の残りが悪く、特に(2)は高台が完全に剥落しているが、(1)(3)(4)の高台端部には初殻痕が残存する。いずれも尾張産とみられ、藤沢

氏による山茶碗編年の第6形式に相当すると思われるが(2)はやや新しい形態である。溝SD 03はほぼ並行に走るSD 02とSD 04の間を蛇行しながら走っている。幅1m前後、深さ15～20cmの規模を持ち、緩いU字状の断面を呈する。山茶碗、土師器片が出土した。(10)の口縁部径は15.8cm、器高は4.7cm、底部径は7.2cmである。内外面ともロクロナデが施されている。口縁部には自然釉が残っている。藤沢氏による山茶碗編年の第5形式に相当すると思われる。溝SD 04は幅60～80cm、深さ25～30cmの規模である。調査区の南西隅をSD 02と並行して直線的に走っていることや出土遺物から、両溝はほぼ同時期に存在したと思われる。SD 05は、SD 03・04と交差するように蛇行しながら走り両溝を切っている。5条の溝の新旧関係は切り合いから、SD 05が最も新しい溝であることは判断できるが、他の4条の新旧関係は明確にはできない。しかしながら、SD 01から04の4条は並行しながら走っており、いずれも山茶碗、土師器片などの出土遺物から判断すると中世のほぼ同時期に存在した溝だと考えられる。また、SD 04の北側にあるSK 01は長辺90cm、短辺70cm、深さ35cmの楕円形を呈する。埋土中から山茶碗、土師皿、土師器片がまとまって出土した。時期的には出土遺物やSD 04に切られていることから判断して平安時代末頃と考えられる。(5)～(7)は体部がほぼ直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。口縁部径は15.6～16.2cm、器高は4.9～5.6cm、底部径は7.6～8.6cmである。内外面ともロクロナデが施されている。藤沢氏による山茶碗編年の第5形式に相当すると思われる。(8)(9)は土師器の小皿で(8)は8.6cmの口径である。(9)の口径は9.6cmで、内面にナデ、外面にオサエ、口縁端部にヨコナデを施す。また試掘時に出土

した(11)の山茶碗は体部はやや丸みを帯び、口縁端部を丸くおさめる。口縁部径は16.8cm、器高は6cm、底部径は8.1cmである。内外面ともロクロナデが施されている。藤沢氏による山茶碗編年の第5形式に相当すると思われる。

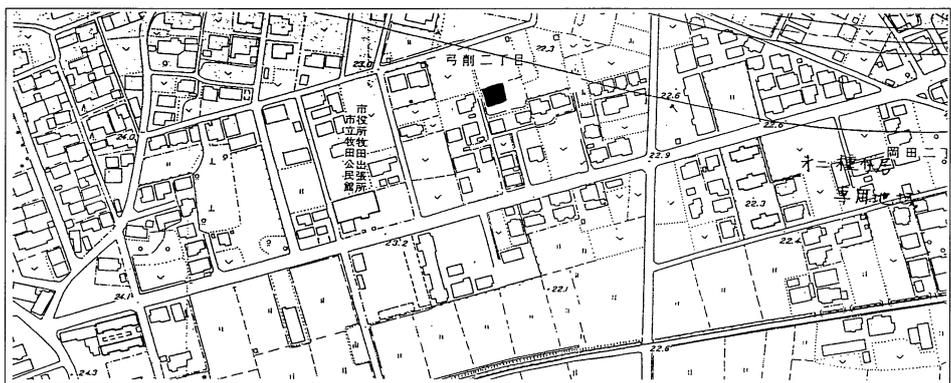
ると判断できる。今回の調査で中世の時期、少なくとも岡太神社の南側約150mにあたるこの調査区に人々の生活の痕跡が認められことが分かり、岡太神社を中心とした岡太神社遺跡の広がりや南側縁辺部を確認できた意義は大きい。(岡田雅幸)

### 3. まとめ

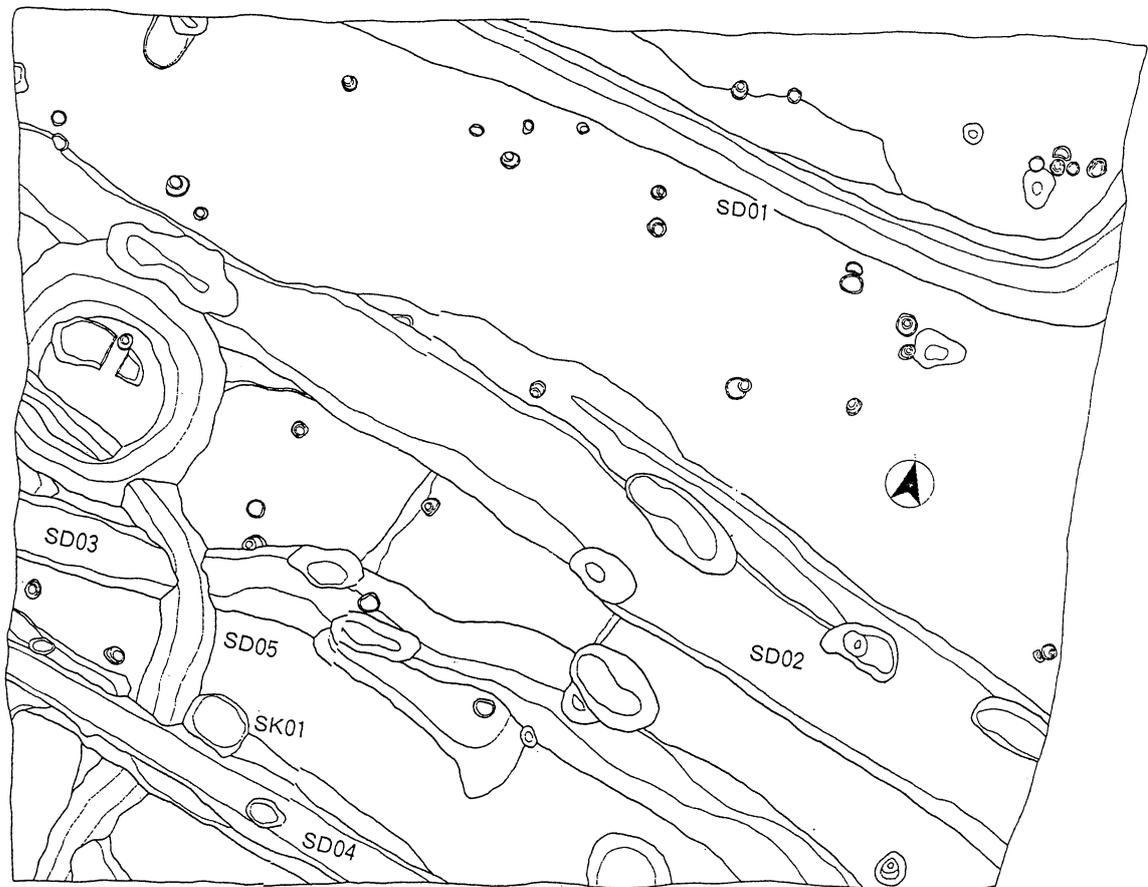
出土遺物から判断して、本調査区の遺構は平安時代末から鎌倉、室町時代にかけての時期のものである

### [参考文献]

藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』  
三重県埋蔵文化財センター1994



調査区位置図(縮尺1:5,000)



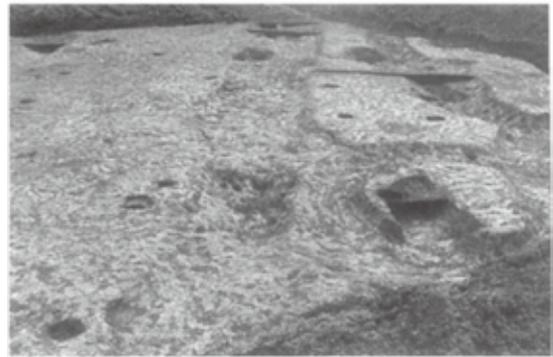
遺構配置図(縮尺1:100)



調査区全景



S D 03・04・05



S D 02



S D 01



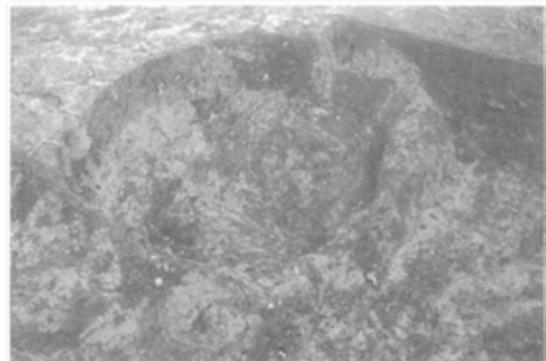
S D 04



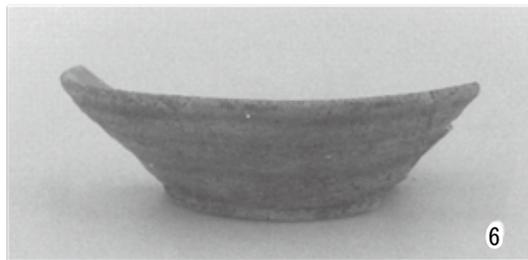
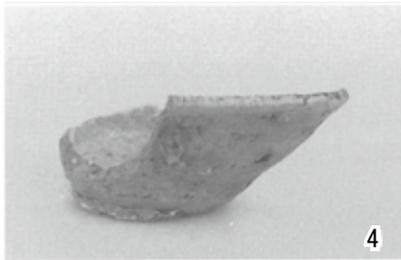
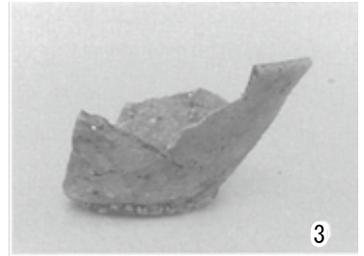
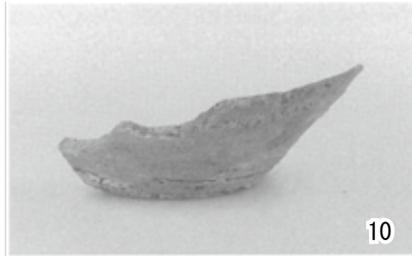
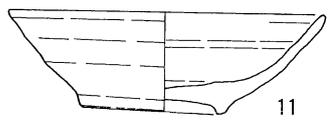
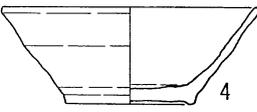
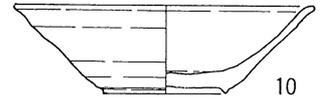
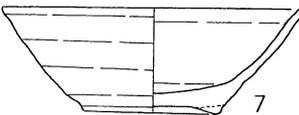
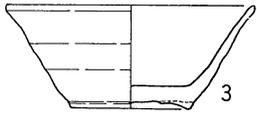
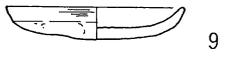
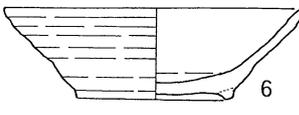
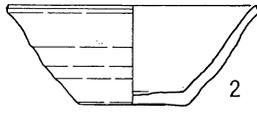
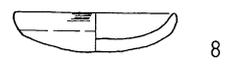
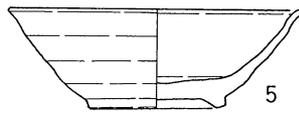
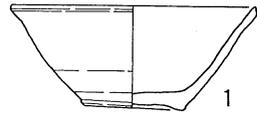
S D 03・S D 05



S K 01 遺物出土状況



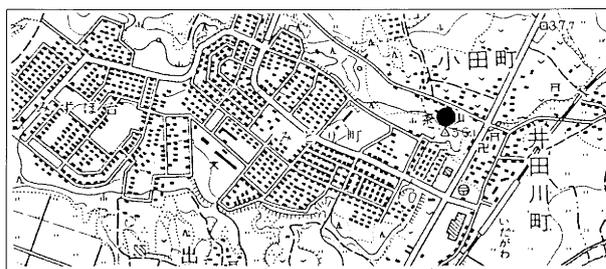
S K 01



出土遺物

### 13. 羽舞場遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市小田町字羽舞場 1174-119・120  
事業主体 三重県住宅供給公社  
調査目的 土地区画整理に伴う発掘調査  
調査期間 平成8年11月19日～平成9年1月16日  
調査面積 780㎡  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 藤原秀樹



位置図 (1:25,000)

#### 1. はじめに

国道1号線を鈴鹿市から亀山市に向かい、ちょうど市境に至ると国道は低い丘陵の東端をカットしている。この丘陵は第三紀の亀山層からなる低丘陵地で、先端の一角は一般に茶臼山と呼ばれ、標高56.1mを測る。茶臼山の東を主要河川鈴鹿川が、北には鈴鹿川の支流安楽川が流れ、すぐ下流で合流している。茶臼山丘陵をとりまくように両河川によって形成された標高40m前後の高位段丘が広がっており、両河川の合流点に向けて半島状に延びる。羽舞場遺跡が立地するのは、この茶臼山の北麓の緩傾斜地である。

この鈴鹿川と安楽川の合流点を臨む両岸の台地上は北伊勢地域でも有数の古墳分布の密な地域であり、この井田川丘陵も例に漏れない。昭和40年代後半、一角では住宅開発が活発に進められ、幾つかの古墳が発掘され消滅していった。鈴鹿川流域最古の横穴式石室を有する井田川茶臼山古墳、全長40mの円筒埴輪列を有する城山古墳などがその例である。

#### 2. 調査の成果

調査区は南から北へ緩やかに傾斜し調査区端での比高差は2.5mを測る。層序は地表から約20cmの暗黒灰色耕作土、20～30cmの浅黄色砂質シルト(無遺物)を除去すると、丘陵を構成する第三紀亀山層の泥岩の風化・再堆積物である灰白色と明黄褐色粘質土層の基盤層となり、この上面で遺構の検出を行った。調査は廃土処理の関係から上部と、下部の2区に分けて実施した。検出された遺構は、現代溝を除外すれば、弥生時代溝状遺構と古墳時代堅穴住居である。

弥生時代の遺構と遺物

調査区の全面に溝状の落ち込みがみられ、複雑に切りあっている。浸食により掘方の肩が不明瞭となっているため検出は極めて困難であった。溝には人工的に掘られたものと、それらから派生した自然の流路があると考えられたため、掘方がはっきりとし、形に一定のまとまりがあるものを溝とした。その他は自然流路と考えて、遺物の包含が見込まれるもののみを掘削の対象とした。埋土はすべて浅黄色の細砂質土である。

**溝SD01** 調査区西辺上部から現れ、下方に向かって湾曲する溝。幅約1m、検出面からの深さは最大で20cm。埋土は黄褐色細砂質土である。

**弥生土器壺(3・4)** SD01埋土から出土した。焼成・胎土からみて同一個体とみられる。推定口径14.8cm。口縁が強く外反する。外面ま縦ハケメ調整。にぶい橙色を呈する。

**溝SD02** 調査区の中央部に位置する。斜面に直交する部分と西側から垂下する部分からなり、SD03と一体化する。最大幅1.8m、屈曲部で深さ50cm、平均的には20cm前後である。

**弥生土器壺(10)** SD02屈曲部埋土から出土。底部のみの破片で、底径9.3cm。外面は縦ハケメ調整。にぶい黄褐色を呈する。

**溝SD03** SD02の西側に連続する一辺が約5mの「匚」字状を呈する溝である。最大幅約1.2m、検出面からの深さは5～20cm。

**弥生土器壺(1・2)** 同一個体とみられるが接合しない。胴部の最大径が下半に来る壺である。推定最大径26.2cm、底径6.6cm。調整は不明。にぶい橙色を呈する。

**溝SD04** 調査区東側に位置する。SD02と同様斜面

に直交する部分と西側から垂下する部分からなる。屈曲部で最大幅 1.6 m、検出面からの深さ 30cm を測る。

**弥生土器甕 (5・6)** (5) は口径 23cm、器高 23.7cm を測る。胴部は膨らみを持たず、口縁部への屈曲はみられず、緩やかに外反する。外面は縦ハケメ調整される。にぶい黄褐色を呈し、胴部中央に黒斑を有する。(6) は最大径 19.5cm、器高が 27cm 以上と極めて長胴である。外面は縦ハケメ調整される。外面は橙色からにぶい黄褐色を呈し、胴部中位と底部付近に黒斑がみられる。

**弥生土器壺 (7)** 最大径が胴部の下半に来る壺で、径 24.4cm を測る。調整は不明、内面に黒色の炭化物が 0.5 mm の厚さで付着する。暗褐色を呈する。

**溝 S D 08** S D 01 の下方に位置する。斜面に平行に走る部分とそれに直交し調査区外に延びる部分からなる「ト」字形の溝である。S D 01 とセットになるものとみられる。最大幅 1.5 m、検出面からの深さ 10cm。

**溝 S D 09** S D 04 の下側に位置する。一部が調査区東辺外へと及ぶ「L」字状の溝である。斜面に直交する部分で幅 1.7 m、検出面からの深さ 25cm を測る。

**流路 S D 05** 調査区中央を調査区北辺に向けて流れる流路である。上半部は確認しなかったが位置的に S D 02・S D 03 から派生するとみられる。最大幅 2.4 m、検出面からの深さ 35cm を測る。埋土は黄褐色砂質土で、僅かに炭片と弥生土器の細片を含む。

**流路 S D 06** 調査区西側から「S」字状にカーブして、S D 05 と交差し、調査区北辺中央へと流れる流路である。S D 05 との新旧関係は明らかにできなかった。S D 08 から派生するとみられる。最大幅 2.2 m、深さ 30cm を測る。埋土は浅黄色砂質土で炭細片を僅かに含む。

**弥生土器壺 (12)** 胴部の中位に最大径が来る壺である。最大径 27.5cm を測る。外面は縦ハケメ調整である。浅黄色を呈し、底部の大部分と胴に縦方向に長い黒斑を有する。

**土壙 S K 01** S D 06 と S D 09 の中間に位置する。主軸を南北に向け、長さ 3.4 m、幅 1.5 m、検出面からの深さ 20cm を測る。埋土は浅黄色の砂質土で焼土塊、炭細片を含む。

**土壙 S K 02** 東西に主軸を向けた長さ 3.2 m、幅 1.5 m の長方形土壙である。埋土は黄褐色の粘質土である。  
**土壙 S K 03** 南北 2.3 m、東西 3 m 以上の方形の土壙である。検出面からの深さは 5cm 弱で、埋土は浅黄色の砂質土である。

その他の遺物

**弥生土器壺 (9)** 遺構検出時に出土。壺の肩部の破片である。外面に原体幅 2.3cm、14 条の櫛書きによる波状紋を 3 条めぐらせる。橙色。(11) S D 06 と S D 09 の中間位置の地山直上から出土した。外面は縦ハケメ調整が施される。浅黄色を呈し、底面付近に広く黒斑を有する。

**弥生土器甕 (8)** S D 05 に近接した、地山直上から出土した。外面は縦ハケメ調整が施される。外面明赤褐色を呈し、内面には厚く炭化物が付着する。

古墳時代の遺構と遺物

**竪穴住居 S B 01** 調査区の北西端に位置する。西側に存在し現在は埋め立てられている谷状地形に面する。規模は南・北辺が 5.4 m、東辺が 5 m、西辺が 5.6 m の西にやや開いた形の方形を呈する。埋土は上層が粘質のにぶい黄褐色土層で竪穴掘方の中央にレンズ状に厚さ 10cm ほどに堆積している。下層は、細砂質の明黄褐色土で炭細粒と土器片を多く含む。検出面から床面までの深さは南辺で 20cm、北辺ではほぼ等しくなっていて、旧表土はかなり流失していることがうかがえる。

床面には支柱穴が 4 基検出され、東西南北それぞれの柱間は 2.16 m、2.4 m、2.72 m、2.4 m である。西側支柱穴間のやや内寄りに炉跡とみられる径 30cm の円形の焼土面が検出された。また、南西支柱穴周辺の床面上に焼土、炭の散布が著しい。南西柱穴の南に近接して、直径 80cm、深さ 20cm の皿状の土壙 S K 01 が検出された。底面を薄く炭・焼土の層がみられ埋土は浅黄色土である。また北壁中央の壁際にも直径 70cm、深さ 35cm の土壙がみられる。下層は浅黄色の砂質土と灰白色粘土の互層で炭を含み、上層は浅黄色土層である。いずれも貯蔵穴とみられるが、再び埋め戻されている。さらに、南壁中央壁際にも東西 64cm、南北 25cm、深さ 10cm ほどの楕円形の皿状土壙が検出されている。この土壙は竪穴廃絶時に

使用されていたとみられ、多数の炭や土器片が出土した。壁溝はみられない。

床面遺物はほとんど無いが、埋土下層の浅黄色土層から土師器の台付甕、小形丸底壺、高杯等が破片となって出土した。

**土師器台付甕** (13) 口径 18cm、胴部最大径 30cm を測る、球形の胴部を持つ甕である。口縁部はいわゆる S 字状を呈さず、直線的に広がる。外面は荒い斜めハケメ調整が施される。灰黄色を呈し、外面胴部中に煤が付く。(14) 口径 18cm。「く」字状を呈する。口縁を持つ。外面は縦ハケメ調整。黒色を呈する。(15～17) いずれも台付甕の脚台部である。底径は 9～10cm を測る。直線的に開き、端部は内側に 1cm 強折り返される。(15・16) はにぶい黄褐色、(17) にぶい橙色を呈する。

**土師器高杯** (18) 高杯の杯部の破片である、杯底部は小さい。腰部の稜ははっきりせず、口縁部にかけて大きく開く。にぶい橙色を呈する。(19) 高杯の脚部である。脚部は細く、中位が膨らむ。橙色を呈する。

**土師器丸底壺** (20) 胴部径 9.2cm と小形である。胴部は扁平で、口縁部にかけて直線的に開く。にぶい黄褐色を呈する。(21) 口径 12cm、胴部最大径 15.5cm を測る。扁平な胴部と、わずかに外反気味に立ち上がる口縁部を有する。橙色を呈する。

### 3. まとめ

#### 弥生時代

遺構は、調査区の中央を東西に連なっている「L」字および「コ」字状の溝である。いずれも埋土は浅黄色からにぶい黄色を呈する細砂質土で、炭の細片を含む。溝内からは弥生土器の壺、甕が完形ではないまでも個体ごとにまとまって出土する。にもかかわらず土器細片は全くといって散布せず、生活の場としての匂いはほとんどしない。浸食の著しい傾斜地ということもあり遺構の残存状況はかなり悪く、その性格を断定することは至難といえるが。上記のような特徴に適合するものとして方形周溝墓群の可能性が高いと判断している。おそらく SD01 と SD08、SD03、SD02、SD03、SD04 と SD09 がセットとなって少なくとも 4 基が存在したのであろう。出土した

土器は、甕と壺の底部と特徴に乏しいが、胴部下半が強く張る壺のスタイルからおおよそ弥生時代中期後葉に位置づけられる。この限定された期間に墓域として開発されたものとみられる。

もう一類は調査区の中央部に発し緩やかにカーブしながら調査区北側に続く不定形の溝であり、南の崖面から湧水や雨水が斜面を浸食してできた自然流路であると考えている。埋土は同様に細砂質土であり、炭の細粒とともに弥生土器細片を含んでいる。一帯が墓地として利用され一時的にしる植生が失われたことにより急速に一帯の浸食が進み溝状の流路が形成されたとみられる。

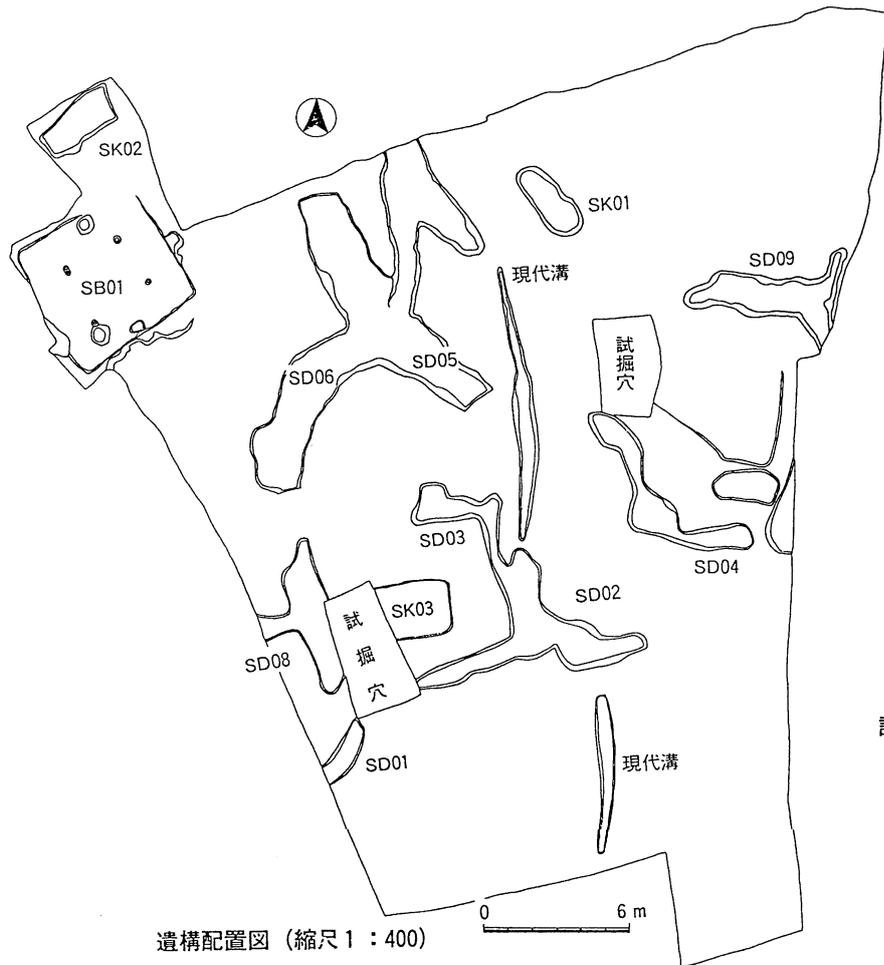
#### 古墳時代

検出された遺構は堅穴住居 1 基である。調査地の北側となる現集落下に集落が展開している可能性があり、その場合南縁部に位置することになる。背後に丘陵をひかえ午前中はほとんど日照はなく、輻射する流路から分かるように丘陵端からの地下水の滲み出しが著しく生活の場として好適地とはいえない。目前に広大な段丘面が広がっているにもかかわらず、立地として当地が選ばれたこととは背後の丘陵上に活発に首長墓が営まれ始めることとの関連を考えねばならないのだろうか。

出土遺物は土師器のみで須恵器は全く伴わない。しかし、出土した土師器をみると台付き甕の S 字口縁は退化傾向を示し 1 単位のナデで形成され、小形壺の胴部は扁平化が進んで口縁部の径も胴部最大径よりやや小振りになるなど、古墳時代後期の土師器への移行段階にあることを示す。周辺の遺跡では安楽川上流域の亀山市地藏僧遺跡の S B 22 がこの段階の良好なセットを持っている。報告書(倉田 1978)では須恵器出現前とされるが、いわゆる初期須恵器の段階に平行するものと考えられる。堅穴住居はカマドを伴っていない、当地における一般集落でのカマドの普及は須恵器編年の T K 23 形式段階、5 世紀の後半～末葉であり、この堅穴住居がこの時期に先行することを裏付ける。(藤原秀樹)

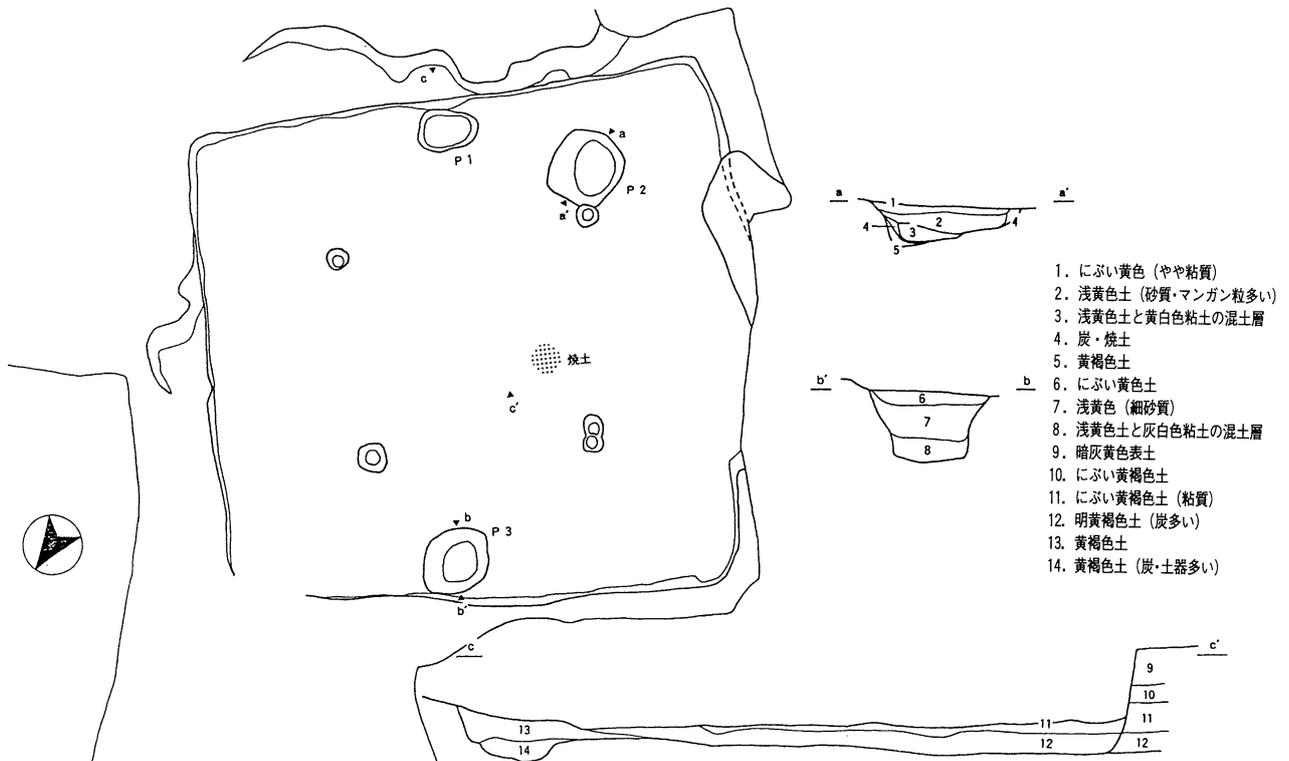
#### 【参考文献】

倉田直純『地藏僧遺跡』亀山市教育委員会 1978



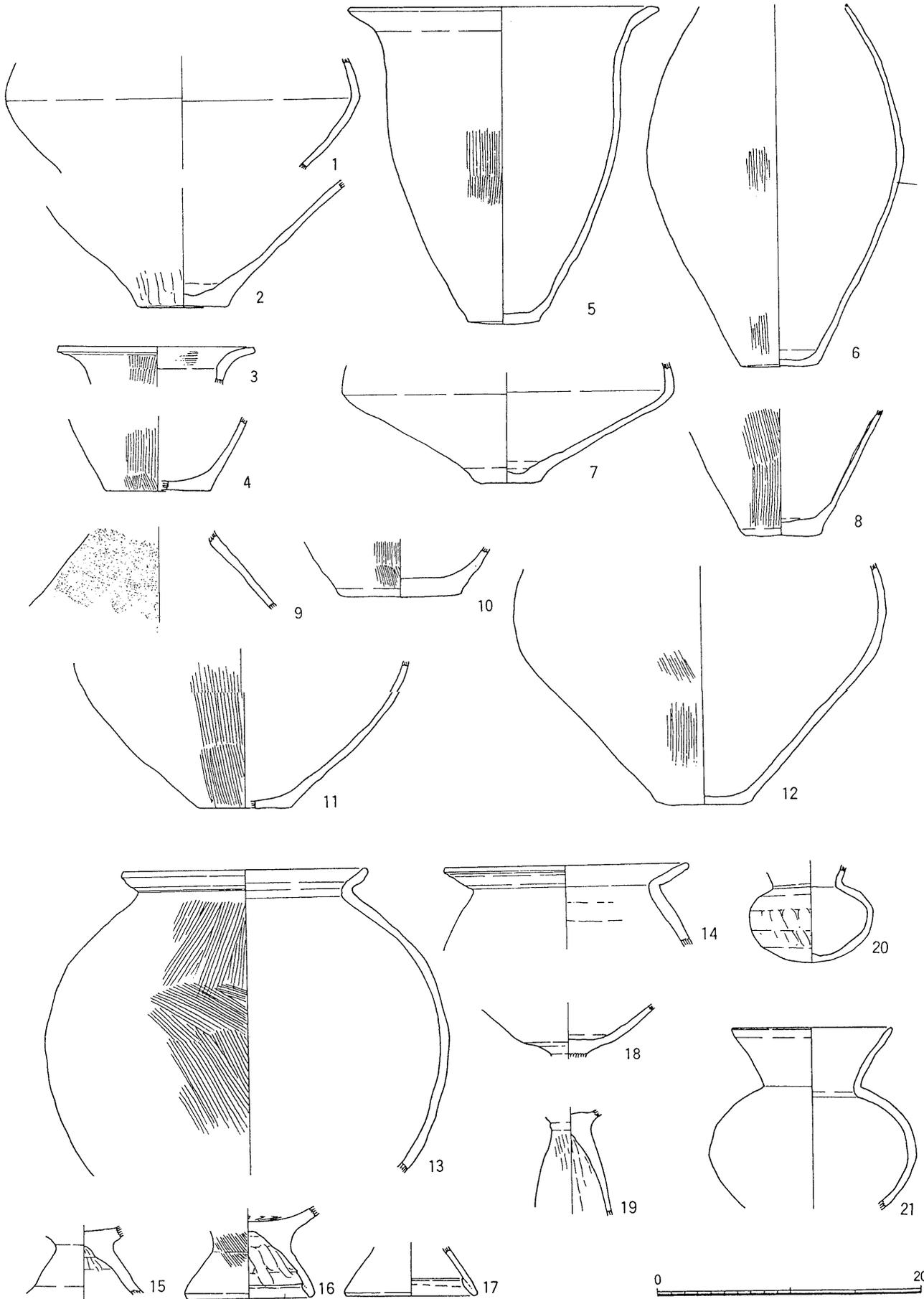
調査区位置図 (縮尺 1 : 4,000)

遺構配置図 (縮尺 1 : 400)



1. にぶい黄色 (やや粘質)
2. 浅黄色土 (砂質・マンガング多い)
3. 浅黄色土と灰白色粘土の混土層
4. 炭・焼土
5. 黄褐色土
6. にぶい黄色土
7. 浅黄色 (細砂質)
8. 浅黄色土と灰白色粘土の混土層
9. 暗灰黄色表土
10. にぶい黄褐色土
11. にぶい黄褐色土 (粘質)
12. 明黄褐色土 (炭多い)
13. 黄褐色土
14. 黄褐色土 (炭・土器多い)

竪穴住居SB01実測図 (縮尺 平面 1 : 80, 断面 1 : 40)





上部調査区全景（北から）



SD 01・03・08, SK 03(北から)



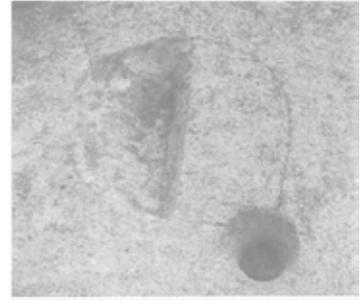
下部調査区全景（西から）



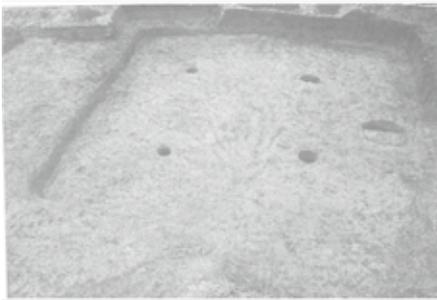
SD 05・06, SK 01(南から)



SB 01 セクション



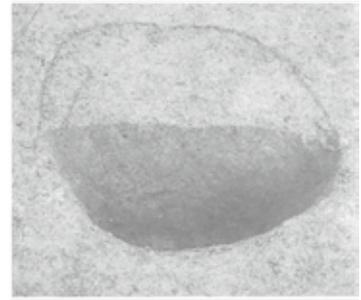
SB 01 p2



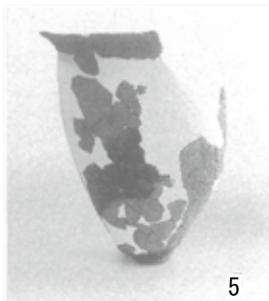
SB 01 (東から)



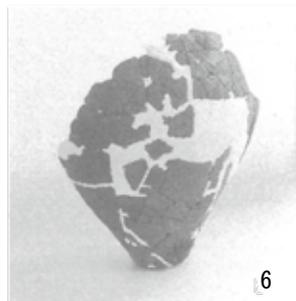
SB 01 (西から)



SB 01 p3



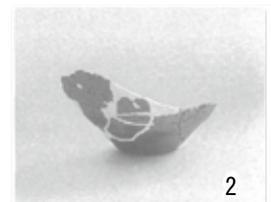
5



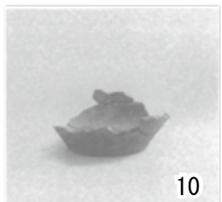
6



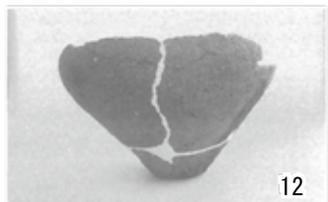
11



2



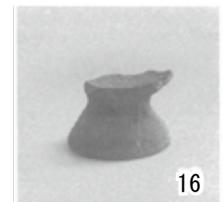
10



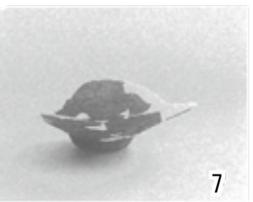
12



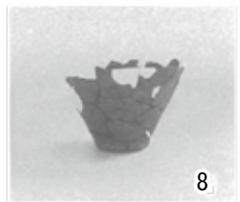
13



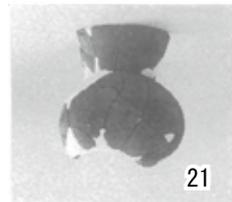
16



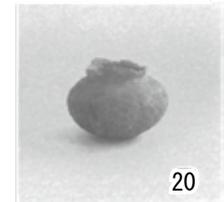
7



8



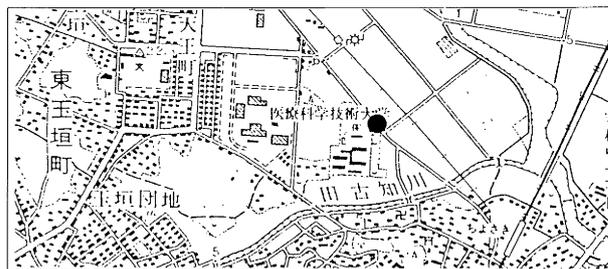
21



20

## 14. 天王遺跡（第2次）発掘調査報告

所在地 鈴鹿市岸岡町 577-4 外  
事業主体 鈴鹿市  
調査目的 歩道整備に伴う埋蔵文化財の記録保存  
調査期間 平成8年11月26日～12月19日  
調査面積 110m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 杉立正徳



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地は鈴鹿川右岸に形成された沖積平野の最南端に位置し、すぐ南には岸岡山丘陵が迫っている。（詳しくは第1次調査報告）。調査地は東西に分断されていたため、便宜上東側をA区、西側をB区として調査に入った。調査区内の基本層序は第1次調査と同様に掩乱を受けている部分もあるため一定してはいないが、100～140cmの整地土、遺物包含層などを除去した後に現れる明黄褐色粘質土（地山）の上面において遺構検出を行った。

### 2. 遺構と遺物

A区では柱穴、溝、井戸などを検出した。溝（SD 01）からは多数の山茶碗（1～6）、山皿（7）、土師器皿（8～11）、瓦片（12～14）、土錘（15・16）などが出土している。これらの遺物から判断すると13世紀後半を中心とした年代が考えられよう。埋土の状況から見て、当時は滞水していたものと想定される。

**掘立柱建物SB 01** 調査範囲の関係上一部のみを検出したにとどまったが、少なくとも東西に5間分の建物が想定されそうである。検出した範囲では一つの柱穴を除いて柱痕は確認出来なかったが、柱の掘り方は一辺約60cmの方形を呈している。柱穴の埋土から知多式製塩土器（17）の脚部が出土している。

**井戸SE 01** 長径1.2m、深さについては湧き水のために完掘出来なかったが、1m以上を測る。埋土の状況は粘質土とシルト質土が交互に堆積している。土錘（18）、土師器片、須恵器片が出土した。

B区では溝、井戸、柱穴などを検出した。

**井戸SE 02** 出土遺物（19～22）から判断して弥生時代後期から古墳時代にかけての時代幅が考えられる。長径1.8m、深さについては湧き水のために完掘出来なかったが、1.8m以上を測る。

**溝SD 09** 須恵器の蓋（23）、高坏（24）、はそう（25）、瓦片（26）などが出土している。これらの遺物から判断すると7世紀の中頃から後半の時期が考えられよう。

**山茶碗（1～6）** 直線的な体部を持つもので、底部には糸切り痕が明瞭に残る。高台が既に剥がれてしまったものもある。口縁部は角張り気味で、外面に浅い凹みが巡るものもある（3～6）。13世紀後半の年代が与えられるが、2はさらに古い様相を示している。

**山皿（7）** 体部は直線的に開いており、上半はやや外反気味である。

**土師器皿（8～11）** いずれも体部から口縁部にかけての破片であるが、推定口径12cm代のもの（9・11）とやや大型のもの（8・10）に分けられる。体部上半部はヨコナデ調整、下半部にはユビオサエを施しているようである。

**瓦（12～14）** いずれも平瓦片で凹面には布目痕が明瞭に残り、側端部を面取りしている。青灰色を呈し、堅緻に焼成されている。

**土錘（15・16）** 15は残存長3.55cm、最大径1.5cmを測り、にぶい黄橙色を呈している。16は残存長5.8cm、最大径1.9cmを測り、暗灰黄色を呈している。

**製塩土器（17）** 脚高8.2cmを測り、坏部との接合部で剥がれたようである。知多式製塩土器の脚部と考えられるもので、奈良時代のものと思われる。

**土錘（18）** 残存長3.75cm、最大径1.8cmを測り、に

ぶい黄橙色を呈している。

**壺 (19)、台付甕 (20・21)、高坏 (22)** いずれも S E 02 から一括で出土したもので、いずれも破片での出土で胴部の形状については不明である。従って詳細については不明であるが、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものであろう。

**坏蓋 (23)** 中央が突出したつまみとかえりの付く蓋である。平坦な天井部からやや内湾気味に口縁に至り、そのまま丸く収めている。天井部は回転ヘラケズリ、それ以外をロクロナデ調整している。

**高坏 (24)** 脚部から坏部にかけての破片で、脚部はロクロナデ、坏部の上半部は回転ヘラケズリされるようである。

**はそう (25)** 胴部のみの残存で、胴部最大径 8.4cm、残存高 5.2cm を測る。胴部上面はロクロナデ、下半部はヘラケズリされており、注口はやや突出している。

**瓦 (26)** 平瓦片で凹面には布目痕が残り、側端部は面取りされている。青灰色を呈し、堅緻な焼成である。

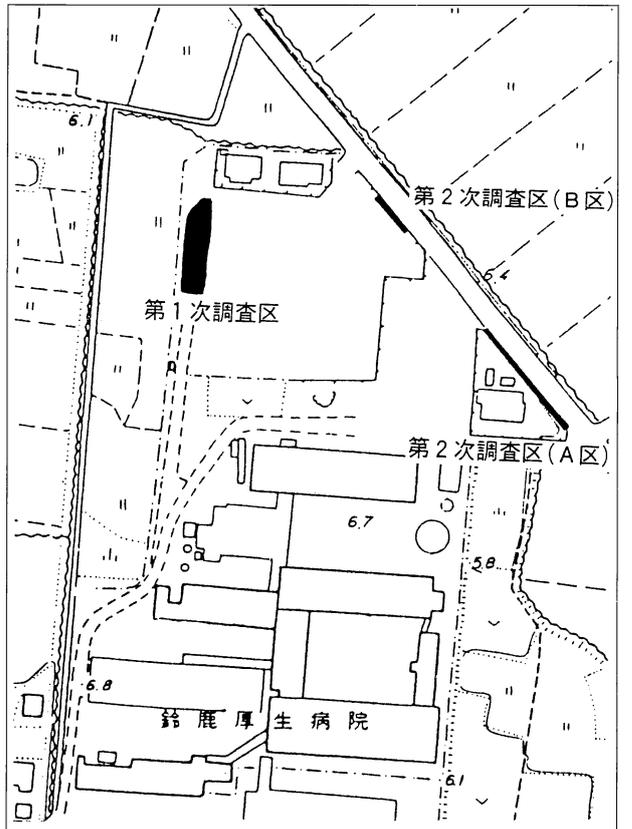
**須恵器高坏 (27・28)** いずれも脚部のみの残存で、ロクロナデされている。27 は A 区のピット 42、28 は B 区の包含層から出土している。

**土錘 (29～33)** 残存長 3.7～4.7cm、最大径 1.0～1.8cm のもの (29～32) と、残存長 6.2cm、最大径 3.6cm を測る大型のものに分けられる。29 は A 区の包含層、30 は A 区のピット 01、31 は A 区のピット 08、32 は B 区の包含層、33 は B 区の S D 14 の出土である。

### 3. まとめ

今回の調査では弥生時代に遡ると考えられる遺物が井戸 S E 02 から見つかっている。しかし、それ以外はこの時代の遺構は検出されていない。調査区の北方に位置し、過去の調査において弥生時代の竪穴住居群が検出されている深田遺跡、双ツ塚遺跡との関連に注意を払う必要があるようである。また、7世紀後半に比定される須恵器やこれに伴う瓦の出土は、第1次調査の結果や過去の周辺での採集資料と合わせて、白鳳時代の寺院の存在を強く意識させるものといえよう。さらに S B 01 や第1次調査で見つかった掘立柱建物も、方位はやや異にするものの、

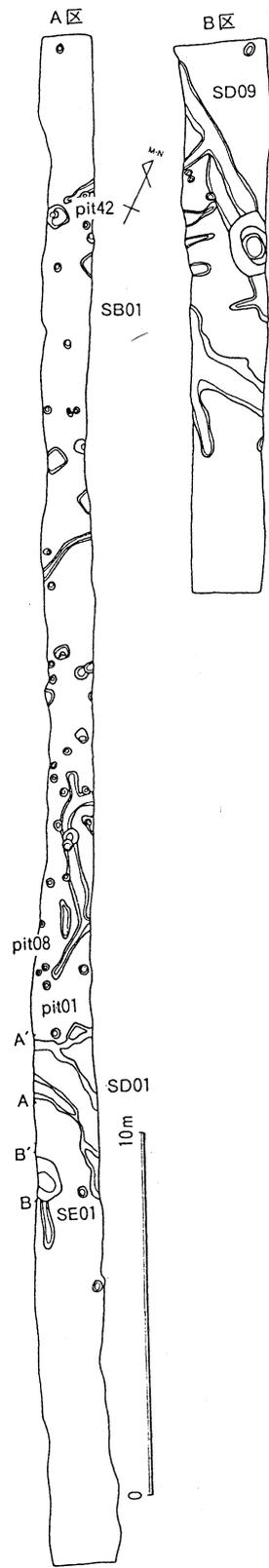
7、8世紀代の年代が想定される。知多式製塩土器の出土に見られるように、これらの開発の基盤に伊勢湾を媒介とした交易活動が大きな比重を占めていた可能性が考えられる。(杉立正徳)



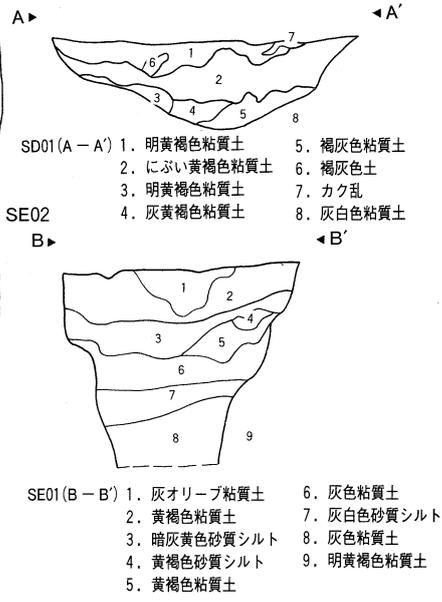
調査区位置図 (1:2,500) 0 100m



第2次調査区 (B区) から第1次調査区を望む



遺構配置図 (1 : 200)



断面図 (1 : 40) 0 1 m



A区全景 (北から)



S B 01 (北から)



S D 01 遺物出土状況 (東から)



S E 01・S D 01 (南から)



作業風景



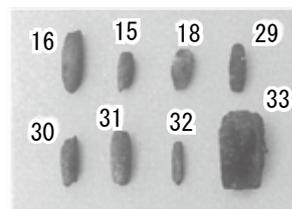
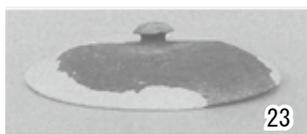
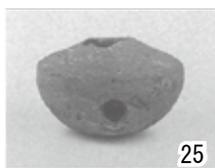
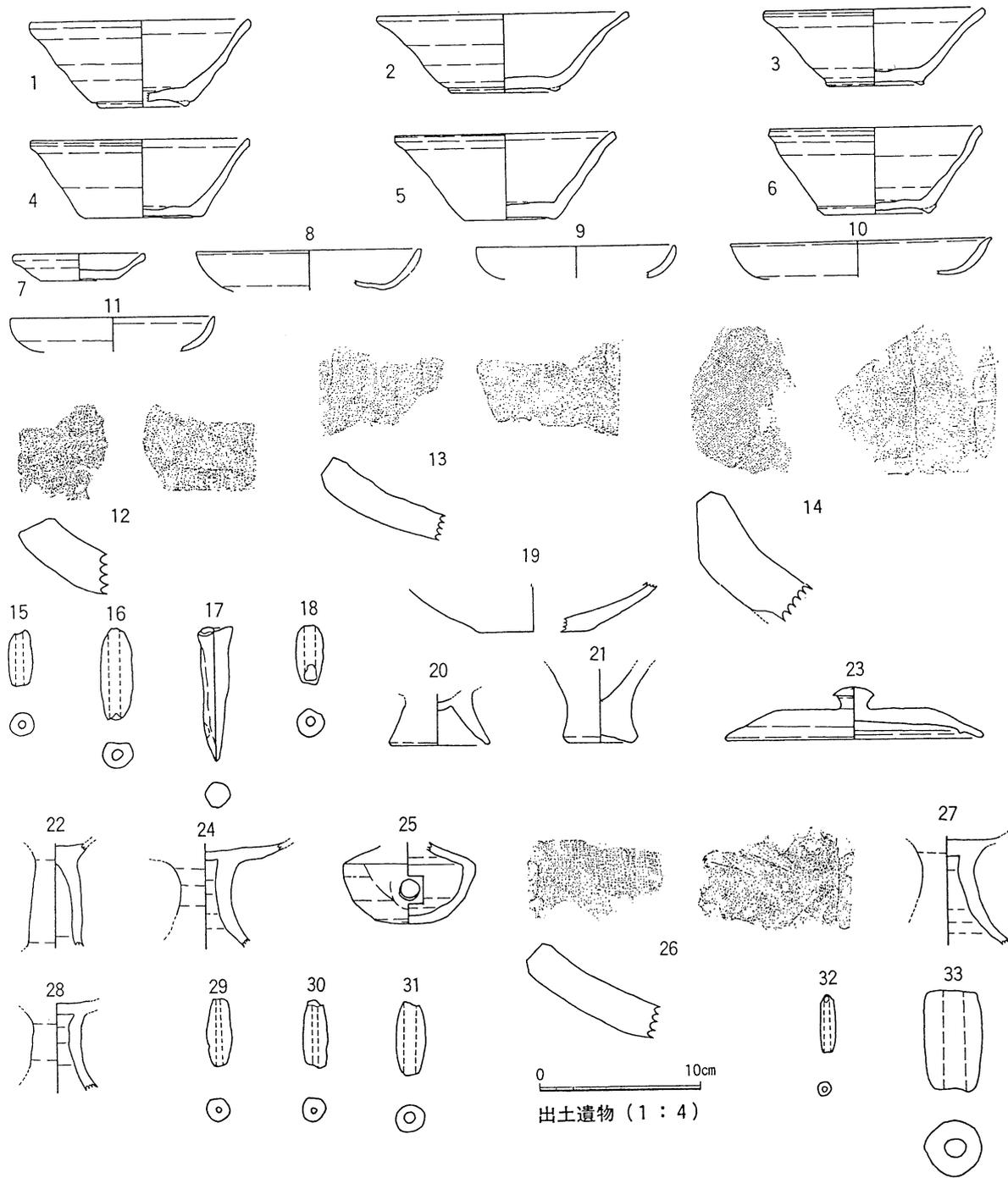
B区全景 (北から)



S E 02 (西から)



作業風景



出土遺物

## 15. 三宅神社遺跡（第3次）発掘調査報告

所在地 鈴鹿市国府町字中木曾田 3555

事業主体 個人

調査目的 個人住宅建設に伴う発掘調査

調査期間 平成8年12月9日

調査面積 31.8 m<sup>2</sup>

調査主体 鈴鹿市教育委員会

調査担当 新田剛・藤原秀樹



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地点は三宅神社の東北東100m、第2次調査地点の北50mに位置する。第3次調査となった今次の調査は個人住宅の建て替えに伴うもので、表層は過去の建物基礎による攪乱が著しい。遺構検出面は表土の攪乱層を30～40cm除去した灰白色シルト層上面である。

### 2. 遺構と遺物

平安後期から鎌倉時代にかけてのものと考えられる柱穴群と土壇が検出された。土壇は新旧2基が切り合うもので、柱穴を切っている。

#### 柱穴群

柱穴群は概して残りが悪く、最低部が残存するのみである。掘り方径は30～40cmで、径15cmの柱痕をとどめるものがある。建物を構成するまともは判然としない。

#### 土壇

新土壇は1.6×1.7m、旧土壇は1.7×2.3mの隅丸方形プランを呈する。埋土最低部には炭化物層がある。遺物は極めて少なく、旧土壇埋土から土師器坏(1)・土師器小皿(2)・須恵器片・灰釉陶器片などが出土した。

**土師器坏(1)** 平坦な底部をもち、口縁部はわずかに内湾する。口径113mm・高さ27mm。混入遺物と考えられる。

**土師器小皿(2)** 外面に指頭圧痕が残る。口径71mm・高さ15mm。

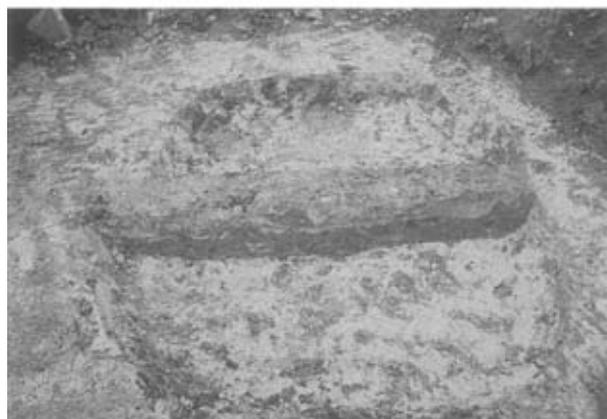
### 3. まとめ

土壇は平安末から鎌倉時代にかけての埋没年代が与えられ、柱穴群は平安後期頃のものであろう。近接する第2次調査地点では規格性の高い9世紀末から10世紀前半にかけての建物群が見つかったが、当地点ではとくに際だった点は見られない。国府の盛衰や画期を検討するうえで参考にすべき事例となった。

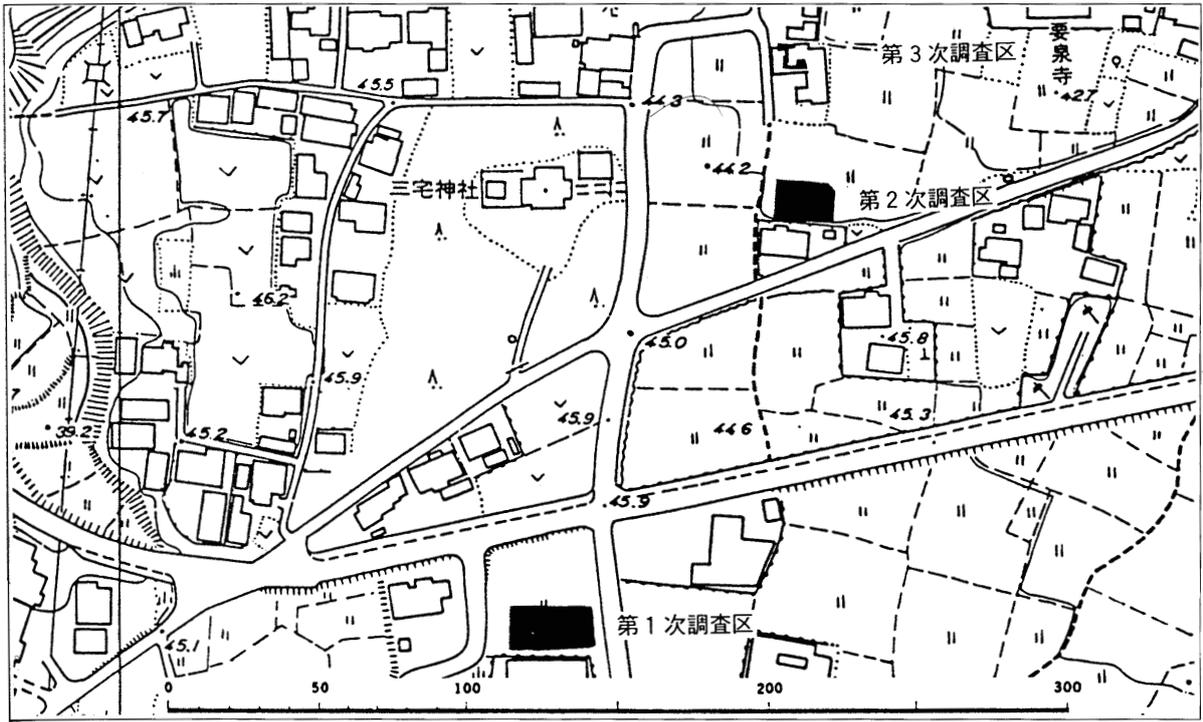
(新田剛)



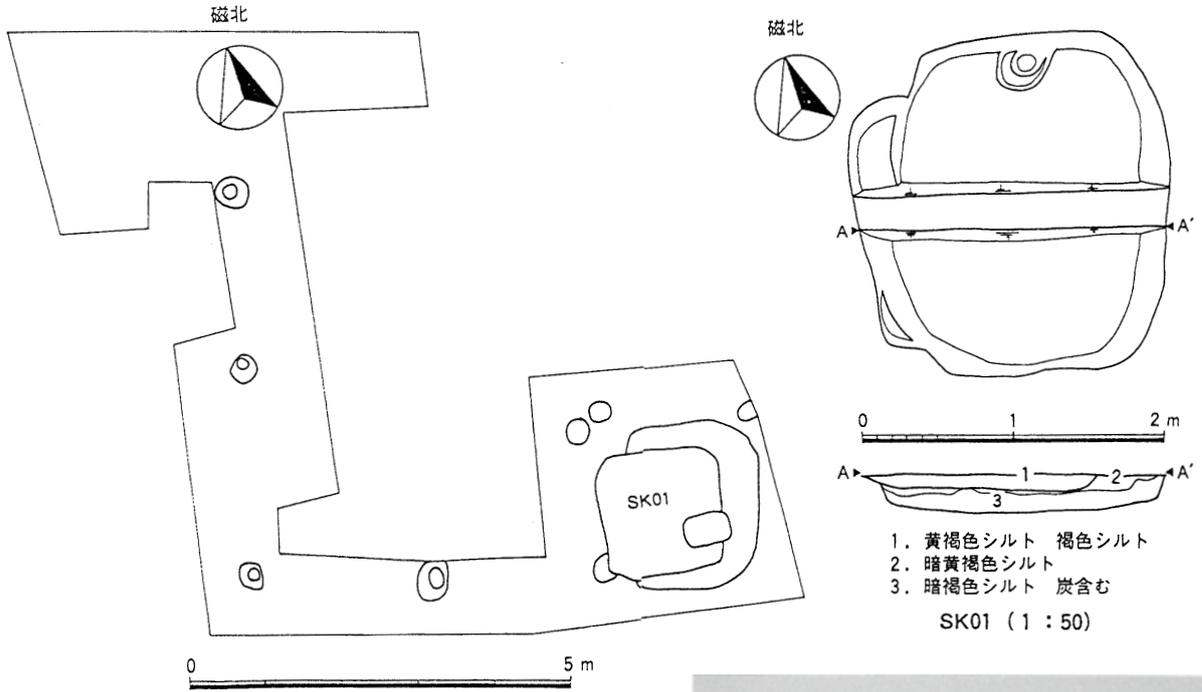
調査区 (南西から)



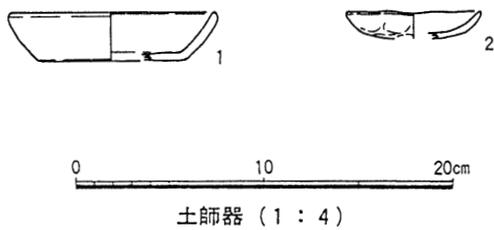
SK 01 (南から)



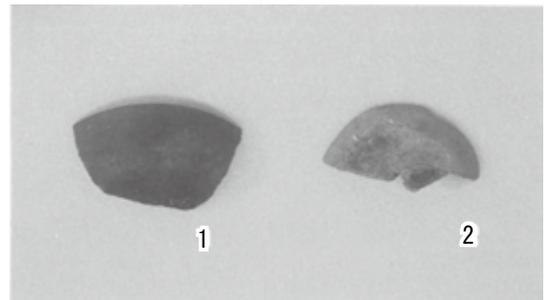
調査区位置図 (1 : 2,500)



遺構検出状況 (1 : 100)



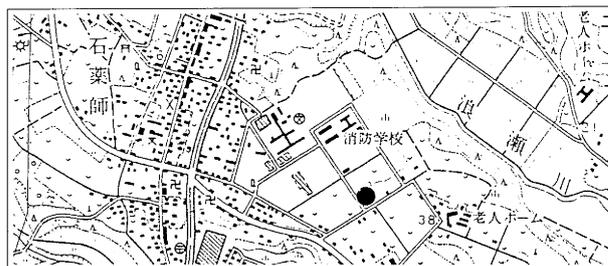
土師器 (1 : 4)



土師器

## 16. 石薬師東第76号墳発掘調査報告

所在地 鈴鹿市石薬師町 452-107  
事業主体 個人  
調査目的 農業用倉庫建築に伴う発掘調査  
調査日 平成8年12月11日  
調査面積 9 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 藤原秀樹



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

石薬師東遺跡は鈴鹿川左岸の台地上に位置し、北を浪瀬川、南を大石川に挟まれた舌状台地に位置する。戦前までは台地の全域に多数の古墳が跡をとどめていたと伝えられるが、この地に昭和17年に陸軍第一気象連隊(中部第131部隊、のち第555部隊)がおかれたことにより、全長31mの丸山1号墳をはじめほとんどの古墳が墳丘を削平された。現在は県立石薬師高校のグラウンドの片隅に前方後円墳の乗鞍古墳(全長44m)1基が残るのみである。しかし、平成5年から4年次にわたり三重県消防学校の改築工事に伴う発掘調査が継続され、方墳を主体とした50基を超える古墳周溝が発掘されている。

### 2. 遺構と遺物

調査は建設予定地の中央に北西一南東方向に幅1m、長さ3mの試掘調査区を設定して実施した。

層序は、地表から90cmの整地土層、17cmの茶褐色粘質土の旧耕作土、17cmの暗褐色土層(黒ボク)をへて橙色土の基盤層となる。基盤層の上面で遺構の検出を行ったところ、溝状の落ち込みの西側の肩を検出したため、拡張して本調査の対象とすることとした。溝は、これまでの周辺発掘の結果から見て古墳周溝の可能性が高いと判断できた。そこで、溝の規模を知るべく建築予定建物の基礎に影響を与えない範囲で拡張を開始した。ところが東側でただちに大きなコンクリート塊が出現し、さらに調査区に直交して幅約50cmのコンクリート基礎が検出された。聞くところによると、当地には戦時中気象連隊の2階建て兵舎が何棟も並列して建てられており、その基礎が残存しているものと考えられた。この基礎やコン

クリート塊は重機を用いても除去は困難であり、また基礎により遺構は掩蔽されているものと判断して調査区の拡張を断念した。

溝の西肩は北から約35°東に振れる直線状であり、底までの検出面からの深さは21.5cmで、幅は不明である。溝は旧表土とした暗褐色土を切って掘り込まれており、埋土は均密な暗茶褐色土(黒ボク)の単純な堆積である。埋土を掘り込んで植えられたコンクリート基礎はほぼ溝底面のレベルに及んでいる。溝の底部は平坦で断面は皿状を呈する。埋土内からは完全に破碎され散乱した状態で土師器片が出土した。

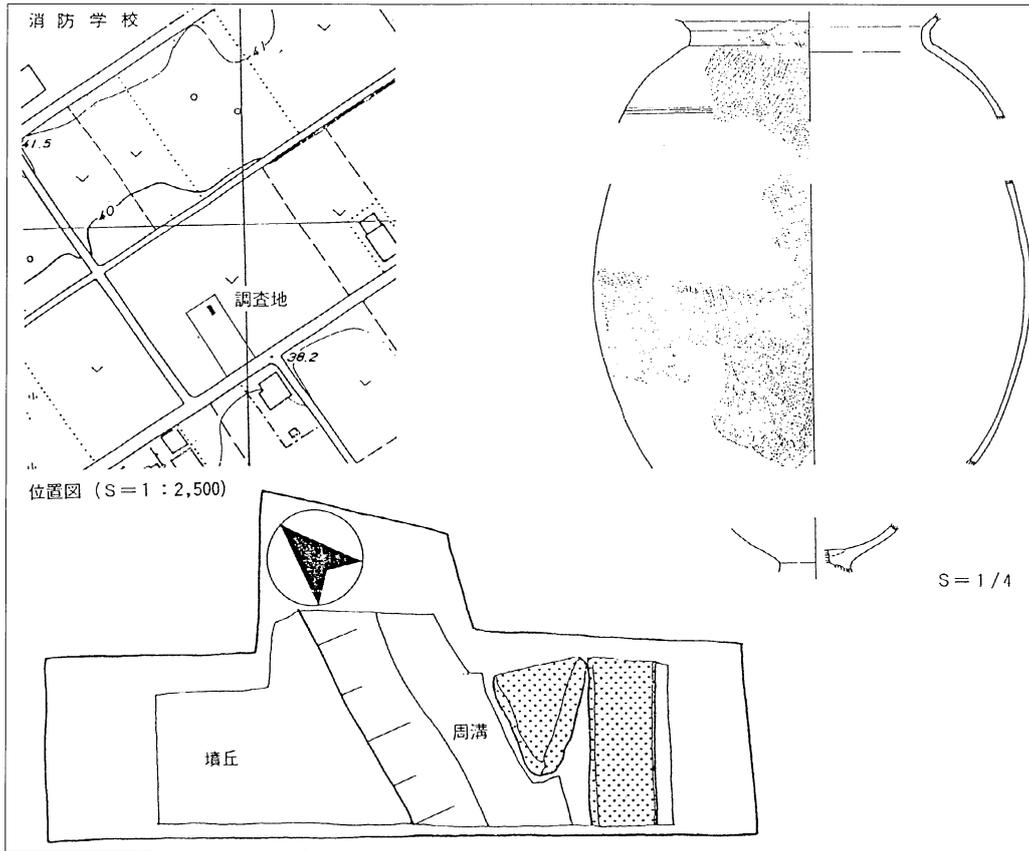
**土師器台付甕(1)～(3)** 出土した破片は全て、胎土や色調から同一個体の破片と見られるが、全体を復原するには至らなかった。(1)は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁端は欠く。推定口径は18cm。頸部は一旦直立したのち外反し口縁部に至る。肩部は目の粗い原体による左下がりの強い斜めハケメ調整が見られ、肩の部分に横方向の2条の沈線がみられるが、断片のため全周するか部分的な加飾かは判断できない。にぶい黄色を呈する。(2)は胴部破片で、推定最大径29cm、肩から胴にかけての張りは顕著ではない。左上がりに一気に施される長い斜めハケメ調整が見られる。内面は丁寧に横ナデ調整される。上部はにぶい黄色、過半部は橙色を呈し、過半部外面には煤が付着する。(3)は脚部破片である。ハケメ調整は脚部付近まで及ばない。にぶい橙色を呈する。

### 3. まとめ

今回検出した溝は、その形状と台付甕の出土から

古墳周溝の可能性が高いと判断し、仮に石薬師東76号墳と命名した。周溝の西肩は直線的であるため、墳形は方墳であり、墳丘は溝より西側に存在すると判断される。すると基盤層上に堆積した暗褐色土層（黒ボク）は古墳墳丘基底下の旧表土層となる。限定された調査区内での調査のため規模等は不明である。出土した台付甕は細片と化し磨滅も著しいため、

墳丘上に置かれたものが破損し、墳丘の浸食と共に流入したと考えられる。また、年代の手がかりとなる口縁端が失われているが、肩の張りに乏しい長胴の形態から須恵器を併出する段階のものと考えられるため、石薬師東76号墳も他の石薬師東古墳群内の各小方墳と同様、5世紀後半から6世紀前半の範囲の中で位置づけられよう。（藤原秀樹）



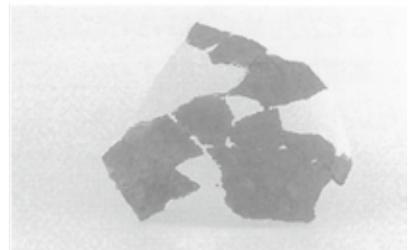
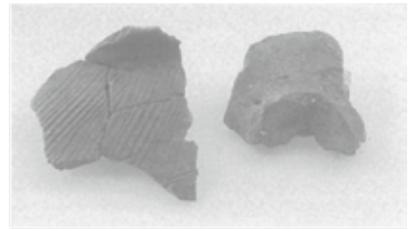
遺構実測図 (S=1:150)



全景 (西から)



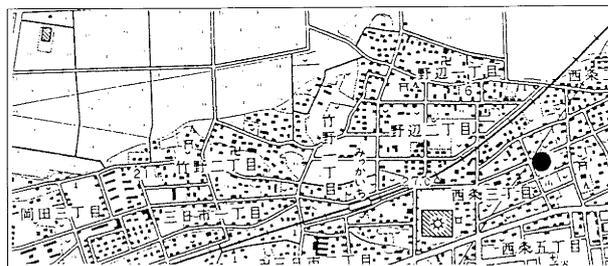
周溝 (南から)



出土土師器

## 17. 狐穴遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市西条3丁目1137-1  
事業主体 有限会社飯田商事  
調査目的 宅地造成に伴う埋蔵文化財の記録保存  
調査期間 平成8年12月19日～平成9年1月14日  
調査面積 360㎡  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 杉立正徳、新田剛



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

調査地は鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置する。調査区は北から南に向けて緩やかに傾斜しており、その比高差は約50cmを測る。調査区内の基本層序は第Ⅰ層が約20cmのクロボク土、第Ⅱ層が黄褐色を呈する地山となる。但し、南にいくにつれて第Ⅰ層と第Ⅱ層の間に黒褐色を呈する層の堆積が認められる。調査区は試掘調査の結果を踏まえて開発予定地内のほぼ中央に設定し、第Ⅱ層の上面において遺構検出を行った。その結果、古墳(狐穴古墳)1基と中世の掘立柱建物を検出した。

### 2. 調査の成果

**古墳** 周溝の内法で東西12m、南北13.6mを測るやや南北に長い円墳である。調査区全体が後世にかなり削平を受けているために、遺構の残り具合は良好と言えるものではなかったが、それでも玄室、前溝、墓道、周溝を検出した。主体部は南北軸から約20度東に向けて築かれていた横穴式石室と考えられるが、石室に使用されていた石材は既に抜き取られており、その抜き取り痕が検出された。玄室の長さ、高さについては不明であるが、長さ2.4m、幅約1mを測る。また、袖形態については抜き取り痕から判断すると左片袖式であった可能性が高いと考えられる。墓道は石室の前面から南に向かい、西に折れ、さらに南に向かって終息している。総延長18.5mを測る。長さについては不明であるが、高さについては最も深い所で検出面から60cmを測る。周溝については底部にかなりの起伏が見られるが、最も幅の広い所で4m、最も深い所で30cmを測る。出土遺物は墓道から須恵器の坏が2点(①・②)出土している。

**掘立柱建物** SB01は4間×4間の総柱建物であり、棟方位は正方位を示す。柱間にはバラッキが見られるが、東西筋は192～224cm、南北筋は176～192cmを測る。柱穴の幾つかからは山茶碗(③)、土師器皿(④)が出土している。これらの遺物から判断してこの建物は12世紀後半から13世紀前半の年代が考えられる。

**須恵器坏①** 口径10.2cm、器高3.9cmを測る。底部はやや丸みを持ち、体部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収めている。底部は回転ヘラケズリ、体部にはロクロナデ調整を施している。

**須恵器坏②** 口径10.6cm、器高3.7cmを測る。底部から体部にかけては丸みを持ち、口縁部はやや外反気味で、端部を丸く収めている。底部はヘラ切りの後にナデ調整を行い、口縁部にはロクロナデ調整を施している。

**山茶碗③** 口径15.2cm、器高4.8cmを測る。器高は低く扁平で、ややつぶれ気味の高台を有する。底部の外面に墨書痕が認められる。

**土師器皿④** 口径13.2cm、器高2.8cmを測る。ナデ調整された底部は持ち上げられており、口縁部が強くヨコナデされることにより端部はやや外反している。

### 3. まとめ

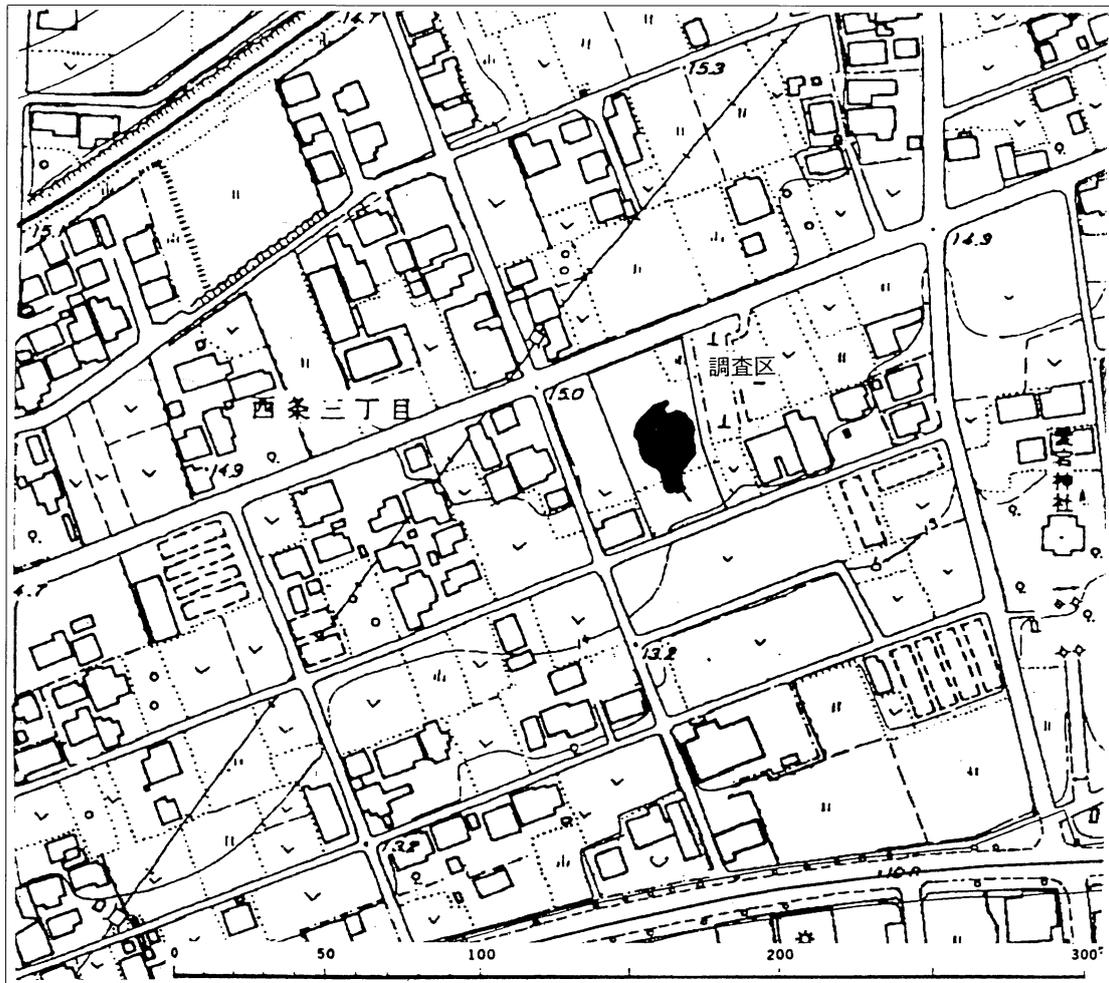
今回の調査では小型の横穴式石室を伴う円墳を検出することが出来た。この古墳では墓道と考えられる溝状の遺構が検出されたが、北勢地域では過去の調査でもこのような墓道と考えられる溝状の遺構の発見例は幾つか報告されている。今回検出された墓

道は途中で屈曲しているが、このように途中で屈曲する墓道の検出例としては四日市市北小松町の北小松3号墳が挙げられる。しかし、過去の発見例の多くは直線的に伸びるものであり、今回のように屈曲するものは珍しいといえよう、あるいは隣接する古墳を避けた結果とも考えられるが、掘削工事の立ち会いにおいては古墳らしき痕跡は見いだせなかった。また、保子里18号墳、深溝狐塚古墳、北野古墳と過去の鈴鹿市における墓道を伴う古墳の発見例は全て方墳であるのに対して、狐穴古墳は円墳である。この点も同古墳の特徴といえよう。

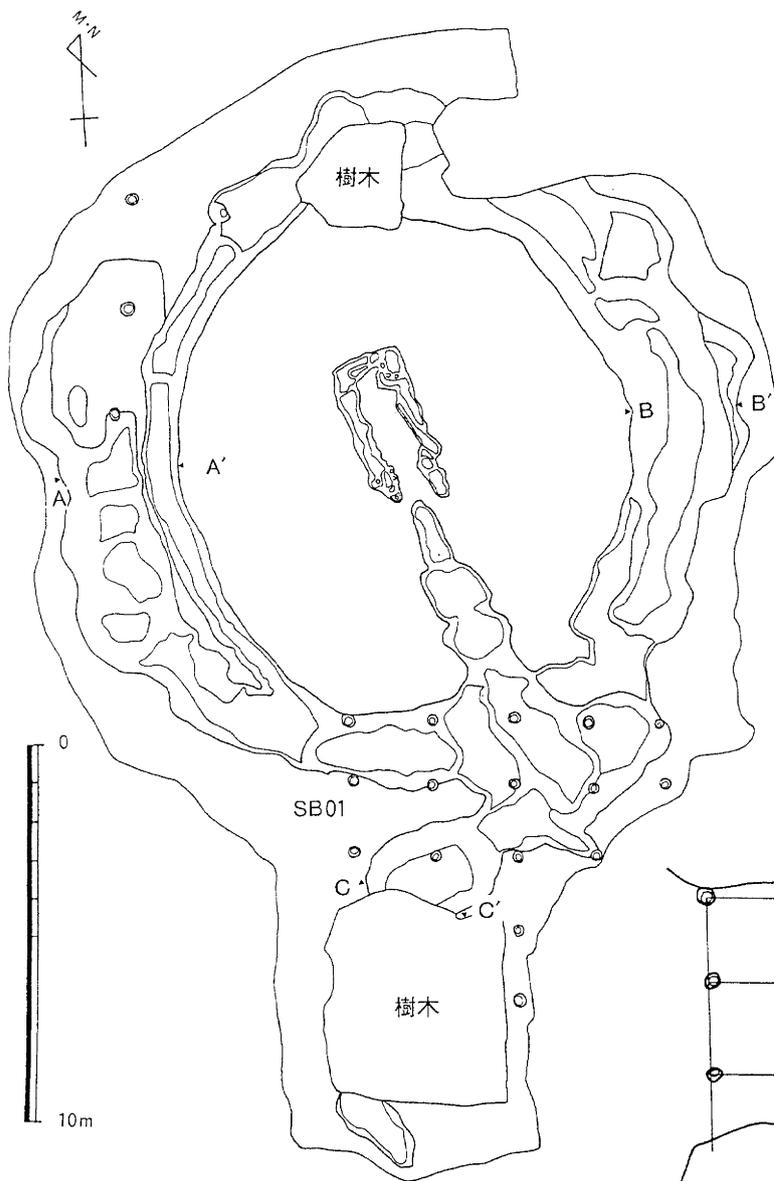
この古墳の年代であるが、墓道から出土した須恵器から判断して7世紀の中頃が考えられる。しかし、これらの須恵器はいずれも墓道の底面から浮いた状

態で出土しており、また、墓道という追葬や追善祭祀と強く関わる場所から出土していることを踏まえると、築造時期はさらに遡る可能性もある。

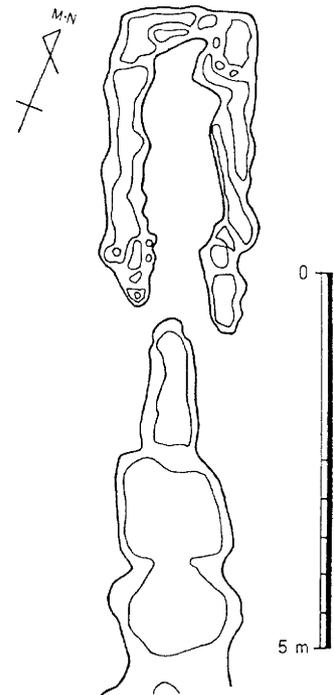
今回検出された狐穴古墳は横穴式石室を伴うものとしては鈴鹿川右岸で最も下流での発見となる。しかし、今回の調査地の字名は狐穴であり、横穴式石室の存在を想定させるものといえよう。また、調査地の近辺には聖塚、東、西白塚、荒塚など、塚を想定させる字名も多く見受けられる。このようなことから、調査地の周辺では今までは全く古墳の存在は確認されてはいなかったものの、かつては今回の調査で確認されたものと同じような横穴式石室を主体とした小型の古墳が存在していたものと考えられる。(杉立正徳)



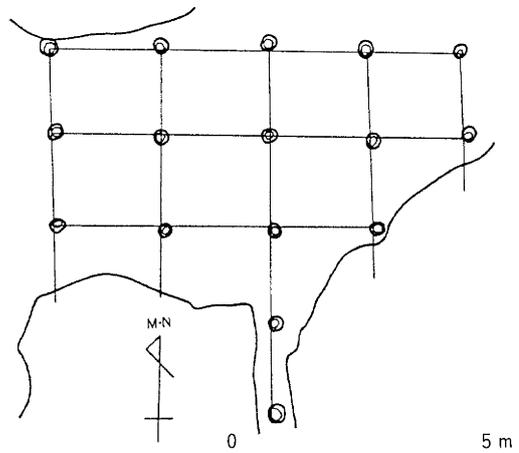
調査区位置図 (1:2,500)



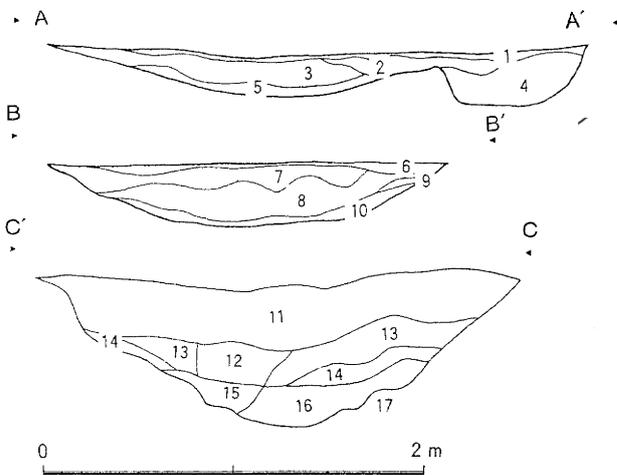
遺構配置図 (1 : 200)



主体部 (1 : 100)

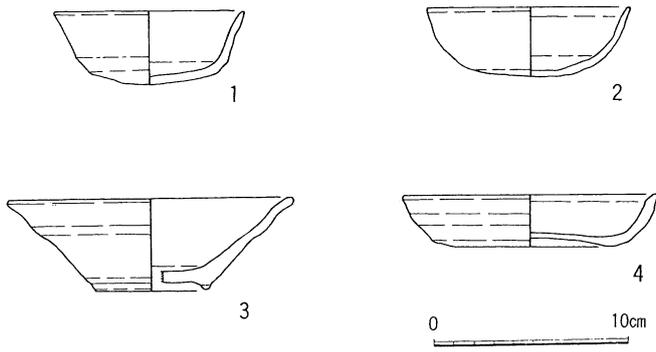


掘立柱建物 SB 01 (1 : 150)

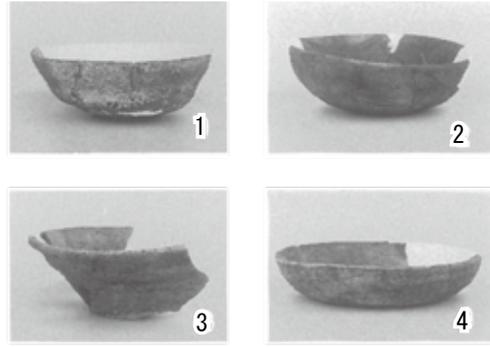


断面図 (1 : 40)

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. 黒色粘質シルト     | 9. オリーブ黒色粘質シルト  |
| 2. 黒褐色粘質シルト    | 10. 灰オリーブ色粘質シルト |
| 3. オリーブ黒色粘質シルト | 11. 黒褐色粘質シルト    |
| 4. 黒色粘質シルト     | 12. 黒色土         |
| 5. 灰オリーブ色粘質シルト | 13. 黒色粘質シルト     |
| 6. 黒色粘質シルト     | 14. 黄灰色粘質シルト    |
| 7. 黒色粘質シルト     | 15. 暗灰黄色粘質シルト   |
| 8. オリーブ黒色粘質シルト | 16. 黄褐色粘質シルト    |
|                | 17. 黄色粘質土       |



出土遺物 (1 : 4)



出土遺物



古墳検出状況 (南から)



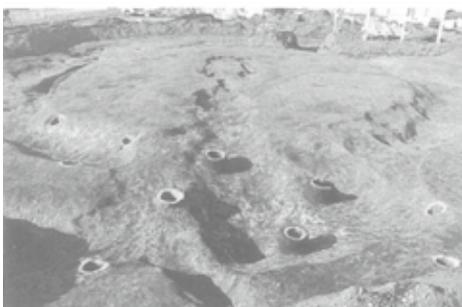
古墳 (北から)



主体部 (北から)



主体部 (東から)



主体部 (南から)



SB 01 (北から)

## 18. 富士遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市平野町字尼ノ橋 1151-4  
事業主体 高岡工業株式会社  
調査目的 共同住宅建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成9年1月27日～2月1日  
調査面積 112.8 m<sup>2</sup>  
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会  
調査担当 新田 剛・岡田雅幸・藤原秀樹・杉立正徳



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

鈴鹿川右岸の段丘上に位置する。山林内には開墾を免れた八百姫古墳群が段丘崖に沿って残存する。当遺跡は弥生時代から鎌倉時代までの埋蔵文化財包蔵地として周知されているが、古墳群を含めこれまで発掘調査が行われたことは無い。

今回の開発に伴う範囲確認調査で周溝状遺構が検出されたため、八百姫古墳群の一つであるという想定のもと記録保存のための発掘調査を実施した。

遺構検出面はクロボクを主体とした耕作土を26～47cm除去した黄褐色砂質シルト層上面である。

### 2. 遺構と遺物

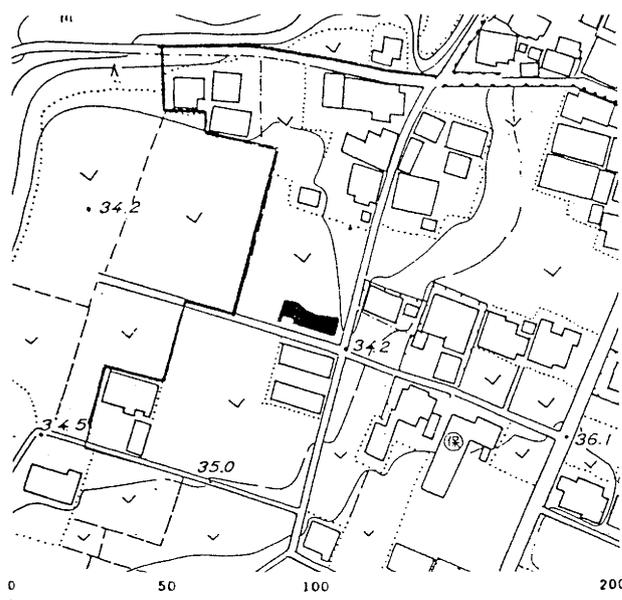
調査の結果、試掘調査で検出された周溝状遺構は弥生時代中期の方形周溝墓(SX01)であることが確認された。その他、中世の区画溝が2条検出された。

**方形周溝墓SX01** 検出されたのは北東部の1辺のみで、他の3辺を含む大部分は調査区外である。軸方向は磁方位でN44°Wである。北東辺の周溝は最大幅2.9m・深さ25cmである。北隅と思われる部分は明確に途切れ、いわゆる陸橋状を為す。東隅は1.1mまで幅を減じるが、途切れることは無い。内側縁は明瞭に直線を為し、外側縁は緩い内湾曲線を描く。周溝の埋土はクロボクを主体としたもので、墳丘部側から黄褐色土を含む層が流れ込む。埋土中には遺物は非常に少なく、風化の著しい弥生土器片が少量出土したのみである。出土位置に顕著な特徴は認められず、層位は上層から中程にかけてであった。したがって原位置を保つ遺物は皆無であると判

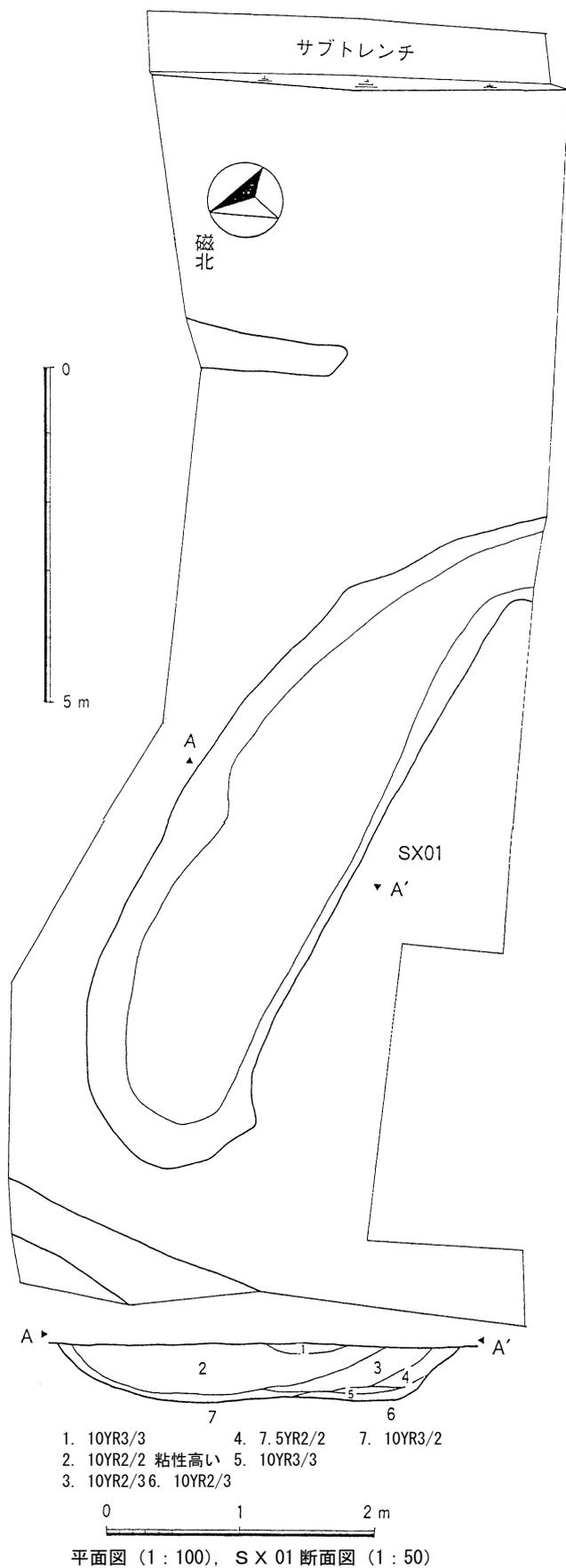
断され、地山層に由来する黄褐色土混じりの盛土等とともに墳丘側から流入したものと考えられる。

### 3. まとめ

方形周溝墓SX01は大部分が調査区外であるため全体規模は不明であるが、北隅及び東隅部分の状況から墳丘部の一辺が10m程度と推定される。当周溝墓の築造時期についての推定は判断材料が乏しいため極めて困難である。出土土器片や遺構の形態的特徴から弥生中期中葉を遡ることは無いが、中期後葉から後期前葉までの中で特定することは難しい。検出された周溝墓は1基のみであるが、調査区外にもさらに存在する可能性がある。試掘調査では当調査区の北側にトレンチを延ばしたが遺構は皆無であった。さらに周溝墓群が存在するとすれば調査区の南方から西方にかけてであろう。(新田剛)



位置図 (1:2,500)



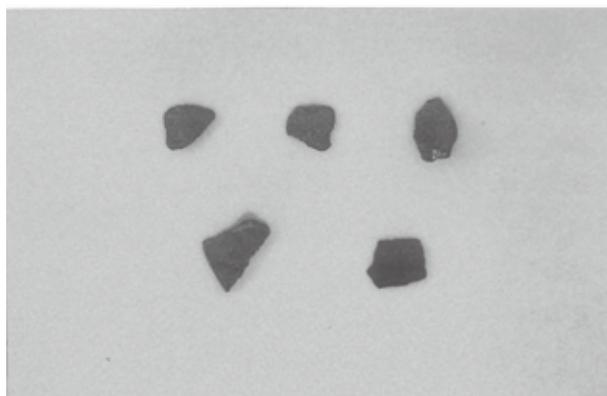
S X 01 (西から)



S X 01 (南東から)



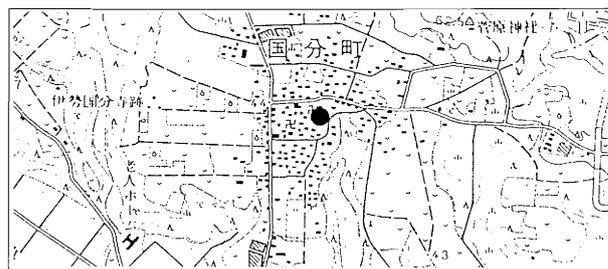
S X 01 断面 (西から)



弥生土器片

## 19. 国分遺跡発掘調査報告

所在地 鈴鹿市国分町字北條 1305  
事業主体 光福寺  
調査目的 寺院建設に伴う発掘調査  
調査期間 平成9年2月21日  
調査面積 11.5㎡  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 新田剛・辻公則



位置図 (1:25,000)

### 1. はじめに

国分尼寺推定地内に所在する花木山光福寺の改築に伴い調査を実施した。付近からは、国分僧寺に比定される史跡指定地のものとは異なる天平期の軒瓦が出土し、さらに1994年には伽藍地の北辺と考えられる溝や掘立柱列が検出されるに及んで、尼寺の所在が推定されるに到った。当調査地点の東は50m程で国分川が流れる谷に到るため、尼寺が所在するとすれば当地点はその東辺付近に位置する。光福寺境内には、伊勢国分二寺の由来を示す享和二年の碑文が残されている。

遺構検出面は掩乱層を20～30cm除去した黄褐色地山上面である。

### 2. 遺構と遺物

土壌SK01・SK02と現代溝が検出された。SK01は径1.4mの円形土壌で、深さは約50cmである。埋土は暗褐色で、焼土や炭化物を含む。小土壌ながら軒平瓦片を含む瓦類や土器類が多く、整理箱に5箱出土した。土器には土師器片・黒色土器片・灰釉陶器(1)～(7)・須恵器瓶(8)がある。

**灰釉陶器碗** (1) 直立気味の細長い高台を有し、底部には糸切り痕をとどめる。口径172mm・底径88mm・器高55mm。

**灰釉陶器皿** (2) 低い三日月高台を有する。口縁は軽く内湾し、端部は小さく外半する。口径157mm・底径77mm・器高30mm。

**灰釉陶器段皿** (3) やや内湾する三角形の高台を有し、口縁は直線的に開き、口端はわずかに外半する。口径154mm・底径80mm・器高32mm。

**灰釉陶器底部** (4～7) 碗・皿の底部。4・5は湾

曲の弱い三日月高台、6は細長い高台、7は三角形の高台。6・7には糸切り痕が残存し、4・6の底部外面には炭が付着する。底径は4が74mm、5が85mm、6が74mm、7が72mm。

**須恵器瓶** (8) 外端が接地する瓶の底部。糸切り痕が残存する。底径100mm。

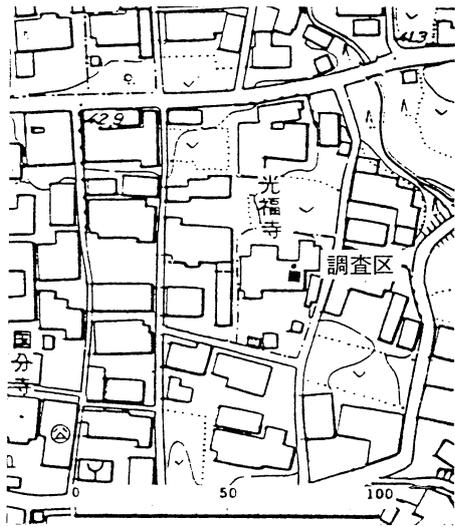
### 3. まとめ

SK01から出土した灰釉陶器は折戸53号窯式から東山72号窯式までのものである。小土壌ながらも遺物は豊富で、廃棄物処理用の土壌と考えられる。1993年の推定尼寺西側で検出された径9.2mにも及ぶ廃棄土壌は大規模な廃材処理などに伴うものと想定され、国分寺の存続形態における大きな画期を示す可能性がある。これに対して今回のような小土壌は小規模な維持修繕に伴い随時設けられたものと云えるであろうか。当地点が果たして尼寺の伽藍地に含まれかどうかは、不明のまま今後の課題として残されることとなった。

(新田剛)



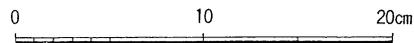
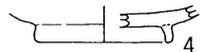
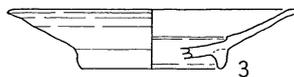
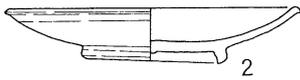
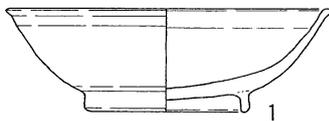
作業風景(南東から)



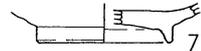
位置図 (1:2,500)



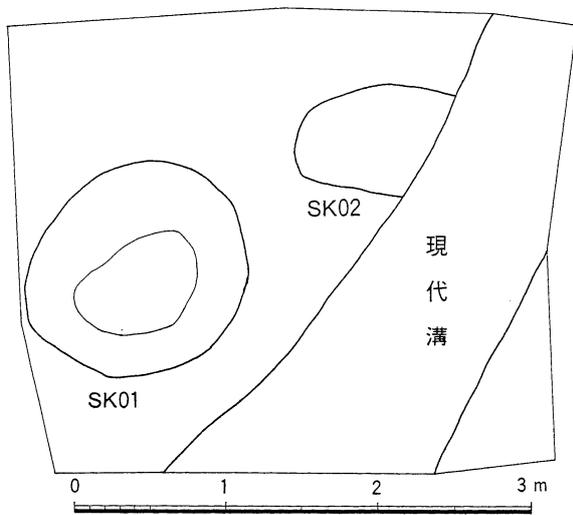
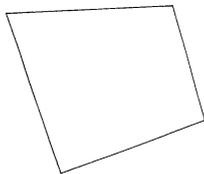
全景 (北西から)



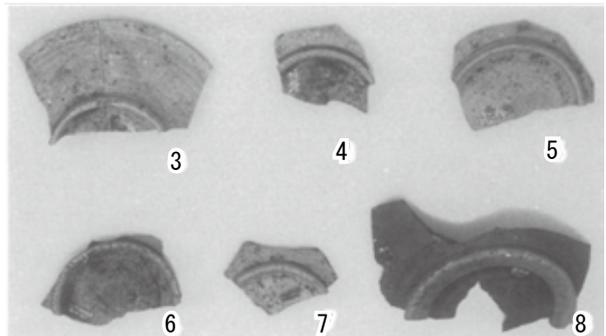
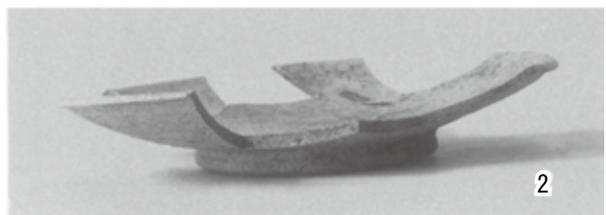
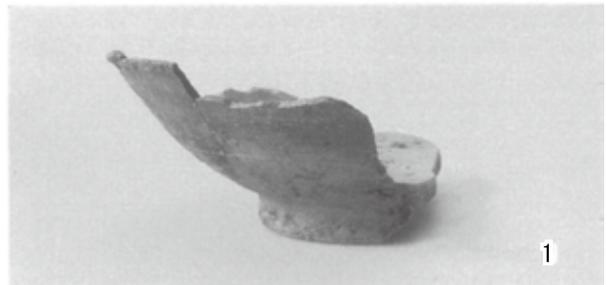
灰釉陶器・須恵器 (1:4)



磁北



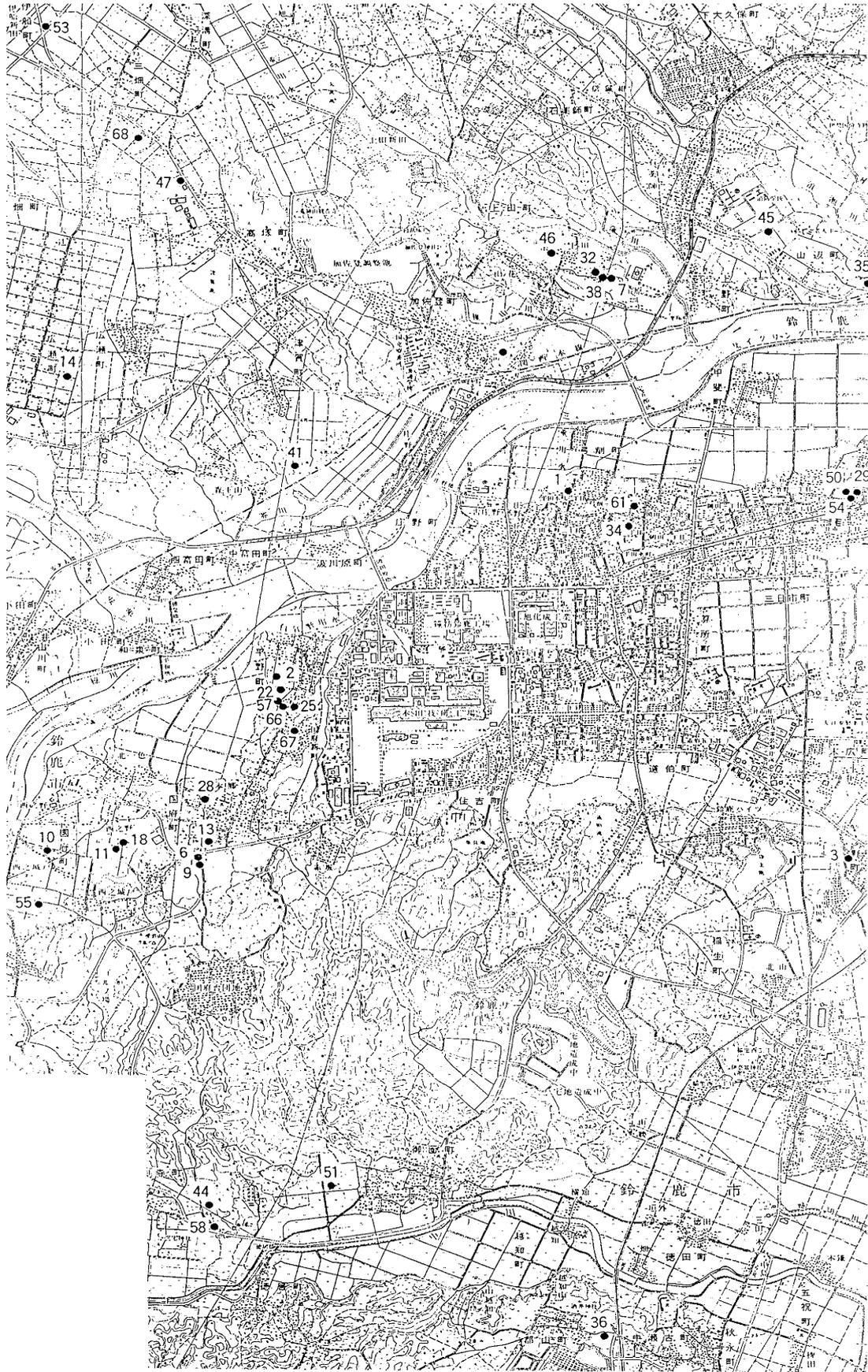
平面图 (1:50)



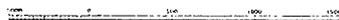
## IV . 試掘調査一覧

遺跡名	所在地	調査原因	費用負担	期間	面積	調査概要	通知番号 日付	地図 番号
平田遺跡	平田本町一丁目169外	住宅	鈴鹿市	4/10	3	溝・土師器・山茶碗	604 3/4	1
岩ヶ谷遺跡	平野町岩ヶ谷1060-1	住宅	鈴鹿市	4/22	3.5	ろくろ土師器	607 3/14	2
大新田遺跡	野町葵726	住宅	原因者	5/7	22.8	遺物・遺構なし	53 4/5	3
上箕田遺跡	上箕田一丁目2628-1外	住宅	鈴鹿市	5/14	5	弥生土器片	92 4/12	4
砂山遺跡	岸岡町砂山3096-59	住宅	鈴鹿市	5/14	5	中世陶器片	54 4/5	5
三宅神社遺跡	国府町西木曾田3694-6	小売店舗	鈴鹿市	5/14	31	(本調査実施)	71 4/8	6
山ノ原遺跡	上田町赤土290-2	住宅	鈴鹿市	5/14	3.5	土師器片	73 4/8	7
天王遺跡	岸岡町582	病院	原因者	5/24~27	100	(本調査実施)	114 4/22	8
三宅神社遺跡	国府町西木曾田3694-1	土地造成	鈴鹿市	6/4	21	土師器・須恵器	141 5/1	9
西ノ野遺跡	国府町152	住宅	鈴鹿市	6/4	5	攪乱土壌	134 5/1	10
国府A遺跡	国府町西之条1416	住宅	鈴鹿市	6/4	20	なし	135 5/1	11
北若松遺跡	若松東三丁目520-1	住宅分譲	鈴鹿市	6/7	7	中世流路	152 5/1	12
三宅神社遺跡	国府町中木曾田 <sup>4</sup>	学習塾	鈴鹿市	6/7	20	(本調査実施)	146 5/1	13
長者屋敷遺跡	広瀬町字丸内2683外	道路	鈴鹿市	6/12・13	123	(本調査実施)	49 4/30	14
須賀遺跡	須賀一丁目16	住宅	鈴鹿市	6/19	15	(本調査実施)	81 4/12	15
国分北遺跡	国分町873	住宅	鈴鹿市	6/19	8	なし	178 5/13	16
須賀遺跡	須賀一丁目1714-1・2	住宅	原因者	6/19	3	なし	211 5/13	17
国府A遺跡	国府町西之条1440-1	住宅	鈴鹿市	6/27	17	現代溝	85 4/12	18
天王遺跡	岸岡町577-4	道路	鈴鹿市	7/16~18	58.4	(本調査実施)	243 6/10	19
林崎遺跡	林崎一丁目961~963	宅地分譲	鈴鹿市	7/18	7	遺物・遺構なし	182 5/20	20
加佐登遺跡	加佐登一丁目2582-4外	住宅	鈴鹿市	7/18	9	遺物・遺構なし	179 5/13	21
岩ヶ谷遺跡	平野町岩ヶ谷1014	農業倉庫	鈴鹿市	7/19	4	土壌・土師器	265 6/12	22
国分遺跡	国分町1322	住宅	鈴鹿市	7/24	13.2	柱穴・瓦・山茶碗	298 6/20	23
(周知外)	若松北二丁目1137外	宅地開発	鈴鹿市	7/25	4	土師器・須恵器		24
平野遺跡	平野町花林1248-1外	住宅	鈴鹿市	8/6	5	土師器・須恵器	347 7/1	25
須賀遺跡	須賀一丁目49・50	住宅	鈴鹿市	8/14	6.5	土器片	324 7/10	26
国分遺跡	国分町北條1322-1	住宅	鈴鹿市	8/26	6.5	瓦・山茶碗	298 6/20	27
国府城跡	国府町1785	住宅	鈴鹿市	9/3	1	なし	367 7/29	28
竹野一丁目遺跡	竹野一丁目13・14	宅地造成	鈴鹿市	9/3	62	(本調査実施)	7/1	29
天王遺跡	岸岡町577-4	道路	鈴鹿市	9/11	18	(本調査実施)	243 6/10	30
上箕田遺跡	上箕田一丁目2592-1	住宅	鈴鹿市	9/19~24	10.5	中世柱穴・土坑	410 8/8	31
山の原遺跡	上田町海戸田163-2	住宅	事業者	9/24	1.5	なし	411 8/19	32
国分東遺跡	国分町1104	住宅	鈴鹿市	9/27	10.5	中世柱穴・溝	445 8/22	33
(周知外)	弓削二丁目455-2	宅地分譲	鈴鹿市	9/27	38	(本調査実施)		34
山辺瓦窯跡	山辺町232	神社	鈴鹿市	10/7	26.5	遺構・遺物なし	482 10/14	35
塚腰遺跡	郡山町42427	住宅	鈴鹿市	10/24	2	飛鳥時代竪穴住居	521 10/30	36

遺跡名	所在地	調査原因	費用負担	期間	面積	調査概要	通知番号 日付	地図 番号
岸岡山遺跡	岸岡町南山越2985	共同住宅	鈴鹿市	10/24	10	須恵器片	522 10/30	37
山の原遺跡	上田町292	住宅	鈴鹿市	10/24	6	遺構・遺物なし	523 10/30	38
上箕田遺跡	上箕田一丁目2607	農業倉庫	鈴鹿市	10/31	3	遺構・遺物なし	538 11/6	39
上箕田遺跡	上箕田二丁目299-1・2	住宅	鈴鹿市	11/13	2.5	土師器・近世陶器	422 8/22	40
居敷遺跡	津賀町居敷1042外	耕地整理	鈴鹿市	11/13	15	土師器・竪穴住居		41
天王遺跡	岸岡町天王3132-4外	宅地造成	事業者	11/18~21	500	(9年度本調査実施)		42
野起遺跡	白子町野起1783-1	住宅	鈴鹿市	11/21	10.5			43
長法寺遺跡	長法寺町権現746-1外	老人福祉施設	事業者	11/21~1/17	211	(9年度本調査実施)		44
石薬師東遺跡	石薬師町452-107	資材置場	鈴鹿市	11/25	9	なし		45
西浦遺跡	上田町五反田599-4	住宅	鈴鹿市	11/25	9	なし		46
南東大野遺	三畑町南東大野5141-3	店舗	鈴鹿市	11/26	13	なし		47
国分尼寺跡 国分南遺跡	国分町谷上1454 国分町南浦1393	農業関連	鈴鹿市	11/29		(9年度本調査実施)		48
(周知外)	西条三丁目1137-1	宅地造成	鈴鹿市	12/4	120	(本調査実施)		49
竹野一丁目遺跡	竹野一丁目11	住宅	鈴鹿市	12/11	7.4	なし		50
長畑遺跡	御菌町字長畑	農業倉庫	鈴鹿市	1/6	1.5	土師器・須恵器		51
岸岡山遺跡	岸岡町見当山2615外	公園	鈴鹿市	1/7~8	95	(9年度本調査実施)		52
(周知外)	伊船町北下ノ割2177-1	店舗	鈴鹿市	1/9	27	なし		53
竹野一丁目遺跡	竹野一丁目11	造成	鈴鹿市	1/16	34.7	溝・柱穴・土壌		54
西ノ野遺跡	国府町牛落4344	資材置場	鈴鹿市	1/16	103	溝・竪穴住居・土壌		55
南原永遺跡	南若松町山之腰273-3	住宅	鈴鹿市	1/17	9	なし		56
富士遺跡	平野町尼の橋1151-4	共同住宅	鈴鹿市	1/17	50	(本調査実施)		57
(周知外)	三宅町志比1408外	進入道路	鈴鹿市	1/28	7	なし		58
須賀遺跡	須賀二丁目1725-1	住宅	鈴鹿市	1/28	2	なし		59
磐城山遺跡	木田町磐城山2253	農地改良	鈴鹿市	2/3	53	竪穴住居・溝・土壌		60
岡田神社遺跡	岡田一丁目22-4	住宅	鈴鹿市	2/7	16	溝・柱穴・緑釉陶器		61
国分北遺跡	国分町東條1282-1	農業倉庫	鈴鹿市	2/7	4.5	なし		62
国分遺跡	国分町北條1305	寺院	鈴鹿市	2/21	11.5	(本調査実施)		63
石薬師東遺跡	石薬師町願入坊284-5	農業倉庫	鈴鹿市	2/21	4	現代溝		64
国分遺跡	国分町北條1315-1	住宅	鈴鹿市	2/26	4	焼土・炭		65
平野遺跡	平野町花林1159-1	住宅	鈴鹿市	2/26	6	近世溝		66
(周知外)	国府町中尾2916-1外	宅地造成	鈴鹿市	2/26	38	(本調査実施)		67
北中大野遺跡	三畑町北中大野	道路	鈴鹿市	3/10~14	225	なし		68
岸岡山2号窯	南若松町山之腰3524	住宅	鈴鹿市	3/13	4	なし		69
富士山越遺跡	国分町	住宅	鈴鹿市	2/13	75	なし		70



試掘調査地点位置図 (1)





試掘調査地点位置図 (2)  
1 : 50,000

## V. 受贈図書一覧

### 北海道

根室市博物館開設準備室  
根室市博物館開設準備室紀要第10号  
北海道埋蔵文化財センター  
調査年報7  
調査年報8

### 山形

米沢市教育委員会  
平成7年米沢市文化財年報  
一ノ坂遺跡  
遺跡詳細分布調査報告書第9集

### 宮城

多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市埋蔵文化財調査センター年報一平成6年度一  
市川橋遺跡  
涌谷町教育委員会  
黄金山産金遺跡

### 茨城

土浦市教育委員会  
寿行地古墳発掘調査報告書  
東山団地遺跡  
中新台遺跡発掘調査報告書  
上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
企画展土浦の遺跡1  
「埋蔵銭の物語」展示図録

玉里村立資料館  
玉里村立史料館報第1号  
地方王権の誕生

### 栃木

しもつけ風土記の丘資料館  
しもつけ風土記の丘資料館年報  
企画展「はにわワンダーランド」  
財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
埋蔵文化財センター年報第6号  
栃木県埋蔵文化財センター通信「やまかいどう」No.14  
国分寺町教育委員会  
史跡下野国分尼寺跡整備事業報告書  
釈迦堂遺跡一下野国分尼寺跡伽藍南西隣接地確認調査縦

### 群馬

笠懸野岩宿文化資料館  
図録「岩宿遺跡」  
古代からのメッセージ  
国指定遺跡岩宿遺跡  
パンフレット「定住が始まったムラ」  
リーフレット「岩宿人の広場」「史跡岩宿遺跡」  
リーフレット「笠懸野岩宿文化資料館」

### 群馬町教育委員会

足門古墳群  
庚申古墳群  
町内遺跡IV  
渋川市教育委員会  
半田中原・南原遺跡  
半田南原遺跡  
八木原沖田IV遺跡

### 埼玉

菖蒲町教育委員会  
菖蒲町文化財マップ  
大井町遺跡調査会  
町内遺跡群IV  
鳩山町教育委員会  
文化財だより第16号  
江南町教育委員会  
丸山遺跡  
江南町千代遺跡群発掘調査会  
千代遺跡群（縄文時代編）

### 千葉

市川市教育委員会  
平成7年度市川市内遺跡発掘調査報告  
佐原市教育委員会  
佐原市内遺跡発掘調査概報X  
市原市文化財センター  
市原市埋蔵文化財センター年報平成3年度  
市原市埋蔵文化財センター年報平成4年度  
市原市埋蔵文化財センター年報平成5年度

### 東京

東京大学文学部考古学研究室  
ライトコロ右岸遺跡  
東京大学文学部考古学研究室研究紀要第14号  
明治大学考古学博物館

明治大学博物館研究報告第1号  
港区立港郷土資料館  
地下鉄7号線白銀台・東六本木間遺跡発掘調査報告書II  
資料館だより第29・30・31号  
平成7年度港区指定文化財  
港区文化財調査集録第3集  
港区立港郷土資料館所蔵文書目録  
港郷土資料館報一14一  
港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書21  
港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書22  
港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書23

### 八王子市教育委員会

小野田遺跡発掘調査報告書  
落越遺跡  
八王子市埋蔵文化財年報平成7年度

### 国分寺市教育委員会

武蔵国分寺跡発掘調査概報XXI  
恋ヶ窪遺跡調査報告W  
武蔵国分尼寺跡IH

### 国分寺市

国分寺の歴史と自然  
府中市教育委員会  
武蔵国府関連遺跡調査報告17  
武蔵国分寺関連遺跡調査会  
武蔵国分寺関連遺跡の調査孤

### 神奈川

平塚市教育委員会  
平塚市文化財調査報告書第31集  
平塚市埋蔵文化財シリーズ28  
平塚市埋蔵文化財シリーズ29  
平塚市埋蔵文化財調査報告書第13集  
海老名市教育委員会  
海老名市の庚申塔  
海老名市埋蔵文化財年報1

### 富山

小矢部市教育委員会  
考古速報展おやべ'96

### 石川

七尾市教育委員会  
七尾市内遺跡発掘調査報告書  
小松市教育委員会  
小松市埋蔵文化財調査だより（第6号）  
古府しのまち遺跡

### 福井

武生市教育委員会  
岡本山古墳群他遺跡詳細分布調査報告書  
深草廢寺  
埋文武生ダイジェスト

### 長野

長野市教育委員会  
和田東山古墳群  
松原遺跡皿  
猪平・宮ノ下遺跡  
小島柳原遺跡群宮西遺跡  
浅川扇状地遺跡群徳間本堂原遺跡  
浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡II  
長野市埋蔵文化財センター所報No.4～6  
木曾郡町村会  
水無神社付近遺跡

### 岐阜

岐阜県文化財保護センター  
岡本山横穴墓  
岡前遺跡  
西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡  
下巾上遺跡  
牧野小山遺跡発掘調査概報  
岐阜市教育委員会  
岐阜市遺跡詳細分布調査報告書  
平成7年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書  
平成5～7年度岐阜市埋蔵文化財調査報告書  
堀田・城之内  
各務原市教育委員会  
各務寒洞窯趾群発掘調査報告書  
太田1号窯跡群発掘調査報告書  
恵那市教育委員会  
ムラの桶職人  
恵那市文化財ガイドマップ  
恵那の中山道かたりへの小箱

- 岐阜市歴史博物館  
博物館だより No. 33、34、35
- 多治見市文化財保護センター  
虎渓山1号古墳：墳発掘調査報告書  
西坂  
多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書  
多治見市埋蔵文化財センター研究紀要第2号
- 大垣市教育委員会  
昼飯大塚古墳範囲確認調査概要1  
大垣市埋蔵文化財調査概要平成6年度
- 垂井町教育委員会  
美濃国府跡発掘調査報告書1
- 静岡**
- 浜松市文化協会  
川の前遺跡  
村西遺跡  
宮竹野際遺跡4  
半田山C27号墳
- 浜松市教育委員会  
浜松市指定文化財一浜松城跡一
- 磐田市教育委員会  
平成7年度国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書  
平成7年度勾坂下原古墳群・勾坂上5遺跡発掘調査報告書  
長江崎遺跡発掘調査報告書  
大宝院庵寺遺跡第7次発掘調査報告書  
御殿・二之宮遺跡第27次発掘調査報告書  
磐田の古墳  
勾坂中遺跡発掘調査報告書1  
中山古墳群・ニヶ谷遺跡発掘調査報告書
- 静岡市立登呂博物館  
登呂の時代一むらびとたちのくらしぶり一  
静岡市立登呂博物館報2～6  
登呂の弥生人一体験して学ぶ農村の暮らし1～3  
登呂遺跡第1次調査の記録  
登呂遺跡第1次調査出土資料目録  
静岡・清水平野の弥生時代  
静岡・清水平野の古墳時代  
静岡市立登呂博物館20年のあゆみ  
発掘された駿府城跡
- 静岡市教育委員会  
ふちゅーる No. 3  
ふちゅーる No. 4  
平城遺跡・平城古墳群2
- 袋井市教育委員会  
久野城平成6・7年度発掘調査概要  
金山古墳群・金山横穴群1・1  
高尾向山遺跡II
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
10周年記念論文集  
年報 XI  
年報 XII  
研究所報 No. 53～62  
遠江国分寺跡の調査
- 新居町教育委員会  
特別史跡新居関跡遺構調査報告書1
- 愛知**
- 名古屋市見晴台考古資料館  
片山神社遺跡第2次発掘調査報告書  
幅下小学校遺跡第4次発掘調査の概要  
高蔵遺跡第10次発掘調査の概要  
高蔵遺跡第11次発掘調査の概要  
鳴海城跡発掘調査概要報告書  
鳴海城跡第2次発掘調査概要報告書  
平田城跡発掘調査報告書  
見晴台遺跡第35次発掘調査報告書  
西志賀遺跡発掘調査の概要  
雷貝塚第2次発掘調査報告書  
正木町遺跡第5次調査の概要  
正木町遺跡第6次調査の概要  
見晴台遺跡第32・33次発掘調査の記録  
名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書  
特別展「城下町大発掘」図録  
名古屋市見晴台考古資料館年報13
- 味鏡B遺跡調査会  
味鏡B遺跡発掘調査報告書
- 一宮市博物館  
博物館だより No. 21  
暮らしの道具一今と昔一  
年報(4)
- 豊田市教育委員会  
豊田市郷土資料館だより No. 15、16、17、18、19  
豊田の文化財  
豊田史料叢書『内藤家文書』
- 豊田史料叢書『廣見村史料二』  
豊田の方言  
豊田市教育委員会  
マキノ映画の時代  
梅坪遺跡血  
神明遺跡  
名古屋大学文学部  
名古屋大学文学部論集考古学抜刷第11集  
瀬戸市埋蔵文化財センター  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第4輯  
平成7年度瀬戸市埋蔵文化財センター年報  
南山大学人類学博物館  
根古谷貝塚の土器  
南山大学大学院  
1994・1995年度博士課程修士論文  
姥子古窯跡  
高塚古墳  
愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究  
豊川市教育委員会  
駒場遺跡  
豊川市内遺跡発掘調査概報V  
愛知県埋蔵文化財センター  
埋蔵文化財愛知第44・45・46・47号  
年報平成7年度  
愛知県埋蔵文化財情報11  
広坪遺跡  
烏帽子遺跡  
清洲城下町遺跡VI  
大毛沖遺跡  
北道手遺跡  
儀長正楽寺遺跡  
鳥羽城跡
- 稲沢市教育委員会  
北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書  
稲沢市内遺跡発掘調査報告書(II)
- 豊橋市教育委員会  
高井遺跡  
外神遺跡  
王郷遺跡  
豊橋の文化財一絵画・彫刻編一  
豊橋の文化財(指定文化財一覧表)  
百々池B古窯・東田遺跡(1)  
南田遺跡・瓜郷遺跡  
鎌田遺跡・西新屋古墓群  
大西貝塚(II)
- 知立市教育委員会  
小針遺跡発掘調査報告書  
内藤魯一関係文書目録  
年報平成6年度
- 春日井市教育委員会  
堀ノ内遺跡発掘調査概要報告書  
尾張古代史セミナー(1)考古学から見た壬申の乱
- 一宮町教育委員会  
舟山4号墳
- 三重**
- 三雲町町史編纂室  
ふるさと三雲今と昔
- 名張市教育委員会  
新田水路保全保護基本調査報告書  
史跡夏見庵寺跡保存整備報告書
- 四日市市  
四日市市史  
四日市市教育委員会  
四日市市文化財保護年報6  
北勢バイパス発掘調査ニュース第1・2号
- 四日市市遺跡調査会  
茶臼山古墳群発掘調査報告書  
西ヶ谷遺跡発掘調査報告書
- 上野市遺跡調査会  
小芝遺跡発掘調査報告(3次)  
西明寺遺跡発掘調査報告(6次)  
森田遺跡発掘調査報告  
追越遺跡発掘調査報告
- 津市教育委員会  
北垣内遺跡発掘調査報告  
藤堂光訓書簡  
津市民文化第24号  
津市埋蔵文化財センター  
埋文センターニュース第3・4号
- 斎宮歴史博物館  
史跡斎宮跡平成4年度発掘調査概報  
史跡斎宮跡平成5年度発掘調査概報  
史跡斎宮跡平成6年度発掘調査概報

史跡齋宮跡県道南藤原・竹川線発掘調査報告書  
齋宮歴史博物館  
平成7年度齋宮歴史博：物館年報  
歩いてみようさいくうがいどまつが  
図録齋宮・国府・国分寺一伊勢のまつりと古代の役所一  
企画展図録眠りから覚めた文字たち  
史跡齋宮跡平成7年度発掘調査概報

四日市市立博物館  
研究紀要第2号  
平成7年度年報

三重県埋蔵文化財センター  
大蔵遺跡発掘調査報告(D地区)  
昭和63年度農業基盤整備事業地域埋文調査報告一第2分冊  
研究紀要第4号  
研究紀要第5号  
次郎六郎東遺跡発掘調査報告書  
岩出地区内遺跡群発掘調査報告書  
一般国道42号線松阪多気バイパス埋文発掘調査概報M  
三重県埋蔵文化財年報7  
切山瓦窯跡・浦ノ山中世墓発掘調査報告  
センター通信みえNO.19  
第13回三重県埋蔵文化財展伊勢志摩をめぐる考古学  
一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報H  
一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報W  
一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告自然科学編1  
天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告  
石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第4次)発掘調査概報  
大古曾遺跡・山竈遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告  
近畿自動車道(久居～勢和)埋文発掘調査報告一第3分冊8  
古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告  
多気遺跡群発掘調査報告1  
奈加切遺跡発掘調査報告  
南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告  
大鼻遺跡  
朱中遺跡・朱中古墳群  
上ノ垣外遺跡  
火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡  
北野遺跡(第5次)発掘調査概報  
伊賀国府跡(第4次)発掘調査報告  
井尻遺跡発掘調査報告  
長者屋敷遺跡・峰城跡・中富田西浦遺跡  
一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告1  
曾祢崎遺跡発掘調査報告  
相可出張遺跡発掘調査報告  
敷伝遺跡(第2次)発掘調査報告

伊賀町教育委員会  
霊山山頂遺跡発掘調査報告

亀山市教育委員会  
亀山城跡  
亀山市歴史博物館  
亀山市歴史博物館年報創刊号  
亀山の米作り

上野市教育委員会  
上野市埋蔵文化財年報2

松阪市教育委員会  
黒角遺跡・口南戸遺跡発掘調査報告書

嬉野町教育委員会  
片部遺跡への招待

桑名市教育委員会  
桑部城跡第一次発掘調査報告書

玉城町教育委員会  
田丸城跡整備計画策定書  
三重県指定史跡田丸城跡発掘調査報告  
小池流田丸水練場史

青山町教育委員会  
七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・梅ヶ森遺跡発掘調査報告書

美杉村教育委員会  
美杉村遺跡分布地図

紀和町教育委員会  
国史跡赤木城跡発掘調査概要

三重県教育委員会  
三重県の近代化遺産  
特別天然記念物カモシカー保護と対策一

皇學館大学史料編纂所  
史料第146号

一志町教育委員会  
斑光寺跡  
鳥居本遺跡第三次調査報告  
高寺遺跡発掘調査報告

三重県大型化石発掘調査団  
三重県鳥羽市産恐竜化石発掘調査中間報告  
地質学雑誌口絵別刷

**滋賀**

山東町教育委員会  
山東町内文化財調査報告書X  
町内遺跡(大原氏館跡第3次・観音寺遺跡)

栗東町文化体育振興事業団  
栗東町埋蔵文化財調査1994年度年報  
栗東町埋蔵文化財調査1993・1994年度年報J  
栗東町埋蔵文化財発掘調査1995年度年報

長浜市教育委員会  
金剛寺遺跡  
長浜文化財ファイル16川崎遺跡2

大津市歴史博物館  
近江の古代を掘る

竜王町教育委員会  
竜王町内遺跡詳細分布調査報告

滋賀県立大学人間文化学部  
人間文化  
平成8年度環琵琶湖文化論実習報告書

**京都**

京都府埋蔵文化財調査研究センター  
京都府埋蔵文化財情報第59・60・61号  
第14回小さな展覧会

城陽市教育委員会  
城陽市埋蔵文化財調査報告書第30集  
城陽市埋蔵文化財調査報告書第31集

綾部町教育委員会  
綾部市資料館報平成6年度  
特別展示図録「食」「ヒミコの箱」「石」  
興隆寺大般若経の研究  
綾部市文化財調査報告第19集  
綾部市文化財調査報告第20集  
綾部市文化財調査報告第21集  
新庄遺跡  
綾部市文化財調査報告第23集  
綾部市文化財調査報告第24集  
綾部市文化財調査報告第25集  
史跡私学円山古墳整備報告

橘女子大学  
TachibanaBeing第9号

八幡市教育委員会  
ほ場整備事業地内遺跡第3次発掘調査概報  
出垣内遺跡第2次発掘調査概報  
女郎花遺跡第2次発掘調査概報

田辺町教育委員会  
田辺町遺跡地図

**大阪**

柏原市教育委員会  
安福寺横穴群(柏原市文化財ガイドシリーズ4)  
資料集大泉の鉄  
柏原市遺跡群発掘調査概報1995年度1  
柏原市遺跡群発掘調査概報1995年度IV  
平野・大泉古墳群  
高井田山古墳

高槻市教育委員会  
平成6年度高槻市文化財年報  
高槻市文化財調査概要XXII  
嶋上郡発掘調査概要20  
古曾部・芝谷遺跡  
古曾部芝谷遺跡発掘調査報告書

河内長野市教育委員会  
河内長野市文化財調査会報XII  
仁深野No.5

河内長野市遺跡調査会  
高向遺跡  
ジョウノマエ遺跡・尾崎遺跡他  
錦町北遺跡

貝塚市教育委員会  
加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要  
東遺跡発掘調査概要1  
貝塚市遺跡群発掘調査概要18  
貝塚寺内町遺跡

堺市教育委員会  
堺市文化財調査報告

大阪大学文学部  
井ノ内稲荷塚古墳  
雪野山古墳の研究

泉南市教育委員会  
仏教の受容と古代国家  
市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告  
古代の技術革新

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII  
泉南市文化財年報 No. 1  
弥生文化の成立—日本古代国家の成立を探る—  
泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII  
東大阪市文化財協会  
若江遺跡第 38 次発掘調査報告書  
宮ノ下遺跡第 1 次発掘調査報告書  
西ノ辻遺跡第 9 次発掘調査報告書  
西ノ辻遺跡第 22 次発掘調査報告書  
西ノ辻遺跡第 27 次発掘調査報告書  
西ノ辻遺跡第 30 次発掘調査報告書  
東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告  
鬼虎川遺跡第 26 次・西ノ辻遺跡第 18～20 次発掘調査

#### 兵庫

三原郡埋蔵文化財発掘調査事務所  
岩谷遺跡  
三田市教育委員会  
三田文化財情報平成 7 年度合冊号  
三田のくらし 3—はかる道具  
東家地古墳・茗荷谷古墳群第 3 号墳  
さんだ風土記 3「小野」  
おかあさんの考古学  
さんだのくらし 5 いわいの道具  
ふるさと三田第 19 集「三田の力士碑」  
妙見山麓遺跡調査会  
楠・荒田遺跡  
下上津遺跡  
加西市教育委員会  
長塚遺跡 1  
パンフレット「横田遺跡」「村前遺跡」「渡遺跡」  
パンフレット「畑町の歴史」

#### 奈良

奈良市教育委員会  
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 7 年度  
奈良市埋蔵文化財センター紀要 1995  
平城京東市推定地の調査 XIV  
奈良大学文化財学科  
平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書  
文化財学報  
奈良国立文化財研究所  
CAONews No. 78, 82～84  
大和郡山市教育委員会  
額田寺旧境内表探軒瓦調査報告  
内山瓦窯第 4 次発掘調査概要  
額田部の歴史と文化  
第 1 回こおりやま歴史フォーラム資料  
郡山の歴史 1 豊臣秀長  
桜井市埋蔵文化財センター  
大和の大王の埴輪  
御所市教育委員会  
檜原遺跡 II  
長柄遺跡第四次発掘調査報告書  
榛原町教育委員会  
榛原町郷土ボックス 6  
榛原町遺跡調査集 1  
榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1993 年度  
榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1994 年度

#### 和歌山

和歌山市教育委員会  
鳴神 IV 遺跡第 4 次発掘調査概要  
鳴神 IV 遺跡第 6 次発掘調査概要  
太田・黒田遺跡第 26 次発掘調査概要  
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 1・2

#### 鳥取

淀江町教育委員会  
上淀廃寺

#### 岡山

津山市教育委員会  
長畝山北 11 号墳  
年報津山弥生の里第 3 号  
岡山市教育委員会  
岡山市埋蔵文化財調査の概要(平成 6 年度)  
岡山理科大学蒜山研究所  
自然科学研究所研究報告第 21 号  
津島東 3 丁目遺跡第 1 地点・清水谷遺跡  
倉敷埋蔵文化財センター  
茂浦古墳群  
倉敷埋蔵文化財センター年報 2  
総社市教育委員会  
総社市埋蔵文化財調査年報 6

#### 広島

東広島市教育文化振興事業団文化財センター  
今田遺跡発掘調査報告書  
西東子遺跡発掘調査報告書  
広島大学文学部  
広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 X  
辰の口古墳  
1996 古代の塩作りシンポジウム  
府中市教育委員会  
府中市内遺跡 1  
府中市内遺跡 2

#### 山口

下関市立考古博物館  
常設展示図録  
綾羅木郷遺跡の歴史展  
下関市立考古博物館年報 1  
延行条里遺跡  
防府市教育委員会  
防府市文化財調査年報 XI  
周防国跡跡第 88・91 次発掘調査概要  
平成 5・6 年度防府市内遺跡発掘調査概要

#### 香川

国分寺町教育委員会  
特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書  
高松市教育委員会  
空港跡地遺跡(亀の町地区 1)  
空港跡地遺跡(亀の町地区 豆)  
松林遺跡  
井手東 I 遺跡  
井手東 II 遺跡  
弘福寺領讃岐国山田郡田園関係遺跡発掘調査概報 1

#### 徳島

徳島市教育委員会  
徳島市埋蔵文化財発掘調査概要  
第 16 回埋蔵文化財資料展図録

#### 愛媛

砥部町教育委員会  
麻生小学校南遺跡第 6 次調査・第 7 次調査

#### 福岡

大野城市教育委員会  
大野城市の文化財第 27 集  
大野城市の文化財第 28 集  
大野城市の文化財第 43 集  
大野城市の文化財第 45 集  
大野城市の文化財第 44 集  
大野城市の文化財第 46 集  
大宰府市教育委員会  
太宰府市の文化財第 30 集  
太宰府市の文化財第 31 集  
CD「太宰府」  
福岡市埋蔵文化財センター  
福岡市埋蔵文化財センター年報第 14・15 号  
小郡市埋蔵文化財調査センター  
一ノロ遺跡 1 地点  
三国地区遺跡群 4  
三国地区遺跡群 5  
大保西小路遺跡  
福童山の上遺跡 2・小郡正尻遺跡 2  
苅又地区遺跡群 1  
小郡正尻遺跡 3  
三国地区遺跡群 6  
三国地区遺跡群 7  
大刀洗町教育委員会  
甲条神社遺跡  
大刀洗町遺跡分布地図  
本郷盾遺跡  
下高橋上野遺跡 II  
宗像市教育委員会  
宗像の歴史散歩  
富地原森  
富地原神屋崎  
津屋崎町教育委員会  
在自遺跡群皿  
沖繩

#### 個人・出版社

国史學第 156 号  
多賀城跡発掘調査年報 1992  
鈴鹿市の軍事施設～軍都鈴鹿市の全貌～  
日本の古代遺跡 52 三重

## VI. 資料紹介

### 鈴鹿市の有茎尖頭器 (1)

新田 剛

鈴鹿川流域は、伊勢湾西岸地域において時代を問わず遺跡の密集する地域である。同じ伊勢湾西岸にあって櫛田川や宮川などの流れる南勢地域とは景観が異なり、縄紋以前の遺跡の分布にも差が見られる。このことはしばしば分布調査頻度の差として指摘される点でもある。さらに南勢地域では、これまで調査が比較的少なく、かつ大規模な開発もほとんどなかった山間部において道路建設等に伴う緊急調査がここにきて増加し、縄紋時代以前の調査が増えたことも資料的な充実につながったと云える。

鈴鹿川流域を含む北勢地域では開発が盛んな割にはまだまだ十分な遺跡の把握がなされていないことは筆者にとっても大いに反省すべき点ではある。北勢地域の景観を特徴づけるものとして第一に挙げられる急峻な山稜は扇状地を発達させ、大量の土砂を流下させ、ときには伏流水となる一見水量の乏しい河川を生み出した。こうした景観の違いも遺跡内容に反映されていないだろうか。

今回取り上げる有茎尖頭器も、奥 1985 によればやはり南勢地域の河川流域に多く分布することが知られる<sup>(1)</sup>が、鈴鹿川流域周辺にもわずかに分布の集中が認められる。それらの多くはすでに紹介されているが<sup>(2)</sup>1996年8月の鈴鹿市埋蔵文化財展においていくつか実見する機会を得た。以下に紹介する2例はともに個人によって採集され、大切に保管されてきた資料である。先の展示の図録において掲載できなかったため、改めて紹介したい。

#### ① 椎山川河床遺跡<sup>(3)</sup> (鈴鹿市加佐登町)

岡田鉞夫氏蔵 サヌカイト製

長さ 90.6 mm・幅 17.5 mm・厚さ 10.5 mm

椎山川の河床で採集された。背後には段丘崖があるため段丘上から転落したものか、あるいは上流からもたらされたものと考えられる。表面にはローリングの痕跡は無く、使用時の紛失・遺棄などによってこの地点に原位置を保ってきたとは想定しがた

い。ごく近隣に包含されていたものが何らかの要因で包含地から離脱したものと推定される。すでに大場 1980 で紹介されたことのある資料である。

身部・茎部ともに長身かつ細身である。横断面形は凸レンズ状をなすが、図裏面はわずかに偏平である。先端・基端・両逆刺部は新しい剥離により失われている。他端に達するような精緻な斜状平行剥離が施された優品である。表裏における右上から左下への平行剥離は図裏面が先行し、図表面の平行剥離によって大部分の調整を終えている。

#### ② 北中大野遺跡<sup>(4)</sup> (鈴鹿市三畑町字東大野)

加藤千秋氏蔵 チャート製

長さ 84.0 mm・幅 23.2 mm・厚さ 8.1 mm

加藤氏宅の畑で単独採集された。地域の郷土誌に図が掲載されたことはあるものの<sup>(5)</sup> 一般的にはその存在が知られていなかったものである。

先端を欠損する。節理の多いチャートを素材としている。そのためか調整剥離はしばしば階段状を呈するが、全体的には均整のとれた仕上がりである。側縁基部付近は直線的で、中程から先端付近にかけてはわずかに曲線をなし、先端は細く、かつ鋭利である。逆刺部はあまり発達せず、基部は平坦である。細かな調整剥離によって側縁の最終的な仕上げがなされている。

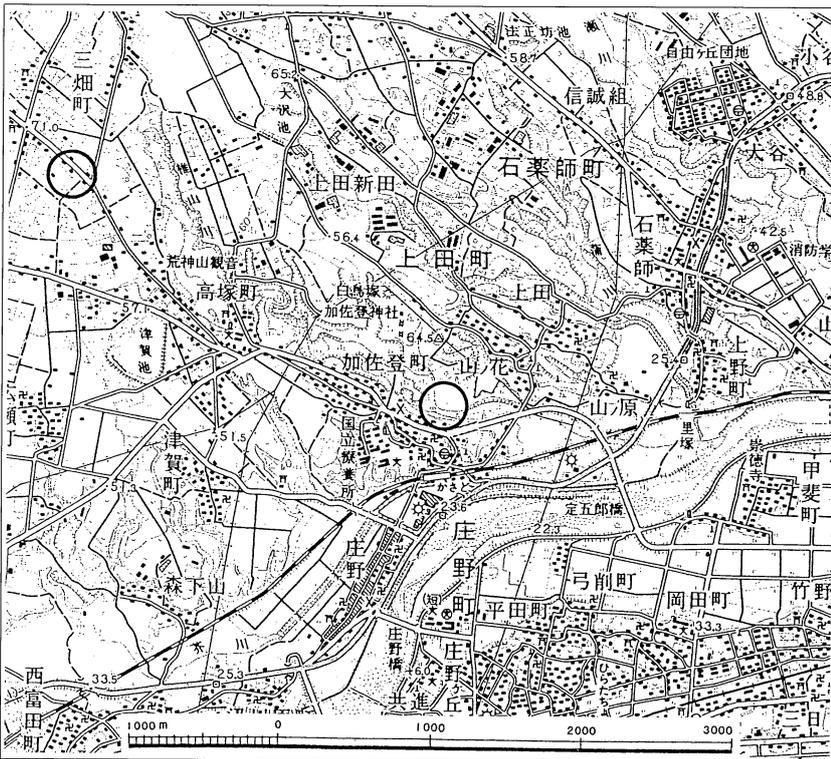
両例とも伴出遺物が知られず、①に至っては本来の包蔵地も定かではない。こうした単独資料からいかに考古学的意義や資料的価値を見いだすかは、これらを取り扱う研究者の手に委ねられていると云えるが、今のところ筆者にとっては荷の重い作業である。今後しばらくは同様の紹介を重ね、既存資料の整理あるいは新資料の探求に努めるつもりである。

【註】

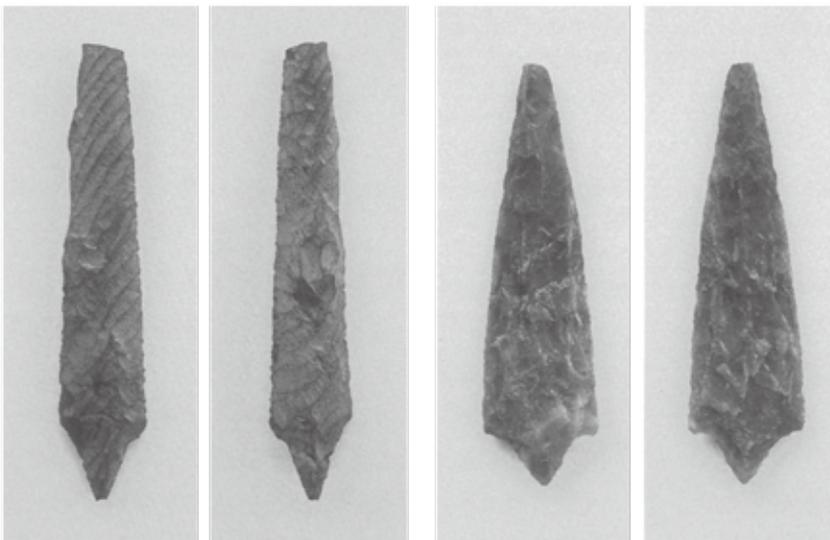
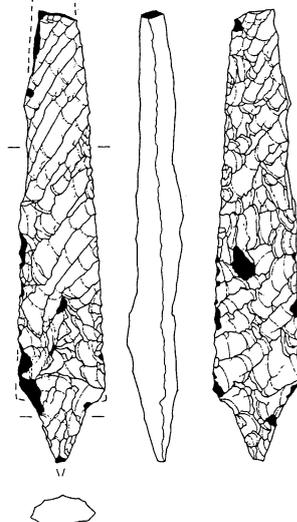
- (1) 奥 1985 の「有舌尖頭器出土遺跡分布図」以後約 20 例程資料の増加があった。
- (2) 大場 1968・1980。
- (3) 正確な包蔵地は不明であるため、仮称としておく。
- (4) 周知の包蔵地：北中大野遺跡（中世）に隣接するため、当採集地も同遺跡に編入した。1997 年 3 月に道路建設に伴う試掘調査が実施されたが、遺物・遺構は全く検出されなかった。
- (5) 加藤 1993。

【参考文献】

- 大場範久 1968 「三重県出土の有舌尖頭器」『古代文化』第 20 巻第 8・9 号（古代学協会）
- 大場範久 1980 「郷土のあけぼの」『鈴鹿市史』第 1 巻原始・古代編中世編（鈴鹿市教育委員会）
- 奥義次 1985 「三重県の先土器時代関連遺跡地名表」『上地山遺跡発掘調査報告書』（玉城町教育委員会）
- 加藤千秋 1993 「三畑町の古代」『深溝・三畑・追分の郷土誌』（鈴鹿市深伊沢わがまち魅力再発見委員会）

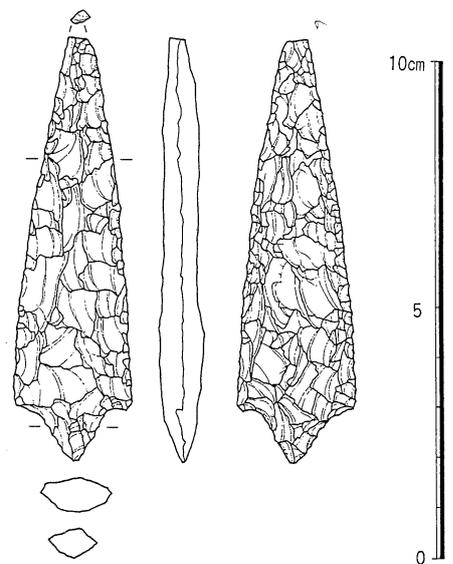


位置図 (1 : 50,000)



左：椎山川河床遺跡

右：北中大野遺跡



上：椎川側河床遺跡

下：北中大野遺跡

## Ⅶ．自然科学分析

### 鈴鹿市上箕田遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

上箕田遺跡は鈴鹿市上箕田および中箕田に位置する伊勢湾西岸の代表的な弥生時代の遺跡であり、地形的には鈴鹿川の右岸の平野上に位置する。今回は平成7年度の調査で採取された遺跡の下部堆積物について、花粉分析、プラント・オパール分析さらに種実同定を行い、植生と環境を検討する。

#### 2. 試料

花粉分析とプラント・オパール分析の試料はともにA区トレンチとB区トレンチの断面から採取された下部の堆積物の計17点であり、A区トレンチでは上位から、細砂(3: 試料1、3、4)、細砂に挟まれるシルト(4: 試料2)、シルト(5: 試料5、6、7)、植物遺体と加工木片を含む粘質土(6: 試料8)であり、B区トレンチでは上位から、シルト(4: 試料1、2、3)、暗色の有機質を含む粘質土(5: 試料4、5、6)、シルト(6: 試料7、8、9)である。

種実同定試料はA区トレンチ下層の植物遺体と加工木片を含む粘質土(6: 試料8)の1点である。

#### 3. 花粉分析

##### (1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入し

プレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、形態的特徴および所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

##### (2) 結果

出現した分類群は、樹木花粉31、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉18、シダ植物孢子3形態の計56である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ-シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ミズキ属、エゴノキ属、ニワトコ属-ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、カヤヅリグサ科、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ風ノブ

ドウ、セリ科、シソ科、ナス科、オミナエシ科、タシポボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、アヤメ属〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、ミズワラビ、三条溝孢子

#### 1)A区トレンチ

下位より、試料8では樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高い。他に樹木花粉ではクリ-シイ属(ここでは大型でシイ属が多い)、スギ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、スギ、モミ属が伴われる。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が主に出現する。イネ科にはイネ属型が含まれない。試料7、6では、クリ-シイ属の出現率が高くなり、コナラ属アカガシ亜属はやや低くなる。草本花粉も減少する。ガマ属-ミクリ属やタデ属サナエタデ節の水湿地植物も出現している。試料5、4では再びコナラ属アカガシ亜属が高率になり、クリ-シイ属はやや減少する。試料2でも傾向は変化しない。なお、試料3、1は花粉が少ない。なお、試料8と1では花粉がいたんでおり、分解されている。

#### 2)B区トレンチ

下位より、試料9~5は花粉がほとんど出現しない。試料4では草本花粉のヨモギ属が極めて優占し、イネ科やキク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、クリ-シイ属、スギが主に出現する。試料3になるとヨモギ属の出現率が減少し、コナラ属アカガシ亜属、クリ-シイ属の樹木花粉の出現率が高くなり、ハンノキ属、スギが伴われる。草本花粉は少ないが、イネ科、ヨモギ属が出現する。試料2ではクリ-シイ属の出現率がより高くなり、コナラ属アカガシ亜属とともに優占する。スギは減少し、ハンノキ属、トチノキが伴われる。草本花粉は少ないが、イネ科とヨモギ属が伴われる。

## 4. 種実同定

### (1) 方法

試料(堆積物)500c. c. を0.25mmの篩を用いて水洗選別を行い、その残渣を双眼実体顕微鏡下で観察した。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### (2) 結果

樹木5、草本5の計10が同定された。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。

検出された種実数は比較的少ない。樹木ではカジノキ、クワ属、キイチゴ属、アカメガシワ、ヒサカキ属、草本ではカヤツリグサ科、カラムシ属、ザクロソウ、ナデシコ科、キク科が検出された。カラムシ属はやや多い。

以下に主要な分類群の形態的特徴を記す。

〔樹木〕

a. カジノキ *Broussonetia papyrifera* Vent. 種子 クワ科

黄褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面にはいぼ状の隆起がある。径2.2~2.5mm。

b. クワ属 *Morus* 種子 クワ科

種子は黄褐色で、三角状広倒卵形、基部に爪状の突起を持つ。長さ1.5mm、幅1.2mm。

c. キイチゴ属 *Rubus* 核バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ1.2mm、幅0.8mm。

d. アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへソがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。長さ3.4mm、幅3.4mm、厚さ2.8mm。

e. ヒサカキ属 *Eurya Thunb.* 種子 ツバキ科

不整形を呈し、表面に多数の多数の小凹点がある。長さ1.8mm、幅1.3mm。

〔草本〕

f. カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黒褐色で倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。表面に細かい網目模様がある。長さ1.3mm、幅1.0mm。

g. カラムシ属 *Boehmeria* 種子イラクサ科

ゆがんだ卵形、両端は尖る。表面はざらつき、種皮は厚くやや堅い。黄褐色。長さ0.5~0.7mm。

h. ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子

ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑

紋がある。径 0.4 mm。

i. ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。径 0.6 mm。

j. キク科 Compositae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に 8 本程度の筋が走る。長さ 1.3 mm、幅 0.3 mm。

## 5. プラント・オパール分析

### (1) 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)、仮比重測定
- 2) 試料土約 19 を秤量、ガラスビーズ添加(直径約 40  $\mu$  m, 約 0.02g)

※電子分析天秤により 1 万分の 1g の精度で秤量

- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20  $\mu$  m 以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1g 中のプラント・オパール個数(試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0 と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重, 単位: 10<sup>-5</sup> g)を乗じて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ

亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ 2.94(種実重は 1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48 である(杉山・藤原, 1987)。

### (2) 結果

検出されたプラント・オパールは、各試料ともに不明を含めてごく少量である。このうち同定されたものは、ヨシ属、タケ亜科の 2 分類群のみであった。分析結果を表 4 に示す。検出された分類群の顕微鏡写真を巻末に示す。

#### 1) A 区トレンチ

プラント・オパールが検出されたのは下位より、試料 8、7、6、2 の 4 試料である。試料 8 ではヨシ属とタケ亜科が極少量認められた。試料 6、2 ではタケ亜科のみが認められたがいずれも微量である。試料 7 では不明が少量認められたのみである。

#### 2) B 区トレンチ

ここでは、試料 2 を除く各試料よりプラント・オパールが検出された。いずれの試料からもタケ亜科が認められたが、どれも少量である。

## 6. 考察

### (1) 推定される植生と環境

#### 1) A 区トレンチ

A 区トレンチでは、6～3(試料 8～2)の花粉群集は、コナラ属アカガシ亜属とクリーシイ属が優占しほぼ同じ特徴を示す。6～3(試料 8～2)の時期は、カシ類(コナラ属アカガシ亜属、以下カシ類とする)とシイ類(クリーシイ属、ここでは大型の花粉が多くシイ属とみなされ、以下シイ類とする)を主とする照葉樹林が周辺に分布しており、他にエノキ属ムクノキ、スギ、モミ属なども分布するが、スギ、モミ属の針葉樹はやや遠方の山地に分布していたと考えられる。周囲にはトチノキが生育する河辺の肥沃な適潤地も分布していたとみられる。草本花粉の占める割合が低く、プラント・オパールも極少量であるため、周囲は森林が優勢であったとみなされる。

最下位の 6(試料 8)では草本花粉のイネ科とヨモギ属を主に出現率がやや高い。種実の検出数

は少ないが、カジノキ、クワ属、キイチゴ属、アカメガシワ、ヒサカキ属の樹木とカヤツリグサ科、カラムシ属、ザクロソウ、ナデシコ科、キク科の草本が検出され、いずれもやや日当たりのよい林縁のような環境に生育する植物である。よって、堆積地はこれらの樹木や草本が生育し、やや日当たりのよい林縁部に分布する適潤地であったと考えられる。前述河辺に生育するトチノキが分布することからみても、河辺の林縁の環境であったと考えられる。

なお、試料3、1では花粉、プラント・オパールともにほとんど検出されないが、試料となった堆積物が砂であることから、堆積時に分別作用を受けたことが考えられる。

## 2)B区トレンチ

下位の6、5(試料9～5)では、花粉、プラント・オパールがほとんど出現しないため、植生は復原できない。5の上部(試料4)では、乾燥地を好むヨモギ属を主にイネ科やキク亜科などの草本が繁茂していた。このことからみて、この時期のB区トレンチはやや乾燥した環境であったとみなされる。下位の6、5(試料9～5)においても、乾燥した堆積環境によって花粉が分解された可能性が高い。他に分別作用によって堆積しなかった可能性もある。なお、周辺地域にはカシ類やシイ類を主とする照葉樹林やスギが分布している。4(試料3、2)の時期になるとヨモギ属が減少し、カシ類とシイ類の照葉樹林が周囲を覆ったと推定される。ハンノキ属、スギ、トチノキなども樹木も森林の構成要素か近隣に分布していたとみなされる。なお、イネ科、ヨモギ属の繁茂する林縁のような日当たりのよいところも部分的に分布していたと推定される。

### (2) 照葉樹林分布と環境変動との関連

今回扱った上箕田遺跡A、B区下位の堆積物は、カシ類とシイ類の花粉が卓越し、遺跡周辺に最盛期の照葉樹林が分布していたことが示唆された。この様相から、完新統上部、すなわち、縄文海進以後で、稲作開始以前の時期が考えられ、遺跡の下部が縄文時代後半の堆積物で構成されているとみなされる。

縄文海進以後の後期完新世は、太田ら(1982、1990)によると、5,000～4,000年前、3,000～2,000年前に、海面の小変動・海面低下期あるいは停滞期が認められており、伊勢湾沿岸でも北岸の濃尾平野において、これらの時期の埋積浅谷や小海退が井関(1972)と古川(1972)によって指摘され、広い範囲の平野や盆地で認められている(金原、1993)。それらに伴う植生の変化も朝日遺跡(吉野ら、1992)において認められている。上箕田遺跡では今回の分析調査によって古環境の一端が明らかになったが、遺跡の立地からみて、より詳細な植生、環境、農耕の検討を行うことが可能と考えられ、縄文海進以後の古環境の変遷を連続的に探れる可能性もあろう。

## 【参考文献】

- 井関弘太郎(1972)濃尾平野の沖積層-濃尾平野の研究その1-。地質学論集, no. 7, p. 117-123.
- 太田陽子・海通正倫・松島義章(1990)日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題-1980～1988における研究の展望。第四紀研究, 29, p. 31-48.
- 太田陽子・松島義章・森脇広(1985)日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題-Atlas of Holocene Sea-level Records in Japanを資料として-。第四紀研究, 21, P. 133-143.
- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 鈴鹿市教育委員会(1996)上箕田遺跡発掘調査報告。鈴鹿市埋蔵文化財調査年報, III, 平成7年度, 鈴鹿市教育委員会, p. 27-30.
- 中村純(1973)花粉分析。古今書院, p. 82-110.
- 中村純(1980)日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定-。考古学と自然科学, 12, p. 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田趾の探査-。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.
- 古川博泰(1972)濃尾平野の沖積層-濃尾平野の研究その1-。地質学論集, no. 7, p. 39-59.
- 吉野道彦・萬谷さつき(1992)花粉化石からみた朝日遺跡。朝日遺跡・自然科学編, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告第31集, p. 59-69.

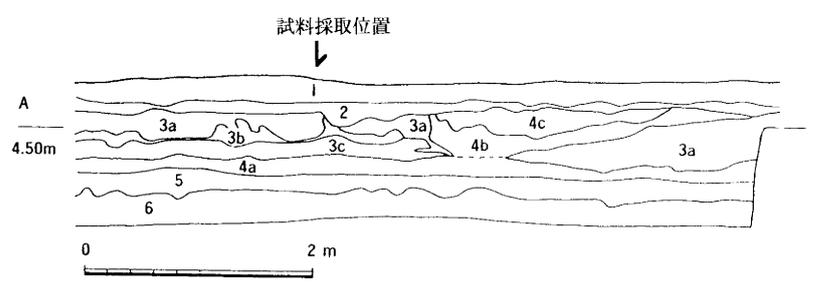
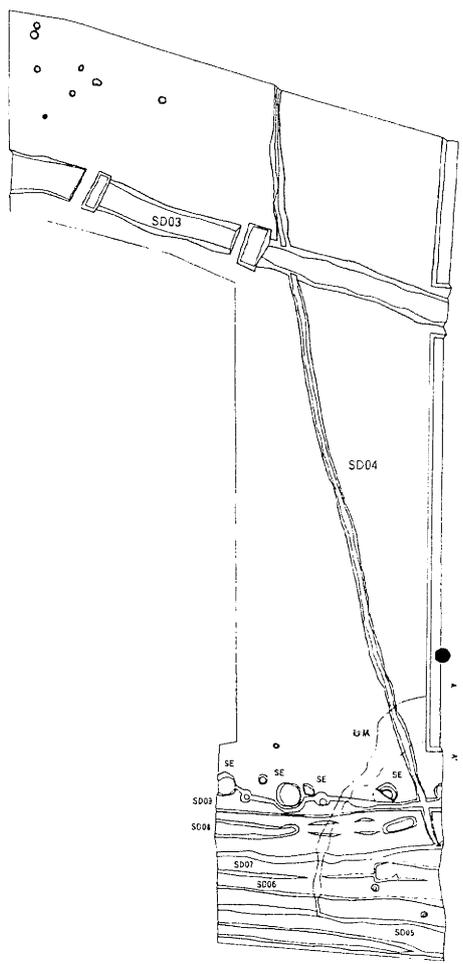
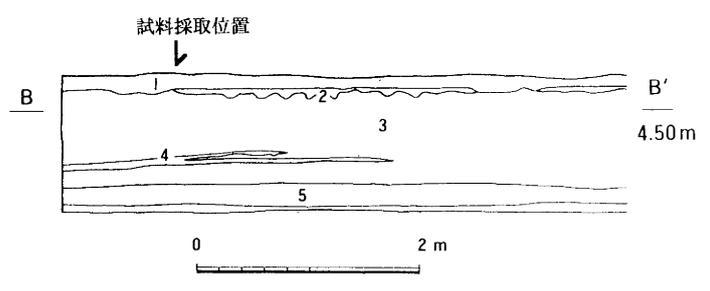
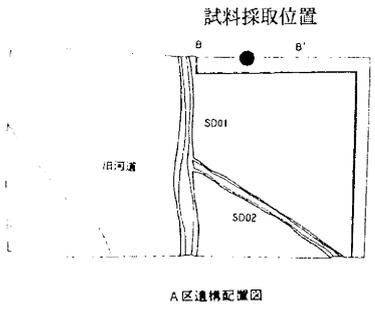


図1 上箕田遺跡における資料採取位置

表1 上箕田遺跡における花粉分析結果 (1)

学名	分類群	和名	A区トレンチ										
			1	2	3	4	5	6	7	8			
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Podocarpus</i>		マキ属		1				1					
<i>Abies</i>		モミ属		4	1	5	3	10	11				9
<i>Tsuga</i>		ツガ属		1	1			1	2				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複維管束亜属	1	8	1	6	6	4	3				6
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	4	21	6	16	29	21	25				16
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ			1		2	1					
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		3	2	1	5	1	11				6
<i>Myrica</i>		ヤマモモ属											1
<i>Juglans</i>		クルミ属		2		3	1	1					
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1	2	1	1		5	5				3
<i>Betula</i>		カバノキ属		1				4	6	7			1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		1	1	1	2	5	19				3
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>		クリ-シイ属	9	82	5	29	79	160	130				34
<i>Fagus</i>		ブナ属	1			2							1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	1	5		1	6	8	5				2
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	4	164	22	82	209	75	73				135
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ		2		3	2	3	4				2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		4	4	11	15	12	24				15
<i>Mallotus japonicus</i>		アカメガシワ		1			1	1					1
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		4									1
<i>Phellodendron</i>		キハダ属	1				2	2	1				1
<i>Acer</i>		カエデ属					2	1					
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		4		5	10	7	11				16
<i>Sapindus</i>		ムクロジ属			2	1		1					
<i>Vitis</i>		ブドウ属		2		2	5	2					
<i>Cornus</i>		ミズキ属						3					
<i>Styrax</i>		エゴノキ属											1
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属					2	1	2				2
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属											1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	8	10	2	1	4	13	10				19
Rosaceae		バラ科						2					1
Leguminosae		マメ科											1
Nonarboreal pollen		草本花粉											
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属						2	1				
Gramineae		イネ科	10	9	3	11	12	16	12				50
Cyperaceae		カヤツリグサ科		7	2	2	1	1	5				3
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節						1					
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属		1									2
Cruciferae		アブラナ科											1
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属	1							1			
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ		2				1	1				
Umbelliferae		セリ科		1	1		1						1
Solanaceae		ナス科						2	3				
Valerianaceae		オミナエシ科		1									
Lactucoideae		タンポポ亜科											2
Asteroideae		キク亜科				1						1	
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	4	7	1	5	6	5	4				18
Fern spore		シダ植物胞子											
Monolate type spore		単条溝胞子	7	26	3	7	17	14	11				21
<i>Celatopteris</i>		ミズワラビ					1						
Trilate type spore		三条溝胞子	5	11		7	8	7	7				13
Arboreal pollen		樹木花粉	22	312	47	169	386	331	335				255
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	8	10	2	1	4	15	10				21
Nonarboreal pollen		草本花粉	15	28	7	19	21	28	27				77
Total pollen		花粉総数	45	350	56	189	411	374	372				353
Unknown pollen		未同定花粉	2	5	1	5	6	6	5				6
Fern spore		シダ植物胞子	12	37	3	14	26	21	18				34
Helminth eggs		寄生虫卵											
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>		異形吸虫類						1					

表2 上箕田遺跡における花粉分析結果 (2)

学名	分類群	和名	B区トレンチ											
			1	2	3	4	5	6	7	8	9			
Arboreal pollen		樹木花粉												
<i>Abies</i>		モミ属		1	1	1								1
<i>Tsuga</i>		ツガ属												
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	1		3	3	1	1					2	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ		3	13	8	2			1		2	2	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	3									
<i>Juglans</i>		クルミ属	1											
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ		1	1									
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	8	8	5					1		2	2	
<i>Betula</i>		カバノキ属			1									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		4	3									
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>		クリ-シイ属	7	158	62	13	2			1		2		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	1	5	4	2								
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	3	90	71	9	1	4	1	3		1	1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	1	1		1								2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ			2									
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属				1								
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1	1									
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		6	2									
<i>Sapindus</i>		ムクロジ属		1										
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属		1	2									
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科		1	4					1		1		
Rosaceae		バラ科		1										
Leguminosae		マメ科												
Nonarboreal pollen		草本花粉												
Gramineae		イネ科	3	46	31	22	2	1	3	19	10			
Cyperaceae		カヤツリグサ科		3	8		1			1				
<i>Iris</i>		アヤメ属				1								
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節				2						2	1	
<i>Rumex</i>		ギシギシ属		1										
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科				1								
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属		1										
Cruciferae		アブラナ科		2	4									
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属		1										
Umbelliferae		セリ科		1			2							
Labiatae		シソ科	3											
Lactucoideae		タンポポ亜科		1	1									
Asteroideae		キク亜科			6	6	1	1	1					
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	2	22	29	186	29	10	4	7	1			
Fern spore		シダ植物胞子												
Monolate type spore		単条溝胞子	61	95	62	16	13	10	18	31	16			
Trilate type spore		三条溝胞子	11	28	25	8	10	16	17	20	15			
Arboreal pollen		樹木花粉	22	281	174	38	6	5	4	11	8			
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	2	4	0	0	0	1	1	0			
Nonarboreal pollen		草本花粉	8	78	79	218	35	12	8	29	12			
Total pollen		花粉総数	30	361	257	256	41	17	13	41	20			
Unknown pollen		未同定花粉	2	8	1	2	0	0	0	0	2			
Fern spore		シダ植物胞子	72	123	87	24	23	26	35	51	31			
Helminth eggs		寄生虫卵	—	—	—	—	—	—	—	—	—			

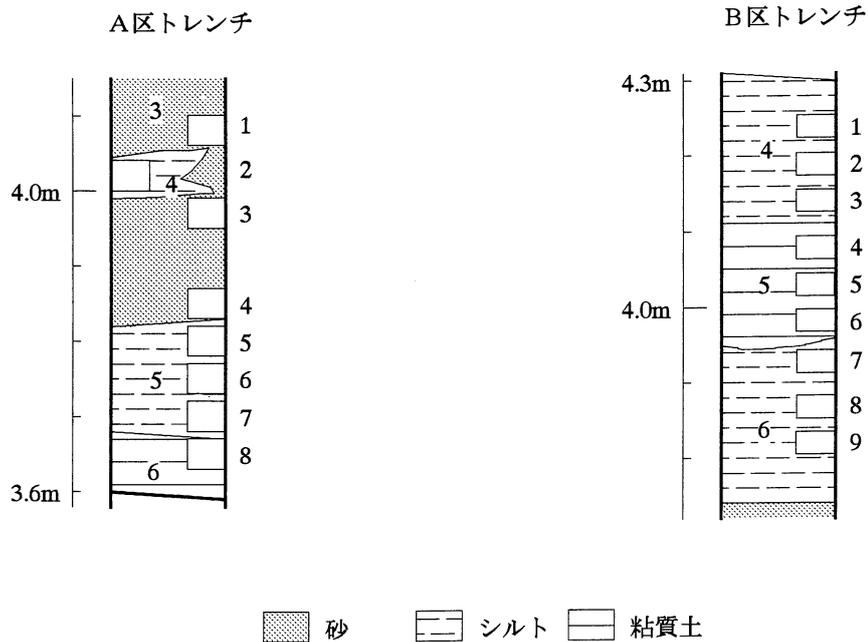


図2 上箕田遺跡における柱状図と試料

表3 上箕田遺跡における種実同定結果

学名	分類群	和名	(試料500cc中) 部位	A区トレンチ 6(8)
arbor		樹木		
<i>Broussonetia papyrifera</i> Vent.		カジノキ	種子	1
<i>Morus</i>		クワ属	種子	1
<i>Rubus</i>		キイチゴ属	核	2
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.		アカメガシワ	種子	1
<i>Eurya</i>		ヒサカキ属	種子	1
herb		草本		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実	1
<i>Boehmeria</i>		カラムシ属	種子	6
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.		ザクロソウ	種子	2
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子	1
Compositae		キク科	果実	1
Total		合計		16
Unknown		不明		2

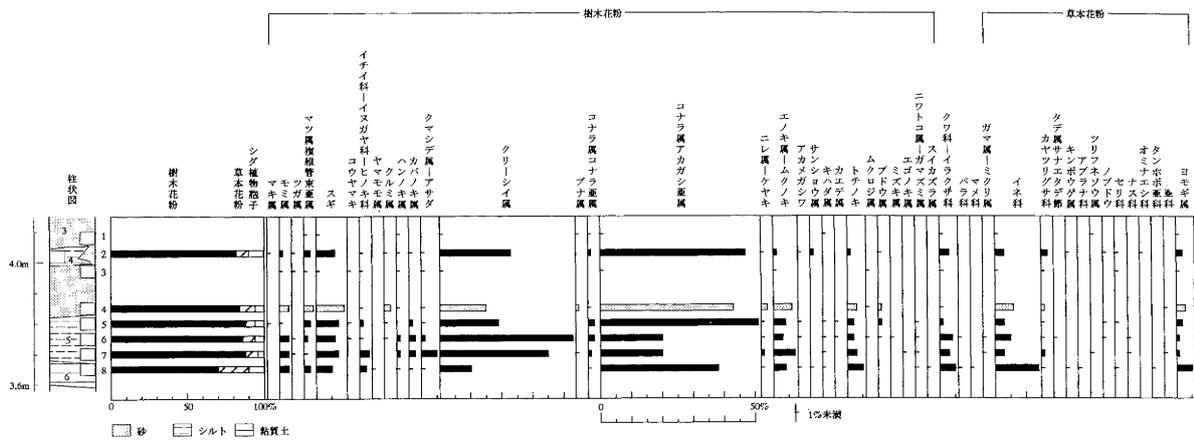


図3 上箕田遺跡A区トレンチにおける花粉組成図 (花粉総数が基数)

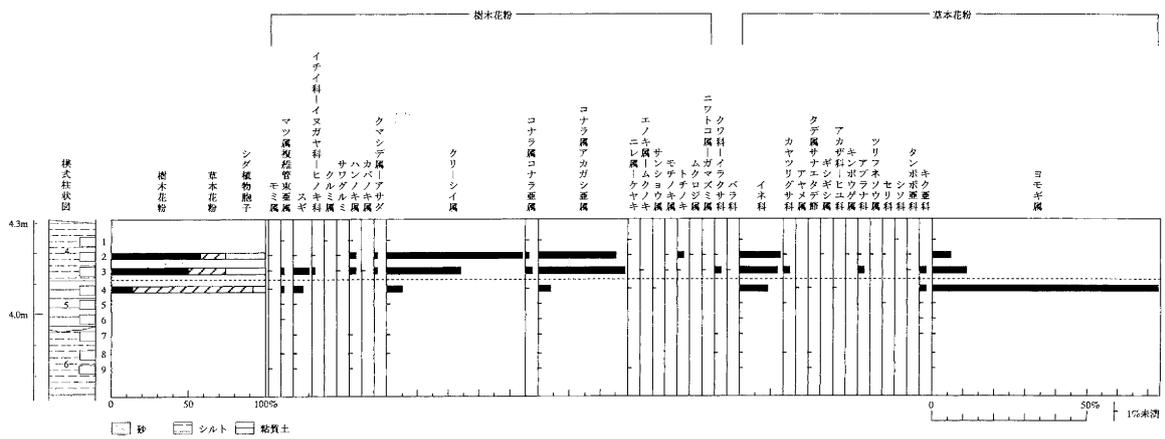


図4 上箕田遺跡B地区トレンチにおける花粉組成図 (花粉総数が基数)

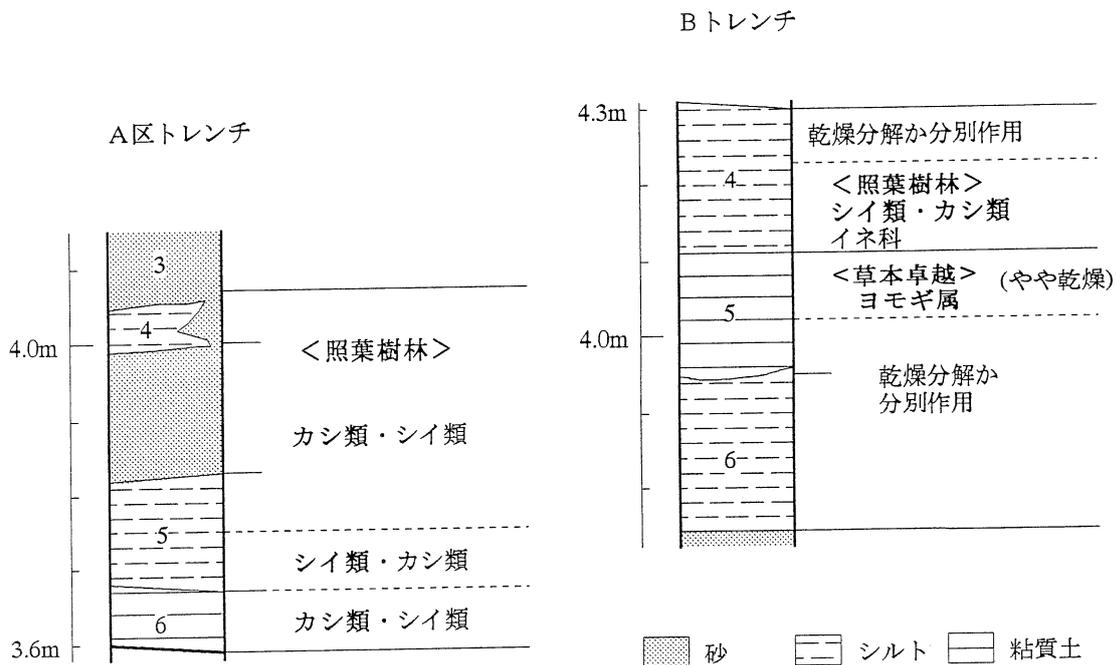


図5 上箕田遺跡における植生と環境の推定

表4 上箕田遺跡のプラント・オパール分析結果

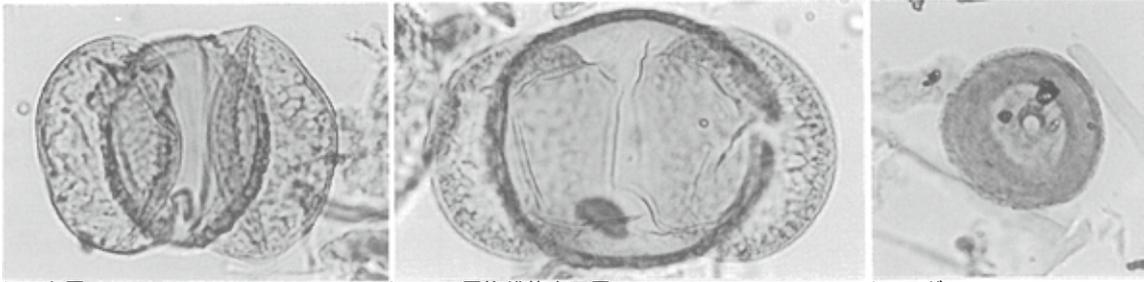
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	A区西辺トレンチ								B区北辺トレンチ								
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ																	
キビ族 (ヒエ属など)																	
ヨシ属								7									
ウシクサ族 (ススキ属など)																	
タケ亜科 (おもにネザサ節)																	
その他																	

推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ (イネ稈)																	
キビ族(ヒエ属など)																	
ヨシ属								0.42									
ウシクサ属(ススキ属など)																	
タケ亜科(おもにネザサ節)																	

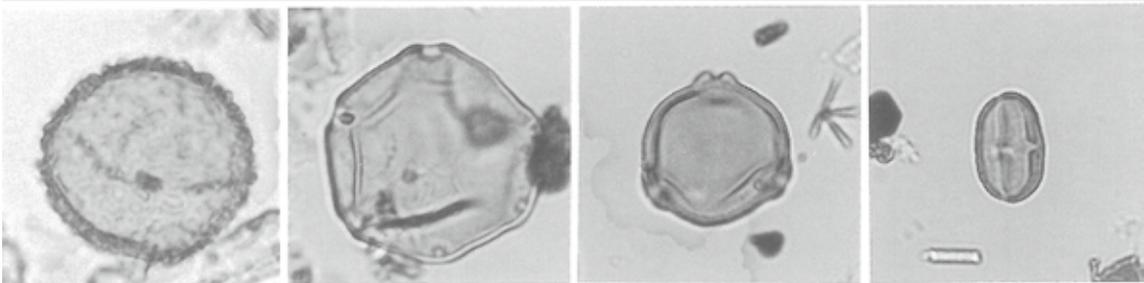
上箕田遺跡の花粉・寄生虫卵・孢子遺体



1 マキ属

2 マツ属複維管束亜属

3 スギ

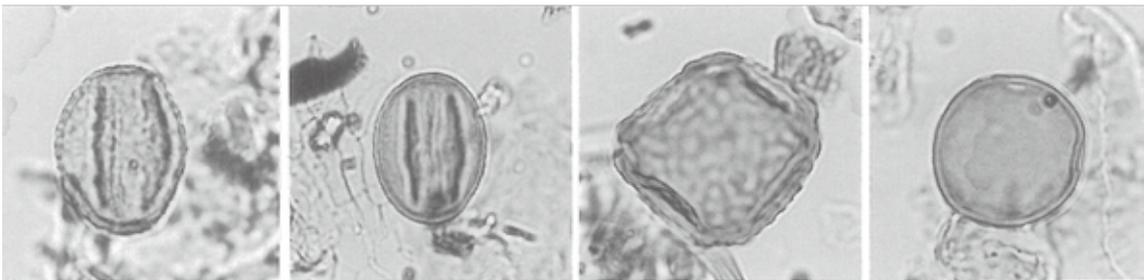


4 コウヤマキ

5 サワグルミ

6 カバノキ属

7 クリ-シイ属

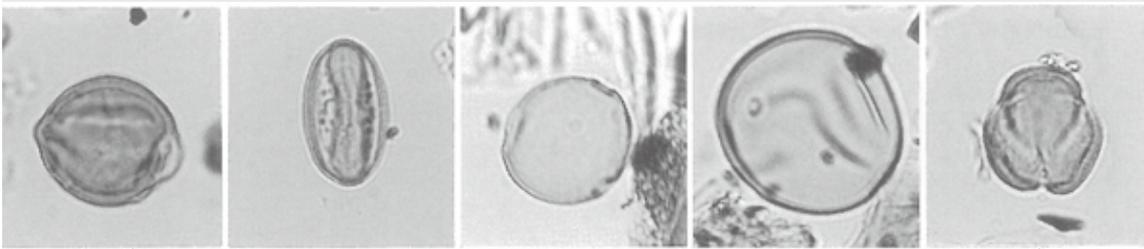


8 コナラ属コナラ亜属

9 コナラ属アカガシ亜属

10 ニレ属-ケヤキ

11 エノキ属-ムクノキ



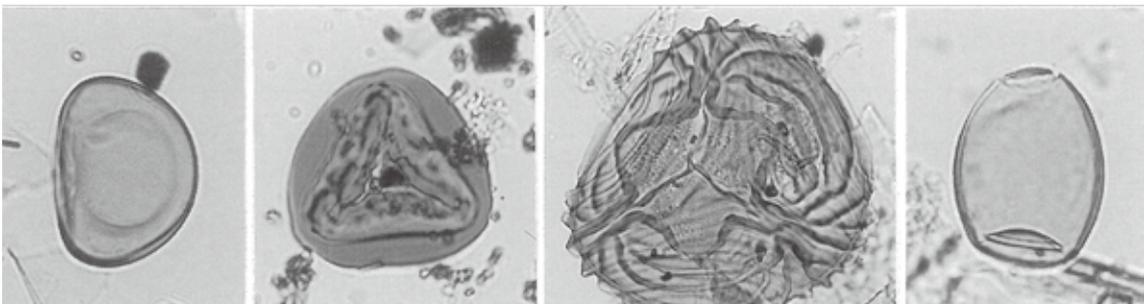
12 アカメガシワ

13 トチノキ

14 クワ科-イラクサ科

15 イネ科

16 ヨモギ属



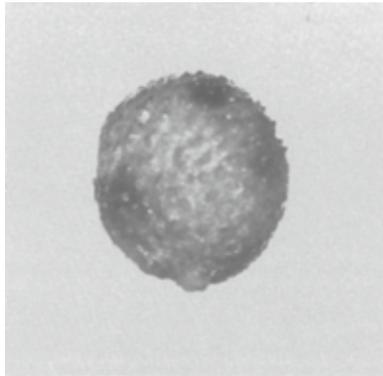
17 シダ植物単条溝孢子

18 シダ植物三条溝孢子  
45 μm

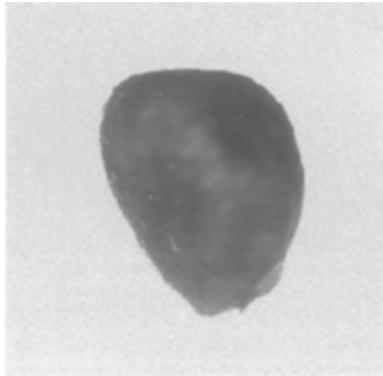
19 ミズワラビ  
90 μm

20 異形吸虫卵  
45 μm

上箕田遺跡出土種実



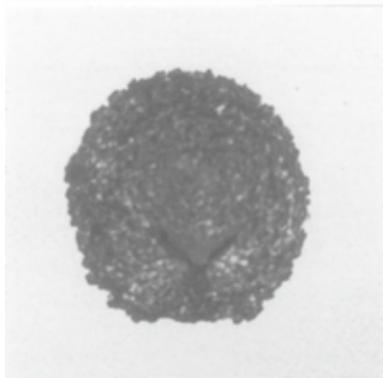
1 カジノキ種子 0.5mm



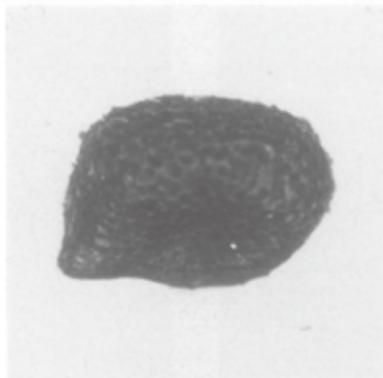
2 クワ属種子 0.5mm



3 キイチゴ属核 0.1mm



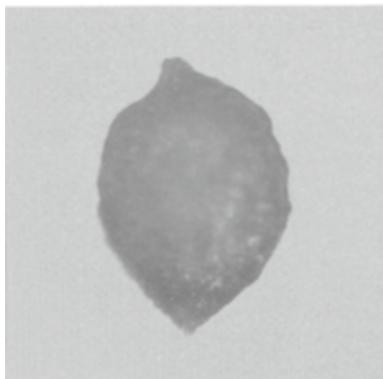
4 アカメガシワ種子 0.5mm



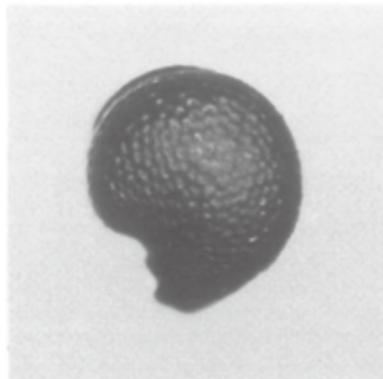
5 ヒサカキ属種子 0.5mm



6 カヤツリグサ科果実 0.1mm



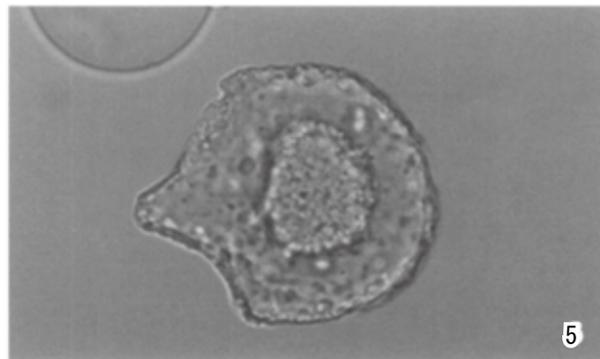
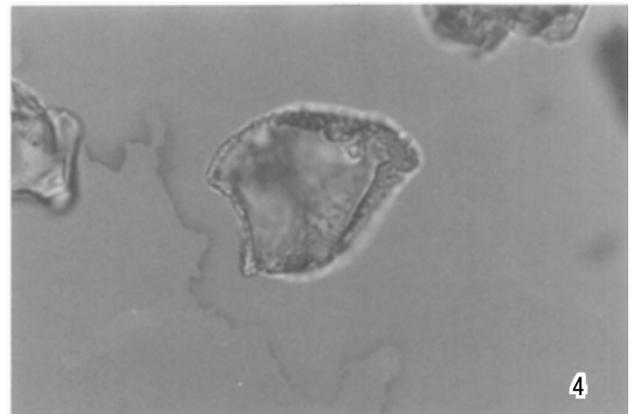
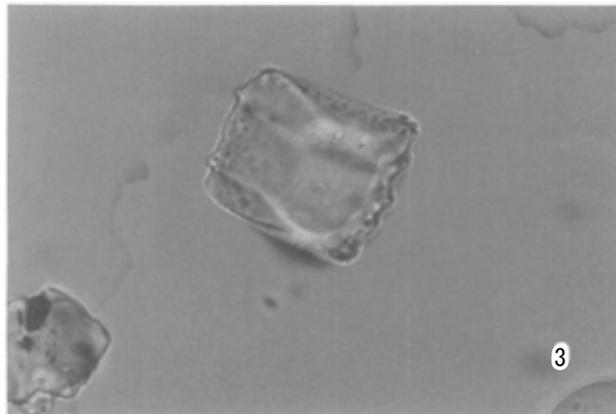
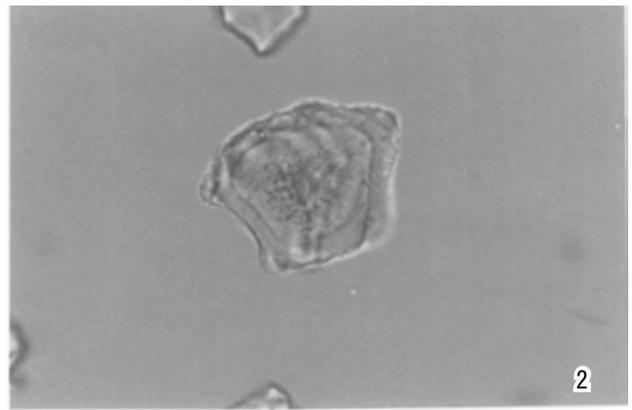
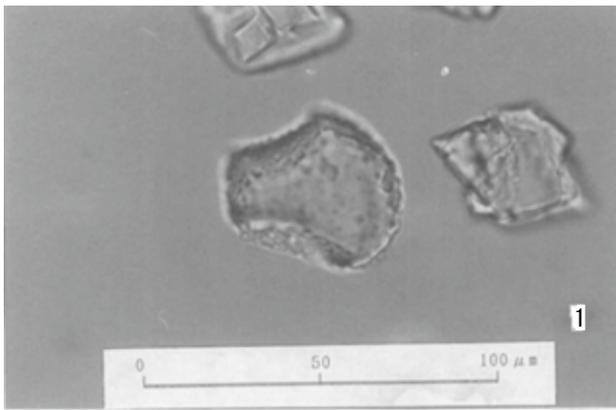
7 カラムシ属種子 0.1mm



8 ザクロソウ種子 0.1mm



9 キク科果実 0.5mm



植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名
1	タケ亜科	A区トレンチ	試料2
2	タケ亜科	A区トレンチ	試料6
3	タケ亜科	B区トレンチ	試料4
4	タケ亜科	B区トレンチ	試料8
5	ヨシ属	A区トレンチ	試料8

# 報告書抄録

ふりがな	すずかしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼうⅣ							
書名	鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ							
編著者名	岡田雅幸・杉立正徳・新田 剛・藤原秀樹							
編集機関	鈴鹿市教育委員会							
所在地	〒513 三重県鈴鹿市神戸九丁目11-15 TEL0593-82-9031							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木田坂上 (第2次)	木田町木田坂山 2160外	24207	537	34度 53分 58秒	136度 34分 23秒	19960411 ) 19960608	1,000㎡	土砂採取
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落	奈良 中世 縄文晩期	竪穴住居 掘立柱 建物 土墳墓、土 器 棺墓	須恵器 土師器 縄 文晩期土器 山茶碗		L字状に配置された掘立柱建物は豪族居宅の可能性あり。		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石薬師東	石薬師町寺東 452-39	24207	727	34度 53分 59秒	136度 33分 47秒	19960410 ) 19960418	80㎡	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	古墳	古墳	古墳周溝(方墳) 2基	須恵器 土師器		石薬師東59・64号墳に該当する。		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三宅神社	国府町西木曾田 3694-6	24207	495	34度 51分 00秒	136秒 30分 37秒	19960523 ) 19960531	378㎡	小売店舗 建築
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落 (官衙)	奈良	井戸 土壇	土師器 須恵器		井戸は奈良時代前半で掘り方は一辺4mと大型のものである。		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三宅神社 (第2次)	国府町中木曾田 3565-2	24207	495	34度 51分 04秒	136秒 30分 39秒	19960617 ) 19960717	260㎡	塾建築
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落 (官衙)	奈良～平安	掘立柱建物 井戸 土壇	土師器 須恵器 瓦 緑釉・灰釉陶器		9世紀末の建物群は緑釉陶器・瓦の出土から官衙の可能性あり。		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷 (第5次)	ひろせちょうまるのうち 広瀬町丸内	24207	363	34度 53分 14秒	136度 29分 55秒	19960620 ) 19960716	133㎡	農道拡幅
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	官衙	奈良	竪穴住居 溝	土師器 須恵器 瓦		竪穴住居のカマドに国府建物の瓦が転用されている。		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷 (第6次)	ひろせちょうやおろし 広瀬町矢下	24207	363	34度 52分 47秒	136度 30分 01秒	19960625 ) 19960719	288㎡	市道舗装
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	官衙	奈良	溝			平成5年発見の国府政庁前面にあたるが関連遺構は検出されず。		

所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
須賀	須賀一丁目16-3		24207	166	34度 53分 03秒	136度 35分 27秒	19960704 ) 19960711	45.7m <sup>2</sup>	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	弥生 鎌倉	環濠 周溝墓 井戸		弥生土器 石斧 山茶碗		環濠は半島状の延びる低位段丘を横断するように掘られる。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
天王	岸岡町天王589-2		24207	873	34度 51分 19秒	136度 36分 22秒	19960722 ) 19960823	260m <sup>2</sup>	病院施設 建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	奈良～平安	掘立柱建物 溝 焼土壌		土師器 須恵器		海岸平野に立地する集落。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
一反通	上野町一反通3131-4		24207	533	34度 53分 39秒	136度 33分 22秒	19960719 ) 19960814	33.3m <sup>2</sup>	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	弥生 奈良	環濠 土壌		弥生土器 石斧 石鏃 須恵器		拠点集落の背後を区画する弥生時代中期の環濠3条を検出。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
山の原	上田町赤土292		24207	532	34度 53分 43秒	136度 32分 41秒	19960719 ) 19960724	22.1m <sup>2</sup>	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	奈良	竪穴住居 柱穴		土師器 須恵器		竪穴住居は長方形プランで東に竈を有する。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
山辺瓦窯	山辺町高見232		24207	1236	34度 53分 43秒	136度 33分 59秒	19960826 ) 19961031	50m <sup>2</sup>	神社改築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	瓦窯	白鳳	窯窯		重弧紋軒平瓦 平瓦 丸瓦 須恵器		北東850m地点の大鹿廃寺に瓦を供給。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
岡太神社	弓削二丁目455-2		24207	1182	34度 52分 32秒	136度 32分 46秒	19961016 ) 19961028	180m <sup>2</sup>	宅地造成
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	鎌倉～室町	土壌 柱穴 溝		山茶碗 土師器 常滑焼		中世集落の辺縁部		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
羽舞場	小田町羽舞場 1174-119・120		24207	1233	34度 52分 03秒	136度 29分 37秒	19961119 ) 19970116	780m <sup>2</sup>	土地区画 整理
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	弥生～古墳	溝(周溝墓) 竪穴住居		弥生土器 土師器		北向きの丘陵麓に立地する集落		

所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
天王 (第2次)	岸岡町天王577-4		24207	873	34度 51分 18秒	136度 36分 22秒	19961126 ) 19961219	100m <sup>2</sup>	歩道整備
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	弥生～鎌倉	井戸 土壇 溝 掘立柱建物		弥生土器 土師器 製塩土器 土錘 瓦		知多式製塩土器や土錘など漁業や 海上交易と関連深い遺物出土。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
三宅神社 (第3次)	国府町中木曾田 3555		24207	495	34度 51分 06秒	136度 30分 39秒	19961209	31.8m <sup>2</sup>	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	奈良～平安	掘立柱建物 土壇		須恵器 土師器		平安期の建物。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
石薬師東	石薬師町寺東 452-107		24207	727	34度 53分 54秒	136度 33分 47秒	19961211	9m <sup>2</sup>	住宅建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	古墳	古墳	古墳周溝		土師器台付甕		石薬師東76号墳と命名。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
狐穴	西条三丁目1137-1		24207	1234	34度 52分 41秒	136度 34分 18秒	19961219 ) 19970114	260m <sup>2</sup>	宅地造成
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	古墳 集落	古墳 鎌倉	円墳 掘立柱建物		須恵器 山茶碗		鈴鹿川下流域右岸で初の横穴石 室墳の検出、7世紀前葉。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
富士	平野町尼の橋1151		24207	952	34度 51分 41秒	136度 31分 00秒	19970127 ) 19970201	112.8m <sup>2</sup>	集合住宅 建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	集落	弥生	周溝墓		弥生土器		弥生中期後半の周溝墓の一部を 検出。		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
国分	国分町北篠1305		24207	838	34度 54分 21秒	136度 34分 21秒	19970221	11.5m <sup>2</sup>	寺院建築
	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
	寺院	奈良～平安	土壇		灰釉陶器 須恵器		推定国分尼寺跡の範囲内。		

鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ  
平成8年度  
発行日 平成9年3月31日  
編集発行 鈴鹿市教育委員会  
〒513 鈴鹿市神戸九丁目11-15  
印刷 早川印刷株式会社

